

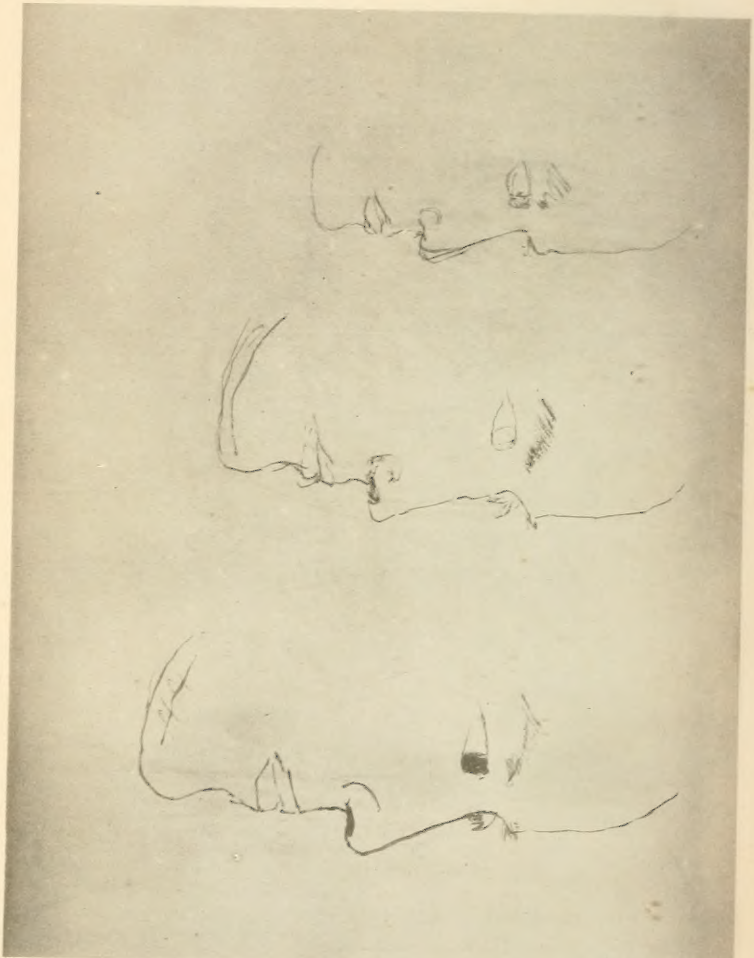
長塚節全集

第四巻

長塚節著

歌論歌話・病牀日記

東京
春陽堂版

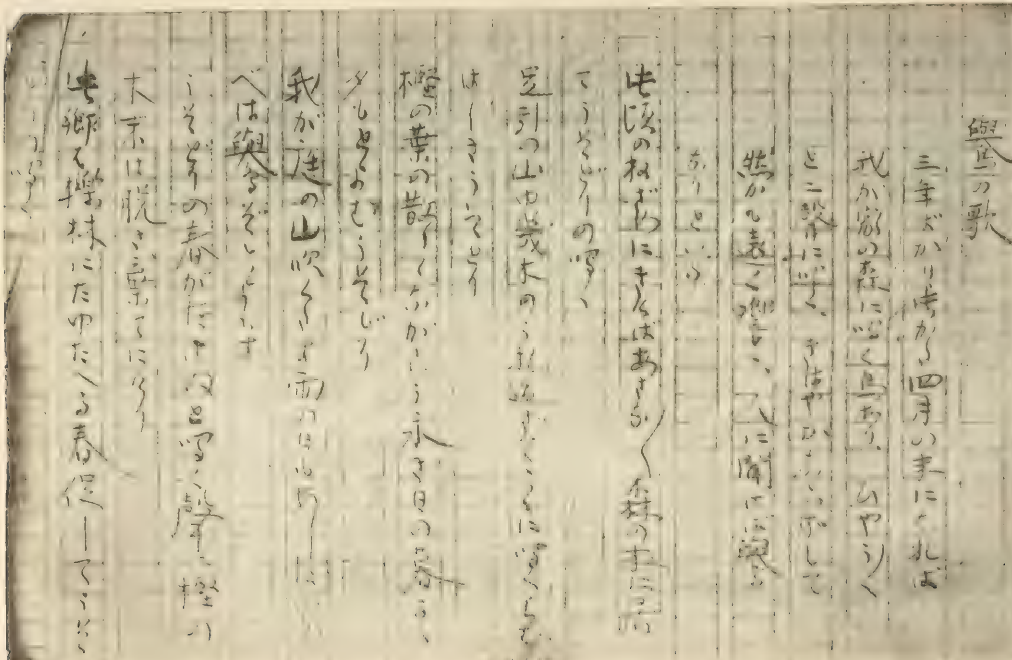


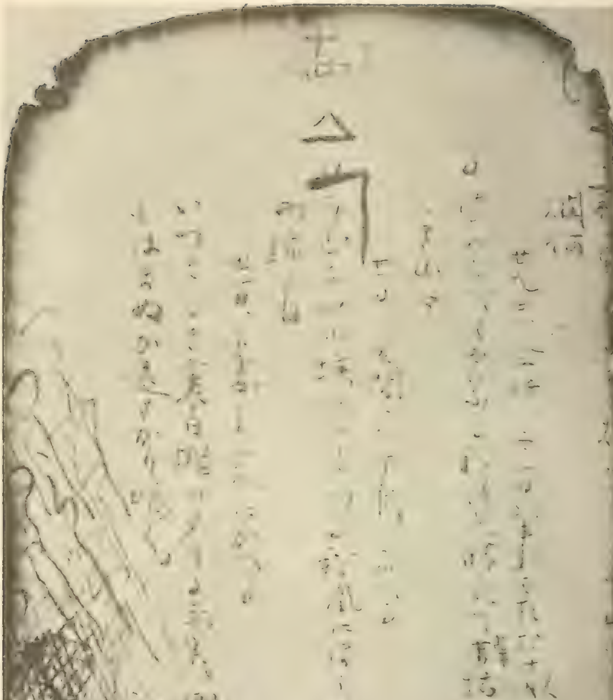
[illegible]は自分で[illegible]

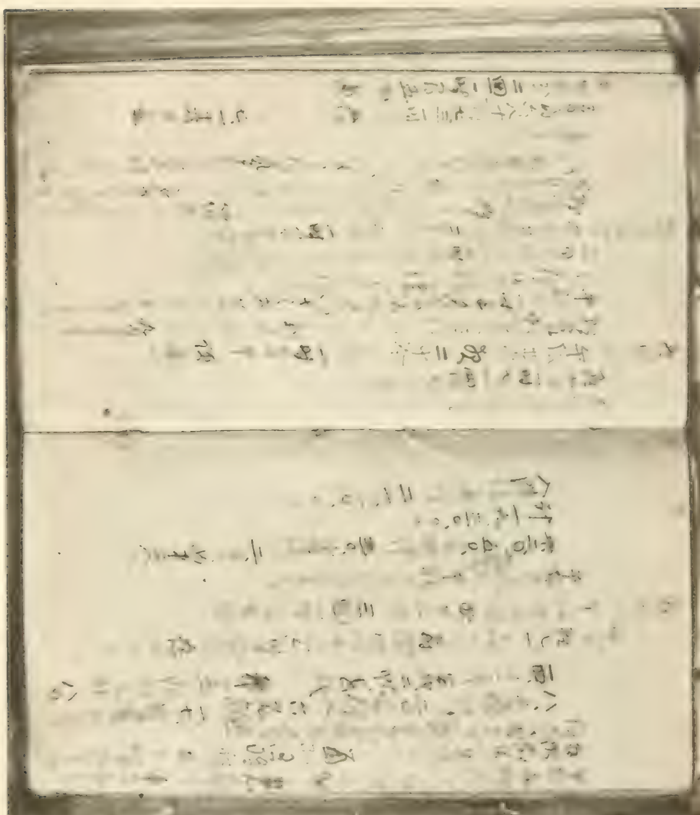
[illegible]自ら許す[illegible]

[illegible]を揃へつけて他に[illegible]

[illegible]


鸎の歌
三年ばかり前から四月の末になれば
我が家の森に啼く鳥あり
我が庭の山吹く
木末は脱き散てにけり





歌論歌話・病牀日記目次

歌論歌話

歌論歌話

萬葉集卷の十四

萬葉集二十卷いづれの卷か佳作に乏しからむ。佳作と稱すべきもの亦いづれか特色を存せざらむ。而かもその特色たるや概ね萬葉集全部を通じての謂に非るはなし。例令ば悲壯なるもの、雄渾なるもの、奇拔なるもの、溫雅なるもの、平淡なるもの等これらの諸作に接することあらむに、凡てこれ萬葉集が有する特色の一に外ならざるが如し。されば萬葉集中の一卷を拔きて炳然たる區劃を立てむことは蓋し難しと雖その間自ら二つの異彩を放てるものを見るべし。卽ち卷の十四なる東歌（二十にも東歌たる防人の作あれども大抵同じきを以て暫く言はず）と同十六なる滑稽歌とにありとなす。概括して之を云へば東歌は外形に於て、滑稽

歌は內容に於て共に他に異なりたるが如し。十六の滑稽歌は嘗て亡師の所論載せて「日本」紙上に在り、敢て蛇足を添へざるべし。東歌に至りてはその珍品と目せらるゝにも拘はらず、これを解剖吟味せしものありとせむも稀なるが如し。萬葉十四は悉く東歌にして短歌二百三十一首を以て成る　試に數首を抄出すれば

筑波嶺の新桑繭の絹はあれど君がみけししあやにきほしも

つくば嶺に雪かも降らる否をかもかなしき兒ろがにぬ干さるかも

武藏野のをぐきが雉子たちわかれ去にし宵より背ろに逢はなふよ

葛飾の眞間の手古奈がありしかば眞間のおすひに波もとどろに

足柄のおてもこのもにさす罠のかなる間しづみ兒ろあれ紐とく

おふ楉このもと山のましはにも告らぬ妹が名かたに出でむかも

あらたまのきべの林に汝を立てて行きがつましも妹さきだたね

等一見して直ちに常態と異なるものあるを知るべきなり。今少しくこれに就きて

吟味せむに「筑波嶺」の歌の二の句「新桑繭」は一の造語とも見るべくこれを以て東歌の特色となさんか、造語は萬葉の特色なり。未だ以て東歌の特色となすべからず。況やこの種のもの極めて少きをや。次の筑波嶺の歌内容の妙も頗る見るべしと雖句法の奇抜なるところ光傳すべきもの多からず。東歌中また一ありて二なし「むさし野」の歌序歌としての巧妙なるは誇るに足るべきものあり。東歌にはこの種のもの最も夥しく例令ば、

（かみつけぬ佐野の舟橋とり放し）おやはさくれどあはさかるがへ

（あしがりのわをかけ山の穀の木）のわをかづさねもかずさかずとも

（とやの野にをさぎ狙はりをさをさも）寐なへ子故に母にころはえ

（赤駒を打ちてさを牽き心びき）いかなる背なかわがりこむといふ

の如き六十首に上る。實に總數の四分の一強たり。而して措辭の巧妙なること此の如きものあり。以て東歌の特色となすべきか。強ひて言はば或は可ならむも序

歌は萬葉の特色なり。比較的多きを以て遽に東歌のために氣焔を吐くべからず。「葛飾」の歌いひ切らざるところに妙味あるが如くなれどもこの類他に甚だ多く、「瀧もとどろに」と用ゐたる歌「十一」に二つまでもあるが如き更に珍らしとするに足らず。「足柄の歌」の結句は二音の語より成りたる字餘りの句なり。珍らしと雖なほ東歌中他に見るべからざるが如し。卽ち以上の見解によりて造語の巧みなるものも句法の奇拔なるものも餘韻を存したるものもこれ等の形式は皆東歌の特色として見るべきものに非るを知らむ。

東歌の特色は方言訛語の適用せられたる所にあり。萬葉十四の常態と異なるもののあるを感ずるは一にこの方言訛語の存在に外ならず。東歌と稱するもの全く之に因由す。前揭の諸詠に見るも「降らる」「兒ろ」「背ろに逢はなふよ」「おすひ」「おふ楉」「行きがつましも」「あはさかるがへ」「わをかづさねも」「かづさかずとも」「狙はり」「寐なへ子」「母にころはえ」等、いかにその夥しきものなるかを知るに足ら

む而してこれ等の方言訛語がいかに外形の上に鹽梅せられたるかを檢せむと欲す。

東歌に於ける方言訛語は夥多なるにも拘はらず初句に用ゐられたるは極めて僅なり。例へば、

足柄を「あしがり」

妹なねを「妹なろ」

大楉を「おふ楉」

内日刺すを「内日さつ」

群萓を「むろがや」

といふの類にして一も活用せられたるものなし。二の句に於て用ゐられたるは二十首の上に出でて初句に比するに活動したるもの多し。

小峰見過ぐしを「小峰見そぐし」

こよひと告れるを「こよひと告らろ」
吾にこふらむを「わぬにこふなも」
弓束なべ向きを「弓束なべまき」
岡ろ田に生ふるを「をろ田におはる」
をさぎ狙ひを「をさぎ狙はり」

の如きなほ「嶺にはつかなな」「悲しけしだ」「駒の行このす」等著しく異なりたるを見む。三の句に東語の用ゐられたるものも二十首に上る。

待ち慕はすを「待つしたす」
降る雪を「ふろよき」
かくしつつを「かくすすぞ」
思ふらむを「思ふなむ」
危ふけどを「あやほかど」「あやはども」

逢はされば を「逢はなへば」「逢はなはば」

日がてればを「日がとれば」

これを初句に比するに亦大に活動したるを見るべし。二の句に比すれば稍振はざるが如きも畢竟後の七言なるに此の五言なるの結果なれども、五言にしてなほ動詞の使用せられたるもの多きは注目すべからずや。四の句に至りては東語の詠み込みあるもの實に四十首ならむとす。

行きがてましを「行きがつましも」

吾をかどはせを「わをかづさねも」

反らしめおきなばを「せらしめきなば」

吾は音に泣くを「あを音しなくよ」

流れ行けばを「ぬがなへ行けば」

逢はぬ時もを「逢はなへしだも」

おもほすらむを「おもほすなもろ」
忘れはせぬを「忘れはせなな」
雨を待つなすを「雨をまとのす」
明日來ざらめやを「明日來せざめや」
著しく活動の度を加へたるを見るべし。結句に至りては更に五十首の上に出づ。
布干せるかもを「にぬほさるかも」
みだれそめめやを「みだれしめめや」
背に逢はぬを「背ろに逢はなふよ」
汝は戀むを「汝はこふばぞも」
汝を懸けずてあらむを「汝をかけなはめ」
いざ寐しめよを「いざねしめとら」
忘れせぬを「忘れせなふも」

吾は放らめやを「吾はさかるがへ」
かどはかしめずともを「かずさかずとも」
そといひて追はじを「吾はそともはじ」
行末を思ひつつを「おくをかぬかぬ」
相違はじを「あひはたけはじ」
寐むと言はぬかもを「寐ろとへなかも」
な思ひそねを「なもはりそね」
母に叱られを「母にころはえ」
汝をいかにせむを「汝をどかもしむ」
君を待つを「君をとまとも」

なほ一々擧げざるべし。如上の引證に據りて之を略言すれば初句に於ては更に

方言訛語の存在を認めずといふも不可なく、二句三句に及びて多く四句は更に多

く、結句に至りて十分の活動を爲したるを見るべし。これ何によりて然るか。曰く萬葉全體に通じたる短歌構成上の大原則を脱せざるが故なり。何をか短歌構成上の原則といふ。曰くはじめは輕からむことを欲し、終は重からむことを欲すこれのみ。萬葉二十卷短歌の數實に四千百七十三首と稱す。未だその一首だに初句の活動したるものを見ず。活動したる句は重し。重きもの初にありて後の輕からざる理なし。萬葉の短歌が初句に於て動詞の僅少なるもの宜なりといふべし。亡師屢予を誡めて曰く初句に言はむと欲する所はこれを二句に、二句に言はむと欲する所は之を三句に以下順次に此の如くして四五の二句にいふべきは能ふべくはこれを終の一句に緊縮せよ。かくの如くせば以て頭重脚輕の弊を免れむ。ここに至りて枕詞の必要を感ずべしと。爾來萬葉を繙く毎に初句の必ず枕詞に非れば名詞等完全の意義を成さざる語の多きを見てその明に服せざるを得ざりき。東歌の初句が殆んど無意味のもの多く句毎に活動の度を增すと共に東語の使用せられ

たるもの亦句毎に多きを加ふるの理を覺るべきなり。

　東語がいかに一首の上に影響せるかを見るに、東歌が朴素の資に富めるもの東人の性情が然りしより出づと雖東語の與つて力あるは論なし。吾人が日常の談話にも言語の如何によりては同意味のことを表示するにも拘はらず聽者の感覺に大なる差異を生ぜしむるが如く、内容の甚だ異なる所なきも之を東語に表はす時は殆ど別樣の思ひあり。この點既に東語の特色とも稱すべきも東語の特色は單に茲に止まらず。前にも述べたるが如く東語の適切に使用せられたるが東歌の特色にして萬葉十四の面目全く茲に存するなり。前掲の例歌に於て見るも「にぬほさるかも」といひ「背ろに逢はなふよ」といひ「行きがつましも」といひ「あはさかるがへ」といひ「わをかづさねもかずさかずとも」「寐なへ子故に母にころはえ」といふの類その他、

　潮舟のおかれば悲しさねつれば人言しげし汝をどかもしむ

みくぐぬにかものはほのす兒ろがうへにことおろ延へて来だ寐なふも
白雲のたえにし妹をあぜせろと心にのりてこば悲しけ
うべ兒なはわぬにこふなもたとつくのぬがなへ行けばこふしかるなも
いかほろに天雲いつぎ鹿沼づく人とおたばふいざ寐しめとら
狹衣の小筑波嶺ろの山のさきわすらえこばこそ汝をかけなはめ
うまぐたの嶺ろの笹葉の露霜のぬれてわきなば汝はこふばぞも

これを平語ならしめむよりは調子の上に於て妙味あることいくばくなるを知らず。東語をして單に訛語のみとなさば東歌は徒に難解の集たるに過ぎざりしならむ。然るに東人の技倆容易に東語獨得の長所を發揮したるがために遂に萬葉集中に異彩を放たしむるに至る。東人亦萬葉の歌人たるに恥ぢずといふべし。余が曩に造語も序歌も句法の奇拔なるものも皆東歌の特色とするに足らずして而かも主として東歌に取るべきは外形にありとなしたるもの誣言に非るを知る可きなり。

近來漸く單調を厭ふの結果種々の變體を試みむと欲するの傾向を生じたるが如し。余の如きも曾て記紀の歌、神樂催馬樂を見て分別もなく之を模したりき。今に至りて顧るにその皮相の見に過ぎざりしを恥ぢざるを得ず。東歌を模せむとするもの亦ここに見る所なかるべからず。吾人の見て方言訛語となすものは當時に於ける東人の通用語たりしなり。日常の言語を以て作爲したる短歌の成功したるものが卽ち東歌なり。成功したる作なるが故に之に使用せられたる方言訛語はしかく活動せるなり。東歌を模せむとする人の動もすればその方言訛語の珍らしきを見て一意之を取らむとするものあり。抑も誤れるの甚だしきものといふべし。東人の東歌を作るや全く自然に出づ。後人の徒らに珍奇を趁ふものと共に語るべからず。東語を用ゐるも普通の語を用ゐるも一首の上に何等の影響をも及ぼさざらむには強て難語を用ゐるべきの理なきに非ずや。東語の成句を取りてまでも自家の功名となさむと欲す、吾人はその陋劣なるを認めずんば非ず。東歌に倣ふもの

は須らく東歌に倣へたるが故に佳なるものたるべし。要は唯これのみ。

東歌が東語を用ゐたるが故に價値あるものたりと雖稀には一種の厭味を感ずるものなきに非ず、「妹なろ」といひ「背なな」といひ「あぜ」といひ「あどすとか」といふの類東歌に在りてはさまでに感ぜざるものなれども今人の頻りに用ゐるに至りては厭惡の念に堪へざらむと欲す。東歌に於けるこれらの語は自然に出でたるが故に調和せりしかも時に厭味のものなからず、今人猥りに襲用せむと欲す、戒めざるべけむや。

變體を試みむと欲して東歌を參酌するは可なり、徒にその短所を取りて長所の存する所を知らざるが如きは策の得たるものに非るなり。

東歌に就ていふべきことなほ少なからずと雖余は之を次號に讓る。執筆の際頭腦病むこと甚だしく殆んど闇中を辿るが如し。一葉にしてやみ數行にしてやむ。意を盡さざる所多きはこれがためなり。

（明治三十六年六月五日發行。馬醉木第一號所載）

東歌餘談（二）

萬葉十四の東歌に就ては、思ふところのあらましは述べたのであるが、更に二三の見るところを附加して見ようと思ふのである。それはどういふことかといふに、東歌にはどんな品物が裝飾として、或は作者の思想を表示する爲にどんな鹽梅に用ゐられてあるか、その品物は萬葉の他の歌に於ける品物とどんな相違があるか、又東歌には言語の異なつて居るのみでなく、境遇の異なつて居るところから、東人でなければ出來ない作が交つてゐるが、それはどんな所を作つたものであるか、東歌といへば萬葉二十の防人の歌も東歌であるが、この「二十」の防人の歌と「十四」の東歌とは相違があるかないか、有ればどんな所が相違して居る

のか、これ等の問題と尙ほ吾人の頭腦を刺戟して感覺を起さしめるのは主として目と耳とにあるのであるが、その目よりする「色」と、耳よりする「音」とかいふものは東人にはどんな刺戟を與へて居るか、つまり色とか音とかを材料にしてどんな製作物が出されて居るか、凡そこれ等の點から少しく研究して見ようと思ふのである。これを云ふに先つて而かもそれはこれ等の研究に何等の關係をも持つて居らぬことであるが、東歌の研究も本篇に止める積りであるから、ここに云はなければ殆んど機を失してしまふの憾があるので、或は少し長くなる爲めに、腰を折るやうな憂もあるが、また止を得ないので云つておかなければならぬ。それは何かといふに、重複にはなるが本誌の壹號に論じた東歌の特色卽ち東歌は外形の上に大に萬葉集の他のものと異つて居る。東人の方言訛語が自在に適用されて、ために調子の上に著しき動變を生じ、方言訛語なるが故に東歌が存在して居るのであるといふ最も重要なる證據立が粗漏であつた。その以外は割合にこまか

でそこが顚倒してゐるのであるから、更に例を引いて論じて見ようとするのである　東語であるために振つてゐるのを一句々々に就て見たのは壹號に詳しいからここには云はないが、一首の上に影響したものを調べて見ると、

筑波嶺に雪かも降らる否をかもかなしき兒ろがにぬ干さるかも

といふのがある。平語にして見ればかうなる。

筑波嶺に雪かも降れる否を（と）かもかなしき兒らがぬの干せるかも

「降らる」が「降れる」よりもよく、「兒ろ」が「兒ら」よりもよく、「にぬ干さるかも」が「ぬの干せるかも」よりもよいのは一目にして瞭然たるものである　尤もこれはこの一首に於ていいので、他の一切の場合に於てもさうであるといふのではない。次々にいふところ皆それである。

うべ兒なはわぬに戀ふなもたとつくのぬがなへ行けばこふしかるなも

これも、

うべ兒らはわれに戀ふらむたつ月のながらへ行けばこふしかるかも

となるが、原作の重厚にして樸素なるには到底相如くことはならない。

かなと田をあらがきまゆみ日がとれば雨をまとのす君をとまとも

「あらがきまゆみ」は「あらがき」は荒掻、「まゆみ」は土の乎われること、「日がとれば」は「日がてれば」「まとのす」は「待つなす」「君をとまとも」は「君をし待つも」、これも前評と同じである。殊に「君をとまとも」の「と」の用法の如きは最も注目すべき所であつて、恐らく比を見ないと思ふ。

相模嶺のをみね見そぐし忘れくる妹が名呼びてあをねしなくな

「あをなかしむな」といふよりも、あをねしなくな」といふのが流暢である「吾をねしなくる」も同じやうだ

うまぐたの嶺ろの笹葉の露霜の沾れてわきなば汝はこふばぞも

「汝は戀ひむぞ」といふよりは遙かに力がある。

伊香保ろに天雲いつぎ鹿沼づく人とおた延ふいざ寢しめとら

「いざ寢しめよ」などといふよりはこれも非常に力があつて非常に緊密である。

上毛ぬ佐野の舟橋とり放しおやはさくれどあはさかるがへ

「われさからめや」とか「吾さかれやも」とかいふ句はとても及びも付かない。

「ぞも」「とら」「がへ」などの用法はたまつたものでない。序にいふが「放し」といふのは通常「放ち」といふべきであるが、現在の東國の俗語がこれであるのは面白いではないか。

武藏野の小岫が雉子たちわかれ去にし宵より背ろに逢はなふよ

これは力があつて緊まつて居るといふのではなく、鷹揚に悠長である所がおもしろい。これに類した句をつかつたのは、

みくぐぬに鴨のはほのす兒ろが上に言おろ延へて未だ寢なふも

あずへから駒のゆこのすあやはども人妻兒ろをまゆかせらふも

床しく可愛らしく思ふといふことを「まゆかせらふも」といふ使ひ方は、ほかの言語ではどういつたらよからうか。

をかによせ我刈る萱のさねかやのまことなごやは寝ろとへなかも

しほ舟のおかれば悲しさねつれば人言しげし汝をどかもしむ

「ぬよといはぬかも」「汝をいかにせむ」といふ可きをかく云つてある。この外にも、

あしがりのわをかけ山の穀の木のわをかづさねもかづさかずとも

とやの野にをさぎ狙はりをさをさも寝なへ子故に母にころはえ

などといふのがあるが、いづれも力があつて面白い。要するにこれ等の例證に據つて見ても東語が力量があつて重厚で、それに比類なき樸素の氣を帶びて居ることが明瞭である。東語でなければ到底成し難いといふ所、またさうでなくても確かに東語の特色を保つて居て決して他のいかなるものにも劣らぬ所のあるのは、

この例證に出つて了解し得らるるであらうと思ふ。

壹號にも仔細に述べてあるが、玆に例に出したものだけでも結句が非常に振つて居る。當時に於ける名もない僻遠の野人の作であつても萬葉の時代はこんなものであつた。現在に於ける吾々の作はどうであらう。東歌に在るやうな序歌の巧妙なものがあるであらうか。句法の變化したものがあるであらうか。力量があるであらうか　緊密であるであらうか。尙又一首の組織上最も緊急なる五の句に注意を怠らぬのであらうか。これで東語に就いては、ほぼ叙說した積りであるから溯つて東歌に用ゐられてある品物に目を注いで見ようと思ふ。天象地文のことは別にして、禽獸蟲魚草木等の萬葉集に現はれて居るものは頗る夥しいのであるが、これ等の品物は品物そのものを主にしてあるのではなく、大抵は作者の主觀を表明するに於てその方便の一として卽ち片々ではその主觀を助けるのと、片々では組織の上に裝飾として用ゐられてるものであるが、東歌二百三十一首の中にはま

た種々なる品物が引用されてある。さうしてそれがまた賓位に据ゑられてあるので、萬葉にある品物は悉く作者の眼に映じたものであるから、東歌に用ゐてあるものは大抵は萬葉の他の部分に用ゐられて居るもののやうであるが、中には東歌にのみ發見し得らるるものがいくらもある。少しくそれを調べて見ようと思ふが、禽獸蟲魚草木と分つていづれが最も多いかといふにそれは草木卽ち植物で、禽獸蟲魚卽ち動物に至つて少い。特に蟲魚に至つては全く見出すことができない。唯一つの蠶があるばかりである。植物のうちでは草が多くて木は遙かに少ない。それで東歌にのみ見られる品物といふのも全く草にあるのである、

いはゐづら、　はまつづら、　たはみづら、
山かつら蔭、　おほゐ草、　うけら、
ねつこ草、

等これ皆東歌の外には見られない品物である。木であつては、

だけが外にない品物であるやうである。扨てこれがどう使用せられて居るかといふに悉く序歌の材料になつてゐるので、その作品の價値がどうかといふに、それは決して惡いことはない　悉く巧妙であると稱揚するに憚らないが、これを萬葉の秀逸なるものと比較したならばどうであらうか、否東歌のうちの秀逸なるものと比較してみてもどうであらうか、さういふ段になると頗る遜色あるを免れない。平凡なる品物を材料としたものに、却て秀逸が指摘せられるのは面白い現象であるといはねばならぬ。なぜさうであるかといふに、この品物は唯一句を埋めるだけに過ぎないので、一首の骨子たる主觀と之を表示する言語との如何によりてその差違が生ずるわけである。

あどもへかあじくま山の弦葉のふふまるときに風吹かずかも

の「弦葉」だけは譬喩の作であるから別になつてくる。つまり「弦葉」が主にな

つて行きわたつてある。それから東歌には平凡な品物が作者の技倆によつて一の熟語にして使用せられたものがある。動物では、

新桑繭、　小岫が雉子、

植物では、

垣内柳、　椎のこやで、　根やはら小菅、

根白高萓、若かへる手、　藤のうら葉、

などである。これ等を材料にしたものは序歌にあるがいろいろある。

こひしけば来ませ吾背子かきつ柳うれつみからし吾立ちまたむ

海原の根やはら小菅あまたあれば君は忘らすわれ忘るれや

こもち山わかかへる手のもみづまで寝もとわはもふ汝はあどかもふ

あとの三つは序歌である。そのうちで、

おそはやもなをこそ待ため（むかつ丘の椎のこやでの）あひはたけはじ

（はるべさく藤のうら葉の）うらやすにさぬる夜ぞなき兒ろをし思へば

の如きは巧妙なる作といふべきである。平凡なる品物を材料としたもので面白いのは、

吾背子を大和へやりてまつしたす足柄山の杉の木の間か

あしがりの麻萬の小菅のすが枕あぜかまかさむ兒ろせ手枕

うまぐたの嶺ろの笹葉の露霜のぬれてわきなば汝はこふばぞも

なほこの外にこれ等にはずつと立ちまさつた面白いのがあるが、東人でなければ云ひえない歌の例として後段に述べるから、ここには重複を厭ひてのせない。動物には珍らしいものが一つもない。萬葉には非常に多い時鳥さへも一首しかない。一々數へ擧げれば種類はあるが皆ありふれたものばかりである。それ等のなかで最も多く用ゐられたのは「駒」であるが、これは作者自らに最も接近したものであるからであらうか。接近したものといへば、東人の目に觸れたもののはいく

らもあつたらうと思ふのに、それが乏しいといふのは寧ろ怪訝に堪へないのであるが、或は東人の感覺がこんなものには薄かつたのか、歌はあつたが散逸したのかそれは到底分明する期がない。植物であつても「花橘」などは一つしかない所を見ると京人の稱賛するものが必ず東人を感動せしめたものではなかつたらしい。

足柄のをてもこのもにさす罠のかなる間しづみ兒ろあれひもとく

筑波嶺のをてもこのもにもりべ据ゑ母はもれどもたまぞあひにける

などのうまい所へ注目されたのを見ると、どうも妙に思はれるのである。しかしかく少ないうちにも極めて面白く用ゐられて居るものはあるのである。

烏とふ大嘘鳥のまさでにもきまさぬ君を兒ろくとぞなく

この外にもいくらもあるがこれも後段にいふ折があるから茲には云はない

かやうに東歌に在つては少ないものが、京人には非常に重く用ゐられて居るが、その代りには東人の用ゐたものは比類のないものもいくらもあるのである。それ

でそれを活動せしめたところは決して京人に劣つて居るものではないと思はれるのである。

（明治卅六年八月十日發行。馬醉木第三號所載）

東歌餘談（三）

冒頭にも書いてあるが東歌で愉快に思ふのは、どうしても東人でなくては作成しえられないものがいくらも存在して居ることである。例を引いて見れば、

しなぬ路はいまのはり路かりば根に足ふましむな沓はけ吾背

この川に朝菜あらふ兒なれもあれもよちをぞもてるいで子たばりに

さなづらの岡に粟まきかなしきが駒はたぐともわはそともはじ

稲つけばかかるあが手をこよひもかとのの稚子がとりてなげかむ

あさをらを苧笥にふすさにうまずとも明日きせざめやいざせ小床に

にひ室の蠶時（こごき）にいたればはたすすき穂に出し君がみえぬこのごろ

妹をこそ逢見にこしかまよ引のよこ山べろのししなす思へる

　おして否と稲はつかねどなみのほのいた振らしもよきぞひとりねて

などの作がいかに巧を弄しないうちに、口には現はしえない妙味があるか、東歌のうちに在りてもいかに異彩があるか、東人の伎倆がますます侮り難いのを認めるのである。

「二十」の防人の歌と比較して見るさきに、も一つ調べて見たいのは「駒」を引用した歌がどう變化して居るかである。煩はしいが例を引いて說明すれば、序歌が大分にある。

(春の野に草はむ駒の)口やまずあをしぬぶらむ家のこゝろはも

(赤駒を打ちてさを引き)心引きいかなる背なかわがりこむといふ

(くへ越しに麥はむ駒の)はつはつに相見し兒らしあやにかなしも

(坍(あず)のうへに駒をつなぎて)あやほかど人妻ころを息にわがする

（さざれ石に駒をはさせて）心いたみあがもふ妹が家のあたりかも

これだけの變化でもよほど面白いのに、外にもいくらもある。

赤駒がかどでをしつつ出でがてにせしを見立てしいへのこらはも

おのが男をおほになおもひそ庭にたち笑ますがからに駒に逢ふものを

ひろ橋を馬こしかねてこころのみ妹がりやりてわはここにして

さわたりの手兒にいゆき逢ひ赤駒が足搔をはやみ言とはずきぬ

類似して居るやうではあるが「駒」といふものの出し方が、いづれも變化して居るは頗る注目すべき所であると思ふ。それといま一つ、

おもしろきぬをばな燒きそふる草ににひ草まじり生ひばおふるがにといふ歌があるが東歌中に在りては極めて珍らしいのである、東歌のうちには各種の品が用ゐられて居ることは既に言つてあるが、この歌のやうに自然物そのものに眤んでよんだのはない。萬葉全體からいへばなにも珍らしいといふではない

が、この一首の爲めに東歌の區域が擴大されたやうな心持がするのでそれが愉快な所なのである。

「二十」の防人の歌と比較して見ると同じく東人の作であるから、相類似はして居る。例令ば東語が目立つて見える所や朴訥な所が特色になつては居るのであるが、おのづから異つて居るのである。その異つてゐるところを擧げて見ると、大概左の如きものになるであらう。

「十四」

一、變化自在なり
一、序歌多し
一、東語の用ゐられたるもの句毎に多きを加ふ
一、東語の活動せるもの夥し

「二十」

一、變化乏し
一、序歌少し
一、東語の用ゐられたるもの稍不規則なり
一、東語の活動せるもの鮮し

一、序歌その他の裝飾に用ゐられたる品物多し

一、品物少し

「十四」は變化があつて「二十」は變化が乏しいのはどういふ理由かと云ふに、一は決して區域を限られて居ないが、一は防人の歌のみであつて區域がチャンと極つて居るので隨つて變化の餘地を與へられて居ない。それがために千篇一律に陷り易いのである。然し單に防人の歌のみに就いて見れば、その狹小な變化しにくい區域内にあつても隨分變化せしめてあることを發見しえらるるのである。防人として徵集せられた東人の悲哀の情はいづれの時に最も激しかつたかといふに、家を出る時と家を出たその當座であつたらうと想像せられるのである。歌を見てもそれが最も多く詠んであるやうである。家を出づるに當りて最も防人の情緒を纒綿たらしめたものは妻である。隨て妻を憶ふの歌が最も多く、次には父母をおもふの歌である。そのうちに父母とならべてあるものと父のみ母のみをよん

だものがあるが、父は極めて少くて殆んど悉く母であるといつてもよいのである。家を出づる時の悲哀の情といふので既に區域が狹小になつて居る上に、主眼たるものが父母妻子といふのだから變化のしやうがないのである。

ささむりに立たむ騷ぎにいへの妹がなるべきことを言はずきぬかも

と詠んであるやうに、嚴命が下つてからその徵集は至極急速であつたのであるから、作品の上に裝飾を施すだけに心の餘裕がなかつたのでもあつたらう。外界の品物をかりて裝飾をしなければ單に主觀のみになつてしまふ所から、それは各人いくらづつかの相違はあるにしても陳腐といふ側に傾いてしまふのである。茲に例に出したのは中での珍らしいので、これらはそれらと一つには見られぬのである。それからこの例歌もさうであるが、次々に掲げる歌にも東語には圏點を附することにする

かくの如くで防人の歌は概ね主觀のみで成立したものであるが、中にはさうでな

いものもないではない。

むらたまの樞に釘刺しかためとし妹がこころはあよくなめかも

赤駒をやまぬにはがしとりかにて玉の横山かじゆかやらむ（妻かよめる）

わが門の傍山椿まことなれ我手ふれなな土におちもかも

いはろには蘆火たけども住みよけを筑紫にいたりてこふしけもはも

草枕旅のまる寢の紐たえばあが手とつけろこれのはるもし（妻がよめる）

廐なる繩たつ駒のおくるがへ妹がいひしをおきて悲しも

これ等は孰れも傑出したものであるが、皆なにか品物を捉へて使用してある。そこがこれ等の作品をしてかくの如き奕々たる光彩を放たしめたのである。

道のへのうまらのうれにはほ豆のからまる君をはかれか行かむ

の如きも外界の品物によつて成功したものである。それから

松のけのなみたる見ればいは人の我を見おくると立たりしもころ

これもその類でしかも五の句の如きは頗る珍らしいものである。

ふたほがみ惡しけ人なり痾病わがする時に防人にさす

も防人自らの特殊の狀態を寫したものであるから珍らしく且つ面白いのである。

わが妻も畫にかきとらむいつまもが旅行くあれは見つつしぬばむ

といふ如きも畫にかくといふことで既に思想の自在を得て居る所から面白い。その他家を思ふとか妻を思ふとかいふのを、直ちにさうは言はないで山河を詠んだものの變化の種になるのである。例令ば、

久慈川はさけくあり待てしほ船にまかぢしじぬきわはかへりこむ

わぎめこと二人我見しうちえする駿河の嶺らはくふしくめあるか

橘のした吹く風のかぐはしき筑波の山を戀ひずあらめかも

の如きである。それにこれとは異つては居るが、

八十國は難波につどひ船かざりあがせむ日ろを見も人もがも

ゆこさきに波なとゑらひしるべには子をと妻をとおきてともきぬ

の「八十國」及び「と」の用法の如きは、狹い區域内に跼蹐しつつあつた防人のために見逃すべきものではあるまいと思ふ。要するに比較的佳作はあつて伎倆の嘆稱すべきものはあるが、「十四」に比しては到底及ばざるものといふに歸着するのである。

序歌の「二十」に少いのも裝飾の餘地がなかつたからであらう。「十四」には東語が規則的に順次多きを加へたが、「二十」では四の句に三の句よりも少なく、初句には比較的多い。しかし初句には活動しない點は同一である。さうして五の句には最も多いのであるから、壹號に述べた原則といふものに觸れるやうなことはない。

「二十」にある東語は「十四」にないものがいくらもあるが、振つて居るものは少い。

ささくあれとを「さくあれて」
たち出でむ時にを「たしでも時に」
戀ふしくもあるかを「くふしくめあるか」
危ふくあらぬかを「あよくなめかも」
越えてきぬるかもを「こよてきぬかむ」
戀ふしく思はむを「こふしけもはも」
これの針持ちを「これのはるもし」

などは「十四」に無いもので能く活動して居るものであるが、この外に一字二字位替へれば普通語になるものは夥しい。例令ば、

とへたほみ（遠江）　わぎめこ（吾妹子）
わがいはろ（吾家）　旅とおめほど（おもへど）
さゆるの花（さゆり）　いづまもが（暇もが）

しるべには（しりへ）　まゆすびに（まむすび）
うのばら（うなばら）　妹がこゝり（妹がこゝろ）
えびはとかなな（帯は）　いむ（妹）
ささごて（捧げて）　おめかはり（面かはり）
かしゆかやらむ（徒歩）　見とと（見つつ）

等その一班である「二十」に品物の少ないのも區域の狭いからであらう「二十」が到底「二十四」に及ばないのは勿論であるが、あとにもさきにも是れ一つといふ長歌のあるのは「二十」のために誇るに足るべきではあるまいか。

足柄の　み坂たまはり　かへり見ず　あれはくえ行く　あらし男も　たしや憚る　不破の關　くえてわは行く　馬の蹄　筑紫のさきに　ちまり居て　あれは齋はむ　もろもろは　さけくとまをす　かへりくまでに

家持作の長篇よりも余はこの片言交りの作を愛するのである。

凡そ吾人が詩歌に就いての感じ、卽ち面白いとか面白くないとかの判斷の起つて來るのは主として眼のはたらきであるが、半は耳のはたらきである。內容の趣味を感知するのは眼よりするのであるが、外形卽ち調子に至つては耳の司る部分であらうと思はれる。

故に天然物を寫すにしても全く眼の力にのみ一任してしまふ所の繪畫のやうに明瞭なわけには行かない。文字を以て時間的に說明するものはいかなる微細なる觀察眼を以てしても、到底一枚の粗畫程にも明瞭ならしむることは出來ない。まして短歌のやうなものになると同じく自然を寫すにしても、ほんのその骨を描くに止まるのみであつて、彩色の如きは殆んど問ふの暇がない。殊に萬葉のやうな主觀を表示するの方便として天然物を捉へるやりかたでは尙更のことである。つまり「色」といふものには餘り頓着しないことになるのである。しかし仔細に見れば色を用ゐたものがないではない。

淺綠そめかけたりと見るまでに春の楊は萠えにけるかも（卷十）

の如きものや萬葉の末になつて家持の作とある

みづとりの鴨の羽の色の靑馬をけふ見る人は限りなしといふ（卷二十）

の如き、よし家持のは拙いにしても孰れも色に重きを置いて詠んだものであるが、東歌になるとこんなものは一首もない。一つは口調の上から來た

白波、白砥、白栲、靑柳、赤駒

などの尤も普通の名詞で、一首に纏つたものでは、

こひしけば袖も振らむを（武藏野のうけらが花の）いろに出なゆめ

（眞金吹く丹生のまそほの）いろに出でいはなくのみぞあがこふらくは

の二首で共に「いろに出づ」といふための序にしてあるので、色その物の說明には力が這入つて居らない。

東歌にある「音」或は「聲」は色に關したものよりはずつと多い。しかしそれも

鷲が鳴くとか、ほととぎすの鳴くを聞くとか、

伊香保ろに神な鳴りそね我がへには故はなけども兒らによりてぞ

つむが野に鈴が音きこゆかむしだのとのの仲子し鳥狩すらしも

とかいふので音には相違ないが、「音」といふ小部類を立てて見ると一向につまらぬものである。この外に音を形容した語は「とどろに」とか「とどとして」とかいふのでこれも平凡なものである。かやうに「音」や「聲」に就いては面白いもののないうちに唯一つ極めて珍らしくはたらかせたものがある。それは旣に例に引いた歌であるが

烏とふ大嘘鳥のまさでにも來まさぬ君を兒ろくとぞなく

といふのである。「十四」「二十」の東歌三百首の中にせめて一つのこの作のあつたのはいかにも愉快に思はれるのである。

東歌に對して色や音に關した作の研究をしようとした余が前提はあまり大袈裟過

ぎて居つた。余は更に廣く萬葉全體に渉つて、色と音との研究をして見ようと思ふ。結果が面白かつたら再び本誌の上に掲載する覺悟である。

（明治卅六年十月十三日發行。馬醉木第五號所載）

萬葉口舌〔二〕

卷の十六の研究

予は嚢に十四の研究を公にした時に十六の滑稽を以て東歌と共に萬葉中に異彩を放つものであることを斷つて置いた。東歌は既に概畧の研究を遂げたのであるから、其順序として十六の滑稽に就いて論じなければならない。然し單に滑稽のみとすれば正岡先生が嘗て評論せられたことがあるから最早言ふの必要が無いのであるけれども、猶ほ方面を異にして研究をして見ようと思ふ。それと同時に十六に於けるは注目す可き點が滑稽のみに限らないのであるから十六惣體に渉つて研究することにした。十四は悉く東人の作であつたから、研究上部類分けをする必

要もなく容易なものであつたが、十六となると種類の異つたものがいくらも錯綜して居るから稍々面倒に成つてくる。しかしこれも大別すれば三つとすることが出來る。卽ち一つは有由緣歌といふ部に入る可きもので、一つは滑稽といふ部に入る可きものである。此二つは分明に部類を立てることの出來るものである。夫れから他の一つは雜歌として部類を立つ可きもので、これは種々なる歌を含んで居るもので、有由緣歌にも滑稽にも入る可きものでないのである。雜歌の中には異つた種類があるのであるから、更に部類を立てて見ようとすれば特色を備へたものでなくなる。隨て雜歌といふ漠たる標題の下に置かねばならないのである。かく三つに區分したがこれが果して正しい區分であるかどうかそれは分らない。詰り自分が研究に便利であると認めた方法に從つた迄である。

有由緣歌。この部に入れたものは歌そのものの由來が說明してあるものであるが、滑稽の調を帶びたものは由緣あるものでもそれは滑稽の部に入れて仕舞つ

たから玆に此の部に入れるものは悉く眞面目の作のみである。さうしてその作品が僅々二十首に過ぎないのであるから一つの部門を立てるのは薄弱なやうであるが、此の部に屬するものには自ら一つの特色を存じて居る。一言にして盡して見れば、各の歌の由て來るところの說明によつて、一際その歌に對する讀者の感懷を深からしめる點である。

春去らば揷頭にせむと我がもひし櫻の花は散りにけるかも

妹が名に繫せる櫻花さかば常にや戀ひむいや年のはに

この二つの歌を單にこの歌だけにして見たらどうであるか、二つ共に一種の濕やかな沈んだ調子であることは極めて容易に感ずることが出來るけれども、それならば何れの場合に詠んだものであるかと問うたならばそれを限ることは頗る困難である。見る人によつて解を異にするの結果に出でなければならない。隨て見やうによればどうにも成るといふことになるのであるから感情が分離してしまふ

のである。殊に「春去らば」の如きは唯植物に對して感懷を寄せたに過ぎないものと見られるのである。然れども此の二つの歌の由緣卽ち昔その名は櫻兒といふ娘子を吾えむものと二人の壯士が生を捐てて爭つた時に一女の身にして二門に往くといふことは到底出來難いことである、といつて一人のもとに身を任すことは猶更なしえらるることではない。何れへも寄することのならない身であるといつて控へて居れば壯士の爭は劇烈になつてくる。それを見つつ苦しまむよりは寧ろ死んだがましである。自分が死んだならば壯士の爭ひも留むることが出來ようと萬斛の淚を吞んで林中に入つて樹に懸つて死んでしまつた。つまり自ら犯した罪もないのに、否々罪のないのみならず、情ある壯士の愛するところとなつた爲めに、却て自己の禍となつて果てた悲慘な事柄である。自分達の執着によつて娘子をしてこの悲慘な死を致さしめた壯士は慟哭せざるを得ない。血に泣いて詠じた歌が卽ちこれである。かういふ事柄を知つた上に此の歌に對したならばどうであ

るか、いかなる場合であつたかといふことも、いかなる人が詠んだかといふことも、いかなる情を含んで居たかといふことも、確乎として動かす可からざるものになる。さうしてこの平凡なやうな調子のうちに、涕涙の滂沱たるを認められるのである。即ち平凡に近いこの二つの歌は、その事柄の表明によつて人の感情を惹くことの至つて大なるものたるを知るのである。この歌の長々しい説明は徒爾に屬するものではなかつた。

耳なしの池し恨めし吾妹兒が來つつ潜かば水は涸れなむ

足曳の山縵の兒けふ往くと吾に告りせばはやくこましを

足曳の山縵の兒けふの如いづれの隈を見つつ來にけむ

この三つの歌も事柄は概ね似たことであるが、さきのは壯士が二人であるのにこれは三人であるのと、さきのは娘子が樹に懸つて死んだのに、これは池に沈んで果てたといふ相違は有るが、悲慘の死を歌つたのであることは同一である。

この三つの歌になるとさきのよりは歌そのものの上に事柄が表明されて居るけれども尚ほ漠たることは免れない。「耳なしの池し恨めし」だけは妹の兒なるものの水に趨いたことが分るけれども、ただこの歌の上のみにては妹の兒なるものが妻であるか一般の女子に對する親しみの意を含めたものであるか判明しない。あとの二つの如きは見やうによつてどうにもなるので敢て悲哀怨恨の情を含んだものとは取れないのである。しかし一旦その由縁を知るに至つては無限の憤りと悲しみとの響きをあらはすやうに感ずるのである。

かくのみにありけるものを猪名川の沖を深めて吾がもへりける
ぬばたまの黒髮ぬれて沫雪のふるにや來ますここだ戀ふれば

この歌であつても調子のどこかに痛切なる響きを存して居るけれどもやつぱり漠として見樣によつては變るものである。猪名川の歌の如きも一二の句などはどんなことがかくのみにありけるものをなのか分らない。四五の句なども行く先か

けて長く思つて居つたといふだけのことに成る。いかにもこの歌だけでは喰ひ足りないやうな、あとに何か一品欲しいといふやうな氣がする。あとの歌も概括していへば雪のこのやうに降るのに來て異れたのかいかにも嬉しい。戀しい戀しいと思つた甲斐もあつたといふことだけは聞えるが、取りやうによつては待つて居た方の女がいそいそと立つて、火を焚きもてなす有樣をも想像し得らるるのである。然し乍らこれはそんな事柄に由つて作られたものでは無い。新婚いくらもなきに夫は驛使となつて雲のあなたに隔たつてしまつた。公事の畢らざる間は歸ることもならない。まだうら若い妻の身の思ひ惱んだ末に病に臥して起つことも叶はなくなつたが夫はまだ歸つてこない。慰むるものなき牀のうへに思ひ疲れて死ねばかりに成つた。その時に及んで夫ははじめて歸つてきた。もう遲い。夫たるものが泣かずに居られようか。そこでかくばかりにも我が身を戀ひ慕つてこのやうに死に瀕するまでに病み煩つて居つたものを、知らずに行末長く相睦みて世を

過ぎむと思ひつつそれのみを樂みに任地に奉公の功を積んで漸く歸つて來たものを、このやうな姿を見なければ成らないとはどうした情ないことであるか。僻遠の地で使の往復も心に任せなかつたとはいひ乍らこんなことではないと思つて居た。待つて居た身は嘸たよりない悲しいことであつたらう、この衰へやうはどうしたことか取り返しもならないことか痛ましいことであるといふ無限の情を含んで詠んだのである。かくのみに有りけるものをといふのが最も適切に悲痛の響きをなして居る。吾念へりけるといひ切つてないところに注目す可きである。かくの如き夫の悲みを聞いて妻は枕を擡げて應へた。このふる雪のつらきなかを我がかく戀ふるばかりに來られたのであるか、難澁なことであつたであらうにと、我が身の苦惱は表はさずに夫の身の上をいたはり思つたその情を思へば、この二つの歌を見れば涙がこぼれるやうな氣がする。この歌をして此の如き情を發せしむるといふのは全くその事柄の表示に因るのである。

これまで擧げた例は皆平凡といはばいふべく更に奇と稱すべき點を見出さないのであるが、これはどういふ理由かといふに、これ等のものは悉く非常な悲しみに遭遇したその主人公たるものの作であるから、隨て眞情の溢れて居る所以である。唯それ眞情を歌つたものである。どうして技巧を弄するの暇があるであらう。奇抜なものの出ないのは怪しむに足りないのである。この技巧を弄してないところが吾々をして作者の心情を直覺せしむる所以なのである。技巧を弄したものはその技巧の技巧たるを解した後にその内容に及ぼすのであるから見るものの感情を惹くことが薄らぐことに成つて仕舞ふ。これがこれ等の作に奇抜な點の無い理由である。夫れから又かういふことがある。同じく物を食ふにしても空腹な時には惣じて味がよい。これは胃の腑の感じを強く敏捷にしておくためである。かかどの刺は痛くないが腫物には手も觸れることが出來ない。これも感じが敏捷になつて居るからである。ここに例に出した歌の由緣もつまるところ讀者の感情を強

めておく一つの方便といつて宜しい。讀者の感情が鋭く強くなつて居るがために其の歌が浸み透るやうに覺えるのである。夫れから子供がここに泣いて居るとする。只泣いて居るのを見たのでは喧嘩して泣いて居るのかどうか分らない。ところがその子が母を見失つて泣いて居るとすると、その子供に對する感情が異なつてくる。

ここに人が困つたといふ一言を發したとする。手桶の水で足袋を濡らしたことでも困つたといふこともあるであらう。二丁か三丁も迂回すればさきへ行かれる堀江の土橋が崩れて居つても吾々は困つたといふことがあるであらう。尋ねる品が見えないでも困つたといふことがあるであらう。是等の些々たることにも困つたといふことをいふとすると、いかに困つたかの說明がなくては分らないことになる。さうしてその說明によつていかやうにも聞く人の耳に響くのである「ぬばたまの黑髮ぬれて」の歌の如きもそのいかなる事柄であつたかの由緣が附隨して

居るために吾々は悲しく感ずるのである。概括して見ればここに述べたことは一の事柄に就て作つたものはどうしてもその事柄を表示してその作つた歌に附隨せしめなければ感じが薄くなるといふに歸するのである。

馬醉木や鵜川の歌を見ても詞書の必要なものに何にもないものが幾らもある。これはこんなものかといふ想像を下して見てもどうやら覺束ないものが少なくない。殊に人事的のものになると人事そのものは複雑なものでも死んだとか生れたとかいふことになると、詮ずるところ悲しいとかうれしいとかいふことになるので有るが、その悲しいにも嬉しいにも歌と詞書と相待つて始めてさまざまに變化して見られるのである。況やその他のものに在つては猶更のことである。詞書を添へる段になると、成たけ離れて作るが肝要になる。詞書が無くても明瞭であるといふ歌よりも、詞書がなくてはならない歌の方が變化せしめ易いのである。素より吾々が常に陷りつつある、詞書と歌とが重複するやうなことは最も厭ふべき

で、そんなことになると感興を殺ぐことといくらであるか分らない。要は附隨せしむべきものには必ず怠る勿れといふことである。

これまで引用した歌のやうに由緣の說明と重大な關係を持つて居なくても、卽ちこれまでのよりも歌そのもので明瞭なものでも、尙ほ說明のために面白さの增すものでは、密に契つた女の方で父母に知らしめむと欲して、男の意向を問ふたといふ

　こもりのみ戀ふれば苦し山のはゆ出でくる月の顯さばいかに

の歌や、男女の間を父母に知られて呵嘖せられむことを恐れて男が心のゆるむだのを女が自分の決心を夫に示したといふ

　ことしあらば小泊瀨山の石城にもこもらば共にな思ひ吾が背

の歌や、また鄙人の我が妻が鄕人に交つて野遊するを見てよんだといふ

　墨の江の小集樂に出でてまさめにも己妻すらを鏡と見つも

の歌の如きはなほ説明を待つてはじめて一層の妙味を感ずるのである。なほ面白いものはいくらもあれどこの位に留めておくが、以上はすべてその事柄の主人公の作ばかりであつたが、有由縁歌の中には稍異つたものがある。

家にありし櫃に鏁さしをさめてし戀の奴のつかみかかりて

柄臼は田廬のもとに我背子はにふぶに笑みて立ちませり見ゆ

夕立の雨うち降れば春日野の尾花がうれの白露思ほゆ

抔であるがこれらに附隨した説明は琴を弄ぶ毎にこれを誦したといふだけでこの歌の出て來る所以は缺如たるものである。これまでの作は皆悲哀煩悶等のもので見るものをして明白地にしかく感ぜしめたが、同種のものでも戀の奴の歌の如きは少しく物足らぬやうな感じがする。尤もこれは巧拙といふ方面からの論ではない。面白いことは面白いが、技巧を弄しただけいくらか作り物の感じがするのである。

ここに擧げた春日野の歌の如きは十六中には異類のもので六、七あたりに入るべきものである。偶々この歌のあつたために余は一つの考を得たのである。それはかくの如き客觀に極めて單純な主觀を交へたものには別に何の説明をも要せないことである。客觀に人事の複雜なるものを交へた時には必ず說明を要することにもなるのであらう。有由緣歌は悉く人事的の作であることを思へばこの說は首肯せらることと思ふ。

更に立ち戾つていつて見れば余が有由緣歌を一つの部門として論じたのは、詞書といふものがどれ程必要なものであるかといふことを、まだ心付かなかつた人に知らしめむとするの素志であつた。さうしてこれ等の歌は慥に十六中に異彩を放つて居つて更に萬葉中にあつても特色を存して居るものと思ふ。さうして悲哀の情の深いもの程奇拔なところも異なつたところもなく、悲哀の情や煩悶の情の乏しいものになれば、その代りに技巧の點がすぐれて居るといふ傾向が見えるや

うである。

（明治卄七年二月十七日發行。馬醉木第九號所載）

萬葉口舌〔三〕

卷の十六の研究（承前）

滑稽　滑稽の部に屬するものは分つて二つとすることが出來る。一はその目的の全く滑稽に存ずるもので、一はその結果の全く滑稽に出でたるものである。目的の滑稽に在るもの、卽ち滑稽を主として作つたもの、作例を示せば左の如くである。

勝間田の池は我知る蓮なししかいふ君が鬚なきが如し

寺々の女餓鬼申さく大三輪の男餓鬼たばりてその子うまはむ

佛造る眞朱(まそほ)足らずは水たまる池田の朝臣が鼻のへを穿れ

小兒等は草はな刈りそ八穗蓼を穗積の朝臣が腋草を刈れ

いづくぞ眞朱穿る丘薦疊平群の朝臣が鼻のへを穿れ

烏玉の斐太の大黒見る每に巨勢の小黑し念ほゆるかも

駒造る土師の志婢麿白なればうべ欲しからむその黑色を

法師等が鬚の剃杭馬繫ぎいたくな引きそ法師なからかむ

壇越やしかもないひそさとをさ等が課役はたらば汝もなからかむ

石麿に我物申す夏痩によしといふものぞむなぎとりめせ

痩す痩すも生けらばあらむをはたやはたむなぎをとると河にながるな

このごろの我戀力しるしあつめ功に申さば五位の冠

このごろの我戀力たばらずばみやこに出でて訴へ申さむ

等であるが悉く皆戲れに人を嗤笑したるに過ぎない。殆んど一時の座興を添へた位のものと見て大なる相違もないゝ人も自分もその座に笑つて趾はなんにも無く、

物に譬へればぱつと開いてぱつと消えたやうに、單純で且つ何物をも捉へないやうな所が厭味の無い所以であらう。ここに擧げた例歌のうちでもなほ二つに分ちうる。卽ち孰れも作者の技倆手腕に俟つて滑稽の趣味を發揮されたには極つて居るが、いくらか滑稽の趣味あるものを土臺にしたのと、更に滑稽の分子を認めないものを全く作者の技倆に依つて滑稽化して仕舞つたものとである。池田の朝臣が瘦せこけた大神の朝臣を嗤れば大神の朝臣が相手の鼻の赤いところを捉へて嗤り返す。穗積の朝臣が腋毛の多いのを發かれて更に相手を嗤りかへす。對照が既に滑稽になつて居る。それに作者の技倆が加はるのであるから愈罪の無い面白いものに成るが「勝間田の池」や「法師等が鬚の剃杭」の如きはその物には聊かも滑稽の分子を含まないにも拘らず、滑稽化せしめた作者の技倆の非凡なるには駭かざるを得ない。

　要するに滑稽の分子を含んだものでも含まないものでも上手に出來たものは甲

乙を附するわけに行かない。しかし十六中に在つても滑稽の分子を含んだもいから成つたのよりは含まないものから成つたのが遙かに少ない。是れ兩者の間に難易の懸隔があるといふことを憶められるだらうと思ふ。結果の全く滑稽に出でたるものは卽ち詠數種物歌であるが、これは前項の例の如く滑稽を主としてのみ作つたものでない。此の滑稽に頗る輕い意味に取るべきものが多い。

さす鍋に湯沸せ子供櫟津の檜橋よりこむ狐にあむさむ
婆羅門の作れる小田を喫む烏瞼腫れて幡幢に居り
こり塗れる塔になよりそ河隈の屎鮒はめる痛き女奴
枳の棘原刈りそけ倉立てむ屎遠くまれ櫛造る刀自
葛花にはひおほとれる屎葛たゆることなく宮仕へせむ
食薦しき青菜煮持ちき梁に行騰かけて息む此君
醬酢に蒜つきかてて鯛願ふ我にな見せそ水葱のあつもの

玉掃刈りて鎌麻呂室の樹と棗がもとを掻きはかむため

池神の力士儛かも白鷺の桙啄ひ持ちて飛び渡るらむ

虎に乗り古屋を越えて青淵にみつちとりこむ剣太刀もが

等であるが、非常な難題を事も無く仕遂げるといふのが主眼になつて居る。只管滑稽を弄するものとは大に相違してくるわけである。窮屈な思ひがけないものを纏めることは困難なことだが、出来るとなれば却つて面白いものをうることが普通である。此等の作例もそれであるが變な了解し憎いやうなところに、いふ可からざる妙味を存じて居る。その了解し憎い罪のないところが自ら滑稽に傾いて仕舞ふのである。作者は滑稽を弄する意志でなくてもその取合せが普通でない爲めに、知らず識らず滑稽になつてくる。此のうちにも滑稽の表面なものと滑稽といふ程でなくても眞面目でないものとがある。「さす鍋」「婆羅門」「葛花」「枳」など、孰れも多少作者が沈思默考のうちにも滑稽趣味を加へようとした形跡を認め

らる「食薦しき」「醤酢に」「玉掃」「虎に乘り」等は、唯よみおほせたもののやうに思はれるが、樑に行縢をかけるとか、醤酢に蒜つきかてて鯛願ふとか、虎に乘つて青淵に蛟をとるといふだけならば不思議はないが、古屋を越えてといふの類、了解すべきものでないところが滑稽に傾いてくる。

了解し憎いといへば、

吾妹兒が額に生ひたる雙六の犢の牛の鞍の上の瘡

吾背子が犢鼻にするつぶれ石の吉野の山に氷魚ぞ懸れる

抔もそれであるが、此は固より了解すべからざるものを作るの意であつたのだから一層六かしいわけである。譯の分らないものではあるが、如何にも初二句から三句への接續が巧妙で音調が些の澁滯も無いために欺かれて何物かを言ひ表したものであらうといふやうな感じが卒讀の際には起る。その感じの起るだけこの歌を全く了解した以上には巧妙なる手段に驚かさるるのである。巧妙なる手段とい

ふのは人を馬鹿にした點にあるので、人を馬鹿にしたところが滑稽である。

以上掲載したる歌に就て音調の上から見ると——無心所著歌の如きは殊に音調の滑かなる爲めに成立して居るのだから別物として前項の二つの例に就いて見ると一は流暢にして一は拮屈である。一は思想の趨くに任せて些の拘束もないのに、一は極端の束縛を蒙つたからである。前者の流暢なる所以は嬉戲の間に成つたのも原因である。普通の談話であつても眞面目な話は重くるしいが笑ひばなしは輕快になる。から考へて見ると流暢が更に流暢に感ぜられる。後者の拮屈は束縛を受けて居るからであるのは勿論のことだが、卽ち材料が夥しいために、全體に非常の重量を感ずる。材料の一つ一つを僅に彌縫し得たに過ぎないのであるから重量が一點に歸着しない。初句でさへも非常に活動して居る。これは慥に萬葉中の破格なものである。しかし幸に結句を疎末にしない爲め一種の平均を保つことが出來た。

自分は嚢に東歌は外形に優れ、滑稽歌は内容に秀でて居るといふことを斷言して置いた。十六の滑稽卽ち玆に示した例歌の内容に妙味の存在して居ることは瞭然たる所であるが、外形に於ても頗る見るべきものが少くない。此は丁度東歌の中にも内容を以て誇るべきものがあつたと同一事である。

十六の滑稽には他に類例のない句法がある。「その子生まはむ」とか「法師なからかむ」とかいふ類がそれである。其他に至つても「鼻のへを穿れ」「腋草を刈れ」「五位の冠」「狐にあむさむ」「痛き女奴」「櫛造る刀自」「幡幢に居り」等孰れも一種の用法である。何故に此の如き珍らしき句が十六には散在して居るかといふに、作者の目的方法が他の場合とは全く相違して居る。言語句法共に變化せしめなければ到底言ひ表しえないものを試みた結果である。それで十六の作者は最初から言語句法の變化を期待して居つたかといふに決してさうとは言はれないことと思ふ。出來上つたものが自然に此の如きものを得たのであらうと考へられる。滑稽

の作と稱すべきものも、當時は十六所載の少數のみでは無かつた。必ず他にも有つたらうがその成功したものが現存して居るのだ。一日して作者の氣乘りがした時分の作であることがわかる。氣乘りのした時分は思ひの外の作をするものである。十六の作者も蓋し作つてから面白いことであつたと心付く位のものであつたらう。

（明治卅七年五月五日發行。馬醉木第十一號所載）

萬葉口舌〔三〕

卷の十六の研究（承前）

雜歌。此の部に屬すべきものは明瞭に一の標題のもとに一括することの出來難いものである。

竹取翁の歌と乞食者の作二篇とは共に理想的で十六中に珍らしいのみでなく、萬葉全體に通じて見ることの出來ないものである。此種の作では九の浦島子、勝鹿眞間娘子、菟原處女の如きものがあるけれど、彼れは固より世上に流布したる傳說を基礎としたり、又は土地の古老から聞知したりしたものであるが、此は悉く作者自身の頭腦から案出したものである。隨つて彼は客觀的の作であるが、此

は主觀的の作である（比較的に）。然し孰れも萬葉集中に珍らしいのみでなく、古往今來歌といふものの中に匹儔すべきものがない。萬葉の思想は極めて簡單で、露や梅のやうなものであつても、どれを見ても皆同一であるやうに感ぜられる程であるにも拘らず、著しく多方面であつて、後世迚ても係さへ見ることの出來ないものがいくらもあるが、これ等の作はその最も著しいものである。

それ故予は長いのを厭はず三篇とも玆に揭げて、少しく意見を述べて見たいと思ふ。

唯竹取の一篇は古來難解の作で頗る研究を要すべきものであるから暫く避けて他日に讓るのであるが、難解といふのも詰り語句の上に存するので、主意とする所は無常迅速といふ觀念を言ひ表したる至極簡單のものである。故に全然空想より成つて居る。勉めて面白きものにしようとした結果、隨分形容のしやうには苦心慘憺したものである。萬葉古義の作者からは「こちたき漢國の故事を主として

よめるなどいとうるさく、人麻呂赤人の餘風はきよく失り果てて今さだかに解得がたし」とまでいはれ居るのであるが、そこがこの篇の生命の存する所で、少年易老といふ觀念をいふために、作者は殆んど自己の有する限りの手腕を振つたものと認められるのである。解し難きは語句であつて主意は至つて見易いものであるといはば趣味的に研究する人の爲めには左程に困難でもないと思ふ。

乞食者詠二首

いとこなせの君、居り居りて物にい行くと、韓國の虎とふ神を、生けどりに八つとり持ち來、其皮を疊にさし、八重疊平群の山に、四月と五月のほどに、藥獵仕ふる時に、足引の此片山に、二つ立つ櫟がもとに、梓弓八つ手挿み、ひめ鏑八つ手挿み、しし待つと我居る時に、小男鹿の來立ち嘆かく、忽ちにあれは死ぬべし、大君に吾は仕へむ、吾角は御笠の飾、吾耳は御墨の坩、吾目らは眞澄の鏡、吾爪は御弓のゆはず、吾毛らは御筆の飾、

吾皮は御箱の皮に、吾肉はみなます榮(はや)し、吾膽も御膾はやし、吾みぎは御鹽のはやし、老い果てぬ我身一つに、七重花咲く八重花さくと、白しはやさね、まをしはやさね

右歌一首爲鹿述痛作之也

押照るや難波の小江に、廬造りなまりて居る、葦蟹を大君召すと、何爲むに吾を召すらめや、明けく吾は知ることを、歌人と吾を召すらめや、笛吹とわを召すらめや、琴彈と吾を召すらめや、かもかくもみこと受けむと、けふけふと飛鳥に到り、おかねどもおきなに到り、つかねどもつく野に到り、東の中の御門ゆ、參り來て命うくれば、馬にこそふもだしかくもの、牛にこそ鼻繩はくれ、足引の此片山の、百楡を五百枝はぎ垂り、天てるや日のけに干し、さひづるや柄碓に舂き、庭に立つすり臼につき、押してるや難波の小江の、始垂を辛く垂り來て、陶人の作れる瓶を、けふ往きて明

日取り持ち來、吾目らに鹽ぬりたまひ、もちはやすも、もちはやすも

右歌一首爲蟹述痛作之也

これも嚢に言つた如く、普通知られて居たことを極めて面白く作るといふのが目的なのだからその心持で見なければならぬ。それで孰れも鹿自ら、蟹自らの言語にしてある。鹿の歌の如きも作者の說明と見るべき句は「八重疊平群の山云々」の十六句に過ぎない「伊刀古なせ云々」の十句は序歌である。序歌としても隨分思ひ切つた大膽な用法である。然し一篇の構想は滑稽の分子によつて面白からしめむとしたのであるからこの大膽な用法は寧ろ適切な感じがする。

蟹の歌には特別なる序歌の如きものはないが、想像の變化があるので鹿の歌よりも面白く感ぜられる。これも滑稽の分子が充滿して居るのであるが、先づ蟹の態度の傲慢らしく見えるのを表はすために「葦蟹を大君召すと」から「みこと受けむ」までいつてある。これを古義の作者は「何の能もなき吾なるに何故に吾を

召したまふことぞと疑ふ意なり」といつてあるがそれでは面白くない。傲慢不遜の態度を形容したものとするから、はじめて盤その物が眼前に髣髴として來るのである。「おかねどもおきな」「けふけふと飛鳥」「つかねどもつく野」や馬にこそとか牛にこそとかいふのも、皆一篇の上に關係を及ぼさないものであるが、面白くしようといふ爲めにかういつてあるのだ。以下の句も皆それである。

二篇共に左程にもないことを作者の技倆一つで極めて面白くしてあるのは竹取と同一轍である。然し此は事柄の形跡のあるものを基礎としたのであるが竹取は全く假想である。此の一讀明瞭に且つ了解し易いのに、竹取の再三再四反覆してなほ不明の感じがするのは、有るものを基礎としたことと、無いものから案出したこととの相違からくるのである。即ち一は隨分無理にも語句を造らなければならないが、一は極めて樂にいくからである。

十六のこの三篇は孰れも面白いのであるから、甲乙を附するといふことは六か

しいが、有るものを基礎とした鹿蟹の歌の如きは、無いものから案出した竹取の如きものよりは變化せしめ易い。それで竹取の如きものは再び出來難いが、鹿蟹の如きやり方は趣向の立てやうによつて更にまた出來る望がある。それで鹿の歌と蟹の歌とに就て比較して見ると、鹿よりは蟹は變化がある。隨て內容に面白味がおほい。その代りに鹿の歌には蟹の歌にない大膽な序歌が用ゐられてある。恰も鹿の歌に比して竹取の歌が非常に語句に力が費してあるやうな傾きである。

能登國三首も面白いものである、

かしま嶺の机の島の、小螺をい拾ひ持ち來て、石もちつつきはふり、はや川に洗ひ濯ぎ、辛鹽にこごともみ、高杯にもり机に立てて、母にまつりつや、めつこの刀自、父にまつりつや、みめつこの刀自

此の短い體は十三一卷が悉くそれであるが、只この作の十三にあるものと異つて居るのは、動作の極めて明瞭に表示されてあることである。小螺を料理する狀

が遺憾なくあらはれて居る。この作は料理する狀をいふことの外になんにもいつて無いのだから、之を讀むものの腦中には作者がいはむとした動作のみが印象されるからである。萬葉の凡てが茫漠たるものであるのに、この作の如き明瞭なものは洵に珍らしいのである。

堦楯の熊來のやらに、新羅斧墮し入れわし、かけてかけてな泣かしそね、浮き出づるやと見むわし

右歌一首傳云或有愚人斧墮海底而不解鐵沉無理浮水聊作此歌口吟爲喩也

堦楯の熊來酒屋に、まぬらる奴わし、さすひたて率てきなましを、まぬらる奴わし

これはさきのとは正反對に極めて茫漠として新羅斧の如きは殆んど了解し難い程で、解釋して仕舞つては趣味を減却せしめると思ふ位のものである。然しそこ

が長所のある點で飽くことの知らない理由である。このやうな句法は萬葉集よりは萬葉集以前にあるので、以前といふのよりは俗間にあつたのであらう。それが埋れてしまつてここに二つ位が保存されたのかも知れない。現今であつても子守唄や手毬唄の中にも何の意味であるか分明でないやうなものに語路の流暢で滑かなためいふべからざる妙味のあるものがいくらもある。この二つの語句の末に「わし」といふ語の附隨して居るなどは頗る面白味を助けて居る。加之この二つは萬葉集中他に類のないものであるに至つては更に面白い。

厭世間無常歌三首

生死の二つの海を厭はしみ潮干の山をしぬびつるかも
世のなかのしき借廬に住み住みて至らむ國のたづき知らずも
鯨魚取り海や死にする山や死にする、死ねこそ海は潮干て山は枯れすれ

藐姑射山歌一首

心をし無何有(むかう)の郷に置きてあらば藐姑射の山を見まく近けむ

萬葉集に於ける佛教思想といふことで必ず引證される歌であるが、それは玆にいふべき限りでない。此歌はいひ表しが變つて居る。無何有の郷とか藐姑射の山とかも目立つて見えるが殊に「見まく近けむ」の如きは稀な語である。これはうたふべき方面が異なつたからなので、同一方面の作では作者の手腕で變化はあるにしても異なつた方面程に變化し易くはない。

怕物歌三首

天なるやささらの小野に茅草刈りかや刈りばかに鶉をたつも

奥つ國知らす君が染屋形黄染の屋形神の門渡る

人魂の佐靑なる君がただ獨りあへりし雨夜は久しく思ほゆ

これもいくらか異なつた方面の作であるが、かくの如きものの存在は複雜なる十六をして更に複雜ならしめるものである。この他にも單に面白いといへば面白

いものもあるが、萬葉の全體から見れば普通のものであるけれども、唯一つ擧げて見たいのは越中國歌四首の中の、

伊夜彦のおのれ神さび青雲の棚引く日すら小雨そほふる

の莊嚴な感じがあつてしかも極めて寫生的なことである。そこで二の句の「おのれ」が難解であるが、「おのれ」は「尾ぬれ」で山の頂であるといふ考を持つて居るのは左千夫君である「おのれ」と「おぬれ」では假名が違ふが我輩は「おぬれ」として明瞭に且つ妙味を增す方に左袒せざるをえない。

畢りに筑前國志賀白水郞歌十首といふもの、これは寧ろ有由緣歌の中に入るべきものであるが、これを山上憶良一人の作であるとすると、一つの連作の體をなすので稍々注目すべきものになるが、その變化のない所先づ價値のないものとするが至當であらう。

要するに萬葉の十六は極めて複雜な卷であることが特色で、有由緣歌が悲哀怨

恨の情を歌つたものかと思へば、滑稽の歌の如きものがある　而して我々が萬葉十六に學ぶべきは、異つた多くの方面に渉つて變化せしむべきことでなければならない。

（明治三十八年二月二十日發行。馬醉木第二卷第一號所載）

歌の季に就いて

△ホトトギス七の六高濱虛子氏の俳語の一節にかういつてある。

……次に又、和歌は季を入れずして趣味あることを得るが、更に其に季を入れたらば更に趣味ある和歌となりはすまいか。言を換へれば從來無季の和歌のあつたのは、俳句に比して未だ至らざること一歩であつたのではあるまいか。といふ問題を先づ呈出して見たい。これは和歌に對しては輕からざる問題で、余の如き局外者が輕卒の判斷をなすわけには行かないが、叙情歌は暫く措き、「箱根路」の歌の如き叙景歌に季の無いといふ事は、俳句を作るものの目から見ると何となく物足らぬ樣に思はれる。若し春夏秋冬

孰れの季かが此歌中に明示されて居つたならば其光景が一層判然として、更に一層趣味ある歌となりはすまいかと思はれる。景樹の、

伊勢の海の千尋たく繩永き日も暮れてぞかへるあまの釣舟

といふ歌の如きは「永き日」なる言葉ある爲めに季の感じ確りして、從て風光の上にも種々の連想を惹起せしめる。若し此歌に「永き日」なる言葉が無かつたら蠟を喫む如き無趣味なものとなるであらう。此歌と實朝卿の歌との價値を同一に論ずるわけにも行くまいが、彼の歌に季のものがあつたら更に幾多の趣味を添附し得たらうといふ事の反證とはなるであらう。

………俳句に季無かる可からざる事を前提として、和歌、少くとも叙情和歌には成るべく季を入るる事を歌人諸君に勸め度と思ふ。………

△まことに丁寧穩當の見解であつて、かくの如き考を持つて居るものは天下の歌人中幾人もあるまいと思ふ。此議論で見ると主眼とするところは季に注目せよと

いふに歸するのであるが、敍情歌に就ては別として敍景歌に季の無いのは、趣味の上に價値を減ずるといふので極めて概畧の論である。卽ち議論としては簡に過ぎて居るやうに思ふ。そこで季といふものに就いての自分が持つて居た考を述べて、歌といふものゝ各種の場合を引いて論究して見たいと思ふ。

△萬葉集の歌に就いて一渡り硏究して見れば、萬葉集には無季の傑作が枚擧に遑ない位である。一寸擧げて見ても、

さゞ波の志賀のおほ和太よどむとも昔の人にまたも逢はめやも

丈夫がさつ矢手挿み立ち向ひ射るまど滷は見るにさやけし

丈夫の鞆の音すなり物部の大臣(おほまへつぎみ)楯立つらしも

等の作であつても季はない。然しながら萬葉中の傑作である。高濱氏の「俳句入門」に據て吾々の知つた所は俳句に季のあるのは繪畫に色彩のあるのと同一であるといふことであるが、色彩といふのは卽ち裝飾である。季も亦或意味に於ての

装飾といつて不可なしであらう。又季は空間の連想を惹き起すためのものであるといつてある。俳句は此の如く微妙なる感じを主とし居るが、萬葉の作者は時代の然らしむる所でそんな考は毫末もない。それにも拘らず巧妙なる作を出したのは、一つは歌と俳句との間に自ら異なつたる性質のある故であらう。以上の例に見ても或事柄と隨作して居るものは單に歌その物のみを見るべきでなく事柄とあはせ見てはじめて一層の光彩を放つものである。さゞ波の一であつても柿本人麿が近江の故都を過ぎ、有爲轉變の世の中を悲んで作つたといふ事柄、その事柄よりして壬申の亂を連想して更に此の作に對すれば一層吾々の感じが深くなる。丈夫がさつ矢手挿み一の如きも從駕の人の作であるといふことを知つて見ると、など瀧の淸く潔きを珍らしく思つたことがよく解る。丈夫の鞆の音一も事柄の隨伴せるによつて面白いものである。さうして此等の作は孰れも事柄と相俟て面白いのみでなく、調子の上に於て特に趣味を感ずるのである。歌（暫く長歌を省く）は

文字の數に於ては俳句に比して殆んど倍して居るにも拘らず、內容は却て簡單なる場合が多い。この例にしてもそれである。そこが俳句に比して遙にのんびりした所以で、言葉の上に專ら裝飾を施すことが出來るわけである。裝飾の爲めに數多い文字を使用して且つのんびりせしめることは俳句には到底容れ能はざるところである。こののんびりした點が歌の長所の一つで音調の上に餘韻を感ぜしめる。歌は比較的簡單であるから隨て狹くなるがこれらの作の傑出したる理由に外ならない。

憶良等はいまはまからむ子泣くらむその彼の母も吾を待つらむぞ

人言をしげみこちたみ逢はざりき心あるごと思ふな我背

丈夫と思へる我や水莖の水城の上に涙のごはむ

君が行くみちの長手をくりたたね燒き亡さむ天の火もがも

琴とればなげき先立つ蓋しくも琴の下樋に嬬やこもれる

等の如きで素より季はない。文字の數(かず)あるだけ感情の由て來る事柄とか、自己の動作とかの一部分が表明されてある。長歌になれば文字の數が無窮大であるだけますます自在である。然しながら主觀を咏ずるにしても、絕對に他の事物を借りないといふわけには行かない。主觀を咏ずる場合には文學の上に於ける裝飾を施すことも趣味を變化する方法の一つである。例へば、

秋の田の穗の上に霧(きら)ふあさがすみいづへの方に我戀やまむ

大船の檝取の海に碇おろしいかなる人か物思はざらむ

難波人葦火たく屋の煤たれど己が妻こそとこ珍らしき

柜楉(うませ)越しに麥はむ駒の罵らゆれど猶しこひしくしぬびかねつも

湊入りの葦分小舟さはりおほみいま來む我をこずと思ふな

これは即序詞の體で俳句にはない處だ。單純な意味を詞の飾りで面白くなつてゐる。又直ちに季のものを提へて作つたものもある。

葦邊行く鴨の羽がひに霜降りて寒き夕は大和しおもほゆ

君待つと我こひ居れば我宿の簾動かし秋の風吹く

我宿の穗蓼古幹(ふるから)つみおほし實になるまでに君をし待たむ

ながらふる雪吹く風の寒き夜に吾背の君は獨かぬらむ

三吉野の山のあらしの寒けくにはたや此宵も我がひとり寢む

それで此の三つのうちで孰れが適切に感情を言ひ表して居るかといへば、裝飾も季もないものと季のものを捉へたものとで、文字の裝飾をしたものは稍劣つて見える。一つは感情の激した折の作であるから、直叙して宜しい。却て裝飾等を嫌ふのである。然しこの方法で成功する場合は少ない。文字の裝飾をするのは比較的輕い場合の仕方で、季のものを捉へるのが適切に且簡易な方法である。萬葉集に在つてさへもかくの如くである。ここ大に刮目して見なければならぬ。

△これからは敍景の方面に向つて見よう。先づ「箱根路」の歌を吟味して後に萬

葉集に及ばむとするのである「箱根路」には人情を含むで居ない、景色を叙することが主になつて居る。一二の句「箱根路を我が越え來れば」にて作者自身の位置及び動作までが明瞭に說明してある。三句に至りて「伊豆の海」なる地名を措出し、更に四の句「沖の小島」といひて思想をその海中の一小部分に集め、波のよる見ゆ」の句を以てその一小部分の現象を說明し盡したるもので、秩序整然粗より細に入り、大より小に至る、一糸紊れずして叙し去りたるところ、かくの如く明瞭な序法は萬葉にも比少きものである　然しながら高邁なる作者の手腕は却て無季の點に於て議せらるるに至つたのである　もとこの歌は萬葉の句法を襲踏したるもので、萬葉中より例を引けば

相坂を打ち出でて見れば近江の海白木綿花に浪立ちわたる

の如きで、一見頗る似て居るがこれは簡單である。その內容は只相坂山を越えて來たれば近江の海に浪が立つて居たといふ他に一物をも含んで居ないもので、こ

れは萬葉の作者の長所で後世の人からは珍らしい仕方である。それでこれには季節もなにも問ふの遑がない。只浪が立つて居たから浪が立つて居たといつたまでなのだ。吾々はこの點に少なからず趣味を感ずる。しかも内容の簡單なるだけすべてが茫漠として居るにも拘らず、「白木綿花」といふ句を用ゐて浪の形容までしてある。箱根路の歌はキチンとし過ぎて居る。これはボウッとして居る。箱根山の歌はキチンとして些の餘裕もないために季のないのが物足らず感ずる。然しながら箱根山の歌を以て價値なきものとは思はぬ。さうして季を入れるとした所容易なことではない。これを霞む小島とするといふやうな説もないではないが、それでは折角明瞭な「波のよる見ゆ」が役に立たなくなる。やつぱり箱根山の歌はこの儘でいゝ。これを救ふ方法といへば、時日行旅のこと等を前置にしたなら季の感じも確かまつたであらうと思ふ。それから簡單といへば萬葉の

大海に島もあらなくに海原のたゆたふ浪に立てる白雲

の如きも只平に靜かな海上に雲のむらむらとして騰りたるを直叙したるもので、季節の如きは關するところではない。一切が茫漠たるものであるのを茫漠と表はしたもので頗る珍らしくまた作者の手腕に驚かされるのである。然しこの種のものは辛くして得べきもので失敗し易い。

△そのほか叙景の作では、

渡津見の豐旗雲に入日さしこよひの月夜きよくてりこそ
ひむかしの野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

登筑波山詠歌

天の原雲なきよひにぬば玉の夜わたる月の入らまく惜しも
和歌の浦に潮滿ち來れば潟をなみ葦邊をさして田鶴鳴き渡る
伊弥彥の尾ぬれ神さび靑雲の棚引く日すら小雨そぼ降る

等も季は明瞭に指示してない。指示してないが豐旗雲の歌の如きはどうしても秋

の感じで筑波山の如きも同一である。「月傾きぬ」の歌の如きは漠然たる言ひ表し方に趣味を感ずる。その音調の壯重なるところ器局の雄大なるところ、その丈高きところ萬葉集中古今の短歌中に在りても屈指の作であると思ふ。伊弥彦の如きも落葉樹の茂つて居る時節を見て趣味を感ずるのである。和歌の浦の歌に至つては容間が明瞭に叙せられて居るにも拘らず季がない。然しこの歌が表はして居る音調と風光とは直ちに萬葉集中に異彩を放ちつつあるものであると感ぜしめる。若し強ひて季の觀念を確めるといふ段になれば、この歌の前書によつてしたいと思ふ。然しそれは冬のことであるので寧ろそれが無かつた方がいいと考へる位である。

△眞面目に景を叙し事を叙したるもので季のあるものは、

巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつしぬばな巨勢の春野を

淺緑染めかけたりと見るまでに春の柳はもえにけるかも

春過ぎて夏來るらし白妙の衣ほしたり天の香具山

等であるが、かくの如く敍景敍事を主としたものは萬葉には極めて少ない。却て

足引の山鳥の尾のしだり尾のながながし夜を獨りかも寢む

ますらをの弓末振り起し獵高の野邊さへ淸く照る月夜かも

のやうに主とする點は極めて簡畧で文字の裝飾、裝飾といつてもそのために言ふところを一際適切にするの方法を取つて居るものがある。

△箱根路の歌に稍々類似したものでは、

天離る夷の長路ゆこひ來れば明石の門より大和島見ゆ

これは目的が敍情にあるので、季節がいつであらうがそんなことは問ふところでない。只明石の門より大和島の見えたのが嬉しくつてかく作つたのである。

淡路の野島が崎の濱風に妹がむすびし紐吹きかへす

これも季節には些の關するところではない。然かも吾々は見て以て傑出したる作

品と信ずる。目的がやつぱり叙情にあるので、叙情の點に成功して居るからである。

△猶叙景の作中で季のない例をいへば、

櫻田へ鶴鳴き渡るあゆち潟汐干にけらし鶴鳴きわたる

しはつ山打ち越え見れば笠縫の島榜ぎ隱る棚なし小舟

いそ埼を榜ぎたみ行けば近江の海八十の湊に鶴さはに鳴く

なはの浦にしほ燒く烟ゆふされば行き過ぎかねて山に棚引く

眉の如くもゐに見ゆる阿波の山かけて榜ぐ舟とまり知らずも

妹に戀ひあかの松原見わたせば汐干の潟にたづなき渡る

あま小舟帆かも張れると見るまでに鞆の浦囘に浪立てる見ゆ

さうして却て叙情的の序歌に在つて季のあるのは抑もどういふ理由であるか。萬葉の作者の叙景は多く唯壯大なる、茫漠たるものを選んだため季の有るものが少

ない。敍情になると沈んだものが普通である。思ひに沈んで居る時に仰いで壯大なる風光を觀ることはなく、手近のものを探るべきである。隨て序歌の材料が季を有したる秋の田の穗とか、麥とかいふものを用ゐるやうに成るのである。

△萬葉の研究は先づ此位にして之を總括して見ると、敍情には季のないものと有るものとがあり、敍景にも季のないものと有るものがある。さうして季のあるものにも傑作があり、ないものにも傑作がある。そこで萬葉はさうであるが今後の歌人はどうすべきであらうか。かういふ考を持つべきだと思ふ。

一、敍情歌に於ては、勿論無季で佳作を得ることができる。

一、同じく季なきも序歌又は比喩等によりて、文字の上に裝飾的語句を用ゐて佳作をうることが出來る。

一、季のものを捉へて懷を述べると適切に且つ簡易に言ひ表はしえらるることがおほい。故に敍情にも季のあるためにより多く面白味を感ずることが

出來る。

一、叙景歌では、只茫漠とした空間を茫漠と言ひ表はす場合には季の必要が少ない。從て無季の叙景にも佳作を得ることができる。

一、單純より複雜に入るのは自然の法則で、今人の單純と思意するものは必ずしも古人の單純でなく、古人の複雜としたことが必ずしも悉く今人をして複雜を感ぜしめることは出來ない。同じ句法の上に製作したものでも、相坂山の歌と箱根山の歌とが相違して居るのは、自ら古人今人の思想の相違を示したものであるといつても差支がない。吾々の頭腦では到底萬葉の單純、萬葉の茫漠主義で滿足は出來ない。一草一葉の微なるものまで趣味を求めなければならない。季が必要であるのはいふまでもなく、知らず識らず季を有するやうに成る。

一、叙情叙景共に季を必要とする場合が多いけれど、强ち一首のうちに必ず

明かに表示されずとも、詞書と歌とをあはせて季の觀念の確めらるべき場合もある。

△詰るところ季は和歌にも必要であるが、俳句とは程度に於て異なつてゐる。俳句は絕對に季を要するが、歌は決してさうでない。

餅買ひにやりけり春の伊勢旅籠

の如きは一句の上に春の觀念を表はさんがための春の字であつて、自然的の春ではない。寧ろ理屈的規則的に春の字を入れた樣に感ずる。歌にはか程までに要求しない。季は天然の現象を咏ずるに最も適切にその現象を感知せしむる方便で、季なくして咏出したる天然の現象は、讀者の腦中に一種の不安心を生ぜしむるが故に、今後の作歌はこの點に俳句と接近するであらうけれども、性質上一步の隔てを有し、百步の隔てを有するのである。そこで高濱氏の「從來無季の和歌のあつたのは、俳句に比して未だ至らざること一步であつたのではあるまいか」といふ

數句だけは粗滿であつたやうに思ふ。(萬葉のうちでも大伴家持の作は大分季のものがはひつて居るが、一つは時代の然らしむるところで、一つはもはや題詠に傾いて來た爲めでもある。それで佳作はその以前のものとは比較にならない程劣つて居る)

(明治三十七年七月發行。馬醉木第十二號所載)

竹の里人選歌につき

左千夫に宛てた消息

惣體の歌に就て僕は、動物、植物、器物、裝飾、食物の五題に分けて調べて見た。興味の無いでもない。

動物

（獸類）熊、狸、馬―駒―赤駒―黒毛の駒、鼠―嫁が君、狐、さを鹿、犬、猫、兎、ましら、かはほり、

（鳥類）鷄―初鷄、鶴―蘆田鶴、鴉、鴨、鷲、雉、梟、つぐみ、鳩、鷹、鶉、鵲、雀、燕―岩燕、眼白、カナリヤ、千鳥、鴫、雁、鶺鴒、木兎、頬白、ひえ鳥、

(虫類) 五月蠅、桑子―繭、蝴蝶、谷蟆、こほろぎ、きりぎりす、蟻、龜、蛭、蚯蚓、灯取虫、

(魚貝類) 鰯、ひしこ、日高、鯉、沙魚、めばる、鯖、金魚、鱸、貝―蛤、海鼠、

(想像の動物) 鬼、土蜘蛛、蒼虬、天狗、龍、

植物

(木) 銀杏の花、栗、―栗の實、松―松原―門松―玉松―小松―松の葉、竹―刺竹―むら竹―竹の葉―小笹、梅、椿―白椿、 檜原、櫻―鹽釜櫻―楊貴妃櫻―姥櫻―小町櫻―西行櫻―墨染櫻―兒櫻、桃、藍毘尼の林、山茶花、杉、楢林―楢の實、茨、八重の緋桃、梨、錦木、はしばみ、白木綿花、樛、しだれ小櫻、李、樫の木、つつじ、青柳、楓、牡丹、沈の木、伽羅、眞榊、桂、いちしば、えびかつら、辛夷、いぬしだの木、楠、棕櫚の花、桜の芽、白樫の落葉、枇杷の落葉、木犀の芽、接骨木(藤)

(草) 麥―麥畑、山慈姑(カタクリ)の花、芝、すゞ菜、(日かげかつら)稻―藻、菫、萱、白百合、罌粟、(天羅) 萩、芒、雪菜、菊―白菊、藍、菖蒲、金盞、蕗の葉、蓬が杣、蕨、(苔)、葱の青鉾、葉廣菜、淺茅原、芍藥、徘生、あづま菊、薊、根芹、蠶豆、蓮―白蓮、羊齒、

いちご、毒菅、芋、諸、黍の稈、眞菰、瓜、茄子、露草、蒜、夏菊、ねむり草、鳳仙花、

器物、（衣服類をも含む）

（括弧内のものはこの類に入るるは穩かならざれども暫くこの儘にす。その他にもかくの如きものあり）

鎌、鍬、網、たたら、ガラスの管、鋸―鋸の歯、逆鉾、板戸、竈、梶、白帆―眞帆―片帆、被帽、扒、箕、鉢、瓶、太刀、瓢、琴、罎、（寫眞）、クルップの丸、錦の幕、鐘―釣鐘、遠眼鏡、電燈、扇、（汽車）、（汽船）、球、畫帖、障子、鋏、（足柄小舟）、（ボート）、たふさぎ、幌、笥、鶴嘴、提籠、（鑑）、（砲）、提灯、冕、直垂、（卒都婆）、矢、征箭、弓、（棚なし小舟）、むしろ、針金、釜、杵、瓊、フグシ、帯、樋、鑄型、箱、書棚、硯箱、料紙箱、針、菅笠、炭とり、羽箒、（苫舟）、竹簍、繩、衾、白紐、笊、機足、竿、琵琶、玉の櫛笥、旗、火桶、梯、太鼓、毬、初荷車、羽子―羽子板、燒太刀、齋瓮、斧、砧、雪車、紙鳶、罠、麻繩、笛、幟、（あまのつり舟）、南蠻鐵の燈籠、

裝飾

雛、アーチ、紙花、錦、櫻色、薔薇色、輪かざり、注連、黄金の鳶、濃染振袖、花籠、

食物

餅、屠蘇、雑煮、酒、蜜柑、海苔、栗飯、氷、さくら花漬、乳、菖蒲酒、蓮、林檎、

柿、藷、茸、栗の實、茶、ひしこ漬、酢、

嚴重にしてはおかしな所がある。即ち弁などを器物の中にいれたのがそれであるが、先づ極めて廣義に解することにしてなかなか多數の材料を以て咏じたものだ。しかし、このなかには隨分な無理を冒して遣つたものがある。今日の我々にしては首を捻るものがいくらもある。これはその當時活氣に任せて外形も何も滅茶滅茶な時分だから出來たことなので、隨而佳作に乏しく疵だらけのものである。疵だらけでも現在のやうに萎靡銷沈して平凡に次ぐに平凡を以てするよりも遙かにましだが、これだけの品物(ひんぶつ)の中殊に動植物の中でも全く珍らしいものといふのはいくらもない。普通のものでも面白いものの出來るのは勿論であるが、出來るこ

とならば珍らしいものを持つて來るがいいではないか。山慈姑の花なんて僕は知らないが面白さうに思ふ。この歌は、

家づとに妹にやらむと森をあさり摘みてぞかへる山慈姑の花

だが、これでもいいはいいが、も少し上手いふと一層よくなる。全體歌人などは動植物の智識などがあんまり無さ過ぎるのだ。少しの心掛けやうによつて、路傍にいくら程やさしい面白い草があるか知れんといふこともわかる。そんなもので作るとしたならば縱令それが非常に上乘な作でないにしても變つたものである。自己の歌ふ所の區域が擴大されるのだ。徒に深山大澤を跋渉するばかりが能事でない。自然は我々にいくらでも手近に面白い動物や植物を分布して置いて呉れる。今後の歌人たるべきものはこの方面にも大に力を致してよからうと思ふ。そこで僕は植物に就て先づ少しばかりの智識をえたいと思つて、先輩に問ひ質して見ていろ〳〵の草の名を知つて歌を作つたがこの間やつた原稿の歌がそれだ。勿論あ

れは拙いがこれ迄人が注目しなかつたものを取つてした丈は自ら認めるのだ。もとより句法の變化に乏しいといふやうなことは甘んじてその譏りに服從する。僕はあれだけでは止めない。出來るだけ作つて見る積だ。新に出來たうちに、

菜の花は咲きのうらべになりしかば莢の膨れを鶸の來て喰ひ

かぶら菜の莢喫む鶸のとびたちに黄色のつばさあらはれのよき

の如きものがあるが、句法その他いひ顯はし方は別問題にしてかういふものが歌に詠まれた、卽ちかういふ平凡なやうな微細なことが歌に詠まれたのは餘り見受けられないやうである。菜の花の末になつて莢を結んだ丈ならば前例もある。君も詠んだやうであつたが、鶸が來て喰ふといふところは珍らしいだらうと思ふ。又鶸の逃げ去る時に翅を廣げるためにひらひら黄色い色の見えるといふことも珍らしいではないか。かういふことでやると、文字の數多いだけ明瞭に表明しえらるるので決して俳句に劣るまいと思ふ。俳句に劣るまいといふのは、この題が劣

るまいといふのでなくて、かういふやり方で成功したならばといふことである。人の顧みなかつた清楚なる趣味を捉へてやるといふのが、僕の近頃意を注いで居る所なのだ。かういふものになると堅くるしい詞や飾り詞などは必要を感ずることが薄い。有の儘に表はすのが第一に成つてくるのである。それでこれらは皆實景でなければ駄目である。竹の里人選歌中の作でも眼前の景物を取つて質實に詠んだものは、その當時に評判がなくても見飽がしない。三十三年の春雨の作でも君なんぞのは、却て人が馬鹿に見た位だつたらうが今日見るといいのだ。他の人のは餘り漠として緊りがないといつてもよいのに、君のは局所を見付けてしかも珍らしい所なのだ。葱の靑鉾が立つて居るとか、葉廣菜に白玉おくとか、赤かつた楓の芽が稍靑くなつたとかいふのであるから、讀者の胸中に極めて明瞭に印象される。先生の抔でもさうだ。芍藥の芽といつて更に紅といつてあるのが面白い。先生のは凡てがこんなやり方で、當時はつまらぬ樣に思つて居たが時立つに從つ

て却てそれがよくなる。我々の腦髓は古人のやうに雜駁な單純なのではないから、詠ずるものも隨て緻密になるべきである。僕のいふことは一つの體に就てであつて、こんなやり方で名山大川を詠まうとしたつてそれは間違だ。なぜならば名山大川と一口にいふことは緻密といふことではないからである。

纒りもつかないことをいつて居るうちに紙數が馬鹿に殖えて仕舞つた。まあこゝらでよしにしよう。只僕は竹の里人選歌には屑が非常にあるが、不朽に垂るべき佳什のあるのを窃に喜ぶのである。それと共に連作といふことが非常な注意でないと十首も作らうといふと同一のものが重なつてしまふといふことと、質實なものは場當りがしないでもいつまでも襃めないといふことゝを知りえたといつて置く

編者曰、文中「君」とあるのは伊藤左千夫をいふのである。

（明治卅七年八月廿五日發行。馬醉木第十三號所載）

寫生の歌に就いて

○萬葉の歌は面白い。萬葉から出たものも亦面白い。萬葉の歌は主觀的である。萬葉から出たものは隨て主觀的に傾くのは見易い道理である。

○蘆雁の圖といふのが本來面白くないと極つたものではない。栗に鶉の圖も面白くないと定つたものではない。然しいつでも蘆雁の圖、いつでも栗に鶉の圖ではその巧拙といふことよりも、陳腐といふことに惱殺されてしまふのである。

○萬葉の歌は面白いが、いつでも萬葉らしいものでは一定の摸型を形つてしまふ所から迚ても見るに堪へられなくなる。近來所々から歌が少しも出來ないとか、どの歌を見ても薩張り感心しないとかいふ煩悶の聲が聞えるが、それは歌その物

の面白い面白くないといふよりは、もう甚だしく飽が來て居るのであるといふのが適切であるやうに思ふ。さういふ煩悶の聲を放つ人は自他の製作物が悉く面白くないと共に、萬葉を見てもちつとも趣味を感じなくなることであらう。

○かういふと一般が萬葉を離れることが出來ない、萬葉かぶれで迷つて居るといふやうであるが、萬葉を讀まない人は格別、さうでない人は孰れも萬葉を離れる心掛ではあつても、その距離が近いやうであるといふのである。

○水は流動しなければ腐敗する。歌も一所に停滯すれば萎靡銷沈するのは同一の理である。現在の趨勢は蓋しそれである。

○それではこの趨勢を挽回するの方法はどうかといふと、それは大問題である。

○俳句の基礎は全く寫生であつた。歌が俳句と甚しく基礎を異にして居るべき理由はないやうに思ふ。

○歌は到底主観を交へなければ成功するものでないといふことは、發達した頭腦

によつて判斷されて居るやうであるが、各自にその解釋の程度を異にして居ることと思ふ。少くとも僕自身の近來の考では、殆んど主觀のないもの、又は純客觀のものでも面白いものが自在に出來ることであらうと思ふのである。

○これまでのは客觀とはいつても、主觀を表はすための方便が大分であつた。僕は暫く之を棄てて主觀といふのも、客觀が主となるものを作りたいといふのである。これ迄の方法は惡いといふのではない。唯飽が來て居るのである。これまでのは製作の上に確かな方法である。僕のいふ所のものは未成品である。然し此際一個の問題として提出して見るのも强ち無稽の所業でもないであらう。

○僕がこの考を持つやうに成つたのは、一つは客觀的の製作物が好きなのと、一つは在來の製作に飽が來た反動である。海岸へ行つて居ると孰れも魚づくめに閉口して、菜や大根が欲しくなるやうなものだ。菜や大根は淡白の味である。寫生の歌には平淡清楚の趣味が主になる。

○水戸の鹽辛屋の主人がいつた。よくなれた鹽辛は汁が濃厚で臭みがない。この汁を桶の菜漬へ注ぎかければ、その味は匹敵するものがないといふのであつた。蔬菜の味でも仕方によつて變化する。平淡淸楚に傾く寫生の歌も、行く行く各種の面白味が出來ることであらう。それで寫生の歌は菜や大根の味よりは複雜であるべきはいふまでもない。

●俳句や寫生文は趣味さへ解つて居れば、熟練の結果左程に學問の力がなくつても名句名文が出るやうである。寫生の歌もそれである。六かしい詞や裝飾などは却てない方がいいので、咏ずべき材料をば眞面目に表すといふことが主になるのである。

○さうであるが寫生文にも、金莖の露一杯といふやうな句が振ふ場合があるやうに、寫生の歌にも古語が要求せらるる場合がある。その程度は俳句や文章よりも遙に切である。

○寫生の歌を作ることは初め非常に六かしい。俳句であつたら苦もなく言ひ盡せると思ふことが、いくら考へても出來ないといふのが普通である。然し乍ら鐵軌の上を押す車は五人七人でやつと動かすものでも、力がついて來れば腕一本で樂である如く、いくらでも出來るやうになることと信ずる。

○寫生といふ以上素より實況でなければ駄目である。現在目に觸れないものでも曾て見たことのあるものならば宜しい。空想は失敗し易い。

○寫生の歌を作るには、歌は文字の數が多いだけ、俳句で同一の事をいふよりは明瞭にすべきものであるといふことに心掛けなくてはならない。これが寫生の歌の生命ともいふべきであらう。

○此の間碧梧桐君に逢つた時に寫生の歌に就いて同君の批評を聞いた。歌が俳句よりも複雜にいひ得るかどうかといふのは疑問であるが、明瞭にすることが出來るといふのは必然であらう。つまり梅一枝を描くにもそれを纎密にするといふこ

となるだらう。今までのものが日本畫であつたら、これは油繪に近づいて來たものといふべきである」といふことと「これまでが俳句の領域である、これまでが歌の領域であると極めて仕舞ふのは宜しくないと思ふ」といふこととであつた。
○寫生の歌は卽ち所謂俳句の領域に一歩を生み込んだもので、俳句以外に別途の趣味を表はさむとするものである。
○かういふ意見で僕はこれまで少しづつ試みた。本號に載せた三十首もそれであるが、一つでも二つでも物になるのがあつたら滿足である。十首のうちに一つ成功したものがあれば、百首作れば十首を得、千首作れば百首を得るの道理である。
○歌は文學上の小部分である。寫生の歌が一體となることが出來たら歌の區域がいくらかでも擴大される譯である。寫生の歌を作るのは一草一木の微にも及ぶべきであるから、必ずしも田園生活に限るべきではないが、田園の風物は取つて材料とするに便利である。市街に居住するものは半日の閑を偸んで郊外の散策を試

みるのが肝要であると思ふ。
○僕は江湖の反響を待つのである。
（明治卅八年一月三日發行。馬醉木第十五號所載）

秋冬雜詠に就いて碧梧桐氏よりの來狀

今度の秋冬雜詠も面白く拜見してうれしかつた。就いて尙ほ素人の門外評を試みて見よう。第一首

　秋の野に豆曳くあとにひきのこるはぐさがなかのこほろぎの聲

「秋の野に」といふ言ひ出しは從來の歌の調子で別にわるいとも思はず、寧ろ大まかでよいとも考へる。併し其下に叙して來る事柄が段々狹い小さい範圍のものになつて行くと、初めの「秋の野」が餘りぱつとし過ぎるやうに思ふ。歌の主意は小さな足もとの光景を寫すにある。それに「秋の野」と廣く見渡すやうな詞を用ゐるは如何。ここは少し境を狹くして「畔(クロ)に生ふる」とか「畔蒔きの」とかしたらどうであらう。田の畔でなければ「木の間畑に」とか「畑畝(ウネ)に」とかしてはわるからうか。尙御一考を煩したい。第二首

　稻幹につかれて掛けし胡麻のから打つべくなりぬ茶の木咲く頃

俳句にも「干胡麻の打つべくなりぬ」といふやうなのがあつたと記憶する。さまで珍らしくもないやうに思ふが、若し寫生の歌といふのが流行すれば、かういふ句は第一に陳腐になるのであらう。第三首

秋雨の庭は淋しも樫の實の落ちて泡だつそのにはたづみ

樫の實が落つるよりも、樹の雫が落ちて泡の立つ方がよく目に寫ると思ふ。「庭は淋しも」「その潦」共に振はぬやうだ。第四首

こほろぎのこころ鳴くなべ淺茅生の蕺（ドクダミ）の葉は紅葉しにけり

「こころ」は「ここら」の誤植でないかと思はれる。「淺茅生」といふやうな處に十藥があるのは少し變に思ふ。藪とか森とか裏庭とかにしてはどうであらう。第五首

桐の木の枝代りしかばその枝に折り敷かれたる白菊の花

初めの方が稍說明的に傾いてゐる。併し桐の枝に白菊の折りしかれた樣は面白い。第六首

あさなあさな來鳴く小雀は松の子をはむとにかあらし松葉立ちぐく

百舌鳥が榎の實を食ふやうな大間違ではない。が、寧ろ普通の歌であらう。第七首

掛けなめし稻のつかねをとりされば藁のみだれに淋し茶の木は

茶の木のあるのが稍突然のやうに思はれる。併し面白い。ここまで讀んで來ると第一首、第二首、第五首、第七首等皆初め十七字が或景色を現す爲めの說明のやうになつてゐる。自然歌の形が略似てゐる。寫生の歌はいつもこれではこまることであらう。作者の反省を求むべき點でないかと思ふ。第八首

芋の葉の霜にしをれしかたへにはさきてともしき黃菊一うね

「かたへには」調子が少しゆるむ。强ひてわるいといふのではない。第九首

獨活の葉は秋の霜ふり落ちしかば目白は來れど枝の淋しも

「落ちしかば」が矢張何となくたるむやうに思はれてならぬ。「目白は來れど枝の淋しも」といふ光景はうどなどよりも少し適切なものがありさうだ。第十首

むさし野の大根の青葉まさやかに秩父秋山みえのよろしも

一讀壯快。第十一首

はらはらに黄葉散りしき眞北むく公孫樹の梢あらはれにけり

「梢あらはる」といふのは森の上とか山の上とかに見える景色のやうに思はれるが、さうすると「はらはらに」と近く見た景色がどうかと思はれる。面白い歌とは思ふがその邊に少し疑問がある。第十二首

秋の田に水はたまれり然れども稲刈るあとに杉菜生ひたり

水田の中に杉菜が生へるといふのは變だ。杉菜は春生へて秋の中頃迄には大方枯れてしまふ。作者は杉菜を思ひ違ひて居りはせぬか。

かやうなことをいふてをると際限がない。其あとの歌の中で

秋の日の蕎麥を刈る日の暖かに蛙が鳴きてまたなきやみぬ

うらさぶる櫟にそそぐ秋雨に枯れ枯れ立てる女郎花あはれ

の二首はつまらぬと思ふ。

尙疊字法の歌が多い。「豆引くあとにひき殘る」「枝伐りしかばその枝に」「秋の日のそばを刈る日の」「鳴きて又なきやみぬ」の類で、これは調子の上でやむを得ぬことであらうが、これをなくすれば今一層詳しく叙することが出來るかも知れぬ。

右妄評多罪々々。一月七日。（河東碧梧桐書狀）

節いふ。馬醉木十五の出たのは一月の六日であるが碧梧桐君の來書にある日付は七日である。卽ち馬醉木を手にして殆んど直ちに送られたものであると思はれる。予は俳句の側から此の如き注意を致されたのを驚くと共に、感謝の念に堪へないのである。缺點として擧げられた所は自らも缺點と考へるのであるが二の意見を序であるから附け加へて見よう。第一首、「秋の野に」の句は左千夫氏もさう言はれたが、いかにも漠としたものに相違ない。然し自分が見た景色は田の畔とかいふやうなものでなくて少しく廣い畑で莠の一面にぼうぼうとした中にそこにもここにも蟀が鳴いて居る所であつた。そこらが皆豆を引いた跡であつたのと、第一の句には輕い句を用ゐるといふ從來の癖とで「秋の野に」と置いたのであつた。

第三首、自分が幼少の折にあつた樫の大木のことを思ひ出したのである。考が足らなかつた。第四首「こころ」は誤植で「ころろ」と蟬の鳴く聲を形容した積であつた。蔵が淺茅生に無いといふのは間違で藪の中などに却て少ないのである。第五首、明瞭に表はさうといふ爲めには説明的に成り易い。曖昧であることより尚ほいいと思ふ。第七首、突然に茶の木が出るやうであるが、毎日眼に觸れた所を作つて見ると自分には左程にも感じない。それで此一首が表し得た所を能く考へて見たならば、いくらか複雜といふ點に至つて居ると思はれる。第九首、獨活に目白の來るのは實を喰ひに來るのである。自然生の獨活は八九尺に及ぶものがあつて一の樹木の形をなして居るものがある。黄になつた廣葉が少しづつ落ちたさまが感じがよかつたのである。第十一首、公孫樹の梢は常に北を向く性質を有して居る。葉のあるうちはさうはつきりともしないが枯木に成つた所を見ると不思議と見る程である。今その大木の葉が皆眞黄色になつた。上からだんだんに

散りはじめる。北を向いた梢がその大きな眞黄色なものの中から少しく表はれた。自分が云はうとしたのはここである。第十二首、杉菜が春生ずることは定まつたことであるが、秋の半ば枯れて仕舞ふといふのは能く杉菜を知らなかつたのである　杉菜は春からいつとなく生ずる。曼珠沙華の外には杉菜ばかり、杉菜の外には曼珠沙華ばかりといふ所も往々ある。粟を刈つて見るとその夥しいのに驚くこともある、水田の中でも容赦なく生へるのであるが、それをいつたのであつた。歌はつまらない。

それから、形式の同じやうな歌が多いといふことであるが、或る光景を描き出すといふやうなことに腐心して居ると遂他の方面に疎略になる。人の注意によつて心付くやうなものである。然し心付いても口癖としてなかなか脱却しえない。飽の來るまでは續出するかも知れない。

疊字法も疊字法で面白い時には用ゐるべきであらう。疊字法なしに一層詳しく

叙するといふことは心掛けなくてはならないが、それも尻の据わるやうに荷勝ちに成らないやうに調和を保つての上である。さうして非常に困難なことではあるが、すべて習練の後に俟つべきものである。唯予は自分の作の愚劣であることを慚づるのである。

左千夫氏からの勸めがあつたので碧梧桐氏に通知した後ここに掲げたのである。

（明治卅八年二月二十日發行。馬醉木第二卷第一號所載）

變體の歌

碧梧桐

長塚の節（たかし）炭燒になりぬとたよりしければ變體二つ三つ作りて一粲を博す。

一

茨城の節（たかし）、年若男、色白男、炭燒くと、眞木を伐る、炭賣ると、俵作る、樹と見まがはし、色黒に化（なり）けむ惜し。

二

草の庵、寒けれど、こごゆれど、爐に焚くに事缺く、粥煮るに、餅やくに、俵しば空しき、茨城の炭やく男、早おこせ炭五俵、たゞちにおこせよや。

三

歌人の節、遑あれや、炭燒くと、眞木を伐る、炭やきの節、時來れば、庵して、歌作る、歌作る時、炭燒くらむ日、何れ樂しき。

四

炭燒くに、手なれれば、わる炭をやく、いぶり炭をやく、はれ炭、かす炭を燒く、ただ燒きに燒くらし。

五

小野はいづく、知らえぬに、歌によむ、えせ歌は作らぬに、炭やくと、山に行く、今の歌人。

六

わが買ふに、櫟炭は値たふとし、楢炭は、次になる、さくら炭は、かいて焚く、枝炭に、折りて燃す、ただわるの炭、打割りて、粉な粉なになる、君が燒く炭、焚きて見まほしき。

節いふ、變體といふべきもの予は嘗て試みたることあり。語句に制限なければ他の體に於て到底いひ能はざることを趣味あるやうにいひなすが變體の特色なり。長短自在の句を斡旋するがためにのびのびとして迫らず極めてゆるやかなる調子を成すこともあり。又急速のかたちを成すこともあり。されば人の顧みざるが如き狀態なるは狹隘なる和歌のために遺憾とするところなり。碧梧桐君の作よきもあしきもあれど、歌として寧ろ珍らしきものなり。殊に第四首の如きは思ひ切つ

て名稱を列べたる所、七句のうちに燒くといふ語の六つも用ゐある所より調和をえて頗る面白きものなり、すべての作概ね結句の力あるは注目すべし。唯滑稽ならむとして滑稽ならざりしが如きものあるを憾むのみ。予も亦之に促されて數首をえたり。左に錄す。（編者曰、歌集の部を參照すべし）

（明治三十八年四月十日發行。馬醉木第二卷第二號所載）

枯桑漫筆〔二〕

○萬葉の作者を除いては、古來殆んど女流の歌人を認めない。稀に一首二首の傳ふべきものありとするも、それは唯一首一首の傳ふべきものありといふに過ぎないので、作者としては何等の價値もない。

○萬葉以後は男子すら寥々たるありさまであるから、女子に於て此の如きは少しも異とするに足りない。然し之は過去の事實である。

○女子の能力は尤も微細なる點に於て發達して居る。面倒に堪へない糸の縺れでも彼等は丁寧に引き出す。一寸四方のはし切れでも彼等は必ず保存して置く。然して何かの役に立てる。これだけの特色が製作の上に現はれないといふ理由はな

いのである。卽ち男子の領域以外に立派なものが出來ない筈がないのである。

○三河の「甲矢」を見て聊か人意を强くするものあるを覺えた。「甲矢」には女性の作家が一二人に止まらないのみならず、孰れも皆振つて居る。余が見た募集歌にかういふ意味のがあつた。「椽側に機を織つて居れば雀が芋や切干をひろげてある莚に來て鳴いた」「椿の花の落ちて居る日あたりに人を待ちながら足袋のうらを刺す」といふのであつた。自己を中心とした女子の作として、又尤も普通にして却て人の注目しなかつたものを捉へた點に於て稱揚に値するのである。

○嘗て知己の一夫人が柘榴の花をよんだのを見るに「もみうらの裾色のやうな花」と形容して居つた。女子の作はどこまでも女子の作であると思つた。夫れは却て「赤い眞綿のやうな花」と形容したものよりは遙に卑近で且つ適切である。

○「甲矢」一の六、「松葉庵小集」には四人の女性の作を連ねてある。

　とりの音にやり戸をくれば葎生のさ庭明るく雪積りけり

みやしろの五百重の杉にみ笠めす月よみ曇り雪ふりにけり

山おろし寒けく吹けば穗の原や楢葉くぬぎ葉雪になりゆく

あかときの星未だ消えず初雪のふりつもりたる山靜なり

卓拔なる作とはいひ難いが孰れも一ふしあつて面白い。楢葉くぬぎ葉の如きは我が鄕の現在に思ひ合せて余が注意を惹いた。生育十年内外の楢や椚は冬季も悉く落葉はしない。その枯葉のしがみ付いて居る梢及び散らばつた落葉に雪の降り來るさま、寫生でなければ出來なかつた。

○女子の特色は微細なる觀察である。女らしき所であるといつたが、以上の四首の如きは之を男子の作といふも疑ふものはあるまい。此の如きは女子の特色はどこまでも女子の特色として存ぜしめて更に大に他の方面に進むものであるとしたならば、則ち我々の希望する所で又各個人の理想とすべきものであらう。

○女子が男子の領域内に踏み込んだ作例としては、てる子の霜の歌を擧げざるを

得ない。

日にうとき背戸の小庭の寒菊に霜を憐む此三朝四朝

伊良胡崎磯馴松原霜凪に汀に群るるちりちり千鳥

霜を憐れむの一句が什麼に寒草に適切であるか。ちりちり千鳥の一句が什麼に彼の足ばやに走つてはツト浪の穗を飛ぶ千鳥を盡して居るか。余は冗漫に流れ易い我國語を以てして斯くも單純なる句で斯くも複雜に描出されたるには驚かざるを得ないのである。伊良胡が崎は此作あつて始て面目を施したといつてもよい。

○以上列擧した所の作は皆調子が緊つて且つ張りがある。內容の趣味を解すること此の如く、外形の組織に得る所此の如くであつたらば、足袋を刺すひま、菜を切るひま、造次も之を忘れなければ遂に卓然として傑出するは必然である。女子の能力が那邊にまで達するものであるかを具體的に説明したこれ等の作を見て、未だ斯道に入らざるものも奮勵一番大に女子の爲に氣を吐くことを得たならば、

亦一世の大快事ではあるまいか。

○「甲矢」六には「アシビ」の短評がある。余の「寫生の歌に就いて」を「歌の寫生は俳句の寫生よりも一層困難で搗たての餅のやうにダラダラしたものが出來たがる、然し寫生に多少の主觀を交へたら宜しからうと思ふ」といつてある。適切な見解である。然し我が輩の所說は決して主觀を沒却して仕舞うたものではない。

○純客觀の作が成立しうるであらうといつた議論に就いては反對がある。「花がさく」といへば純客觀である。「花にさく」といへば一點の主觀を交へて居る。主觀の句なしに我が輩の製作が成立して居ないといふのがその反對の說である。

○自分の製作に純客觀のものが無いといふのを以て絕對に純客觀の製作は不可能であるとは我が輩は思はない。時に之を得るであらうと思惟する。寫生の歌には主として客觀を先として主觀を後とするの必要なるを斷言してある。主觀の句があつても我が輩の主張に抵觸したものでない。

○豆腐は豆の蛋白質であるが、收斂性の苦鹽によつてはじめて豆腐の形を成す。之を口にするものも其の蛋白質の味なるを知つて苦鹽の味を感ずるものはなからう。寫生歌の主觀なるものも豆腐に於ける苦鹽の如きものがある。寫生歌を通讀する際に、客觀的光景を眼前に髣髴たらしむることがあつたとしても、何等の主觀あることを感じない場合が多いであらう。敏捷なる舌によつて豆腐に聊かの苦味あるを感知する如く、發達したる頭腦によつてはじめて寫生の殆んど總てが多少の主觀あるを感知するのである。卽ち明瞭に客觀的光景を寫し出した製作物は我が輩は之を客觀の歌と稱するのである。

○「ちりちり千鳥」の句の如きも千鳥の動作といふ客觀的の光景を表はして居るが、一面に此の句が主觀的であることは通讀の際には感知しない。客觀が主で主觀が從なるものである。蛋白質と苦鹽とである。

○寫生歌がくだくだとして緊りの無いものが出來易いものは最もその短所とする

所である。茫漠たる空間を描き又は主観を表はす場合には、調子の緊密なるを得るけれども、微細なる光景を表はさむとする場合には、僅々三十一字が極めて大なる形式の如く感ぜられる。是に於てか配合物を求める必要が起る。縱ひ配合物を得たとするも、孰れか主位で孰れが客位に在るか辨じ難いものとなる恐がある。加之一首を構成した上に於ても、材料が三十一文字に充實しないかの如く薄弱に見ゆるものがある。

微細なる材料を捉ふるの至難なるはここに在る。然しながら成功の域に達したるものは、到底他の形式に於て見るべからざる趣味がある。寫生歌は進歩したるものである、之を見る眼はまた進歩したものに俟つの外はない。

○世事弊害の隨伴せざるものはない。弊害は邪路に迷ふを最とす。唯寫生歌は弊害が隨伴しても其眞面目なる限り常に天然と一致して離れない。

○寫生といふことが進んで來ると、微細なものは更に微細なものになる。四圍の

風物が皆面白くなる。遂には三十一字の形式に不適當である如きものでも取つて材料とする。勢止むを得ないことで唯倦くに至るまで進むの外はない。

○我輩の現在の位置は自ら榛莽を開いて山巓に到達せむとするものである。疲弊困憊することもあらう。反復迂回することもあらう。他の陳套とすることを自ら清新なりとすることもあるのであらう。本を棄てて末に走るの過をなすこともあるであらう。只目的の地を忘れなければ不可とすべきでない。

○少しく具體的にいへば取材の大小に拘らず其境が眼前に髣髴としなければ至れるものではない。微細なるものの例として庭を描くとするに、先づ自己の庭が果して能く人の腦中に印象をさるるに足るべき特色があるか、ないか、若しあるとしたならば如何に之を表はすべきか、是れ大に先づ考慮せねばならぬ。否特色の有無を問ふ前に、作者自身が趣味を感じたかどうかを問ふの必要がある。特色もなければ敢て自ら趣味を感ずるでもないのに、漫に三十一字を羅列するも、些の

人を動すに足るもののないのは明白である「庭の枯木に霜が白く降つた、四十雀が鳴きながら枝移りをする」「菖蒲の葉が枯れて亂れて居る、其古葉を掻きとつて見たればもう赤い芽がふいて居た」といふやうに動作とか特色とかを捉へて始めて興味を覺える、且つ又印象が明瞭になる、作家たるものここに注意を致せば得る所がある。

○其境地の明瞭に表はされて居るものを余は俗謠に見出した。

朝の出がけに山々見れば雲の掛らぬ山はない

之れは我々の郷里から近くは三春、遠くは相馬の馬市に行く伯樂の常に口にする所である　彼等が五頭十頭二十頭の駒を引き連れて、淋しき奥州の歸途に、汚穢なる馬宿をとぼとぼと立ち出づる朝の光景を寫したものである。いかにも伯樂の口から出づべきもので、光景が明瞭に印象される。何等かの特色を見出し、何等かの趣味を感じて作ることは根本的必要なる法則である。

○作者が萬葉を讀み、萬葉的英氣の充滿せる時は音調滑かに口をついて出で、殆んど咳唾珠を成すの感あるも、英氣一たび去つては是に始めて煩悶の聲を發するのである。此の煩悶の狀態を脫せむとする人の、直ちに自然と接觸することの捷徑たるを悟らないのは甚だ齒痒い思がする。

○深い學問が無ければ歌が到底出來ないものとしたならば失望するものが多いであらう。然しながら知ることと、感ずることとの全く異つたものであることを悟つたならば、樂しんで道に盡すことが出來よう。感ずることを悟つた人、眞率たる寫生の歌を作らむことを希望して止まない。

（明治三十八年四月十日發行。馬醉木第二卷第二號所載）

枯桑漫筆〔二〕

○歌譚抄に就いては一應辯じて置いたが尙ほ少しく云ひたいことがある。予の短歌は文字の數が多いだけ俳句よりは明瞭に表はし得るであらうといつたのに對して、左千夫氏はそれは俳句が連想に待つものであるといふことを知らぬ謬想であるといふのであつた。

○山水の圖は空間が廣大で、椿一枝の圖は空間が狹小である。然し山水の圖に傑作がある如く椿一枝の圖も出來がよければ名作である。山水の圖は觀る者の想像する區域が大であるが、椿一枝には殆んど想像の區域がない。然し狹小なるものには花瓣の一片蘂身の纎維をも認めることが出來る。予の明瞭といふことには此

れ茶碗椿の形状は詳細に表はされて居る。想像の區域の廣大なる雪舟の山水畫にこれはないのである。予の明瞭に寫すといふ歌は區域は狹小になるであらう。夫れは文字の上に事物の位置形狀等を比較的動かぬやうにいひ表はさむとするからである。俳句には想像の部分が多い。制限ある文字を以ていひ表す以上どこまでも想像を離れることは出來ない。隨て歌にも想像の部分がある。

○予は何等の場合にも歌が俳句より明瞭に表示し得るとはいはない。俳句が獨特なる微細の描寫をなす以外に比較的長き文字を以て更に他に確然たる描寫によつて其處に趣味を發揮し得ることが出來る場合のあることを信じたのである。制作が之に伴はないのは技倆がまだ足らぬのだ。

金蓮子百合を掠めて飛びにけり

といふ句の百合の花は赤であるか白であるか鹿の子であるか鐵砲であるかこれは見るものの想像に一任する外はない。赤とか白とか文字で極めて仕舞へば、可否は別として想像の區域はそれだけ狹くなる。明瞭といふことにはこんな係がある。

○竹の里歌から例を引いて見る。

杉垣をあさり靑菜の花をふみ松へ飛びたる四十雀二羽

一うねの靑菜の花の咲き滿つる小庭の空に鳶舞ふ春日

此歌に含まれてゐる名詞「杉垣、靑菜の花、松、四十雀」や「一うねの靑菜の花、小庭、空、鳶、春日」等を以て能く一首の俳句を構成することが出來るだらうか。文字の省略によつて出來たとしても此歌が有する說明の文字（說明といふことは餘情なき乾燥なる說明といふ語とは別である）をも直ちに奪ひ去ることは出來ない。これ等の作は遂に俳句以上に適確なる說明を爲すことの特色を以て自立するものである。

○左千夫君は予の歌を以て俳趣味の歌であるといつて居る。名義はどうでもよからう。客觀の趣味をいくらでも解し得たならば夫れだけ俳句と接近して來るはいふまでもない。俳句の眞似をしたならば陋劣であらう。趣味を捉へてするに何の惡いことがある。故先生が俳想俳調厭ふべしと或歌に下した評を例に引いて居るが夫れは何年前のことであるか。夫れがどのやうな歌であつたか。俳想俳調厭ふべきものであつたからさういつたのだ。直ちに客觀の趣味に接觸したものに何で厭ふべきものがある。

○如何に繪畫を見る目があつても、專門的微細なる觀察は畫家でなければ出來ない。俳句も俳人でなければ專門的の觀察は出來まい。然し趣味を解することが出來れば繪畫も俳句も專門以外の人にも面白く感ずるのである。吾々が俳句を面白く感ずるのは趣味に於て一致する點があるからである。俳句の趣味を解するのは主として客觀の趣味を解するのである。客觀の趣味を解して作る歌を俳想なりと

いふことが出來たならそれもいいだらうが其時に用ゐる俳想といふ文字の意義は變化して來なければならぬ。俳句が最も得意とする客觀の趣味を歌にしたものは以前故先生を除いて一人もない。必ずしも俳句獨占の趣味とはいはない少くとも俳句が得意とする客觀の趣味に接觸するといふことは狹隘なる短歌の上にどれだけの功績があるか。いふの必要はあるまい。

○浮世繪が毛髮を一本々々に描くやうになつて衰へた。油繪の松葉は一本々々に描いてないといふ聲は面白い事であるが、我々の寫生趣味といふことを根本より打破する議論とはならない。予が製作に毛髮や松葉を一本々々に描いたやうなものがあつたらその製作は惡かつたのである。然し松葉でも一小部分の寫生には若楓に散松葉の掛つて居る油繪のあることを記憶して貰ひたい。

○我々の調子が千篇一律であることは自分で確に認めて居る。殊に結句の名詞で止めてある所が甚だしい。然しこれは殆んど人の顧ないやうな材料を採つて詠ず

る場合に最初には最も適當と感じ且つ容易な方法であつた。惰力は奈何ともすることが出來ず今日に及んで居る。眞空制動器を用ゐれば能く進行中の機關車を止めることが出來る。然し進行中の機關車を止めることは車輪に若干の損傷を免れない。欝勃たる英氣を抑へて他に變化の道を發見するまで沈默する人は沈默するがよからう。さういふ克己忍耐の精神は蓋し我々に乏しい。

○信越の國境は雪が深いので樹木は爲めに壓せられて地上に偃してしまふ。それが五間六間にも延長してだんだん太くなれば、五間六間のさきから屈曲して天に向つて生長しはじめるといふことを予は炭竈を見に來た越後の老人から聞いた。發育力の熾なるものには急激の壓迫も效がない。

○欅の生長には面白い特性がある。一方に股をなして大きな枝があると一方の幹に成る方は非常に曲つて育つ。一方の大きな枝を附き際から伐つてやれば幹はいつの間にか起き直つて矗々として天を刺すやうになる。善く性質を知つて培養の

宜しきを得れば此の如きものがある。我々のすることも三年とも五年とも經過しては居ないのであるから、周圍の人は宜しく擧に對する心を以て之に臨むべきではあるまいか。鐵槌を以て打ち壞はすやうな態度は冷酷に過ぎるであらう。（以上五月二十五日夜）

（明治三十八年九月六日發行。馬醉木第二卷第五號所載）

歌譚抄を讀みて

○左千夫氏は歌譚抄一篇を草して予に之に就いての意見をいへといふのである。予は之に對して別に六かしく論ずるの必要は無いと思つた、なぜであるか、左千夫氏の議論には一種浸透の氣があつて、痒きを掻くの感がある、概ね首肯し得らるるのである。然し其精透なる見解も予の現在の意志を曲げて他に向はしむることは出來ないからである。

（先づ予は何が故に今日の如き作をなすのであるか「馬醉木」の十二及び一の十五に於て少しく斷つて置いた筈であるが、最初に主義といふものを立てて其主義に合せて歌を作つて居るのではない。自分の趣味が變化して來たと同時に、此の

傾向を說明して見ようとしたのが、卽ち左千夫氏の所謂頻りに唱へて居るといふ說である。

○近來孰れの作者を見るも我々が滿足する程の變化は更に認めない。必ずしも進步發達とはいはない。一年二年と時日を經過する間には何等かの變化した現象が認められない筈はないのであるが、それが無かつたのである。少くとも予の目には變化と認むべき變化がないのである。自他の製作が漸次飽きて來た。

○自分をいふの必要がある。予がまだ根岸へ行かなかつた頃は、唯日常目に觸るるものに依つてのみ作つて居た。後に萬葉を見て忽ち萬葉調に變化した。これが殆んど去年の春までつづいた。飽きの來た時である。菜の花が門の畑にさいて居たが、いつしか花は末になつて莢になつた。鶸が莢を喰ひに來る。或日行つて見ると鶸が二羽飛び出した。黃色い翅がひらひらと表はれる。面白く感じたので歌によんだ（馬醉木十三に出て居るのがそれである）、予は不圖考へた。直ちに天然

に接觸して寫生をするといふのが現在の急務であると考へた。何だか嬉しい氣がする。種々の推測が湧いて出る。萬葉調の歌に傑作を出したもので後に更に聞えないものがあるか、かういふ人の傑作といふものは萬葉のつけ元氣に過ぎない。自分といふものに歸らないから再び奮ひ起ることが出來ないのである。天然を寫生することに努めたならば乾度其弊を除去することが出來よう。こんなことも胸に浮んだ。自分で試みる。面白い。總べての天然物が皆面白い。暫くは此の眞面目な寫生に立脚地を定めようとした。寫生趣味が表はれて居るとか居ないとか、寫生が可能であるとか不可能であるとか、そんなことの穿鑿は念頭になかつた。お化粧をしてお祭に行く子が、途中で轉ぶの怪我をするのとそんな考へが起らうか。

○予の歌が未成品である。物足りないとしても予は更に悔いない。料理人が多人數の仕出しをする。半日一日の間には料理の匂ひも厭になつて、嗽ひをせずには

堪へられない。茹でた青菜が絶好の美味になる。青菜は或は分析の上から營養分が少いであらう。然しながら甘く感じた時には甘いに相違ない。予の歌が物足らぬものであつても、變化のない他のものに飽きた目には決して捨て去ることが出來ない。予が心には執着がある。

○左千夫氏の論は要するに寫生は歌に不可能であるといふことである。非難の點も多くは予の製作に向つて試られて居るやうであるが、予の製作の不完全であることは予も亦認めて居る。製作に向つての非難は尋いで來るべき製作の上に警めとなるべきもので予は窃に悦ぶのである。然しながら「感じを表はす」といふ寫生の目的が歌に不可能であるといふことは服し難い。我々の歌には未來がある左千夫氏は或は予を以て沒分曉漢とするかも知れないが、予は闇中に何物かを認めるやうな感じがする。理屈の問題ではない。窮極までは進んで見るのもいいではないか。山の中途で雨に逢つたと想像せよ。自己の周圍は殆んど見えない。衣

物は濡れる。まことに馬鹿氣て居るやうである。予の現在が其のやうな趣があつたとしても、平地よりは位置が高いではないか。

○予は歌は絶對的に寫生趣味、客觀趣味でなければならぬとはいはぬ。將來如何に發展すべきかは自ら豫知し難い。機械工學の研究のため洋行して地震學者に成つた人も愉快に感ぜられる　鹿の子が出來損つても甘納豆が出來たら面白いと思ふ。

○左千夫氏は予の歌を以て寫生に非ず、寫生らしきものにも非ず、寫生臭いものに過ぎないといつて居る。それもいい。又いくら寫生々々と騷いでも、連作の必要を自覺せぬ間は、耳はかされぬといつて居る。それもいい。まあじつとして見て居て貰ひたい。夏の短夜でも明けるまでには時間がある。

○飽きるまではやるのである。

（明治卅八年五月廿九日發行。馬醉木第二卷第三號所載）

課題「晩春」「初夏の花」選歌について

今回課題は應募者の熱心と勉強とに因りて陳腐の域を脱したるもの多かりき。在來更に用ゐられざりし材料の夥しきは喜ぶべく誇るべきものならむ。其弊としては只管珍奇なるを求めて却て人に解し難きものを出したるの嫌はあれど其解し難しといふもの一半は慥に讀者の罪なり。歌人の側より俳句の歳事記を繙かば未記の花卉のおほきに驚くなるべし。俳句に於て縱横に咏ぜらるる草木花卉の歌に咏じ難き理はあらざれど、歌人の智識が此點に著しく缺乏せる爲め吟咏の中に入らざるなり。敢て智識と言はず路傍に生ずる草花の一二を取つて之を咏ずるも直ちに珍奇たり難解たるに至るは決して誇るべき所以にあらざるなり。

清新なるこれらの作も難解と感ずる人には些の興味もなかるべし。されど予は佳作と認むべきものを捨て去るに忍びず。胡桃澤君の作は直叙して其性質を描き調子の流暢なるを得たるは其特色なり。田がらし、白屈菜、猿猴草、毒芹、踊子草の如き然りとす。古屋君の作は人事的の趣味を加へて複雑ならしめたるが其特色なり。直叙するものは變化に乏しからむとし、人事を加味せむとするものは稚幼ならむとする弊あり。選外の歌にして未だ多く咏ぜられざる材料を擧げむに、連理草、九輪草、小手まり、ひな菊、垣どほし、つめ草、梅花藻、河原松葉、ドウダン、狐の牡丹、しびびいびいの花、株草、ポンポコ茶釜の花、犬芹、籔豆、金米糖の如し。狐の牡丹以上は胡桃澤君の作中に在りて一般に通ずる名稱なれども後者は古屋君の作中にありて、一地方の名稱なるが如し。志村君の作中には尚ほ風車、蛇苺の花等ありき。多くの作中これ等の珍奇なる材料に富みたるは其可不可は論ぜず、予は一種の興味を惹くを禁ぜざりき。

要するに材料に於ては極端まで珍奇なるを得たれど句法は甚だ單調なり。結句に何々の花といふが如き是なり、此の如きは一首を構成するに容易にして且流暢なるを得るの結果自然茲に至るものゝ如し、之を改むるは蓋し難事なり。

予は諸君の勞力の大なるを想像すると共に、此の如き勞力を此の如きものに向てのみ注ぐは大に顧慮すべきものに似たりと信ず、珍奇と感ずべきもの程之を再三すれば直ちに陳腐たらむ。又路傍の一小草花の如き之を直叙せむには特色を捉ふること難からむ、向後これらに向つて取るべき方法は正面より叙することにあらずして何等かの場合に之を賓位に据うることなり。これ大切なる條件なり。

（明治三十八年七月十八日發行。馬醉木第二卷第四號所載）

文明・茂吉・柿乃村人評

（編者曰、大正二年アララギ第六卷第一號にて伊藤左千夫、長塚節合評中長塚節のなせる評を摘錄す）

土屋文明作の評

文明君に就いての評は、アララギ第五卷十一月號所載「ゆふべ」六首に就いての評である。

○節いふ、面白くないには面白くない。僕にはこの歌はよくは分らんが、僕には何だか無理に絞り出した樣な感じがしてならない。今夜の坐談に、木曾の藪原の櫛を挽くのが濕つぽく苦しい感じがすると云ふ事が出たが、この歌も何だかさ

ういふ苦しい感じがする。併し其楡を挽く音の苦しさは悪い意味にも取れやうが非常に好い意味に於ての苦しさとも取れるだらう。此歌から受ける感じの苦しさは殘念ながら悪い意味に於てばかりである。要するに前にも云つた様に、頭の中に無いものを無理に絞り出した苦しさを吾々は感ずるのである。だから、青竹をスカッと割つた様な心持は何處にも求められない。其點は僕は近頃のアララギの歌全體に亘つて浴びせかけたい評である。

ゆ　ふ　べ　　　　　　　　　　　　土　屋　文　明

此の獸盲ならば友を求めて行かむ。明あるものはされど離れ離れに歩む。並べる友の神の形にあらざるを見ればなり。悲しきは夜なり。彼等が野にも夜なからむや。生けるすべてに明を奪ふ夜のなからむや。悲しきは夜なり。

西方にいり日を追ひて行かむとす野の上の道のはるかなるかな
すゑつひに空しかることとそれにだに依せむかあはれ此のいきの緒を
めぐる天めぐりをとどめ此の道のきはまりたりと君なうべしや
ゆき暮れてとはの夕にわれ立つと遠きくにべに聞かむ君はも

われな恐れあら野に放てあはれあはれ君さへ野路にゆきくれぬらむ
へだてたれ其の日來らば相よらむ君が名よびてあかりある邊に

齋藤茂吉作の評

茂吉君に就いての評は、矢張りアララギ十一月號の「郊外の半日」十八首に就いての評である

○節いふ　全體として非常に血のめぐりの惡い樣なそしてゐて其中に意外に鋭敏な處のある樣な氣のする歌である。さういふ處が之を讀んで一寸驚かされる。而して自分には迚も出來さうにもないと思ふ。それでゐて、一つ一つは、何だか獨立し得られない樣な感じがする

それは、から、繁つた杉の林の中に、たまたまぽつりぽつりと生へて居る眞竹か杉の林と一處にあれば始めて立つて居る事が出來るけれども、杉の木を切つて

仕舞ふとひどく淋しくなるばかりでなく、時には自分で立つ力を失つて倒れるものがある様に、その一首一首で立つて行け相にもないものの様に感じられる。今の僕から云へば、かういふ事は散文で言ひ現はした方が大へん言ひ現し好いと思ふ。つまり、この歌の中で僕が鋭敏だと驚く分子も僕等が散文で書き現す場合には極めて容易に出來る様な感じがする。さういふ頭で全體を見ると短歌といふ形式で之を現したといふ事に、大なる缺陷がある様にも思はれる。

郊外の半日　　齋藤茂吉

今しがた赤くなりて女中を叱りしが郊外に來て寒(さむ)けおぼゆ
郊外はちらりほらりと人行きてわが息づきは和(なご)むとすらん
郊外にいまだ落ちゐぬこころもて螇蚸(ばつた)にぎれば冷たきものを
秋のかぜ吹きてゐたれば遠(をち)かたの薄(すすき)のなかに曼珠沙華赤し
ふた木の松立てりけり下かげに曼珠沙華あかし秋かぜが吹き
一面の唐辛子畑に秋のかぜ天(あめ)より吹きて鴉おりたつ
一面に唐辛子赤き畑みちに立てる童子(わらべ)のまなこ小さし

曼珠沙華咲けるところゆ相むれて現し身に似ぬ囚人は出づ
草の實はこぼれんとしてゐたりけりわが足もとの日の光かも
赭土はこぶ囚人の眼の光るころ茜さす日は傾きにけり
トロツコを押す一人の囚人はくちびる赤し我をば見たり
片方に松二もとは立てりしが囚はれ人は土庭を通りぬ
秋づきて小さく結りし茄子の果を籠に盛る家の日向に運べり
女のわらはは入日のなかに兩手もて籠に盛る茄子のか黒きひかり
天傳ふ日は傾きてかくろへば栗煮る家にわれ急ぐなり
いとまなきわれ郊外にゆふぐれて栗飯食せばかなしこよなし
コスモスの闇にゆらげばわが少女天の戸に縒る光を見つつ
歸りゆかばわれに化ふる女中はやわが室に來て床をとるらむ

連れ。中村憲吉君。すゑ子さん年十四、のぶ子さん年十二。

柿乃村人作の評

柿人君に就いての評は、矢張り十一月號の「病院の前の下宿の座敷」といふ長

い題のある歌に就ての評である。

〇飾いふ。何事を云つても、非常に悲觀した樣になつて居なければ氣がすまないと云ふ樣なのは近頃の此作者の態度である。實際に於て悲觀して居るのかどうかは分らない場合が多い樣である。だから、辛いとか悲しいとか失望したとか云ふ樣な意味の言葉が多い割合には、哀韻が吾々の耳に響き足りない感がある。今云つた樣な意味の言葉が殆ど使用されないで吾々の心にひしひしと響いて來る歌が古人の歌に幾らもある事を振返つて見て貰ひたい。それから此作者に一番多い事は第一句に言葉（文字）の足りないのが澤山にある。それが甚しく一首の調子を破つて居る樣に聞える。又第一の句に文字の足りない例では、古事記にある、

ちばの、かど野を見れば、ももちたる、家庭も見ゆ。國の秀も見ゆ。

かういふ行き方を考へて見て貰ひたい。作者の他の句は順當に一直線に連續してゐるにも拘らず、第一句だけが孤立して居る。そこが甚だ不調和に感ぜられる所

である。

病院の前の下宿の座敷　　柿乃村人

まだ解かぬ荷のかたはらにあはれなる我が子をおきぬ毛の布をきせて
膝の前のつめたき穴に重も重もと幾日の灰のしめり居るかな
疊の久しき冷えが三人を待ちて居しよな坐わり心かな
あはれなる父にははとなりてすわり居るあが膝すらを疑ひにけり
いづこに今日來りしか知らぬゆゑに母のひざべに安く寝るかな
すぐそこに見ゆる怖れをもだしつつうつろの部室を見まはしにけり
べれつつ眠り入りたる子のそばに帶をほどきぬあはれなる妻は
寂しき二人ごころのしたしみに茶のみ茶碗を買ひに行くなり
ひそましき障子のけはひに來て觸るる夕日にも心寄る我らかな
庭の土にものうち棄つれ美しく七つの星のしめる夜なかに

（大正二年一月發行。アララギ第六卷第一號所載）

古泉千樫・中村憲吉評

古泉千樫作の評

千樫君に就いての評はアララギ五巻十一號の「富士ゆき」に就いての評である。

○節○い○ふ○。僕には富士登山の經驗がないから分らないが、此歌に現れた所でみると、熔岩の原といふものはつまらない處の樣である。元より絶對につまらないといふ處は何處にもあるべき筈はないが、充分の興味を以て觀察しないと、つまらぬといひ去るべき場所は隨分あるであらう。熔岩の原も上の空で素通りすれば矢張りつまらぬに相違ない。而して此作者は熔岩の原に向つて深い興味を持つてゐない樣に思はれる。つまらぬ處を強ひて特別に面白く詠み、面白い處を見逃して

詠んだのは此熔岩の原の歌である。だから根本に於て已に大なる缺陥がある。だからもう藥の盛りやうはない。此作者には相當の腕は養ひ得られてゐる。だから何でも歌にする事が出來るやうになつてゐる。而してその弊害に陷つてゐるのである。吾々が嘗て一度通つた邪路に向つて一足踏込んでゐるのである。

富士ゆき（其二）　　古泉千樫

うちわたす熔岩（らは）の流れの黯きうへに木叢（こむら）さ青く日に光りたり
裾野原熔岩のながれのたかだかに今もたぎちてながるるごとし
熔岩の上の低き木叢のあをあをと日は燃ゆるなり物の音もせず
溶岩のながれ光り走れりくれなゐの聲なき嵐吾をつつめり
熔岩の原默し笑へばくれなゐのくちびるあまた目に見ゆるかな
をんなを刺し殺さんとするかなしさに熔岩原ひかり息づきにけり
熔岩原の木叢にそそぐ照り雨に我が額（ぬか）青く濡れ濡れにけり
なやましく照り雨そそぐ熔岩原に摘みては捨てし紅きなでしこ
熔岩原の夕影青葉うらがなしひとり捨てられし吾れなるかなや

夕日よどむ熔岩の流れの青葉かげひと聲鳴ける鳥のさびしさ
山頂をくるくるめぐる白雲のたはむれかなし照り雨の降る
焦砂(やけすな)にしとどまぶれしわが足に照りつくる日の痛くしもよし
山肌にふもとの森にきはやかに夕日の色のながれたるかな
夕の色にはかにせまるすそ原や荷ぐるまのおとの遠く消え行く
裾原に湧ける白雲しづしづと山おほひ行く暮れのかなしさ
宵ふかみ外(と)ならかがへばしらしらと靜かに雨は降りてゐるかな
窓ちかき富士の高嶺は直肌(ひたはだ)にこの夜のあめに濡れてゐるらむ

中村憲吉作の評

憲吉君の評も「曉は動くに」「太陽の愁」の評である。○節いふ。現今亂作をして居る或種の小説家の作品を讀んで見ると、所謂氣分といふ事を八ヶ間敷云つて居るにも拘らず、幾らか只其氣分を味ふ事が出來るといふに過ぎないものが、可なりに多いやうである。憲吉君の歌も通讀すれば或種の

氣分を味ふ事が出來る。然しながら僕はアララギ歌壇からしばらく疎遠になつてゐた爲めか、一首一首に就いて見ると其一首一首を了解して氣分をよく味ふといふ事が至難の業になつてゐる。つまり僕には何だか分り難いのが可なり澤山にあるといふ事になる。其で全體として或種の氣分を味ふことが出來ても一首一首の境界線が甚だ不明瞭だとも云へる。一首一首の獨立が甚だ曖昧だとも云へる。極端に惡く云つて見れば、どうも駄菓子のおこしの様なところがある。目に見てあられの一粒一粒が明瞭に分つてゐるが、飴か砂糖でねばりつけてあるので一粒一粒を噛みしめて味ふ事が出來ないやうなものである。散文の一句一句であれば其でもよいが、然し短歌である以上は今少し其區劃がはつきりとしてゐて貰ひたい。それと、も一つは、蘭引にかけたものの様にも少し力を入れて、數が少しは減じても一首一首はもつと確かに味はれる様にあつて欲しい。

最後に以上の全體を總括していへば、本月號に限らず、本誌の近頃の主觀的の

作品は、寒い晩に足をちぢめて寐て夢を見た時の樣な感じがする。夢の中で或おそろしい者に追はれて逃げようと思つても思ふやうに逃げる事が出來ないで苦しむやうな、何だか一種の壓迫されるやうな苦しみを感ずるのである。

曉は動くに　　　　　　　　中村憲吉

しづかに眼（まなこ）をあけて他（ほか）にまだ何かがありし音がこころかな
あが目にはただほそぼそと有明の燈（ひ）が眠りたる不思議なりけり
灯の色のなかを靜かにながれつつ心かへりて行くところかも
にこよかに胸にもたれし物あればふと手に取りて思ひ出でつも
ひとり寢（い）のいつものやうな心にて目覺めしことも何かさぶしき
紅（くれなゐ）はいまは萎へてあが胸にさみしく倚りて眠りたるかも
きその夜はにごる燈（ほ）かげに赤々とあが目に咲きし笑まひなりけり
くれなゐの優しき息は灯（ほ）なかより身に細やかに觸りて來るかな
戸の外の世のあかつきは海に似てとほく寂しく動きゆくらん
なに鳥か幽かに鳴きぬこの微温（ぬる）きまなこの底に灯のうつるなり
疲れたる人の面わにあかつきと灯とほそぼそと移りゆくかな

ともし火は際涯(はて)なき方の曉にふと誘はれてしづむことあり

何もかもおびやかされてふと覺めし哀れなるものは又ねむりたり

かすかにも眠りて行きし息なれば手に觸りかねつ明けてゆくかもよ

髮などを撫でつつ居れば彼のまなこ再び笑みてひらき來にけり

眼底(まなそこ)に笑みて靜かに光りつつ吾をまてるもののこころ悲しも

灯火はいつか全く消えはてぬあが身もいまはかくれをはりぬ

市街(まち)の音のそとに遠くに覺むるころ遂にひそかによりにけるかも

太陽の愁ひ

太陽(ひ)の愁ひしみみに降れば人の世のみやこはあはれ朝よ曇りぬ

たづたづと雨にもならず太陽の息に都會(みやこ)くもれる今日のなつかし

ものの音も街ゆく影もこの世には曇り隔たるあが思ひかも

曇影(くもり)ふる街の底べのおぼろより知らざる顏があまた出て來るも

舖石(いし)の上にくもり踏みつつたまたまに已が足(あ)の音にさめ返るかな

なにはなく寂しき街にぞろぞろと人ながれつつ曇りゆきけり

霧おもく下り沈みたる街並にふと微かなる柳ゆれたり

街々の動きのなかは霧くらく降りてゐるらんとほくとほく行かな

○

雨だれの氣倦(けだ)るき宵のふけ行くになほ私語(ささ)めくは嬾たき人かも

かかる夜をものの音たゞ尼をゆりて遠く幽かに消えいりぬべし

○

ひとり行くこの月の夜に見えくろは皆あが知れる人の家かも

山河もよりて眠れる故鄉はひとり覺めつつ行くにさぶしき

稻の露にぬれつつ歩む夜のはだへ坐ろに人によりたくなりぬ

をさなくて吾が倦きたるほどに垂乳根にだかれざりしがさぶしき夜なり

山かげの寂しきなかの安らかな稻のいろには抱かれても見たし

道々のつゆ凝(こ)る草になく蟲にきき甘まえつつ行くこころかな

　古くなつて潑溂の氣の失せたる過去一年の歌をまとめることは苦しかつた。それ〴〵も自ら は更に新らしい衣にぬぎかへるに苦しむためにこの歌を作りたかつた。

（大正二年二月發行。アララギ第六卷第二號所載）

茂吉に與ふ

○

到頭體溫が八度七分まで昇つて、痩せたこと自分ながら驚いた。赤光の評とても出來ようとは思はない。仕方がないと諦めてくれ給へ。

アララギ三月號早速拜見した。歌がどれもこれも君の模倣ばかりなのには喫驚してしまつた。

○

摩羅の論非常に面白い。然しあれは君自身の辯護になつて居る點のおほいのが遺憾である。議論が如何にも精細であるが、實際には遠ざかつて居る。白秋氏の

あの歌は第一句法等の全部が遲緩して居る。自分はさういふものを藝術とは思つてゐない。作歌の動機がどうであらうと出來あがつた其ものが詰らなくては仕方が無い。今の評論界では只思想の方面ばかり論じて、品位といふ事を閑却してゐる。今の歌界には品位といふものが探しても無い。これは赤光評の時に云はうと思つて居たが何時書けるか知れないから一寸書添へる。死んだ伊藤君は感情はすべて調子によつて表はされると云つてゐたが、其道理の解つてる人が殆んどない樣だ。僕は千萬言の議論よりも一首を構成して居る言葉に彈力のあるかないかを見るのが第一と思ふ。だがそんな人は少ない。それゆゑどの歌もどの歌も皆遲緩して居る。皆ぼくの考へてゐる藝術とは緣の遠いものばかりだ。今も體が熱い。寐てゐる。

○

「赤光」を見ると品位……藝術界ばかりでなく人間界の萬事に於て第一の要素で

「茂吉の議論」

ある……といふものを理解して居ない事が直ぐ分る。それにも拘はらず僕が「赤光」を尊敬して居るのは他にある「ほのかなるものなりければ少女ごはほほと笑ひてねむりたる……」の如き却つて純潔な作を出したからである。君が白秋氏の摩羅の歌の如き藝術的要素の缺乏した極めて劣等な作品などをさう辯護するには至らぬ。どんなに君が作者の製作當時を聯想して絶叫して見ても肝腎の製作その者が値打なければ何にも成らぬ。中澤臨川氏は白秋氏の彼の一首を論じたので、決して君を一言でも譏つては居ない。君の議論は全體の筋は面白いが、今少し冷静にならないと判斷を誤る。君には殊に此の失態がおほいと思ふ。

　君は帝劇へ行つても、女優が出れば只それで滿足でたまらぬといふくらゐの男だ。それは作者としては實に難有い事にて到底他人の持つ事の出來ない處が君にあるのは其處だと思ふ。だがそれは批判の際には禁物である。何が何でも無闇に感心したのでは批評は出來ない。何でも彼でも其者を讃嘆して擧ふならばよろし

い。さもなくて評論をするには冷靜が必要である。摩羅の論の大體には異存は無い。只白秋氏の一首が劣等の作であるから君の折角の論は空論だと思ふ。實際の議論はその實際を全部離れてしまつては困る。頭が惡いから云ふ事が前後して馱目だが、曲つてもくねつても僕には今自ら得た信念のある事を自覺して居る。

（三月六日。鬼怒川歸帆繪はがきと筑波山の繪はがき）

○

今少しいひたい。君に向つて品位を理解して居ないといふのは君の作全體を通じて品位が無いといふのでは無い。「ほのかなる茗荷の花を見守るとき……」「赤茄子の腐れてゐたるところより……」等の如きは幾ら何と云つても相當の品位を有して居る。「人間は誰でも時として淸淨無垢の純潔境に住し得ることがある。さういふ時に無心にして出來たものには高潔で品位を保つたものがある。けれども僕は今一歩進んで其品位といふことを理解してもらひたいと思ふ。與謝野夫人の作

の如きも皆この品位を缺いて居る俗才の産物だから少しも感服しない。君には作者としての場合には、幸にも眞實といふものがある。詩人はいつでも只嘆美して居ればいいのである。だが反覆していふが評論の際には判斷が要る。同時に冷靜なる事を求める。僕は君に鑑賞といふことに今少し眼を養ふ必要があると思ふ。いつぞや時事新報に出た百人一首の中から、只一首選出した際の君の眼を僕は少なからず疑つた。僕は今世間を余りにかけ離れて、高い藝術を求めて居るのだから、いふ事が君と一致しない場合が多いかも知れぬ。だから今の僕自身をば、赤光」の批評を書く折には告白したいと思つたのであつた。僕を滿足させる藝術が現はれて呉れればいいと願つて居る。僕は滿足するのではなく全身を捧げて尊敬したい。只そればかりだ。幾ら云つても出立するところは其處からだ。さうして歸着するところもそこだ。何もありやしない。僕は大たわけだ。（三月九日、常陸下妻砂沼の繪はがき）

○

八度から八度三分位までの熱を出してしまつたから、當分何も書くことは出來まいと思ふ。四五日じつとして居て早速伊豆の伊東へ行く積りです。今度は暖かになるまで居ます。東京で一度御目にかかりたいと思ひます。到頭平福君へ山水隨縁記の御禮をしずにしまひました。からもう駄目です。僕の藝術論から出立すると寫生の歌といふものはなかなか八釜敷い條件があります。然し今ここにはいふことが出來ません。「赤光」の評も四月號にはとても間に合ひますまい。僕の健康狀態を洞察して延期して下さい。山水隨縁記に就いては、僕等にはなかなかものいふことが出來相にありません。君のアララギ一二月號で云つてある根岸短歌會での配合論と、津田青楓氏の日本畫の線に就いての斷定とに就いては、少し胸中の磊塊を吐きたいと思ひますが、今度もこれも止めです。平福君へは山水隨縁記の御無沙汰をよく御わびして下さい。繪はがきなどへ書いたのでは惡いと思ふ

し、長い手紙など臆劫だし、其内手紙の書きやうがなくなつてしまつたのです。同君は何か思つて居られるか懸念です

中村憲吉君の鳳凰堂の議論に就いて、非常に失望した事があります。同時に書生論に憤慨したからそれも詳しく書く積りで書く事が出來ません。只中村君は未だ古代の藝術を論議する資格がないと思ふ丈を率直にいつて置きます。同時に君達にはまだ俳句に就いての理解が少いやうに見えます。恐らく君達には古來の名句といふ範圍に屬して居るものでも、つまらなく見えるのが多いだらうと思ひます。さういふ時に面白く感じないからといつて、卽時にそれを破壞し毀却することを企てたら其は暴氣ではありませんか。僕は只一言これだけを云つて置きます。あとでゆつくり申します。中村君に就てはどうで一遍云はなければ氣が濟まないのです。寐て居て書いたので見苦しくなりました（三月十六日）

（大正三年四月發行。アララギ第七卷第四號所載）

千樫に與ふ

またこんな處にうづくまる身になりました。

この病院で讀賣新聞をとつて居るので、端なくも大兄の感想を見ました。アララギの三月號と併せて見て興味をもつたといふのは、大兄の齋藤君に對する態度であります。さうして僕はかう思つたのです。今アララギには齋藤君の模倣が充滿して居て殆んど鼻持もならぬ。しんしんといふ言葉でも實に驚くほど多く使用されて居る。惡口をいへば三月號はしんしん號と改めてもいい位です

齋藤君は僕も尊敬して居る作者であります。それは其全部でありません、有體にいへば其一小部分であるのです。七面鳥にしても「十方にまつぴるまなれ」の

如きは實によく彼の倨傲にして尊大な七面鳥を道破して居るのです。七面鳥といはずして七面の鳥といつた彼の一首に就ては、そこに僕には難があります。さういふところを大兄はどう見ましたか。十九首の内僕は四五首をとつて他を棄てます。それを大兄は全部に讃嘆の聲を發するのですか。僕が殘念に思ふのは其處です。世間の歌風が齋藤君にかぶれたといふことですが、あれは昔からの馬鹿者だから不思議はないが、大兄の如きまでが只醉つてしまつて、醒めて見ることの出來ないのは悲しむべき現象だと思ひます。

他人の美を讃すといふことは結構だが、冷靜に見ることが出來なくても困ります。人間といふものは、自分の天分を發揮する外に何もありやしません。だから個性のことは八釜敷いふのです。えらい天分を持つたものはえらくなります。それは眞似ることは出來ません。そのえらいえらくないも一様ではありません。人の下男に終つても百世に傳へらるべき人間もあります。いさゝかでも模倣は許さ

れませんせん。どうですか。（橋田病院より三月十九日朝）

（大正三年四月發行。アララギ第七卷第四號所載）

齋藤君と古泉君

○

近來アララギの歌は殆ど齋藤君の模倣であると斷言して憚らぬ事は前號にも一寸言つて置いた事であるが、アララギの作者全體から言へばさう嚴重な事も言へない理由もある。或歲月の間非常な努力した結果でなければ、彼の八釜しく言はれてゐる個性の發揮といふやうな事は不可能である。だから近來歌を詠み始めたといふやうな人々が、齋藤君にかぶれるのは不快な現象ではあるけれども已むを得ない事である。さういふ人々でも眞實といふ事を土臺にして努力してさへ行けば、其處に自己といふものが確立されるに極まつて居る。要するに比較的後進の人

には一概にやかましい事を言つても却つて其進路を阻礙するやうなものである。どんな天才の製作でも全體を通じて見れば屑が非常に多い。アララギ一部を取つて見て拙劣な模倣の歌が充滿してゐても深く咎むる必要はない。寧ろ結束を固くして進んで行くうちに漸次いい結果が生じて來るだらうと思はれる位である。

一體藝術の方面に於ては自分は全く先輩とか後輩とかいふ區別を付ける事が無意義であると信じて居るのであるが、或る期間の間はさういふ區別も已むを得ない場合がある。一日の長ある先輩が後輩の爲めに途を開いてやるといふことは必要な事である。多少にても自覺の域に達しない内はそれで仕方がない。でなければ後進の人々には殆ど取り付く筋が無くなるからである。アララギの作者でも比較的後進の人に向つては極めて寛大な態度を取りたいと思つてゐる。さういふ人々の中に少しでも個性の閃きを認め得る時は心中に非常な愉快を感じつつある。それがアララギの幹部即ち先輩の態度なり製作なりに向つては殆ど殘酷なほど嚴

重な眼を睜りたいと思ふ。それは人によつて、進むのに多少の遲速はあるけれども、大抵は相當に議論もあるし自覺といふ域にもある點迄は達してゐべき筈であるからである。それにも拘らず自分の眼には其人々の間にさへ模倣といふ事が累をなしてゐるやうに見える。自分の考では一般の藝術界を通じて多少の除外例はあるにしても、模倣といふ事が一種の罪惡であるかのやうに感ぜられる。玆には深く理窟は述べないけれども、殊に文藝の方面に於ては自分は極端に摸倣を排斥する。何でも自己の藝術的良心に訴へて、聊かでも滿足し得らるる程度にまで努力して行きさへすれば、そんなに他人の模倣に墮するやうな憂ひは無い筈である趣味の上に共通な點の多い人々の間には互に相似るといふ事は免れない事で、却つてそれが自然であるとも言ひ得るけれどもそれは皆自己といふものに立脚して居なければならない。藝術的の生命は其所にあると信じて居るからである

大分餘計な事を並べたけれどもアララギに對する不平の一端を開陳するに就い

て是れ丈けの解説も强ち不必要とは思はない。アララギに於て模倣の中心になつてゐるものは齋藤君の製作である。隨分智識も理解もある筈の古泉君が模倣者の一人である事を深く遺憾とする。併し此の二人者は其製作に於て全く相違してゐるべき性質のものである　事實全く相違はしてゐるが古泉君に於て部分部分に顰蹙すべき模倣の跡があるだけである。その一小部分が作者としてむしろ大なる耻辱であるとまで自分は信じてゐるので何時でもそれが不快で堪らないのである。それと同時に二人者の鄕土が非常に異つてゐる點に就いて自分は深い興味を有つて見てゐるのである。齋藤君は出羽の人である。出羽といふても天然に截然として一區域を劃された最上の地で生れてゐる。さうしてそこで成長してゐる。自分の見た最上の自然は豪宕である。彼の松本平から西方一帶の連山が半空に聳えて居るのは天下に比すべきものはないけれども最上の平は松本平よりも小さいだけ却つて一帶が切實な感を與へる。恐ろしいばかりにうねうねと走つてゐる奥羽山脈が

一帶の平地を威壓して其間にあつて巨人の如く中心點をなしてゐるものは藏王山である。松本平から見る連山の甚しい大小の區別が無いのとは違つて藏王山は何處迄も其主眼點である。從つて最上の平野の人々の心には宗教的な偉大な感化を蒙つてゐるやうである。自分は一度十月の末に秋田の方から汽車で此の平野を縱に通過した事がある。曩に恐ろしいやうな山脈といふたが其時滿目の連山が雪を戴いて車窓を壓してゐる所は息がつまるやうな心持であつた。最上は水田のよく開けてゐる所である。さうして其の稻の生育の旺な事は自分の今迄に見た所では一つも夫れに匹敵するものは無い。從つて藁が立派で稈心（みご）が非常に長い。だから自然に藁細工が發達して稈心から造る麻裏草履の表は最上の特産として東京に輸出される位である。是れは何處の山國でも同一であるがその桑の木は自然のまま に高く立つてゐる。自分が殊に忘れ難い印象を與へられたのは藏王山の方向に下がつた龍卷の黒い雲であつた。其日は浮島で有名な大沼山を立つて山形の方へ獨

り寂しく下つて來つつあつた。平野が近くなので穣々たる水田が直ぐ足許に近くなつたとき、ふと、その龍卷の雲が柱の如く立つてゐるのを認めた。段々平地に近づく頃龍卷の雲の柱は周圍が烟の如きものに包まれたかと思ふと其烟の如きものはスーッと消えて空へ登つてしまつた。後には少し細くなつた柱が依然として立つてゐる。幾度か烟のやうなものが、空に消えて柱は段々針金のやうに細くなる迄殘つた。二三の村を過ぎて行く頃丁度小學校の放課の時間と見えて一時に吐き出された生徒が、朝の内に雨があつたと見えて手に手に傘を開いて稻の丈高く稔つた田圃の道を嬉々として歸つて行きつつあつた。勿論彼等は藏王山の方面に於ける此の奇異な現象に注目するものは無かつた。間もなく雄偉な藏王山は霽れた。最上の平野に幾十年の生を享けてゐる人が幾度斯うい ふ現象を目撃しゐたかと想像して見る時に偶ま他鄕に放浪する自分に於て竊かに誇りを感ずるのであつた。自分の眼に映じた最上の自然は一言にして盡せば豪宕にして着實である。齋

藤君は斯ういふ郷土の佛教信者の家に生れたのである。此の點に興味を有つて自分は齋藤君の作品を讀んでゐる。

古泉君の成長した房州の自然は非常に相違の點を有してゐる。纖細にして優雅な趣が房州の到る所に存在してゐる。靈岸島から汽船に乘つて最初に目に觸れる鋸山でも只岩石の皺が多いだけの事で要するになだらかな山である。夫でも周圍が餘りに平板であるために獨り目に立つに過ぎないのである。船が外洋に出て半島に沿うて北に向つて進む間一つでもゴツゴツとした山を見ない。一帶になだらかな丘陵が斷續してゐる丈けである。五月の末の頃であつたがその丘陵は凡べて黃褐色に彩られてあつた。それは麥の熟したのであつた。外洋に漕ぎ出す漁師が目標にするといふ清澄山でも夫れほど高い山ではない。海から一里半も行けば頂上である。山の上で每日新鮮の鰹の刺身が食べられる。全山著莪の花で飾られてゐる。其の中には六尺もある樣な木苺が大きな黃色な房を垂れてゐる。淺い流に

無數の河鹿が鳴いてゐる。どうしても清澄山は爽やかな感じを與へる丈である。外洋に沿うて南の方へ廻つてくれば既に成熟した麥の收穫をしてゐるのに一人でも鎌で苅つてゐるものはなかつた。みんな根元を手で摑んで拔いてしまふのである。砂地の畠であるだけにいかにも手輕な作業である。段々野島ヶ崎の方に近くなると民家が皆槇の木の生垣で圍まれてある。道も庭も砂だから見るからにさつぱりとしてゐる。夫れでゐて所々に大きな葭の叢があつて濱邊の趣を添へて居る。野島ヶ崎は流石に松が土を偃うてゐるけれども土は短い青芝をもつて掩はれてゐる。その芝が時々刈込みをしたやうな綺麗なものである。その芝の間には都草の花が黄色に咲き連つてゐる。その配合(うつり)がいかにもいい。野島ヶ崎から道がすつかり濱邊へ出ると外洋は單調を破つて大島が大きく段々に小さく三宅島や新島がそつと置いたやうに連つてゐる。漁師の女房は搗布(かぢめ)を苅るために海へ這入つて寒くなると濱邊に火を焚いてぶるぶる震へ乍らあたつてゐる。乾いた砂の中には豌豆

の花のやうな草や濱晝顏の花が咲き亂れてゐる。人參の花に似たやうな防風の花がうつかりすると見付けそこなふやうに足もとに咲いてゐる。夫れは砂の色と甚だ紛らはしいからである。內海の方へ行つて見ても濱べの花は同樣である。田の畔には蟹が鋏をさし上げてチョロチョロと走つてゐる。牛が所々にのつそりと草を食つてゐる。自分の眼に映ずる房州は小さいながらに何處でも只休息して居る所がない。天惠に浴してゐる土地と言つたら房州などは先づ最初に指を折るべき所である。特に冬になると濱べに近く水仙の花が咲くさうである。若い百姓の女などがその水仙を刈り集めて夕方問屋に持つて行く。夫れが東京の花屋の店頭に飾られるのである。白い波のさし引く濱べに水仙の花の咲くといふ事は現實を離れた色々な想像を逞しくさせる。古泉君の歌にこの自然の感化が爭はれないのは當然の事である。齋藤君のは强い力の藝術である。さうしてうまく成功して横行濶步してゐるものさへある。古泉君のは一體に優しい藝術である。只遺憾乍らま

く成功してゐるものに逢着する事が少ない。齋藤君の歌は男性的で、古泉君の歌は寧ろ女性的である。從つて知らず識らずの間に古泉君が齋藤君に縋つて行くやうな傾向のあるのが已むを得ない現象であらうけれども自分の特色を傷ける場合のあるのを深く遺憾とするのである。卽ち古泉君には齋藤君の摸倣の痕が甚だ顯著である。それでは全然摸倣であるかといふのに決してさうではない。自分が兩君の鄕土の自然を思ひ出させるやうに、兩君の間の相違は明かに認める事が出來る。夫れにも係らず模倣といふ事をいふのは夫れが僅かな部分であるにしても甚だ全體の統一を缺いてゐる場合が多いからである。極端な事例を擧げて見ると、

赤々と一本の道とほりたり玉きはるわが命なりけり（茂吉）

山の上に朝あけの光ひらめけりよみがへり來るいのちなりけり（千樫）

の二首である。一讀して齋藤君の原作には言外に何物かが潜んでゐるやうに見える。最上の天然は豪宕で着實であるけれども房州の天然の如く足の爪先にも美し

い材料の充滿してゐる樣なものではない。ささやかな草花を以て彩られてゐるやうな場所を想像して見る事が出來ない。夫れでは一帶に潤澤が乏しいかといふのにさうではない。自分が關山峠を越えて天童町近く來た時に荒蕪の上に甜瓜をごろごろと轉がしたまゝ賣つてゐる百姓があつた。その邊は非常な瘦地のやうであつたが、そのむき肌が深潭の水の如きつややかな色をした甜瓜は非常に佳味かつた。百姓はさういふ立派な甜瓜を作つてゐながら關東には甘藷が出來るからいいと云つて心底から羨しがつてゐた。最上には林檎も出來る。一切の果物の魁をなしてゐる櫻桃もある。だが皆深く嚙みしめての味で一見したばかりで心を奪はれるやうな美しさはない。齋藤君には一人離れて何物もより付けないといふやうな立派な特色があるのだけれども、自分にない他の特色を想ひ到る時それが自分のものよりは遙かに小さいものであつても、それを非常に羨しく思ふものは是れも人間の至情である。だけれども夫れは焦心苦慮しても到底得られるものでない。

そこに聊か煩悶が作ふ筈である。其結果出來たのが此の歌である。我に與へられた一筋の大道が曠野の間に通じてゐる。我はこの大道を踏むより外に自分の生きる道はない。これやがて我が全生命であると解釋するのが當然であらう。一方に於ては大なる確信の歌であるけれども一方に於ては全く諦めの歌である。そこに悲痛の分子を抱藏してゐる。だから一讀して痛切に何物かを感じない譯には行かない。所が古泉君の歌になると何があるのか自分には殆ど捕捉する事が出來ない。原作者といふものは自己の物を建設するのに非常な努力を惜まないのである。模倣者はその慘憺たる苦心の存在してゐるものを極めて容易に自分の手に採り入れてゐる。そこに著しく力の懸隔を生じて來る。從つて原作をこえて立派な模倣品の生ずべき理由は發見されないのである。摸倣といふ事のどれほど無意義であるかといふ事は是れ丈けでも了解されるべき筈である。齋藤君の歌は關口の瀧のやうなものである。どうつと落ちて渦卷きかへる水の勢を見る丈けでいいのである。

そこには岸から掩ひかぶさつた深い緑が強い力の趣を添へてゐる。猫の死骸や或は犬の死骸がそこらの一點に漂うてゐても深く累とするに足らぬ。併し櫻草の咲き盛つてゐる柔かな春の野を流れるささやかな清い流には猫の死骸どころか鼠の死骸でも目に立てて厭はねばならぬ。墨痕淋漓たる雲龍の畫には墨痕の一滴が誤つて落ちても大抵の場所では累ひにならぬ。ところが整然たる草花の卷物には一點の汚點も嫌はれねばならぬ。古泉君の歌には齋藤君の歌と違つて斯ういふ傾がある。古泉君の歌の特色の一つとして我々の眼に映ずるところは優しいさつぱりとした淡淡しい趣味である。だからさういふものに齋藤君の正反對な趣味の一部分が、餘り多く濾過される事もなく寧ろその儘採り容れられる時は直に非常な不調和を感ずる。木に竹を接いだやうなのが殊更目につく。木に竹を接いだといふも弓のやうであれば宜しい。他人の長所に私淑しても深く自分の心に練り上げたものであればいいのは勿論である。古泉君を模倣者といふのは此の練り方の足ら

ないのから言ふ事である。強い力といふものは他を壓倒する。さうして人は動もすると自己の個性をも沒却してそれに追隨しようとする。さういふ人は力といふものの理解がないからである。大力士になるために猛烈な稽古を敢てする事には非常な力が籠つてゐるけれども風にも堪へぬやうな少女の姿に扮するために非常な苦心をする俳優の態度にも強い力が籠つてゐる。鐵槌を以てすれば人の頭骨を碎く事が容易である。それは恐しいに相違ない。併し絲の如き銀の鉞を以てしても人の生命を斷つことが出來る。要するに核心に觸れればいいのである。夫れは自己の眞實から根ざしたものでなければならぬ。人にはどんな弱いものでも何處かに一つの強い力を持つて居る。夫れでなければ社會に生存して行く事は出來ない譯である。房州の自然は最上の自然に比して弱いといふ事も言ひ得るであらう。最上の稻は容易な力では成熟の期に及んで拔く事は出來まい。房州の砂地の麥は先きにも言つたやうに皆根ごしにする。だが海岸に根ざして咲く防風や濱晝顔は

彼の乾燥した砂に生育しなければならないために恐しく深く喰ひこんでゐる。あの深い根を完全に掘り取るといふ事は蓋し容易な事ではない。やさしい果敢ない草にこれ丈けの力が籠つてゐる處を見ると我々は深く考へさせられなければならぬ。凡べてが自分の力でなければならぬ。只それ丈けである。それ以外に何もある筈はない。自己の眞實に立脚し自己の藝術的良心に背かない限り模倣は罪惡である事を自覺せねばならぬ。古泉君は製作の當時に於て非常に骨を折るといふ事を聞いてゐる。さうして見ると僅かに今一歩の差である。自分は是れが惜しくて堪らない。だから齋藤君と比較して是れ丈けの事をいふたのである。

餘談に俳句の例を擧げて見る。

若竹や橋本の遊女ありやなし　蕪村

筍や目黒の美人ありやなし　子規

一見して模倣とも剽竊とも云ひ得るやうであるが、筍の句は目黒の牡丹亭で筍飯

を食つて、夜になつて打連れて歸る時に、宿から無紋の提灯を呉れた。先刻から席に侍した美人が途中迄送つて呉れて小石を一つ拾つて提灯の中へ投げ入れて別れた。さういふ事實を十年の後に其時の友人が一寸手紙に書いてよこした。作者は記憶を喚び返事をしながら其末端に此一句を書付けたのである。非常な興味を持つたと見えて、瀕死の病人が一篇の文章迄作つてある。其を見ると箇の句に潑溂たる生命のある事を認める。眞に自己の感興から出たものは殆ど批評の限ではない。（五月十二日午後、赤彦筆記）

（大正三年六月發行。アララギ第七卷第五號所載）

一つ二つ

病院もなかなか暑い處です。一帶の砂地でそれが燬けるもんだから夜になつてもさう涼しくはありません。大勢で居る室は却て涼し相ですが、私は一人で一室を占領してゐるのですから少し位は暑くても結構です。白い一輪挿に暫く花がなくなつて居たので、ふと散歩の序に蚊帳釣草を採つて來て挿して見ました。長い儘に構はずに立てましたが意外に涼しい心持がして居ます。依然として汗はながれて居ますが。

アララギ七月號の齋藤君の「おたまじやくし」は少しく議論もあり相ですが、それにはもつと精讀してからでなくてはいけないし、私の體力が此の暑では困りま

すからいひませんが、折にふれて一の方は同君としては先づ平易に分り憎い所が少いやうです。其内の一つ

朝どりの朝立つわれの靴下のやぶれもしるく夏さりにけり

に就いて私は種々な問題を提供したいと思ひます。勿論此の歌は作者自身に於てもさうたいして自信も持つて居るかどうか疑問であるし、一首の有無は同君の爲めに毫も影響がない筈であるけれども、此の際私の考などを述べて見るのに大變いい都合に思ひますから特に一首を抽出して見ました。簡單に靴下の破れによつて季節の感じを現はさうとした處は寧ろ俳句などにある手段ですけれども、まだ俳人だとてさう目をつけて居ない境地でせう。かういふ微妙な感覺に訴へることは「赤光」などにもかなり散在して居て意外な成功を示して居るのですから、此の一首の如きは却て普通にも思はれるけれど、季節の感じといふことに就いて同君は勿論他の諸君にも更に注意して貰ひたいと思つて吟味して見るのです。季節

に就いての微妙な感覺を極度にまで發揮させたのは日本には俳人の一團があるばかりです。それが元祿の昔に於てさうなのだから驚嘆の外はありません。だけれども俳句は他の人には聊かの理解もし能はぬ程の微妙な方面に細かく詳しく突き進んで居る結果、それを明瞭に的確にする必要に迫られて如何なる場合でも季題と分離することが出來なくなつて居ます。季題といふものが俳句に無かつたら唯曖昧なものに畢らなければ成りません。隨つて俳句は自然を主とする藝術だといふ解釋を一方に下すことが當然であるやうに成つたのです。然るに短歌の方に成ると遙に茫漠として居るだけそれだけ甚だ自由な所があります。我々の將來は何といつても官能の世界に住しなくてはならないのです。さうして短歌は俳句に比して多く肉感的に發達して行かなければ成らぬ運命を有して居ます。かういふ傾向に進んで行つても赤彥君の所謂永久に涉る力を持つたものは生れて來ます。要するに何處まで進歩發達したところで短歌と俳句とは全然其の性質を異にして居

るのですが、我々は從來の短歌の作者よりはもつと季節に對して敏感でなければならないと思ひます。現在に於ては或方面の人々は却て俳人よりも異なつた點に微細な注意を拂つても居るやうですが、兎に角俳句は二百幾十年の前に大成して以後幾多の傑出した人物によつて繼承されて來て居るのですから、我々の思ひ到らぬ境地の開拓が遂げられて居るのです。だから我々は十分敬虔の態度を以て此を研究してさうして其の長所を体得することが必要であると思ひます。それで此の季節の變化に對する俳人の感覺の鋭敏なことに想到すると齋藤君の靴下の破れは甚だしく不明瞭な憾を生じます。「夏さりにけり」といふ感じが適切に響いて來ないのです。靴下の破れを發見したことは慥に進歩した作者の手柄で、かういふことを全然閑却しては我々の世界は極めて狹小なものになつて畢ふと思ふばかりであります。だけれども季節と交渉を保たせるにはも少し肉感的でありたいと思ひます。假りに私が此處にふと思ひついた儘を例に引いてみれば

朝ごとに穿く靴下のやぶれより冷たき冬は身にしみにけり

といふやうなものが有つたとすると此はどうなりますか。勿論これは私が氣まぐれに三十一文字を排列して見たので小技巧に墮して居る非難はあるにしても、此處の冷たいといふ感覺も古靴下の脂染みた冷たさもあるが、寧ろ實感を離れて詩材として取扱ふ時分には其破れた穴に對して意を注ぎたいと思ふのです　齋藤君の取扱つたのは夏の靴下ですが、それにしても

靴を穿いて居ると汗じみて來て痒くなつた。それから靴を脫いで掻いてみたが其の靴下の破れ目が快く爪の先を肌に觸れしめた。

とかういふことも餘りに複雜ではあるが、實際に遭遇したこととすれば必ず單純にすることは容易であると考へられます。齋藤君の儘では第一二の句は何でもないことで第四の句に主として夏の感じが現はされねばならないのに「破れもしるく」だけでは「夏さりにけり」と強く結んだ句に相當して居ないのです。夏に成

つたから鞦下の破れの早いのが日に立つといふ丈では餘りに緩漫です。換言すれば毫も夏らしい感じを起させないのです。殊に此の一首の如く第四の只一句に夏の趣を寓しようとするには容易なことではない筈です。そこへ行くと俳人は五字或は七字に非常な力を保たせる工夫が行き屆いて居ます。短歌と俳句とは組織の上から全然性質を異にして居るのですが、反覆していふ如く我々はそれ等の人々の大なる苦心の存在して居る點に沒交渉ではならないのです。それから齋藤君は枕詞を使用して居ますが、現在の私には少し異存があるのです。以前萬葉集を耽讀した頃は最初に何の必要があつて彼の時代の作者は斯の如く頻々として枕詞を使用したかと疑つて、軈て彼の時代の作風に密接な關係を有して居るのに氣がついて、其の巧妙な使用法に驚嘆すると同時に必要缺くべからざるものであつたことをつくづくと感じたのです。萬葉の時代を通じて其作品は概ね悠容として迫らない一種の風格を有して居ます。だから一首の意義に直接の關係を有たない枕詞

を以て装飾されることは極めて適切な方法であつたのです。それに簡單な思想を詠じた彼の時代にあつては、作者の全感情を傳へるのには只其の調子に俟つたのでありますだから其語句は壓窄して緊張させる必要があります。殊に結末に近づくに從つて力強く成らねばなりません。第一の句に於て全く空位を生ずる程次へ次へと意義ある語句を繰下げねばならない場合が生ずるのです。さういふ時に枕詞の存在の重大な意義が憾まるのです。私はかういふ意味に於て現代の作家が枕詞を使用することに毫も異存はないのです。人はどんなに切破つまつた際にも幾分の餘裕を有し得るのだから、我々が微妙な感覺の世界に住して居ても、裝飾としての枕詞を使用して悠容たる態度を示すに妨げはないが、三十一字の僅少な内に五字までも空しくした時は、只の一句を以てして一首の生命を支配する程のものを撚出する用意が缺乏しては成りません。要するに現在の我々の傾向に於ては枕詞を使用することはそれ自身に一首の上に微妙な響を傳へ得るか、左もなく

ては前述の如き要求を滿たさない限り非常に難しいことと思ふのです。然るに齋藤君の使用した枕詞は一首の上に更に面白味を添へて居ないし、肝腎な第四の句に毫も力の或物を有して居ないのです。然しかう書いて見ると齋藤君の全部を非難したやうに當りはしないかと懸念もするのであるが、頭初に斷つてある如く、此一首が私の考を述べるのに非常に都合がよかつたばかりに論じて見たので、單に同君のみにいはうとしたのではないのです　雜誌の經營をし、編輯をして居る際には、紙面の都合上心ならぬ作まで掲載しなくては成らぬ場合もあるのでせう。私などでも現に一首か二首の爲めに體裁に關係があるといへば其の一首か二首はどうにでもします　然し一時に幾十首の短歌を連ねて、私等の目からは散文と何處が違ふのかと思ふやうなものが、アララギ以外の雜誌には散見するのです。さういふものに成ると其一首一首の、更に其一句一句を分離させて見るといひやうもないみじめなものに成ります。いふまでもなく短歌は一首一首が個體なのです

から、さういふ人々にも少しく反省して貰ひたいと思ふのです。

六月號の批評の中で、赤彦君のに對しては齋藤君のは私の贊同する處です。同君は矢張り作歌に苦勞して來たことが明瞭であります。短歌は短歌としての值打が第一の問題です。動機がどうでも境地がどうでも現はれたものゝ善惡です。

齋藤君の侏儒ひとりに對して、古泉君はもつと侏儒の肉體を描いて貰ひたいとあつたが、此は當つて居ます。然し無理な註文です。中村君ならば女の眼蓋にほんのりした赤みが增して夏が來たといつてあるが、此は侏儒の作者には難かしい。同君は「赤光」であれ程女の歌を澤山に作つて居ながら、單衣に替へた女の美しさに注目して居ないのです。然しそれがない替り、表面の何物も見ないで女の本體に直入する處に同君の生命は存在して居ます。隨つて憾む處はないが作者自身にそれを能く知り悉して居る必要はあります。

六月號の中村君の若き諸は散々に苦勞して反覆してみました。あの歌を解釋す

る前提として私は作者が或人の爲めに胸に餘る思を包んで居たとします。何等かの理由で海岸に行つたとします。旅宿に着いたのは丁度黄昏に近く、凡ての物象幾分づゝ薄い戸張を以て掩はれて行くやうな心持で、何となく手頼りなく感ぜられる さうして内地ならばもう冷かに成るべき時刻なのに海の水は生温い潮の香、藻の香を送つていひ知らず人の心を唆る。絶えぬ思の或物が一部分はぼんやりと、然かも一部分は强烈に頭を擡げて作者に刺戟を與へると、かういふ種々なことを描いて置く必要があると思ひます。

潮ざゐの夕香はぬるく身をそそれ戀はじとすれど渚潮ざゐ

段々見つめて行くと前にいつた條項の或物に該當します。暮れ行く渚のぬるい一種の臭が身をそそつて人戀ひじと思ひながら感情がむらむらと湧いて止まないといふことを甚だ明瞭にいつてない所に、蒼然たる暮色の中に居る作者がよく表はされて居ると思ひます。其語句の斡旋が一見不條理な樣な所に却て表現の方法を

得たと思ひます。蒼き渚の長所は景と情との相纏綿した處を不即不離の態度を以て巧に斡旋した點に在ります。すり硝子を隔てて美人の品隲をする趣であります。これは餘りに極端でありますが、襖一枚隔てて帶解く音を聞いた丈で其女の美醜をも判斷させるやうな歌であります。それでゐながら上等な宇治の玉露を啜つた時に微妙な味が舌の根に殘つて容易に消えない樣に語句の以外に餘情を存して居ます　要するにかういふ行き方は我々の同人には餘りなかつた樣に思はれます。同時に世間の凡てを通じて絶無にして稀有ではないだらうかと思ひます。極言すればかういふ細く軟かで然かもしつかと強い處を有つた、さうして懷しい溫かさを有つた境地は或は中村君の獨擅であるかも知れません。

　それで蒼き渚に對し不完全ながらこれだけいふのには曩にもいつた如くかなりに苦勞を要しました。從來中村君の行き方と、私の行き方は非常な相違があるのですから、其長所を認めて敬意を表するといふよりも其短所と認むべき點、殊に私

の目からはいつも措辭の難澁であることに苦しめられたのです。然し蒼き渚に相當の敬意を表して迎へて讀んだのでありますから、最初に不審に思はれた語句もかういふ場合止むを得ぬことであると自然の間に承認するやうに成りました。それにも拘らず第一首の「遠白波の渚は蒼く」でも、白波の打ち寄する渚が蒼然として暮れて行く光景をいひ表はしたものとして別に異存はないけれども「幾重によ」といふ句が其上に接續して居ます。幾重の遠白波といふと作者はうねうねと寄する白波と直角の度を保つて段々と沖にまで視線を向けたことに解釋されます。さうだとすれば讀者をも沖の方へ引つ張つて行つて、突然渚は蒼くと其間に何の斷りもなく直ぐ足もとの光景をいつてあるのは、讀者の注意力を攪亂して甚だしい不安の念を起させるのです。作者は或は旅宿の二階あたりから渚と平行に視線を放つた場合、蒼然たる渚も幾重の白波も、遠くは凡て一眸の裡に聚る故にかういつたまでだと辯解するか知れないなれど、幾重の遠白波ではさうは解するに無理

なのです。一歩譲つてさうも解釋の出來ないこともないとして見てもそれでは孰れにも歸着しない曖昧なものに墮して畢ひます。其他の一首一首に就いても成るべく作者と一緒に成つて見たいと思つても、猶「戀はじとすれど」「消ゆるらく」等の語句を見遁すことが出來ないのです。我々の祖先が幾百千年の間に自然の約束から成りたつた言語は、我々は自分の意志を表現するのにはどうしても其約束に從はねば成りません　其他にも今は止むを得ないと作者に加祖して居ても最初に疑をもつたのは、第二首の「蒼き潮ざゐ」の續きに粘着力が足りないと思つたこと、第三首の「夕蒼く」が殊更で連續が不十分に感じたこと等幾らもありました。然し一切の語句や一首々々を離れておつと味つて見ると、此の六首には以前にいつたやうな長所がどうしても讀者を感服させずには置かないのです。それはいふまでもなくかういふ境地に手をつけた點に外ならないのです。だが自己の意志の表現は全然言語に俟たねばならないのですから、言語其ものに不安を感ずる

に於ては短歌としての存在に大なる缺陷を有して居るのです。だからずつと想を蒼然たる渚に馳せないで、此の六首の語句によつて作者の趣味を味はうとすると索然たらざるを得ないのです。要するに詩想と言語の離れて居るのを惜むのです。同時に私は一般の讀者が私のいふことに目を透して、短所は短所として更にアララギの同人中には此の如き微妙な境地に到達して居るもののあることを深く味はつて貰ひたいと切望するのであります。大きな事實だからであります。

（大正三年八月發行。アララギ第七卷第七號所載）

齋藤茂吉著歌集「赤光」書き入れ

「悲報來」

　ひた走るわが道(みち)暗ししんしんと堪(こら)へかねたるわが道くらし

三四の句不熟なるべし。

　ほのぼのとおのれ光りてながれたる螢を殺すわが道くらし

例の道草である。

「屋上の石」

　あしびきの山の峽(はざま)をゆくみづのをりをり白くたぎちけるかも

此歌の如きは紀行文的のものにして終つてゐる。

しら玉の憂(うれひ)のをんな戀ひたづね幾やま越えて來りけらしも

二の句はいささか厭味である。

○めん雞(どり)ら砂あび居(ゐ)たれひつそりと剃刀研人(かみそりとぎ)は過ぎ行きにけり

特色を見る。時間の無い單純な空間をよんだ然かも相互に何等關聯も無いものを取つて來た處、作者は只其時の閑寂な光景に感興を湧出したのである。例の癖がよく出たのである。めんどりの砂をあび居る處が既に地味な閑寂な趣である。剃刀研人も亦如何にもぼさぼさした派手でない容子をしたものである。兩者にはそこに一縷の連絡を有してゐる。（編者曰、○印は長塚節氏が附けられたものである。佳作のしるしてあるらしい。以下同じ。）

「麥奴」

飯(いひ)かしぐ煙ならむと鉛筆の秀(ほ)を研(と)ぎて居(ゐ)て煙を見るも

特色を見る。煙が二つ重つて居る。然しこれはいい。句を徒らに重ねたのとは違ふ。

ひた赤し煉瓦の塀はひた赤し女刺しし男に物いひ居れば

女を刺し殺した囚人を診斷して居る作者は、其事が既に自分の心を昂奮させて居る。其時に彼は只其囚人を見て居ない。赤い煉瓦塀がつき纏うて居るのである。

卷尺を囚人のあたまに當て居りて風吹き來しに外面を見たり

五の句只ごとである。調和があらうがなからうが、構はぬ作者の癖が惡く働いて居る。

まはりみち畑にのぼればくろぐろと麥奴は棄てられにけり

特色を見る。

監獄に通ひ來しより幾日經し蜩啼きたり二つ啼きたり

特色を見る。作者が慣用手段である蜩なきて、ふと幾日通つたであらうかと反

省する處聞えたり。

よごれたる門札おきて急ぎたれ八尺入りつ日ゆららに紅し

八尺入りつ日は却つて一首を害するものである。

大正二年に至りては八尺入りつ日の如き殊更なる語句を用ゐつつあるのが、むしろ怪しまれる位である。作者の如き非常に微細な點に長所を有して居るものは、目に立つ語句などはなるべく使はぬがよろしい。さもなくば其語句のために興味が索然としてしまふ。

「みなづき嵐」

○どんよりと空は曇りて居りたれば二たび空を見ざりけるかも

蚊帳のなかに蚊が二三匹ゐるらしき此寂しさを告げやらましを

特色を見る。

狂院の煉瓦の角を見るしかばみなづきの嵐ふきゆきにけり

かばの用法は例の作者の癖なれど、別段其爲に一首の値打を增す事もなく、むしろ平凡に終つてゐる。

「おひろ」

大正二年度において此大作を得たことを喜ぶ。藝術のための藝術ではなくて、作者はもう藝術といふものの範圍を越えて濶歩しようとしてゐる。其處に恐ろしい力を抱藏してゐる。それと同時に、一讀した際には、讀者は憫然たらざるを得ない程露骨に大膽に然かも極めて細心に歌つてゐる。作者の戀が、眞に賣春婦の無情なものから、可憐な少女のしみじみとした情愛の爲に泣いた趣が明瞭である。だが我々は作者の動機がどんなでも、要するに第三者である。出來上つた物の上から批判する外はない。さうして作者が今一轉化することを切望して止まぬ。それと共に時々熱烈な戀を歌つてゐながら、道草に屈托して居る樣な態度を深く自ら警めてもらひたい。

○夜くればさ夜床に寢しかなしかる面わも今は無しも小床も

○淺草に來てうで卵買ひにけりひたさびしくてわが歸るなる

○はつはつに觸れし子なればわが心今は斑らに嘆きたるなれ

○紙くづをさ庭に焚けばけむり立つ戀しきひとははるかなるかも

○ひつたりと抱きて悲しもひとならぬ瘋癲學の書のかなしも

○うづ高く積みし書物に塵たまり見の悲しもよたどき知らねば

○つとめなればけふも電車に乘りにけり悲しきひとは遙かなるかも

○ほのぼのと目を細くして抱かれし子は去りしより幾夜か經たる

○あさぼらけひと目見しゆゑしばだたくくろきまつげをあはれみにけり

○しんしんと雪ふりし夜にその指のあな冷たよと言ひて寄りしか

○あはれなる女の瞼戀ひ撫でてその夜ほとほとわれは死にけり

○このこころ葬らんとして來りぬれ畑には麥は赤らみにけり

○この心葬り果てんと秀の光る錐を疊にさしにけるかも

○ひんがしに星いづる時汝が見なばその眼ほのぼのとかなしくあれよ

（編者曰、以上の歌には○印あるのみ）

抛り捨てし風呂敷包ひろひ持ち抱きてゐたり寂しくてならぬ

五の句は却つて反感を起させ易いばかりでなく、滑稽に聞える。かういふ場合以ての外である。

しら玉の憂のをんな我に来り流るるがごと今は去りにし

二の句例の癖。

思ひ出は霜ふるたにに流れたるうす雲の如かなしきかなや

五の句がことさらでいかぬ。

たまきはる命光りて觸りたれば否とは言ひて消ぬがにも寄る

二の句例の如く不解。

この雨はさみだれならむ昨日よりわがさ庭べに降りてゐるかも

つゝましく一人し居れば狂院のあかき煉瓦に雨のふる見ゆ

例の道草である。

夏されば農園に來て心ぐし水すましをばつかまへにけり

麥の穗に光ながれてたゆたへば向うに山羊は啼きそめにけれ

ただこれだけでは、前後の熱烈なものに比して餘りにそつけない。何だか折角の急用を控へて道草をくつてるやうなものである。

藻の中に潜むゐもりの赤き腹はいつか見そめてうつつともなし

やや前者に近し。

すり下す山葵おろしゆ滲みいでて垂る青みづのかなしかりけり

特色を見る。但し他の幾首とは離して見るべきであるが。

啼くこゑは悲しけれども夕鳥は木に眠るなりわれは寢なくに

むしろ普通で他の獨特の點を有するものと同一には取扱ふことが出來ぬ。

「きさらぎの日」

　杵あまた竝べばかなし一様につぼの白米に落ち居たりけり

　杵あまた馬のかうべの形せりつぼの白米に落ちにけるかも

二首共に幼い處に面白味がある。かういふことは他人には不可能であらう。

　平凡に涙をおとす耶蘇兵士あかき下衣を着たりけるかも

けるかもといふ句を以て結ぶ程、此歌には感情が鋭くあらはれて居らぬ。

　きさらぎの天のひかりに飛行船ニコライでらの上を走れり

この作者の癖なるべし。

　二月ぞら黄いろき船が飛びたればしみじみとをんなに口觸るかなや

作者は明瞭に物をいつてくれぬ。

　この身はも何か知らねどいとほしく夜おそくゐて爪きりにけり

二の句卑俗に近し。爪きるは作者の獨特。

「口ぶえ」

大正元年以前のものにはなかつたものがここには出て來て居る。それは女といふものに對する作者の心もちが極度に無遠慮にあらはされて居ることである。普通の藝術といふ解釋に超越して居ることである。

このやうに何に顴骨たかきかや觸りて見ればをんななれども

女と同衾して居る時の歌である。他人には到底いふことの出來ぬものである。

目をあけてしぬのめごろと思ほえばのびのびと足をのばすなりけり

特色を見る。五の句に注意すべし。

あかねさす朝明けゆゑにひなげしを積みし車に會ひたるならむ

平生の作者の晏起なことも想像されるのである。

「神田の火事」

これやこの昨日の夜の火に赤かりし跡どころなれけむり立ち見ゆ

天明けし燒跡どころ燃えかへる火中に音の聞えけるかも

漫然と只火事といふことを歌にしただけで感じが淺い。

亡ぶるものは悲しけれども目の前にかかれとてしも赤き火にほろぶ

たちのぼる灰燼のなかにくろ眼鏡白き眼鏡を賣れりけるかも

ここには作者が出てゐる。

此五首は散漫である。趣味の中心點がない。

「女學院門前」

驢馬にのる少年の眼はかがやけり藥のうたは向うにきこゆ

此歌になると、題材の連絡に無頓着であるのが、只無頓着で終つてゐる。少年が今目前に在つて、藥賣が既に去つたことはわかつて居るが、その少年なるものが不明である。

世上には小器ようらに生ひたれば人間道の藥かなしも

理解し兼ねるのを遺憾とする。

「吳竹の根岸の里」

にんげんの赤子を負へる子守居りこの子守はも笑はざりけり

只他人ならば赤子でいい處でも、作者は人間と斷らねば承知が出來ぬ。すらすらと滯りなくいつて退けることが、作者には物足らぬのである。さうして子守が笑つてないといふ。赤子と子守は作者によつて一種の凄いやうなものに作りあげられて居る。

日あたれば根岸の里の川べりの靑蕗のたう搖れたつらんか

天然物になるとまだどうもまづい。

春のかぜ吹きたるならむ日のもとの光のなかに塵うごく見ゆ

特色を見る。例の些末な點にわたれば出來榮がまるで違つて來る。只二の句の如き普通でないいひ方は其癖である。

天のなか光りは出でて今はいよよさんらんとかがやきにけり

角兵衛のをさな童のをさなさに涙ながれて我は見んとす

只ひねくつただけである。

笛の音のとろりほろりと鳴りたれば紅色の獅子あらはれにけり

例の作者の同情から出立してゐる。

惜いことに散文の一節たるに過ぎぬ。

ながらふる日光のなか一いろに我のいのちのめぐるなりけり

此も惜いことに、讀者は作者と一つ心になることが出來ない。

あかあかと日輪天にまはりしが猫やなぎこそ光りそめぬれ

くれなゐの獅子のあたまは天なるや廻轉光にぬれゐたりけり

「あかあかと」の三の句「くれなゐの」の四の句共に例のひねくりである。

作者は自分自身を憐み愛する心が、強いと同時に、自己の薄弱なものを嘆ずるの情も切なるものがある。從來の句法には、一向無頓着で、却てその爲に、自己の思ふ處を存分に表現し得て居るものがある。

雪のなかに日の落つる見ゆほのほのと懺悔の心かなしかれども

三四の句作者の癖である。

こよひはや學問したき心起りたりしかすがにわれは床にねむらぬ

破調。作者のいふべきことである。

風引きて寐てゐたりけり窓の戸に雪ふる聞ゆさらさらといひて

甚だ感銘の深い作とはいひ憎いけれども、如何にも病者の歌である。さうしていひ方が作者である。

あわ雪は消なば消ぬがにふりたれば眼悲しく消ぬらくを見む

陳套の感を免れぬのは、一つは措辭の點にある。

腹ばひになりて朱の墨すりしころ七面鳥に泡雪はふりし

一向に題材の連絡も何も省みないといふのが一つの癖である。多くは弊に陥るが此一首に於ては幾らかそれを免れてゐる。

ひる日中床の中より目をひらき何か見つめんと思ほえにけり

雪のうへ照る日光のかなしみに我がつく息はながかりしかも

かうなると獨合點が多くなる。

○家ゆりてとどろと雪はなだれたり今夜は最早幾時ならむ

整うた作である。如何にも床上に横はれる病者の作である。

しんしんと雪ふる最上の上の山に弟は無常を感じたるなり

ひさかたのひかりに濡れて縦しゑやし弟は無情を感じたるなり

二首共に作者の心に憂あるその一端を讀者にも分つてもらはねば迷惑である。

電燈の球にたまりしほこり見ゆすなはち雪はなだれ果てたり

特色を見るべし。一見しては晝夜の區別がないやうで居ながら、電燈の球の埃といふので晝間のことであることが明瞭である。床上に仰臥して、日も既に高くなつたと思ふ頃、赤かつた電燈は消えて、見つめる球には埃が發見されるのみである。閑寂として居る室内である。さうして昨夜からの雪は日光のためになだれるだけはなだれて了つて、これも閑寂の趣を添へてゐる。

破調。

天霧らし雪ふりてなんぢが妻は細りつつ息をつかんとすらし

家に居て心せはしく街ゆけば街には女おほくゆくなり

女。作者にしてはじめて街上女のおほきを感ずるのである。

「墓前」

ひつそりと心なやみて水かける松葉ぼたんはきのふ植ゑにし

一二の句作者の常套手段。

「雪ふる日」

わが庭に鶩（あひる）啼きてゐたれども雪こそつもれ庭もほどろに

同じ雪とか雨とか風とかを歌ふにも作者がぢつとして居た時のものがいいのである。三の句は作者の癖。

枇杷の木の木ぬれに雪のふりつもる心愛憐（あはれ）みしましくも見し

これもよろし。四の句癖。

さにはべの百日紅のほそり木に雪のうれひのしらじらと降る

四の句。厭味の癖である。

天つ雪はだらに降れどさにづらふ心にあらぬ心にはあらぬ

四五の句折返したるにも拘はらず更に通ぜぬ。

「宮益坂」

馬に乗りりくぐん将校きたるなり女難の相か然（しか）にあらずか

獨特獨特。

向ひには女は居たり青き甕もち童子になにかいひつけしかも

女の好きな作者には只女が出たばかりでうれしいのであらうが、讀者にはうけとれぬ。

「折にふれて」

くろぐろと圓らに熟るる豆柿に小鳥はゆきぬつゆじもはふり

只季節の變化をいつただけである　目前の小鳥の動作に感興を催したのでも何でもない。

藏王山に雪かもふるといひしときはや斑なりといらへけらずや

五の句の強い力を含み得るが、只その句だけのことになつて居る。

をりをりは腦解剖書讀むことありゆゑ知らに心つつましくなり

これも作者獨特の境地である。

この里に大山大將住むゆゑにわれの心の嬉しかりけり

如此無造作なことは他人には眞似のできないことである。例令四の句が聊か例の癖を出したとはいふものの、然も其處に滑稽の分子も含まれてゐる。

「青山の鐵砲山」

敍事敍景に短なる作者が、漫然と只目前の事物を捉へた時には何時でも成功したことがない。此數首のごときも何物をも讀者に傳へて居らぬ。

銃丸を土より掘りてよろこべるわらべの側を行き過ぎにけり

只それだけより外はない。五の句いひ方は異つてゐるけれど。

青竹を手に振りながら童子來て何か落ちゐぬ面もちをせり

これも足らぬ。作者特有のしみじみと感じてから作つたのでないからだ。

ゆふ日とほく金に光れば群童は眼つむりて斜面をころがりにけり

金に光ればひねくりである。

「ひとりの道」

無理に作つた歌らしい。殊に叙景の方面に短なる作者として、漫然こんなものに手を出すのは誤りである。

霜ふればほろほろと胡麻の黒き實の地につくなし今わかれなむ

分り兼ねたるいひ方なり

夕凝りし露霜ふみて火を戀ひむ一人のゆゑにこころ安けし

一人といふのは誰であるか。

白雲は湧きたつらむか我ひとり行かむと思ふ山のはざまに

注意すべし、句調の整ひたる歌なり。それは只擬古的に然るのみで、内容は空疎である。

もみぢ斑に照りとほりたる日の光はざまに我を動かざらしむ

只露骨な自己の説明である。

狂人の自殺したるを火葬に附してこれを悲しんだといふ、それだけでいいのである。只幾十首が、自殺を悲しむの情を以て、一貫されて居れば、甚だ其體を得て居るけれど、作者は時々何等の關係もない、途中の出來事位に目を移して、平然とそれを歌つて居る。だから折角の好題材を捉へて居ながら、感興を殺がされること夥しい。それから又動物園の作の如きも、餘りに突然に感ずる。それを二つに分けて、詞書がついたとしたならばどうであるか。火葬の場から歸つて、まだ悲哀につつまれて居るとすれば、鶴の頭が悲しいも、鰐の子が死にさうにないのも、獸が餌を求めて鳴くのも、山椒魚の愚なるが如きも、みな涙の種と成り得るであらう。作者獨りがさうである場合、讀者は或點まで、作者がさうならねばならぬ動機を知らしてもらふ必要がある。短歌は藝術品である。玉石を淘ひ分けねばならぬ。金鑛には黄金が含有されて居るには相違ない。然しながら、それは直

ちに黄金ではない。勿論特殊の智識あるでなければ見わけがつかない。此幾十首の如く支離滅裂なものでは、我々はこれを純粋な藝術品として待遇するに躊躇する。金鑛を以て黄金とはなし難いのである。惜いことである。此を淘汰すれば立派なものが殘るのである。

　自殺せし狂者の棺のうしろより眩暈して行けり道に入日あかく

特色。作者そのものを見ることは出來る歌であるが、只成功して居らぬ。

　陸橋にさしかかるとき兵來れば棺はしまし地に置かれぬ

只の叙述に過ぎない。

　泣きながすわれの涙の黄なりとも人に知らゆな悲しきなれば

詞は切實なやうに用ゐてあるが、態度がよそよそしい。

　鴉らは我はねむりてゐたるらむ狂人の自殺果てにけるはや

第一句作者のひねくる癖出て居れどわからぬ。

死なねばならぬ命まもりて看護婦はしろき火かかぐ狂院のよるに

赤いものの刺戟を受けることに、しみじみするらしい作者が、しろきは珍らしい。歌は普通のことのみである。

歩兵隊代々木のはらに群れゐしが狂人のひつぎひとつ行くなり

兵隊には勇ましい只積極的な分子をのみ發見し得る。それに狂人の然かも自殺した患者の柩を守りて行くといふ。寂しい對照は受取れるが、感情の動きが足らぬ。

赤光の中に浮びて棺ひとつ行き遙けかり野は涯ならん

作者は太陽の光、夕日の光と率直にいふことが出來ないのである。

わが足より汗いでてやや痛みあり靴にたまりし土ほこりかも

五の句のかもに力がない。足にいささかの痛みがある。靴ずれであらう。いためたために其いたい靴を思はず見る。それに埃がたまつてゐた。それだけには解せるが連絡が乏しい。

火葬場に細みづ白くにごり來も向うにひとが米を磨ぎたれば

これでは只目前の光景を漫然と描いたに過ぎない。自分の主観を以て連絡させて居ない。

死はも死はも悲しきものならざらむ目のもとに木の實落つたはやすきかも

要するにいひ様が足らぬ。散文でいへば明瞭であるのに、歌であるために不十分になつた。

兩手をばズボンの隱しに入れ居たりおのが身を愛しと思はねどさびし

自らに同情する態度。

葬り火は赤々と立ち燃ゆらんか我がかたはらに男居りけり

光景甚だ不明瞭である。三の句何故になりしか。

うそ寒きゆふべなるかも葬り火を守るをとこが欠伸をしたり

率直にいふことは惡いことではないが、かういふ場合、五の句の用法は愼しむべ

きものがある。滑稽に墮するよりも反感を起し易い。

骨瓶のひとつを持ちて價を問へりわが口は乾くゆふさり來り

この作者の心事を了解することは出來るが、歌として表はされた上からは、物足らぬのである。此も散文でいへば何の苦もないのだ。

納骨の箱は杉の箱にして骨がめは黒くならびたりけり

何故の破調であるか。

上野なる動物園にかささぎは肉食ひゐたりくれなゐの肉を

くれなゐは作者の好んで用ゐる處である。

おのが身しいとほしきかなゆふぐれて眼鏡のほこり拭ふなりけり

特色を見る。自己に同情する態度。がつかりとした容子も明瞭である。此末のことはどうしても作者の特長である。

自殺せる狂者をあかき火に葬りにんげんの世に戰きにけり

をののくといふやうなことをいふのも、強烈な刺戟を欲する作者の常態である。

然し此も未成品だ。

けだものは食もの戀ひて啼き居たり何といふやさしさぞこれは

特色を見る　同情ある作者を目前に見るやうである。

ペリカンの嘴うすら赤くしてねむりけりかたはらの水光かも

前の作と共に破調である。かもが一向きいて居らぬ。

わが目より涙ながれて居たりけり鶴のあたまは悲しきものを

狂人の死を葬り、更に動物園に來りて、哀心の悲しみいまだ深くして、物每に悲哀を感ずるとも受取れる。

けだもののにほひをかげば悲しくもいのちは明く息づきにけり

いひ方にひねくつた處がある。

支那國のほそき少女の行きなづみ思ひそめにしわれならなくに

技巧が下手に巧んである。

さけび啼くけだものの邊に潜みゐて赤き葬りの火こそ思へれ

露骨にいつた處に感情を殺ぐ處がある。

くれなゐの鶴のあたまを見る故に狂人守をかなしみにけり

意味の了解に苦しむ處がある。

たのまれし狂者は終に自殺せりわれ現なく走りけるかも

四五の句は自分だけがわかつてゐる句だ。

おのが身はいとほしければ赤棟蛇も潜みたるなり土の中ふかく

自己に同情する態度。

世の色相のかたはらにゐて狂者もり黄なる涙は湧きいでにけり

四の句感興を殺ぐ。

やはらかに弱きいのちもくろぐろと甲はんとしてうつつともなし

作者には非常な強味がある。それは感情の働きである。同時に非常に弱い處がある。それも感情の働きである。

かの岡に瘋癲院の立ちたるは邪宗來より悲しかるらむ

四の句例のひねくりなり。

○みやこにも冬さりにけり茜さす日向のなかに髭剃りて居る

特色を見る。如何にも冬である。日常些末のことにいつでも成功して居る作者は憎らしい程である。

○鰐の子も居たりけりみづからの命死なんとせずこの鰐の子は

○泥いろの山椒魚は生きんとし見つつしをればしづかなるかも

「郊外の半日」

此章幸に曼珠沙華、唐辛子畑、茄子等の材料があつた爲に、稍平生の叙事叙景とは異つて居れど、仔細に玩味して居ると、「曼珠沙華赤し」の一首を除きては、叙

景は到底拙である。平素のやうなしみじみと感じて作つてないから、折角の四人もそれ程に生きない。散文的である。

今しがた赤くなりて女中を叱りしが郊外に來て寒けをおほゆ

此歌全體の序の如くなれど、散文的である。

郊外はちらりほらりと人行きてわが息づきは和むとすらん

ここにも自己の態度の説明がある。

郊外に未だ落ちゐぬこころもて螇蚸にぎれば冷たきものを

三の句まで説明である。五の句餘情を存したるが如きも至らず。

○秋のかぜ吹きてゐたれば遠かたの薄のなかに曼珠沙華赤し

特色を見る。二の句作者の苦心の存する處、語格の上より議すべきもののあらんも、そのため却て一首の落つきを得て、秋風の騒がしき感おほく、曼珠沙華のいやが上にも赤さを覺ゆる。然しながら一歩を誤れば、只作者のいひ方を苦にする例の

弊に陥るのである。二の句は實に危機を包藏してゐる句である。

ふた本の松立てりけり下かげに曼珠沙華赤し秋かぜが吹き

存在の必要なし。前者に比して到底同日の談にあらず。

いちめんの唐辛子畑に秋のかぜ天(あめ)より吹きて鴉(からす)おりたつ

五の句唐突なやうで、然かも秋風の吹いてゐる樣子が此一句で生きて來る。然しながら天より吹きてといふやうないひ方が聊か弊をなしてゐる。

いちめんに唐辛子あかき畑みちに立てる童(わらべ)のまなこ小さし

四五のつづき、到底前者の五の句の如く密接なものでない。感情の表現がない。

曼珠沙華咲けるところゆ相むれて現身(うつしみ)に似ぬ囚人は出づ

まだ足らぬ。

草の實はこぼれんとして居たりけりわが足元(あしもと)の日の光かも

三の句までは矢張り自己の足もとを見て居たのだけれど、日の光は唐突の嫌があ

る。かもの用法はただ粗笨である。

トロッコを押す一人(いちにん)の囚人はくちびる赤し我(われ)をば見たり

作者には唇の赤さが一種の刺戟であるかも知らぬが、さうして其赤き唇の恐ろしげなる囚人が、自分を見たといふ處に心を動かす或物が有つたであらうが、それが、讀者に受けいれられない。

片方(かたはう)に松二もとは立てりしが囚はれ人(びと)は其處(そこ)を通りぬ

下手な叙事に過ぎない。

秋つきて小さく結(な)りし茄子の果を籠(こ)に盛る家の日向に蹲居り

第三句までは長い時間を含む。籠に盛る家までも同樣である。然るに五の句の蹲居りは殆ど時間も何もなき目前の光景である。作者には時間と空間との觀念が明瞭でない。だから一讀甚だ不安の念を生ぜしめる。到底叙景には下手である

女のわらは入日のなかに兩手(ちう)もて籠(こ)に盛る茄子のか黒きひかり

これもくだくだとして、單純なる材料の統一が出來てない。技巧も拙である。

「海邊にて」

海の香は山の彼方に生れたるわれのこころにことなしかしも

五の句不解。

あぶらなす眞夏のうみに落つる日の八尺の紅のゆらゆらに見ゆ

四の句殊更である。すべて殊更の語句は感興を殺ぐこと大である。

いささかの潮のたまりにあかきもの生きてゐたれば嬉しむかな

破調。

海のべに紅毛の子の走りたるこのやさしさに我かへるなり

同情あるもの。

大正元年になりても、作者はまだ八尺の紅などいふ殊更な句を用ゐて居る。どうしても作者は日前些末の事項にしみじみと感じ入つた時でなければ駄目である。

空濶なる海邊に來て、それを漫然と歌によまうとしても、迚も思想が纏らないのは當然である。其内から珠玉を探り出す工夫がなければならぬ。作者の短所がそこにある。

「狂人守」

うけもちの狂人も幾たりか死にゆきて折をりあはれを感ずるかな

かすかなるあはれなる相ありこれの相に親しみにけり

調を成さず。

くれなゐの百日紅は咲きぬれどこの狂人はもの云はずけり

百日紅が突然である。これも確に作者の癖である。

としわかき狂人守りのかなしみは通草の花の散らふかなしみ

通草の花は前にもある。作者は頗るこの花を思ふこと切であると見える。然しての一首はもう通草の花の粕である。

　　氣のふれし支那のをみなに寄り添ひて花は紅しといひにけるかな

誰が赤しといひしか。作者自身とすれば說明が足らぬ。

　　ゆふされば靑くたまりし墓みづに食血餓鬼(じきけつがき)は鳴きかゐるらむ

四の句、此も作者が技巧の弊として、一意珍奇なる語句を好めるからである。

　　あはれなる百日紅の下かげに人力車(じんりき)ひとつ見えにけるかな

何があはれなるかわからぬ。

「土屋文明へ」

　　夕さればむらがりて來る油むし汗あえにつつ殺すなりけり

このなりけりは作者の好んで用ゐる語なれども、此際は不調和なり。却て一首弛緩して聞ゆ。

　　かかる時菴羅(あんら)の果をも戀ひたらば心落居むとおもふ悲しみ

作者の何か珍奇のものを求むる癖現れてゐる。

むらさきの桔梗のつぼみ割りたれば蕊あらはれてにくからなくに

特色を見る。果然微細の方面には手腕の延びるを見る。五の句全く力なし。

秋ぐさの花さきにけり幾瓣をみづ遣りしかとおもほゆるかも

同情の發露である。

「夏の夜空」

大分墓の歌がある。

日をあけてきたき天の原見しかども遠の珍のここちこそすれ

ひねくる癖がある。

「折々の歌」

作者の主觀の力が足らぬため、折角何か有りさうでどうしても不明瞭に陥るものがある。又散文的のものもある。成功したものは漸次圓熟し來つて、遂に他人の追隨を許さない。

とろとろとあかき落葉火もえしかば女の男の童をどりけるかも

突然で興味の中心が不明瞭である。

雨ひと夜さむき朝けを日の下の死なねばならぬ鳥見て立てり

特色を見る。作者の同情といふことが主になつて居るけれど、まだ成功したものではない。

をんな寝る街の悲しきひそみ土ここに白霜は消えそめにけり

白霜といふ語もどういふものか。さうして霜をいふために、力を入れてゐるが、それが何の爲にさうかと疑ひたい程である。

猫の舌のうすらに紅き手の觸りのこの悲しさに目ざめけるかも

特色を見る。些末の點に成功してゐる長所は十分にあらはれてゐる。

○ほのかなる茗荷の花を見守る時わが思ふ子ははるかなるかも

特色を見る。作者はほのぼのといふ語を好んで使用するが、此歌の如き其ほのぼ

のとした處に好味を有してゐる。茗荷の花は如何にもほのかなものである。さうして茗荷の花は地味な目につかぬものである。だから作者は見守るとふ語を用ゐて居る。しみじみと見なければ目につかぬ花である。其のしみじみとして居る時に、わが思ふ子を思ひうかべた。其の子は自分に覺束ない感じを與へる。遙かは作者の位置を說明したのでなくて、感じを說明したものとしたい。

○をさな兒の遊びにも似し我がけふも夕かたまけてひもじかりけり（研究室）

特色を見る。自己の態度を說明して居るけれど、かう讀者の胸にひしと來れば十分である。

○みちのくの我家の里に黑き蠶が二たびねぶり目ざめけらしも

特色を見る。しみじみとしてゐる。何でもないことだが、三句黑き蠶が生きてゐる。作者が蠶の二眠の時の容子を能く知つてゐるから、かういふことが出來た。能く見てゐたところにしみじみとした感を起させる力がある。

曼珠沙華ここにも咲きてきぞの夜のひと夜の相あらはれにけり

不解。

秋に入る練兵場のみづたまりに小蜻蛉が卵を生みて居りけり

現身のわれをめぐりてつるみたる赤き蜻蛉が幾つも飛べり

酒の糟あぶりて室に食むこころ腎虚のくすりたづねゆくこころ

特色あり。

何ぞもとのぞき見しかば弟妹らは龜に酒をば飲ませて居たり

ただごとである。

太陽はかくろひしより海のうへ天の血垂りのこころよろしき

天の血垂といふのは單に詞の技巧である。それが只一句使用された爲に、歌に生命を注入することは不可能である。

狂院に寢てをれば夜は溫るし我に觸るるなし蟾蜍は啼きたり

特色あり。作者の捉へさうな所であるが、僅かに怪談咄の一端にありさうな感じがするだけである

伽羅ほくに伽羅の果こもりくろき猫ほそりてあゆむ夏のいぶきに

作者は自ら知らぬものにも珍らしいものを書物の上などで發見して興がる癖がある。此歌などもさうであるらしい。

ほそき雨墓原に降りぬれてゆく黒土に煙草の吸殼を投ぐ

只目前の事實を寫しただけで、それに作ふ感情の働きが足らぬから駄目だ。

萱草をかなしと見つる眼にいまは雨にぬれて行く兵隊が見ゆ

五の句措辭の上に落つきを見ない。

病院をいでて墓原かげの土踏めば何になごみ來しわが心ぞも

自己の態度の説明がいたつて居らぬ

松風の吹き居るところくれなゐの提灯つけて分け入りにけり

散文の或句を取離して見ただけで、前後の連絡も何もない。只それだけのことである。

「さみだれ」

にはとりの卵の黄味の亂れゆくさみだれごろのあぢきなきかな

特色を見る。日常些末のことになれば得意である。只五の句平凡なために大に遺憾とするのである。

胡頽子の果のあかき色ほに出づるゆゑ秀に出づるゆゑに歎かひにけり（おくにを憶ふ）

其嘆きが人に傳はらぬ。句を重ねる弊がまた出て來た。

ぬば玉のさ夜の小床にねむりたるこの現身はいとほしきかな

態度の説明。この歌斷然のぞくべし。

しづかなる女おもひて眠りたるこの現身はいとほしきかな

特色を見る。

　あが友の古泉千樫は貧しけれさみだれの中を歩みゐたりき

特色を見る。無造作ないひ方のうちに、同情ある作者を見ることが出來る。

　けふもまた雨かとひとりごちながら三州味噌をあぶりて食むも

特色を見る。作者が出てゐる。

「兩國」

　肉太の相撲とりこそかなしけれ赤き入り日に目かげをしたり

その悲しさが不明瞭である。

　川向の金の入日をいまさらに今さらさらに我も見入りつ

作者の癖を見る。金の入日、これがひねくつた作者の癖である。

　猿の肉ひさげる家に灯がつきてわが寂しさは極まりにけり

作者の態度の説明に過ぎぬ。

　きな臭き火縄おもほゆ薬種屋に龜の甲羅のぶらさがり見ゆ

一二の句に作者らしき處を見る丈の物である。

冬河の波にさやりてのぼる舟橋のべに來て帆をおろしつつ

叙景は短所である。

「犬の長鳴」

透明なガラスの板に、何かくつついて、それが拭いてもとれないといふぢれつたさよりも、手にくつついた油が、ねつねつとして、洗つても容易にとれないといふやうな感じのする歌がある。いひ方がひねくつてあつたり、ことさらに誇張した句があつて、讀者に作者の感情を強ひるやうな傾きのあるのも、大いなる原因だらうと思ふ。

よる深くふと握飯（にぎりめし）くひたくなり握めし食ひぬ寒がりにつつ

作者の長所をいつたものでありながら、五の句が説明で力がない。

わが體（からだ）ねむらむとしてゐたるとき外（そと）はこがらしの行くおときこゆ

からだがほかほかと暖かくなつて來てはじめて寒い夜には眠れるものである。そのうとうととして來た時に、耳に風のおとをきくといふ。此も作者の長所にいひ至つてゐるのだけれど、なぜもつと率直にうとうととして來た時云々といはぬのだらう。これも誇張の弊か

　遠く遠く流るるならむ灯をゆりて冬の疾風は行きにけるかも

此灯いかなる灯かわからず。

　吠え鳴くはかの犬族のなが鳴くは遠街にして火は燃えにけり

此の火は何が燃えてゐるのか、火事のことか、火事とすると稍變だ、三句までの續きに異存がある。

　さ夜ふけと夜の更けにける暗黑にびようびようと犬は鳴くにあらずや

暗黑の夜にびようびようと犬が鳴くだけがいひ表はされたのでは足らはぬ。作者の感情が毫も傳へられぬからである。

たちのぼる炎のにほひ一天を離りて犬は感じけるはや

犬族の感覺の鋭敏なことをいつたものだけれど、只さういふ智識が作者に在り得たといふ外多くを發見し得ぬ。

「木こり」

常赤く火をし焚かんと現し身は木原へのぼるこころのひかり

五の句でわからなくしてゐる。初句は例の癖。

山腹の木原のなかへ堅凝りのかがよふ雪を踏みのぼるなり

三の句を考へたのだらうけれど、ただそれだけで何ものもない。

天のもと光にむかふ楢木はら伐らんとぞする男とをんな

以下全部作者の弊の誇張に陷つた外に取るべき點がない。依然として作者は叙事叙景に短なるものである。

斧ふりて木を伐るそばに小夜床の陰のかなしさ歎ひてゐたり

特色を見る。此處には明かに陰といつてある。作者の稍不透明なつやけしのガラスの如きいひ方によつて無事に納つてゐる。

　雪のべの火がとろとろと燃えぬれば赤子(あかご)は乳をのみそめにけり

木こりの妻の容子はあらはれて居れど、ただそれだけで、餘り深い感じは起らない。

　杉の樹の肌(はだへ)によればあな悲しくれなゐの油(あぶら)滲み出るかなや

どうしてさう悲しく感ぜられるのか、不明である。殊に五の句のいひ方が餘りに誇張である。

　遠天(をんてん)に雪かがやけば木原なる大鋸(おが)くづ越えて小便をせり

特色を見る。朝の景色だらう。五の句此作者だからこれほど無造作にいふのだけれど、それにしても藝術的でない。

「木の實」

成功したものは傑作であると同時に、不成功のものは一首の意味を了解するにさへ、讀者は非常に苦しむ。さうした苦しみが徒勞に屬してゐる。

しろがねの雪ふる山に人かよふ細ほそとして路見ゆるかな

ただ雪を雪といはずに、何とか、ひねくつて見ねば氣がすまぬ例の癖である。

赤茄子の腐れてゐたるところより幾程(いくほど)もなき歩みなりけり

特色を見る。俳句には只文字の解釋だけではわからぬものがある。此歌もさうである。一見しては、何のことか不明である。然し呆然と何か考へて歩むことすら意識しないやうな場合があつたとして、さうして暫く時が經つたと思つて、ふと氣がついて見ると、先刻は赤茄子の腐れて居た處に居て、やがて其處を立つて來たのであつたが、まだ幾らも歩いては居ないのだつたと、驚いた樣子が表はれてゐると思へば如何にもさう見える。他の人の作にかういふ例があるかないかは知らぬが、短歌に於て慥かに一生面を開いて居るものである。

満ち足らふ心にあらぬ谷つべに酔をふける木の實を食むこころかな

これは受取り憎いものである。

山ふかく谿の石原しらじらと見え來るほどのいとほしみかな

四の句まで說明である。

かうべ垂れ我がゆく道にほたりほたり橡の木の實は落ちにけらずや

五の句强過ぎてかけ合はず。

ひとり居て朝の飯食む我が命は短かからむと思ひて飯はむ

特色を見る。何のために作者は斯く觀ずるかを穿鑿するの餘地はない。佳作。

「睦岡山中」

これまでの處、作者は叙景が下手である。只漫然と山中を歩いただけで、一歩一歩に目に觸るるものを捉へてよんで見ても、平生のやうなしみじみした處が出て來ない道理である。特に叙景の不得意な作者としてはさうである。

寒ざむとゆふぐれて來る山のみち歩めば路は濡れてゐるかな

普通の物に過ぎない。

山ふかき落葉のなかに夕のみづ天より降りてひかり居りけり

題材が題材だけに、餘りにわざとらしく聞えるのを憾みとする。

何ものの眼のごときひかりみづ山の木はらに動かざるかも

一二の句に作者らしい處はあるが、只平凡なことだ。

現し身の瞳かなしく見入りぬる水はするどく寒くひかれり

平凡。

都會のどよみをとほくこの水に口觸れまくは悲しかるらむ

作者の感情が激して居るらしくて、しかも讀者には其一部をも受取ることが出來ない。

天さかる鄙の山路にけだものの足跡を見れば心よろしき

けだものの足跡を見てうれしいといふのが讀者には分らないのである。

　なげきより覺めて歩める山峽に黑き木の實はこぼれ腐りぬ

此作者の「なげき」とか「悲しさ」とかいふのは、恐ろしく頻繁に出て來るのだが、どうも多くは受取ることの難澁なものである。

　寂しさに堪へて空しき我が肌に何か觸れて來悲しかるもの

何か有りさうでゐて足らぬ。

　ふゆ山にひそみて玉のあかき實を啄みてゐる鳥見つ今は

力が無い。

　風おこる木原をとほく入りつ日の赤き光りはふるひ流るも

普通のことをいつたまでだ。

　赤光のなかの歩みはひそか夜の細きかほそきゆめごこちかな

作者の主觀が惡い道を歩いて居るのである。

非常に面白いものが出來て居る。作者獨特の點においての成功であるから、餘裕もあるし深さもある。然し、ここにも其の弊に陷つて居る處が遺憾である　卑俗な語句の存在するのも惡癖である

　くれなゐの鉛筆きりてたまゆらは愼しきかなわれのこころの

此一首は說明の處が惡い。

　をさな妻をとめとなりて幾百日こよひも最早眠りゐるらむ

特色を見る。些の澁滯もなく、此一首を構成するまでの長い道程も明瞭に、然も渾然と描き出されて居る。作者の特色を遺憾なく發揮し得たる傑作である。

　寢ねがてにわれ煙草すふ煙草すふ少女は最早眠りゐるらむ

特色を見る。二三の句重ねたる處に聊かだれ氣味の處はあるが、そんな事は少しも累することがない。作者の態度がありありと目前に映じて來る。

いま吾は鉛筆をきるその少女安心をして眠りゐるらむ

特色を見る。此一首も措辭に難がある。四の句の如きは實に危險な使用法であるにも拘はらず、それが耳ざはりにならぬ。感情がすべてを掩うて居るからである。

わが友は蜜柑むきつつ染じみとはや抱きねといひにけらずや

特色を見る。少し露骨な處に難がある。然し此もこの作者でなければいひ能はぬ。只從來思ひ切つたことを平氣でいつてのける内にも、周圍に氣兼するやうな態度が、此の作者には些かも見えなかつたのだけれど、さうして讀者も平氣であられたけれど、此作にはいささかそれが缺けて居るやうである

けだものの暖かさうな寢すがた思ひうかべて獨りねにけり

特色を見る。途方もないことをいふ作者の習癖はここにも表はれて居る。

寒床にまろく縮まりうつらうつら何時のまにかも眠りゐるかな

平凡。

水のべの花の小花の散りどころ盲目(めしひ)になりて抱(いだ)かれて呉れよ

特色を見る。三句までは只作者がほのぼのと腦裡に思ひ浮べたことをいつたまでであると解釋すればいいと思ふ。さうきめて見ると面白い點も發見されるが、これも露骨に過ぎて、且つ五の句卑俗である。

「此の日頃」

よるさむく火を警むるひようしぎの聞え來る頃はひもじかりけり

何事もないが採れる。

この宵はいまだ淺けれ床ぬちにのびつつ何か考へむとおもふ

些末なことをいうて成功しないものである。

さだめなきものの魘(おそひ)の來る如く胸(むな)ゆらぎして街をいそけり

むしろ獨合點である。惜いことに製作の動機が不明であるために、讀者は霧中に迷ふの感がある。集中それがどれ程か分らぬ。

「おくに」

此處に卑野な俗ないひ方が出て居る。

　なにか言ひたかりつらむその言も言へなくなりて汝は死にしか

率直ないひ方ではあるが、餘りに卑野の感がある。

　これの世に好きななんぢに死にゆかれ生きの命の力なし我は

二の句俗である。

○やすらかな眠もがもと此の日ごろ眠ぐすりに親しみにけり

特色を見る。些末なことになると段が違ふ。

○しみ到るゆふべのいろに赤くゐる火鉢のおきのなつかしきかも

特色を見る。一二の句に多少の難がある。かう無理に強くいはぬ方が宜しいと思ふ。

○何も彼もあはれになりて思ひつるお國のひと世はみぢかかりしか

○現身のわれなるかなと歎かひて火鉢をちかく身に寄せにけり
○ちから無く鉛筆きればほろほろと紅の粉が落ちてたまるも

(「現身の」と「ちからなく」には)特色を見る。

灰のへにくれなゐの粉の落ちゆくを涙ながしていとほしむかも

特色を見る、五の句がむしろわざとらしく聞える。

「うつし身」

自己の態度を只説明して居る弊が夥しい。破調句を成さぬものがある。下品な語句を使用して來た。それは何とか同じい方でも變化させて見たいといふ作者の弊である。

雨にぬるる廣葉細葉のわか葉森あがいふ聲のやさしくきこゆ

森も説明なれば、他も説明である。

いとまなき吾なればいま時の間の青葉の搖も見むとしおもふ

同じく説明である。

しみじみとおのに親しきわがあゆみ墓はらの蔭に道ほそるかな

どうも説明だ。

やはらかに濡れゆく森のゆきずりに生の疲の吾をこそ思へ

説明である。四の句など殊にさうである。

よにも弱き吾なれば忍ばざるべからず雨ふるよ若葉かへるで

破調、何を成さぬ。

にんげんは死にぬ此のごと吾は生きて夕いひ食しに歸へらなむいま

いひ方を只變らせただけだ。

青山の町蔭の田の水さび田にしみじみとして雨ふりにけり

作者がしみじみと感ずることを讀者にはうけ容れ難いのである。他の一首（うちどよむ衢のあひの森かげに殘るみづ田をいとしくおもふ）もさうである。

寂し田に遠來し白鳥見しゆゑに弱ければ吾はうれしくて泣かゆ

五の句別段に力もない。それを他人は眞似たがる。陋といふべし。

くわん草は丈ややのびて濕りある土に戰げりこのいのちはや

五の句に作者の感慨がこめてあるやうなれど、全體の上に表はされないので態とらしいやうに聞ゆる。

はるの日のながらふ光に靑き色ふるへる麥の嫉くてならぬ

五の句は下品だ。

うごき行く蟲を殺してうそ寒く麥のはたけを橫ぎりにけり

二三の句のつづきに取るべき處はある。

「うめの雨」

作者は散文にすべきものを、只三十一文字に排列したものがある。それから何とかいひ方をかへようと苦心する結果厭味なものも交るやうである。

　　おのが身をいとほしみつつ歸り來る夕細道に柿の花落つも

其時節の景物をよみ込むのは餘程むづかしい。

　　はかなき身も死にがてぬこの心君し知れらば共に行きなむ

能く通ぜぬ。

　　さみだれのけならべ降れば苺の實の圓大きくここよりも見ゆ

五の句ことといふのは何處だか分らぬ。然しながらそんなことは頓着なしにさつさといつて了ふのが又此の作者の特色の一つともいひ得る。

　　かぎろひのゆふさりくれど草のみづかくれ水なれば夕光なしや

此頃になつて無暗に哀れつぽいことをいはねば氣が濟まぬといつた有樣である。それが讀者にひしと通ずればよし。然らざれば失敗あるのみ。

　　ゆふ原の草かげ水にいのちいくる蛙はあはれ啼きたるかなや

どんな小さな物にでも感動すれば同時に人を動かすものが出來るのであるが、そ

れには全體の調子の上にそれが表現されねばならぬ。此歌のやうに五の句にのみ強い言葉を用ゐたのは、只不調和を感ずるだけである。

うつそみの命は愛しとなげき立つ雨の夕原に音するものあり

五の句獨合點である。

道のべの細川もいま濁りみづいきほひながる夜の雨ふり

只普通のことである。

汝兄よ汝兄たまごが鳴くといふゆゑに見に行きければ卵が鳴くも

恐ろしく複雜な事實をいつたのである　さうしてそれが甚だ滑稽に聞えて來る。然しまた其點が無邪氣でおもしろいともいへる

あぶなくも覺束なけれ黄いろなる圓きうぶ毛が歩みてゐたり

散文と擇ぶことなし

見てを居り心よろしも鷄の子はついばみ乍らゐねむりにけり

特色を見る。些末な處に手のとどくのが長所である。初句は惡し。

乳のまぬ庭とりの子は自づから哀れなるかもよもの食(は)みにけり

特色を見る。但し四の句がいひ過ぎてゐる。

たまたまに手など觸れつつ添ひ歩む枳殼(からたち)垣にほこりたまれり

特色を見る　些細な點に目をつけて成功してゐる。

ものがくれひそかに煙草すふ時の心よろしさのうらがなしかり

四五の句作者に珍らしい厭味のものである

青葉空雨になりたれ吾はいまこころ細ほそと別れゆくかも

通じない

「藏王山」

藏王をのぼりてゆけばみんなみの吾妻(あづま)の山に雲のゐる見ゆ

只普通のいひ方である

たち上る白雲のなかにあはれなる山鳩啼けり白くものなかに

同上。あはれなる山鳩をあはれに感ぜしめる何ものも含まれてないのである。

あまつ日に日蔭をすれば乳いろの湛かなしきみづうみの見ゆ

死にしづむ火山のうへにわが母の乳汁の色のみづ見ゆるかな

普通である。

秋づけばはらみてあゆむけだものも酸のみづなれば舌觸りかねつ

特色を見る。はらむといふことをいふ必要もない處へはらむといふ。然かも作者はいひたくてたまらぬのであるから、不調和の如くにしていささか落つきを得て居るのである。

赤蜻蛉むらがり飛べどこのみづに卵うまねばかなしかりけり

特色を見る。

ひんがしの遠空にして絹いとのひかりは悲し海つ波なれば

三の句が多少晦澁である。

「秋の夜ごろ」

　玉きはる命をさなく女童をいだき遊びき夜半のこほろぎ

五の句が突然で分らぬ。

　ことわりもなき物怨み我身にもあるが愛しく蟲ききにけり

微妙な何物かを捉へようとしてまだ足らぬものである。

　少年の流されびとのいとほしと思ひにければこほろぎが鳴く

「秋の風ふきてゐたれば遠かたの薄の中の曼珠沙華赤し、」と同一句法に出てゐるが、あれは目前に形が明瞭に表はされて居るからいいが、此はそれと違つて、大いに離れ離れである。

　秋なればこほろぎの子の生れ鳴く冷たき土をかなしみにけり

特色を見る。秋なればといふ初句が勝つてゐて耳ざはりである。

少年の流され人はさ夜の小床に蟲なくよ何の蟲よといひけむ

特色を見る。作者の同情があらはれてゐる。然し句法は粗笨である。

かすかなるうれひにゆるるわが心蟋蟀聞くに堪へにけるかな

自己の態度の說明だからいかぬ。

蟋蟀の音にいづる夜の靜けさにしろがねの錢かぞへてゐたり

特色を見る。目前の些末の事柄をしみじみと見ていふ作者の特長が十分見えてゐる。秋の夜に白金の錢をかぞへるなどは、一寸俳人でも思ひうかべぬであらう。只一二の句は作者がどうかするといひ方をひねくる癖があるのを十分證明して居る。

紅き日の落つる野末の石の間のかそけき蟲にあひにけるかも

五の句「あひにけるかも」などは、餘り物のいひ樣が誇張に過ぎて居る。

足もとの石のひまより靜けさに顫ひて出づる音に賴りにけり

五の句不解。

入りつ日の入りかくろへば露滿つる秋野の末にこほろぎ鳴くも
うちどよむちまたを過ぎてしら露のゆふ凝る原にわれは來にけり
星おほき花原くれば露は凝りみぎりひだりにこほろぎ鳴くも
こほろぎのかそけき原も家ちかみ今ほほ笑ふ女の童きこゆ
はるばると星落つる夜の戀がたり悲しみの世にわれ入りにけり

例の作者のしみじみとした處がないから、只文字を排列して或意味を傳へたといふに過ぎぬ。

濠のみづ干ゆけばここに細き水流れ會ふかな夕ひかりつつ
女の童をとめとなりて泣きし時かなしく吾はおもひたりしか

五の句で打壞してゐる。

此も獨合點、前後に讀者が作者の悲しみを了解しうべき何物もない。

こほろぎはこほろぎゆゑに露原に音をのみぞ鳴く音をのみぞ鳴く

四五の句を重ねていふやうなことは如何なる場合にも短歌として不適當である。固より短い形式のものである、僅に七字と雖も、一首といふものの上からは大なる部分を占めて居る。隨つて四五の句、或は他に於て重ねていふ時は第二の句は直ちに陳腐になつて力なく響くのである。

此頃から、散文と詩といふものの區別を沒却して居るものがある。獨合點が甚しい

「折に觸れて」

なみだ落ちて懷しむかもこの室にいにしへ人は死に給ひにし（子規十周忌）

二の句に自分の態度の說明があるのは非常に惡い。四五の句に作者の特色は幾分表はされてゐる。

自からをさけすみ果てし心すら此夜はあはれ和みてを居ぬ（同上）

此も露骨になつて居る。

しづかに眼をつむり給ひけむ自づからすべては冷たくなり給ひけむ（同上）

表現の方法に於て未だ足らぬ。

涙ながししひそか事も消ゆるかや昔より秋なれば桔梗は咲きぬ

ききやうのむらさきの花萎む時わが身は愛しとおもふかなしみ

さはすみ果てしこの身も堪へ難くなつかしきことありあはれあはれわが少女

獨合點でわからぬ。亂調の弊に陷つてゐる

栗の實の笑みそむる頃谿越えてかすかなる灯に向ふひとあり

かどはかしに逢へるをとめのうつくしと思ひ通ひて谿越えにけり

うつくしき時代なるかな山賊はもみづる谿にいのち落せし

以上三首ともよく分りかねる歌である。さうして山賊のかどはかしといふものを、一篇の錦繪のやうに見てゐる處に、作者の感情も覗ふことも出來るけれども、か

ういふことは、自己の感情をもつと細かに述べて一篇の散文にした方がどれだけいいか知れない。感情に訴へて周圍はむしろ想像卽ち聯想に任せるといふ韻文の本性を沒却して、作者は事實其物を興味の中心にして作つてゐる。事實を描寫することは斯くの如き短詩形のものの能くする所ではないのである。

死に近き狂人を守るはかなさに己が身すらを愛しとなげけり

自己の態度の說明が勝つてゐる。

つかれつつ目ざめがちなるこの夜ごろ寢よりさめ聞くながれ水かな

作者の尤も得意なる題材を捉へて居るが、未だ到つて居ない。

土のうへの生けるものらの潛むべくあな慌し秋の夜の雨

すべての物に同情のある作者を目前に見ることが出來るが未だ足らない。次の三首皆さうである。

秋のあめ煙りて降ればさ庭べに七面鳥は羽もひろげず

寒ざむとひと夜の雨のふりしかば病める庭鳥をいたはり兼ねつ
ほそほそとこほろぎの音はみちのくの霜ふる國へとほ去りぬらむ

此にも途方もなきことをいふ作者の特色を見る。

「Pluma loci」

ほのかなるものなりければをとめごはほほと笑ひてねむりたるらむ

特色を見る　此歌は作者のものとして非常に注目を値する。少女の陰毛を題材としたものである　作者はかういふことを考へたりすることが非常に嬉しいのである　それで臆面もなく一首を構成して居る　然しながら生理學者が自己の研究の材料として居る様に些も卑猥の感を起させない處に獨特の長所が存在して居るを思ふ

「田螺と彗星」

作者の弊としては、透明なガラスの板にペンキか何かがくつついて居て、幾らご

しごしやつても、拭き取れぬやうな、おれつたい心持の惡い處がある。然しそれは一度成功したものになると、甚不透明な分り兼ねる所に、いふべからざる興趣を有してゐる。此田螺などは其例である。田螺といふものには、幾分の滑稽が含有されてゐる。だからいつもの作者の滑稽の分子が附纏つて居ても、却て自然であり得る。そして此田螺では滑稽がなかなか落付いて重みを持つて居る。

とほき世のかりようびんがのわたくし兒田螺はぬるきみづ戀ひにけり

かりようびんがなどといふ途方もないものを持つて來ても、兎に角に落つきを得てるのが、作者の特長である。ぬるき水も田螺に適切である。わたくし兒などいふところ女好きな作者に獨特の處だらう。

田螺はも春戸の閨田にゐると鳴かねどころりころりと幾つもゐるも

滑稽に聞えるけれどよろし。

わらくずのよごれて散れる水無田に田螺の殼は白くなりけり

よろし。叙景の作として珍らしく成功したもの。

　氣ちがひの面まもりてたまさかは田螺も食べてよるいねにけり

作者の例の弊も出てゐる。狂人と田螺との趣味の上の連絡が不明瞭である。

　赤いろの蓮まろ葉の浮けるとき田螺はのどにみごもりぬらし

特色を見る。女好きの作者はすぐに身ごもるといふやうなことをいふ。此場合は非常にいい。

　味噌うづの田螺たうべて酒のめば我が咽喉佛うれしがり鳴る

かうなると猶よがりに堕して居る。

　南蠻の男かなしと戀ひ生みし田螺にほとけの性ともしかり

これもまだ到ることとほし。

　たましひは幸遠天に入れと彗星の白きひかりに酒たてまつる

彗星の歌は皆失敗である。何故に田螺と一しよに出してあるかが疑問である。

「南蠻男」

一讀再讀分らぬ歌である　自分のいふことが讀者によくわかるやうに心がけることも、作者の大なる義務である

　　南蠻のをとこかなしと抱かれしをだまきの花むらさきのよる

よるの語が不解である

　　瞳青きをとこ悲しと島をとめほのほのとしてみごもりにけり

身ごもるなどいふことも、此作者特有のいひ方である　女好の作者であるから、かういふことになる　しかし惡いといふ意味でない

「をさな妻」

此處になると非常に獨合點の句が多い　作者の主觀の動き方がまだ足らぬ。まだ不熟である　さうしてをさな妻といふものを、どう作者は取扱つて居るのかも不明瞭である　漫然と雜多な歌を交ぜ合せて居るから、肝腎の幼妻といふものが疎

略になるのである。

木のもとに梅はめば酸しをさな妻ひとにさにづらふ時たちにけり

特色を見る。一二の句と其以下とは何等の關係もないやうで居ながら、どうにか連絡がついて居て、此外にはいひやうのないものの樣に感ぜられるも、恐らく作者自身にも、何處に連絡があるかと問はれても、答へに窮することであらうと思ふ。然し作者が此一首を構成する時には、只何となくかういひたくて堪らなかつたであらう。そこに二つの無關係のものをきつと結びつけて放さない力がある。

目を閉づれすなはち見ゆる淡々し光に戀ふるもさみしかるかな

獨合點　難解の譏りがかういふ處から起つて來る

このゆふべ塀にかわけるさび紅(あけ)のべにがらの垂りをうれしみにけり

獨合點、何のためだか分らぬ。

公園に支那のをとめを見るゆゑに幼な妻もつこの身愛(は)しけれ

これもよくわからぬ。

ほこり風立ちてしづまるさみしみを市路ゆきつつかへりみるかも
嘴(はし)あかき小鳥さへこそ飛ぶならめはるばる飛ばは悲しきろかも
水さびゐる細江の面に浮きふふむこの水草のうごかざるかな
汗ばみしかうべを垂れて拔けすぐる公園に今しづけさに會ひぬ
をだまきの咲きし頃よりくれなゐにゆららに落つる太陽(ひ)こそ見にけれ

幼妻に緣のない、關係のない歌である。

細みづにながるる砂の片寄りに靜まるほどのうれひなりけり

餘りに說明である。をさな妻に關係がない。

をさな妻をさなきままにその日より涙ながれて行きにけるかも

其目といふのはをさな妻の目であらうか、どうして涙が流れたのかわからぬ。

「悼堀內卓」

上乘の作でない。寧ろ普通のものである。誰がやつてもこの位のことに過ぎまい。

「折に觸れ」

黑き實の圓らつぶらとひかる實の柿は一本立ちにけるかも

一本といふやうな强い語調が好きである。

本よみて賢くなれと戰場のわが兒は錢を吳れたまひたり

特色を見る。此頃から作者にはしみじみしたものならよかつたのである。

戰場のわが兒より來し錢もちて泣きゐたりけり淚が落ちて

特色を見る。五の句に力乏し。聊か滑稽に墮する嫌もなからず。

桑畑の畑のめぐりに紫蘇生ひてちぎりてをればにほひするかも

四五の句の如きも作者の特色をあらはしかけたものだ。

はるばると母は戰を思ひたまふ桑の木の實は熟みゐたりけり

かういふいひ方が、後々までつづくけれど、今少し前後の連絡を顧慮する必要が

ある。

けふの日は母の邊にゐてくろぐろと熟める桑の實食みにけるかも

かがやける眞夏日のもとたらちねは戰を思ふ桑の實くろし

ここにも桑の實があれど、戰との連絡が不十分である。

(「本よみて」の歌以下六首は)前後のものと全く別途に出て居るのに、作者は前書といふことを疎略にして居るので、折角のものが或點まで興味を殺がれる。殺がれるといふよりも、讀者は作者の心もちを受け入れるのに非常の苦痛を感ずる。前書があれば、すぐに歌の出來た成立がわかつて、さうして更に深く其周圍までも、想像して見ることが出來るのである。

馬屋のべにをだまきの花乏しらにをりをり馬が尾を振りにけり

をだまきの花も動くし、又全體が長閑さをいふには足らぬ。

數學のつもりになりて考へしに五目竝べに勝ちにけるかも

餘りに普通である。然し作者はこんなことにも平氣で力を竭して居る。同時に滑稽な感がある。

入りかかる日の赤きころニコライの側の坂をば下りて來にけり

作者の主觀が甚だ不足である。

さ庭べの八重山吹の一枝ちりしばらく見ねばみな散りにけり

八重山吹が、さう潔くはらりと散るものでないやうだ。

日輪がすでに眞赤になりたれば物干にいでて欠伸せりけり

滑稽滑稽。

ゆふさりてランプともせばひと時は心靜まりて何もせず居り

特色を見る。

「地獄極樂圖」

失敗の作。誰もこんなことをいはぬ内に、たまたま試みたといふならば、幾らか

嶄新といふ所に取るべき點もあるが、全然模倣だから何等の手柄もない。

「螢」

あかときの草の露たまも七いろにかがやきわたり蜻蛉生れけり
あかときの草に生れて蜻蛉はも未だ軟らかみ飛びがてぬかも

この二首に付、いささか作者の特色が表はれかかつて居る。然し未だしきものである。

「折に觸れて」

普通の言ひ方ばかりである。作者の特色と見るべきものがまだ表はされぬ。

病癒えし君がにぎ面の鬚あたり目にし浮びてうれしくてならず（蕨眞氏病癒ゆ）

俗語の厭ふべきもの既にここに胚胎す。

「蟲」

失敗だ。此もしみじみと感じた所がない。机の上の想像などで通り一遍のことを

いつて見ても、到底物にならぬ。

とほ世べの戀のあはれをこほろぎの語り部が夜々つぎかたりけり

語り部。これも變つた語が使つて見たいほんの一とほりごとだけだ。

「雲」

雲は失敗の作である。作者はほのぼのとか、つくづくとか、しみじみとかいふ語を好んで使用するが、日常些末の現象に對してしみじみと感じたものに、絶唱を發見する。しみじみと感ずるだけの餘地のないものは駄目である。

いなびかりふくめる雲のたたずまひ物ほしにのりてつくづくと見つ

作者はつくづくとか、しみじみとかいふ語が好きであるが、其しみじみと見たものでなければ、單なる叙景などは駄目である。凝然と見入る作者をこの歌などが僅にあらはして居る。

「苅しほ」

おなじ叙事叙景にしても、作者の感情が動いて居れば、一の主観の句がなくても人を動かす力は强い。此作には其境に達しないものがおほい。また作者の内生活とは何等の關係なきものがある。

秋のひかり土にしみ照り刈しほに黄ばめる小田を馬が來る見ゆ

一通りのことなり。かくの如き歌とは、世間も作者も既に一時代を劃して居る。

竹おほき山べの村の冬しづみ雪降らなくに寒に入りけり

冬しづみ、作者はどうしても主觀の句を挾まなければ承知しない癖がある。作は一通りのこと。

ふゆの日のうすらに照れば並み竹は寒ざむとして霜しづくすも

さむざむ。もう作者の癖が出てゐる。

窓の外に月照りしかば竹の葉のさやのふる舞あらはれにけり

むしろ陳腐である。

しもの夜のさ夜のくだちに戸を押すや竹群が奥に朱の月みゆ

具備した歌である。然しながら感情の動きが足らぬ。

竹むらの影にむかひて琴ひかば清掻にしも引くべかりけり

集中に存在の要なし、陳腐なり

月あかきもみづる山に小猿ども天つ領巾など欲りしてをらむ

作者の特色を認むべきもの、一二句のつづきはととのはず、只譯もなく面白く覺ゆる歌なり。人の意表に出でたる處に妙味あり

猿の子の目のくりくりを面白み日の入りがたをわがかへるなり

目のくりくりが一首の特色である 然し一方には此句のために何となく滑稽の感を免れず。人の意表に出ること、しみじみとして居ながら滑稽の感を免れざる。

「留守居」

全然失敗の作。

まもりゐの縁の入り日に飛びきたり蠅が手をもむに笑ひけるかも

第一句全體とかけ合はず。五の句餘りに突然にして興うつらず。二三句「入り日に飛びきたり」も餘り說明的なり。

一人して留守居さみしら青光る蠅のあゆみをおもひ無に見し

眞におもひ無なれば、おもひ無といはず。調子の上よりも思なげに聞えず。態度の說明にして感情の表現にあらざればなり。

留守をもるわれの机にえ少女のえ少男の蠅がふらざ舞ふかも

餘りに拵へものなり。留守をもるの句が叉荷が勝ちすぎたり。

秋の日の疊の上に飛びあよむ蠅の行ひ見つつ留守すも

留守居は長き時間を意味す。然るに、蠅の行ひは一時の現象なり。只單に蠅の行ひのみを興がりていふならば、却て留守居の徒然をいふことを得べけれど、何事にも留守々々と斷る故に情うつらぬなり。

入り日さすあかり障子はばら色にうすら匂ひて蠅一つとぶ

此には前數首の弊なけれども、さてさしての特色もなし。

事なくて見ゐる障子に赤とんぼかうべ動かす羽さへふるひ

事なくてがやはり說明で、感情を表現し得て居ない。全體の調子に事なき樣が現はれねば駄目なり

まもりゐるのあかり障子にうつりたる蜻蛉は行きて何も來ぬかも

此一首やや徒然の樣をいひ得た

留守もりて入り日紅けれ紙ふくろ猫に冠せんとおもほえなくに

留守もりてが仇をしてゐる。

「新年の歌」

作者はかういふ殆ど極つた形式的の題材を捉へても、相應にこなして居るだけの特色をもつてゐる。それを近來の傾向と對照して見ると興味がある。

今しいま年の來るとひむがしの八百うつ潮に茜かがよふ

普通の作なり。新年の歌などに「今しいま」などいふ急迫の態は宜しからず。

○高ひかる日の母を戀ひ地の廻り廻り極まりて天新たなり

作者の長所を十分に發揮したる作なり。科學の智識もから應用されれば最上なり。

○年のはの眞日のうるはしくれなゐを高きに上り目蔭して見つ

普通なれど、題が題なれば。

○新裝ふ日の大神の清明日を見まくと集ふ現しもろもろ

頗る新年の體を得て居る

○天明り年のきたるとくだかけの長鳴鶏がみな鳴けるかも

何でもない事なれど、五の句で生きてゐる。作者が物をよく見る長所がここにも現はれてゐる。

○沖つとりかもかもせむと初春にこころ問して見まくたぬしも

體を得てゐる。

○くれなゐの梅はよろしも新たまの年の端に見れば特によろしも

取立てていふ程のこともなく、すらすらと普通な處が題意に叶つてゐる。

「雜歌」

あかときの畑の土のうるほひに散れる桐の花ふみて來にけり

三句までは說明に陷つてゐる。曉の畑の土のしめつた處へ、桐の花の散つた處はいいぞといふ說明なり、五の句がそれほど說明しなければならぬものを受けるには力が足りない。

青桐のしみの廣葉の葉かげよりゆふべの色はひろごりにけり

未だ到らざるものである。

○ひながしのともしび二つこの宵も相寄らなくてふけわたるかな

作者の特色をうかがふべし。作者はかういふことのいひ得る人である。何でもな

いことに深い情緒がこもつて居る

　うつし世は一夏に入りて苔がこもる室の疊に蟻を見しかな

五の句に力が無い。語句の異つたものを見つけて興がつてゐる癖がここに出てゐる。

　荒磯ねに八重寄る波のみだれたちいたぶる中の寂しさ思ふ

作者の特色が發揮されざるものである。失敗の作である。四の句の如き折角强さうなことをいひながら、非常に弱くなつてゐる。

　○秋の夜を灯しづかに搖るる時しみじみわれは耳かきにけり

日常些細のことに深き感情を遇するは、他人の及ばざる處である。作者の特色がうかがはれるものである。

　○ほそほそと蟲啼きたれば壁にもたれ膝に手を組む秋のよるかも

作者の特色がうかがはれるもの。

旅ゆくと井に下り立ちて冷々に口そそぐべの月見ぐさのはな

一の句も全體とかけ合はず。五の句が四の句までの働きと合體せぬ。

「鹽原行」

作者にはよくしみじみといふ語がある。しみじみと考へたり見たり感じたりしなければ到底出來ないのが作者であるらしい。鹽原行は四十首以上もあるが、殆ど皆しみじみした處がない。誰が行つても、容易にうまく出來る筈もないが、特に作者は此時まだ叙景などには不熟であつた様だ。たつた二首それでも作者の作らしいものがある。

晴れ透るあめ路の果てに赤埴根り秋の色はも更け渡りけり

只普通のものである。

小筑波を朝を見しかば白雲の凝れるかかむり動くともせず

これも。

山角にかへり見すれば歩み來し街道筋は細りてはるけし

なし。四五の句僅に作者の特色を見るべきのみ。それも只それだけのこと。他には何も

夕ぐれの川べに立ちて落ちたぎつ流るる水におもひ入りたり

「おもひ入りたり」が少しも利かぬ。

谷川の音をききつつ分け入れば一あしごとに山あざやけし

說明の歌の標本なり。

三千尺の目下の極みかがよへる紅葉のそこに水たぎち見ゆ

少しも深い溪の容子があらはれぬ。

山がはの水のいきほひ大岩にせまりきはまり音とどろくも

折角せまりきはまりなどといつても、其の句に力がない。

もみぢ照りあかるき中に我が心空しくなりてしまし居りけり

うつとりとしてあかるい紅葉の中に立つたといふことだけは承知出來るが、朗かな紅葉のけしきが少しも現はされて居らぬ。

しほ原の湯の出でどころとめ來ればもみぢの赤き處なりけり

此歌却てよろしい。目前のことのみをいはずに、一度作者の心で溶かして、作者のものとして出したからである。されどまだたいしたことはないが、鹽原の歌としては上乘の分ならんか。

まほろしにもの戀ひ來れば山川の鳴る谷際に月滿てりけり

稍作者の特色を發揮しかけた作である。月滿てりけりがきいて居る。

「折に觸れて」

宵あさくひとり居りけりみづひかり蛙ひとつかいかいと鳴くも

宵あさく。留守居の弊なり。

かがまりて見つつかなしもしみじみと水湧き居れば砂うごくかな

作者が物をしみじみ見る癖がある爲か、水の無心に湧くさへ作者にはしみじみとして見えるのである。

　夏晴れのさ庭の木かげ梅の實のつぶらの影もさゆらぎて居り

敍景はだめだ、

　春闌けし山峽の湯にしづ籠り楤の芽食しつつひとを思はず

　馬に乘り湯どころ來つつ白梅のととのふ春にあひにけるかも

ひかぬ。

　ひとり居て卵うでつつたぎる湯にうごく卵を見つつうれしも

作者の特色。まだ滑稽には墮して居らぬ。辛うじて。作者の特色はかういふ處に現はれて居る。他人に眞似は出來ない。他人がやらうとすると輕薄に陷る處を、作者がやれば本氣に聞える。

　干柿を弟の子に呉れ居れば淡々と思ひいづることあり

作者の弊をいささかながら出して居る。

ゆふぐれのほどろ雪路をかうべ垂れ濕れたる靴をはきて行くかも

特色ややあらはれて居る。

世のなかの憂苦もしらぬ女わらはの泣くことはあり涙ながして

作者の特色を見る。

春の風はがらに吹けばひさかたの天の高低に凧が浮べり

四五の句に働がある。然し、敍景は得意ではない。

萱さうの小さき萠を見てをれば胸のあたりがうれしくなりぬ

十分に作者の感情を表現して居ながら、滑稽に墮してゐる。かういふ句調が無暗に眞似されて居るのだから厭になる。

明けがたに近き夜さまのおのづから我心にし偏ふらく思ほゆ

作者でなくてはいひ得ぬやうで居て、獨合點の譏を免れぬ。

八百會のうしほ遠鳴るひむがしのわたつ天明雲くだるなり

古語を用ゐたといふ以外に何もない。

「細り身」

やまひ得て嬉しみ居ればほのほのに心ぐけくもなりて來るかも

作者の特色あり。但し少し足らぬ。かういふことは此作者でなければ、なかなかいひ得ぬ處だけれど、其作者自身の特色を發揮しえたと思ふ四五の句に、却て又作者自身の弊がある。其調子の上からさうなつて來る。多少の厭味があるともいへる。他人は凝つたところを眞似たがる　さうしてもつと厭味になる。

病みぬればほのほのとしてあり經たる和世のすがた悲しみにけり

作者はいひ方、いひ方といふよりも、言葉などに妙にひねくつたいひ方をしたがる一種の癖がある。和世の姿などもさうである。作者の工夫には相違ないが、耳ざはりである。

　いはれ無に涙がちなるこのごろを事更ぶともひと云ふらむか

他人の思はくなどを氣にして居ると、感情はうすくなつてしまふ。萬葉集などにもかういふいひ方がおほいが、自分はいつもいい心持で見ない。

　閉づる日の熱き涙のはふり落ちはふり落ちつつあきらめ兼ねつ

何故とも讀者にはわからぬ。

　病み惚けおとろへにたれさ庭べに夕雨ふれば嬉しくきこゆ

如何にも病衰の人の心をいひあらはして居る　暑い季節といふと、殊にさうである　本當に到達してはゐないが、特色あるもの

　熱落ちておとろへ出で來もこのごろの日八日夜八夜は現しからなく

微妙な感情を表現するとなると、聊かでも耳ざはりの語など有つては成らぬ。

　○老にやせ頬にのびし細ひげを手ぐさにしつつさ夜ふけにけり

特色を見る　殆ど作者の上乗の作といふと、かういふ微細の點にある。

おのが身し愛しければかほそ身をあはれがりつつ飯食しにけり

特色を發揮しようとして、少し臭い。

病みて臥すわが枕べに弟妹らがこより花火をして呉れにけり

いささか見るべし。

○とめどなく物思ひ居ればさ庭べに未だいはけなく蟋蟀鳴くも

特色として見る。四の句に同情がある。

さ庭べに何の蟲ども鉦うちて乞ひのむがごとほそほそと鳴くも

四の句の如きは作者の働がその弊に陷らぬものである。

神無月の土の小床にほそほそと亡びのうたを蟲鳴きにけり

四の句は厭だ。

よひよひの露冷えまさる遠空をこほろぎの子らは死にて行くらむ

遠空をなどいふ、少し縁の離れた句を平氣でいふのも此作者の特色である。

「分病室」

隣室(りんしつ)に人は死ねどもひたぶるに帚(はは)ぐさの實(み)食ひたかりけり

帚草の實といふものがどういふのか、只では分らぬ。時々作者は分らぬことを平氣でいふのである。其突梯な處に興味を感ずるけれど、前後の關係が趣味の上から理解されなければ困る。

熱おちてわれは日ねもす夜もすがら稚な兒のごと物を思へり

ある點までいひおほせたもの。　（古泉千樫抄出）

千樫曰。この評語のほかに、赤、あかあか、女、かなし、あはれ、などいふやうの言葉があると、その歌の上に其言葉だけを抄出してある。試みにそれを數へて見る。長塚氏はこの評語中「赤光」の作者は女好きであると幾度もいつて居る。「赤光」中、女といふ字は三十五、少女といふ字が十五ある。その他、をさな妻、みごもる、孕む、つるむ、惚れ、わたくし兒、ほと、といふやうな言葉があれば一々皆抄出してある。

また、赤といふ字が百二十餘、光が五十餘、黑が二十ばかり、くろぐろが六、かなしが約八十、あは

れが三十、うれへが十、なげく、なげかひが十五、ほのぼの、ほのかが約二十、いとほしむが十餘りある。

それから、しんしん、しみじみ、つくづく、ほろほろ、ひつたり、ほそほそ、さむざむ、しとしと、ひつそり、うつうつといふやうな言葉も一々抄出してある。

（大正九年發行。アララギ第十三卷第一・第二・第三・第四號所載）

病牀日記

病牀日記（一）　（中型手帳）

自明治四十四年十一月二十一日　至大正元年十二月六日
自大正二年三月十四日　至大正二年四月二十五日

明治四十四年

十一月廿一日より木村へ通ふ

廿八日

夜一回吸入

廿九日

朝吸入。朝少時、熱六度七分。三時、六度八分。五時、六度六分。八時、六度六

分。夜中、六度五分。

卅日

朝七時、六度七分。二時、六度五分。（歩行後直チニ）。五時、六度七分。六時、六度六分

十二月一日

朝七時、六度五分。一時、六度七分。（歩行シ來リシ後直チニ）。七時半、六度六分　八時半、同。

二日

朝七時、六度七分。十二時、同。三時、同。七時、六度六分。

三日

朝七時、六度七分。三時半、七度。七時半、六度四分。

四日

朝、六度六分。十二時半、六度五分。

五日

朝、六度五分。十二時、六度五分。（此處二字不明）根岸。根岸養生院へ午後四時入院　晩　鯖煮付　菜浸物少許、但し硬し。漬物澤庵の刻みたるものへ醤油を注ぐ。箸をつけず。附添看護婦丸山はな。白山前町四〇。奈良看護婦會。同モト。電話番町二九九二番。此日快晴

六日

白粥。牛乳二合。倉田龍次郎氏へ手紙。朝菜汁一杯、菜は硬きこと前夜と同じ。晝魚のフライ　半分開いたる儘骨もとらぬ。形の小さくなるを嫌ふなり。キャベツは硬し　里芋の鉢　但芋六個。晩。切身照燒（鮪ならん）。豆腐菜の吸物一杯。二、五、新聞紙　三、半紙一帖。二五、附添車賃。今日より牛乳二合。（計四〇、五）

七日

白粥牛乳一合。刺身一皿。朝、牛乳一合、パン半斤に改む。二、五、新聞。七、手拭。三、五、花紙。昼。小魚煮付。鉢、隠元少許。漬物食ふべからず。此日より午飯毎に刺身一皿を添ふることにす。門間春雄、久保田俊彦氏へ手紙。中村不折氏を訪問す。順次郎来る。(計一三)

八日

朝、牛乳一合、卵一ッ。岡君来る。坂本岡埜の菓子。三八、木綿類。二、五、新聞。七五、水菓子。六五、空也。(計二、〇三)。第一回手術。

九日

寺田憲氏よりひしほ、新小説、手紙。七二、玉川堂。七、ココア。九、電車。(計八八)

十日

四、八〇、看護婦。二五、七五（編者曰、脱遺あるか）。四〇、刺身。二、切手。一、二四、洋食。左千夫、茂吉、中村憲吉君來る。順次郎來る。諸道具持參。（計三二、二一）。倉田龍次郎氏より手紙。胡桃澤より葉書。

十一日

一五、理髪。三、湯。五、牛乳。木村芳雨君來る。（計二三）。夜雨より葉書。

十二日

四五、正岡家へ土産　四六、（編者曰、此處空白）。（計九一）。とし子より手紙。河東を訪ふ。

十三日

飯田氏來る　順次郎來る。小布施より廣島來り、肉漬物とどく。久保田より手紙。
八〇、卵。二二、石鹼。一五、茶菓。（計一、一七）

十四日

五〇、團子。正岡家を訪ふ。（計五〇）

十五日

寺田憲氏より書狀　同氏よりひしほ、書籍三册。岡君來る。第二回手術。

十六日

三〇、鳳梨。一五、ネーブル。五〇、牛。（計九五）

十七日

母、順次郎來る　三、湯。七、西洋洗濯。（計一〇）。不折を訪ふ。

十八日

小布施より肉、カステラ、漬物屆く。碧梧桐を訪ふ。（計ナシ）

十九日

母午後より來る。同伊藤君。不折を訪ふ。（計ナシ）

廿　日

四〇、七五、病院へ拂。八、〇〇、看護婦日當。一、〇〇、卵。一〇、牡蠣。五、酢。三、湯。理髮、一〇。二、二〇、刺身代。二〇、電報料。五〇、牛肉。九、電車。厩橋へ行く。（計五三、〇二）。門間より手紙。

廿一日

蕨氏より來狀。（此處十二字不明）芳雨を訪ふ。格堂より手紙。一四、砂糖。四、八百屋。（計一八）

廿二日

渡邊剛三氏宅より手紙。四五、梅仙墨。二〇、茶菓。二、燕。二、洗濯石鹼。第三回手術。（計六九）

廿三日

三五、硯。三、鉛筆。八〇、湖沼の研究。一五、西洋洗濯。伊藤君來る。岡君來る。一〇、牡蠣。岡君梅月の菓子を持ち來る。伊藤君鶫の麴漬。（計一、四三）

廿四日

三、湯。一五、理髮。六〇、牛肉。五〇、芝居。黑田照子來訪、會はず。寢卷を見舞に贈らる。順次郎來る。(一、二八)

廿五日

岩田實來る。九、切手。一五、食鹽。一、五、蕪。(計二五、五)

廿六日

黑田呂惠氏來訪。一、〇〇、卵。四、玉葱。五〇、バタ。(計一、五四)

廿七日

小布施より葡萄の液汁一瓶。同蕪酢漬、鳥肉、蜜柑十個。石塚峻來訪。

廿八日

伊藤君來る。一六、小包料。一一、上草履。一、五、齒磨粉。(計二八、五)

廿九日

古泉幾太郎君來る、會はず。一八、電車切符。五〇、扇。二三、卷紙。一、四六、五、榛原。一〇、トメ鋲。一、〇〇、橋田病院診察料。二、五、輪飾。五、牛乳。一〇、燒芋。(計三、六五)

卅日

五三、一〇、病院へ支拂。順次郎來る、切餅、牛佃煮、雀燒。(計五三、一〇)

卅一日

夜、六度七分、脈搏七六。朝、六度五分、八四。夜、六、七、七四、二、二〇、剃身代。二九、新聞紙代。一五、斬髮。三、湯。九、電車。七、〇〇、マント。五〇、牛肉。一〇、豆粉。一〇、砂糖。一、五、蕪。卵、八七、五。八、醬油。三五、日かげかつら。堤定次郎氏父子來訪、會はず。一〇、洗濯屋。五、牛乳。(計一一、八九)、宅より雜記帳屆く。

明治四十五年

一月一日

堤氏父子を西黒門町中島松次郎氏宅に訪ふ。寺田憲氏より雜誌新年號贈らる。

二日

○記載事項なし。

三日

午前木村芳雨來訪。午後猪瀬宏、菓子折を持ちて來訪。岡君虎屋の菓子を持ちて年賀。順次郎夜來る、蜜柑を贈らる。一〇、牡蠣。(計一〇)

四日

三、湯。一〇、顏剃。伊藤君來る。(計一三)

五日

石塚峻來る。一五、齒料。二五、鳥肉。(計四〇)

六日

五、博物館。五〇、カステーラ。三〇、子持栗。一五、齒料。(計一、〇〇)

七日

一〇、齒科。五、酢。三、梅干。一〇、牡蠣。六〇、牛肉。(計八八)。順次郎入院

八日

三、湯。柳澤氏歸京、土產物贈らる。夜平福君來訪、土產を贈らる。(計一三)。第四回手術。

九日

一〇、齒科。一五、理髮。九、電車。順次郎を橋田病院に訪ふ。(計三四)

十日

四八、五〇、病院拂。二、一三、刺身。武井準氏、横瀨夜雨氏代として見舞に來り青柳の菓子。

正岡先生北堂來訪、土產物。一〇、齒科。一、〇〇、卵。六〇、肉。六、葱頭（計五二、三九）

十一日

三、湯、（計三）

十二日

一八、電車。一、〇〇、橋田病院診察料。三〇、蜜柑。一、新聞。順次郎を訪ふ。四、花紙。（計一、五三）

十三日

川仲子新井善二郎氏來訪、卵一折。一〇、洗濯料。一〇、梅干。潮音より白柿一箱。一〇、牡蠣。（計三〇）

十四日

宅より寢巻小包ニテとどく。五〇、雞肉。一〇、砂糖。三、葱。三、湯。四〇、鼠骨へ蜜柑。（計一、〇六）

十五日

二七、文章世界。一〇、髭剃。三〇、葉書廿枚。一二、切手四枚。一二、小包料。（計九一）。古泉幾太郎氏來訪。第五回手術。

十六日

渡邊叔母剛三君と來訪、銚子水戸屋の菓子。九〇、切手帳。五二、花籠三冊。四〇、美術新報。三〇、深呼吸(?)。三、湯。中村不折氏來訪、菓子折。七、半紙二帖。五、齒磨。（計二、二七）

十七日

小布施より肉、葱頭等贈らる。木村芳雨氏、岡三郎氏來訪、歡談、夜九時に歸る。

五〇、酒五合。七五、刺身三八前。（計一、二二五）

十八日

順次郎を訪ふ。野々村氏に病室にて會ふ。卵かすていら。二、新聞。二五、刺身。（計二七）

十九日

三、湯。一二、小包料。九、電車。二〇、刺身。九、醬油。二〇、齒科。（計七三）

廿日

一、一五、刺身代。四一、六〇、病院拂。八、〇〇、看護婦日當。一五、刺身。一〇、牡蠣。一〇、梅干。四、湯。夜雨集とどく。（計五一、一四）

廿一日

一〇、齒科。中山椿之助氏來訪、岡野の菓子。石塚峻君來る。寺田憲氏より書籍二册贈らる。一〇、齒科。一〇、牡蠣。（計三〇）。夜伊藤君來る。平福君の畫を獲。

廿二日

一〇、歯科。一五、理髪。二〇、刺身。齋藤茂吉君來る。（計四五）

廿三日

一〇、牡蠣。（計一〇）

廿四日

七〇、牛肉。二〇、刺身。（計九〇）。岩田叔父來る、折一つ。

廿五日

一〇、牡蠣。一五、刺身。四、湯。（計二九）

廿六日

二〇、刺身。夜、父來る。第六回手術。一、〇〇〇、附添。（計一、〇二〇）。鼠骨君來る、菓子一折。

廿七日

九、電車。一、〇〇、橋田病院診察料。五〇、林檎。五〇、廣島へ。源五郎叔父より殿中一折。順次郎を訪ふ。夜に入りて高濱虚子君來る。一五、原稿紙。（計二、二四）

廿八日

四、湯。二〇、刺身（計二四）

廿九日

一五、理髮　五五、鷄肉百目。二五、刺身。一〇、（此處一字不明）佃煮。（計一、〇五）

卅日

木村芳雨氏來訪、うに一瓶。三、葱。一五、刺身。（計一八）

卅一日

二五、齒科。一〇、牡蠣　四二、三〇、病院拂。八、味淋一合。九、電車。齋藤隆三君來訪、果物一籃。（計四二、八二）。順次郎ヲ訪フ。

二月一日

一八、電車。齒科醫志村へ行ク。順次郎ヲ訪フ。一五、刺身。(計三三)。志村。

二　日

三　日

一〇、洗濯料。二〇、刺身。二、切手。(計三二)

四　日　日曜

巖直次郎君より鱧漬一箱、小久保喜七氏より南鍋町風月堂カステイラ一折。小堀貢君來る。塚原、柳澤君來る。九、電車。二、新聞。二七、鷄肉。塚原へ行く。森田草平氏を訪ふ。(計三八)

五　日

一八、電車。一、五〇、塚原診察料。四、湯。一五、理髪。順次郎を訪ふ。此日より志

村の治療。不在中伊藤君來る。（計一、八七）

六日

九、電車。一、三〇、扇一本。一五、刺身。九、醬油。八九、足駄。伊藤君蕨君來る。蕨君果物一籃。不折君來る。志村。（計二、六三）

七日

九、電車。一〇、牡蠣。一〇、梅干。（計二九）。志村。碧梧桐を訪ふ。

八日

九、電車。志村。二〇、刺身。父來る。（計二九）

九日

九、電車。二〇、菓物。伊藤景一君來る。柳澤君來る。一五、刺身。（計四四）

十日

一八、電車。二三、橋善。七五、榛原。一、三〇、扇子。四三、七五、病院拂。七五、下

駄。四、湯。一〇、粽。夜鼠骨氏を訪ふ。（計四七、一〇）

十一日　日曜

一〇、理髪。六六、晝餐二人分。一八、電車。五二、空也草紙。岡君來る、名譽饅頭一折。齋藤君を訪ふ。平福君を訪ふ。扇子三本揮毫。夜カフエー、プランタンへ行く。（計一、四六）

十二日

九、電車。七、ちり紙。一五、刺身。（計三一）

十三日

九、電車。八〇、牛肉。三、古雜誌一冊。一〇、洗濯料。一〇、砂糖。（計一、一二）。木村芳雨氏來り銅印を贈らる。夜岡君來る。寺田氏より（此處一字不明）

十四日

午前父來る。一二、手巾。順次郎を訪ふ。一八、電車。二〇、刺身。五、顏剃。（計

五五）

十五日

九、電車。二〇、刺身。寺田君より新小說。（計二一九）

十六日

九、電車。三〇、萬年筆。二〇、刺身。一八、文章世界。笠間叔父より見舞として佐城平四折。（計七七）

十七日

二〇、ちらし。一八、電車。一、六〇、扇子。柳澤君來る。外池達之助君來る。國民新聞社に平福君を訪ふ。二〇、刺身。（計二、一八）

十八日

四、湯。一八、電車。一六、白樺展覽會。二七、足袋。順次郎を訪ふ。二〇、刺身。（計六五）

十九日

二七、電車。六〇、ちらし三つ。五〇、筆代。國民新聞社に平福君を訪ふ。岡君を訪ふ。樋渡氏より見舞。順次郎今日退院の筈。（計一、三七）

廿日

退院。七十八日目。四三、〇〇、病院拂　朝松村修平氏來訪。三五、一月分新聞代。九、電車。二五、蜜柑不折へ。四五、葉書卅枚。二、〇〇、看護婦二人へ心づけ。二二、那須館へ車賃。五〇、看護婦車賃（計四六、八六）。那須館へ移る　二、〇〇、茶料　五〇、番頭へ。三〇、切手十枚　三〇、女中。一一、牛乳（計三、二二）

廿一日

四〇、木村治療代。九、電車。四、牛乳。三〇、晝餐。（計八三）

廿二日

九、電車。一、五四、三越にてリボン。三四、空也草紙。五〇、林檎。三〇、女中へ。

(計二、七六)

廿三日

二〇、女中へ。一八、電車。禿氏春陽堂番頭來り土出版のことを取極む。五〇、養生院診察料。三五、洗濯料。三〇、新聞代。(計一、五三)

廿四日

九、電車。九〇、棕五把。五〇、萬年筆。夏目、池邊、森田氏を訪ふ。一二、理髮。(計一、六一)

廿五日　日曜日

一八、電車。八〇、シウクリーム。三、新聞。二〇、風呂番。(計一、二一)。高田へ行く、堤氏に逢ふ。永樂病院に黑田氏を訪ふ、松田善四郎氏に逢ふ。

廿六日

一八、電車。一八、文章世界。二七、飴。三〇、女中へ。一、乞丐。(計九四)。岡君を

訪ふ。土出版に就いて謝儀を贈る。

廿七日

一八、電車。五〇、養生院。二〇、蜜柑。五〇、林檎蜜柑。胡桃澤君より見舞品。夜左千夫、千樫、本衞君來る。一二、鮨。五〇、萬年筆。五、髭。（計二、〇五）

廿八日

一八、電車。寺田氏午前來訪。午後伊藤君、寺田君三人會合。夜柳澤不在へ來る。（計一八）

廿九日

九、電車。三、切手。二、五、新聞。二五、果物。一〇、子持栗。小瀬、柳澤君來る。三〇、女中。（計七九、五）

三月一日

一八、電車。二五、晝餐。一、新聞。（計四四）

二日

九、電車。一、一〇、帽子。四〇、赤本書。二四、空也草紙。二、五、新聞。一九、電、新聞。三五、カフエー。柳澤と有樂座へ行く滿員、歌舞伎座を覗く。（計二、一五、五）

三日

二七、電車。五二、空也草紙。四、五、新聞。一、五〇、有樂座。三、切手。七五、晩餐。柳澤、古泉兩君と共に有樂座活動寫眞を見る。（計三、一一、五）

四日

四〇、養生院治療代。岡君來る。古泉君來る。春陽堂番頭來る。（計四〇）

五日

二〇、理髮。一八、電車。一、〇八、粽。八〇、空也。高田へ行く。國民新聞社に平福

君を訪ふ、不逢。一一、郵税。一七、六八、宿拂。(計二〇、〇五)

六日

一二、美術協會。六、五、博物館。(計一八、五)

七日

歸鄉。一五、番頭へ。九六、汽車賃。四、五、新聞。一二、牛乳。三五、饅。一、馬車茶代。二、同。三五、馬車賃。八〇、大坂屋。

八日

一〇、理髮。馬場(此處二字不明)訪問。

九日

梅の枝剪定。

十日

三二、蕎麥。下妻へ行く。

十一日

梅の剪定。

十二日

十三日

一〇、理髪。

十六日

五、（此處一字不明）。二〇、車夫。四、新聞。九六、汽車賃。三〇、急行劵。三五、鰻丼。六、牛乳。三〇、正岡家へ土産。三〇、名刺。五五、果物。五〇、診察料。平福君來る。（計三、六一）

十七日

一八、電車。一五、葉書。順次郎ヲ訪フ。夏目氏ヲ訪ふ。齋藤茂吉君ヲ訪フ。（計三三）

十八日

五、髭。九、電。二、三〇、シャツ上下。一、〇〇、橋田病院。四、牛乳。一一、展覧會。四〇、診察。四、牛。二〇、まかた(?)迄。(計四、三三)

十九日

五、三四、那須館。五、電車。四〇、シウクリーム。四、赤帽。二五、辨當。六。牛乳。(計六、一四)。靜岡泊。

廿日

七、五、新聞。一二、牛乳。一五、辨當。(計三四、五)。名古屋泊。

廿一日

三、五、新聞。一五、辨當。一〇、鍵屋が辻。五、月ヶ瀬途上。三〇、人力車賃。七〇、梅花糖。三六、五、繪葉書。一〇、繪葉書。三〇、切手。二〇、女中へ。(計二、三〇)

廿二日

一、〇〇、月ヶ瀬宿料。六〇、馬車。一、途中茶料。九、繪葉書。一、山葵の花莖。五、茶店。一〇、笠置案内料。二一、繪葉書。二四、鮎味噌。四〇、梨酒。五、笠置絕頂茶店。二錢草履。一五、笠置停車場にてすし卯。六、笠置ニテ梨一ッ。一〇〇、龜利茶料。（計三、九九）

廿三日

五〇、番頭へ。二、手荷物保管料。五、三十三間堂。六六、同繪葉書。三、博物館。大學病院に松田君ヲ訪ヒ草間君ニ會フ。四〇、芋棒。五〇、番頭へ。一五、硼酸。三、切手。（計二、三四）

廿四日

二〇、女中。一二、理髮。八、電。八、電。五、インキ。一二、蜜柑。一〇、女中。（計七五）。河井長藏氏を訪ふ。

廿五日

大學病院にて診察を受く。一〇、電車。三〇、蜜柑ネーブル。九、切手。二八、男山往復電車賃。五、同所茶料。四、新聞。二〇、繪葉書。一五、硯。四、五、齒磨。九、封緘葉書。三〇、切手十枚。四五、切手卅枚。二、男山内觀料。（計二、一一、五）

廿六日

三、七〇、鍋利四泊ノ拂。三〇、大學病院マデ車賃。三錢、印紙。八、五、紙。四、五、草履。一五、スリッパ。一、新聞。（計四、三二）。此日入院。

廿七日

手術を受く。草間君、松田君來る。

廿八日

六〇、バナナ、ネーブル。七、茶碗。六、顏剃。（計七三）。谷田善太郎氏來る。草間君宿直。

廿九日

草間君來る。

卅日

四〇、菓子。草間君より菓子を贈らる。美術倶樂部を見る。（計四〇）

卅一日

六、〇〇、入院料。六八、賄。一、〇〇、鳥打帽子。二八、電車。一二、繪葉書。松田君と山陽の山紫水明處を見る。祇園の櫻を見る。二〇、ネーブル。（計七、三八）

四月一日

終日蟄居。

二日

一〇、新古美術展覽會。五、動物園。三、電車。六九、洋食。三〇、蜜柑。五、貸本料。九、繪葉書。（計一、三一）

三日

一五、西洋洗濯。四五、封緘葉書、切手。一二、理髮。四〇、シウ。一〇、繪葉書。（計一、一二二）

四日

四四、洋食。一二、下鴨にて。（計五六）

五日

一〇、銀閣寺見料。一〇、同繪葉書五枚。八、シウ。三五、卵。四五、蜜柑一箱。三七、洋食（計一、四五）。福田靜處を訪ふ。

六日

一〇、青楓展覽會。五、五、新古美術展覽會。三、電。四八、シウ。三七、夕餐。五、智恩院　祇園の櫻まだ散らず僅に蕾もあり。（計一、一二、五）。中岫家より見舞として五圓を贈らる。

七日

一六、二條四條堀間電車往復。二〇、嵐山往復。五、花より嵯峨にて。五、渡船。五、天龍寺。一〇、繪葉書。三七、洋食。（計九七）。嵐山へ行く。

八日

五、岡崎展覽會。五、動物園。一〇、動物園繪葉書。四〇、洋食。（計六〇）。智恩院說法。

九日

一〇、電車。三、豐公社。三、博物館。五、刷物。二五、ネーブル。二四、小包料。（計六〇）

十日

五一、賄へ。一〇、〇〇、入院料。一〇、〇〇、手術料。二〇、車代。二〇、按摩。一五、藥（計二一、〇六）。此日退院、十六日目。夕方東山大佛近傍散步。

十一日

三〇、含嗽料。一五、風邪の藥。昨日發熱今日殆んど就褥。（計三五）

十二日

一、五三、吉野に往復劵。二〇、辨當。五、牛乳。五、蜜柑。五五、六田まで人車。二五、繪葉書。二、新聞。二〇、女中。（計二、八五）。吉野一泊。

十三日

一五、水分神社守。二〇、雲井茶屋。四、新聞。一四、五、繪葉書。三〇、切手廿枚。（計八三、五）

十四日

一、八二、吉野旅宿拂。三、一二、鮨屋。一〇、女中。五、東坂蜜柑。二五、馬車。一二、吉野口。一〇、牛乳二瓶。二、新聞。歸京。（計三、八八）

十五日

一〇、電車。一〇、治療券。三七、晝食。一五、ロダン展覽會。四、牛乳。一、五、葉書。此日病院へ行く。和辻博士の診察を受く。二五、電報料。一一、五、洗濯料。（計一、一四）

十六日

一〇、電車。二八、洋食。六三、岡田式靜坐法。三二、五、ネーブル。四、牛乳。一二、理髮。

十七日

五、電車。一、〇二、藥價。三七、洋食。五、展覽會。五、妙法院。一二、同所繪葉書。五、豐公廟。二、新聞。大學病院にて笠間博士の診察を受く。（計一、七三）

十八日

一〇、電車。一〇、治療券。四〇、シウ。二〇、女中。（計八〇）

十九日

一二、電車。五、大佛。十五、方廣寺繪葉書。四七、洋食。宅より小包にて乗車劵とどく。一五、切手。四、牛乳。三六、小包料。七、八六、龜利拂。（計九、二〇）

廿日

一七、五、洗濯料。二〇、車。八、五、新聞。二五、辨當。二三、岡山公園。三八、洋食。京を立つて廣島。六、梨子。（計一、二八）

廿一日

一、〇〇、廣島宿料。一、二二、五、地圖。一〇、車代。一九、岩國電車。四、新聞。一五、錦帶橋繪葉書。三〇、洋食。六、ラムネ。一二、牛乳。錦帶橋ヲ見ル。（計三、〇八）。馬關へ夜つく。

廿二日

八〇、宿拂。二〇、女中へ。五、（此處一字不明）僧。一二、ネーブル、門司ニテ。四、五、新聞。三五、博多東公園中食。一〇、博多停車場へ電車往復。（一、六六、五）

廿三日

一〇、電車。八一、洋食。三、新聞。西公園ヲ見ル。二〇、女中へ。一五、理髮。（計一、四九）。二〇、ネーブル。

廿四日

一〇、〇〇、久保氏への謝儀。一五、切手五枚。一五、封緘葉書。（計一〇、三〇）

廿五日

三、四五、大坂屋拂。五、五、新聞。三〇、熊本中食。五、清正公寶物見料。五、本妙寺停留場。一一、本妙寺より水前寺まで輕便鐵道。五、水前寺。七、水前寺より輕便。一五、地圖。（計四、二八、五）

廿六日

八〇、熊本研屋拂。四、新聞。二五、人吉中食。一〇、同牛乳。六、ザボン。（計一、三五）

廿七日

一、〇〇、宿料。五三、かごしまより山川まで汽船賃。三、汽船茶菓。三、艀。一〇、山川にて。（計一、六九）

廿八日

開聞登山。六五、川尻宿料。五〇、開聞案内。六〇、鹿兒島まで汽船賃。二〇、女中。三八、下駄。二二、柑橘。四二、繪葉書。三、艀。三一三、（三三の誤？）足袋。（計三、三三）

廿九日

一、二〇、鹿兒島宿料。三三、中食。五五、文旦砂糖漬。一〇、カルカン。六、繪葉書。三〇、切手廿枚。七、顏剃。二五、安樂まで馬車賃。一、〇〇、驗温器。（計三、八八）

卅日

一〇、接摩。八〇、宿料。一〇、女中へ洗濯料。（計一、〇〇）

五月一日

一、〇〇、新湯拂。一〇、安樂茶代。二五、馬車賃。三五、國府中食。二、新聞。一〇、牛乳。二五、辨當。（計二、〇七）

二日

五一、宇土宿料。一、〇五、三角の際崎より長崎行汽船。二〇、際崎辨當茶代。三、艀。五、長崎上陸棧橋通行券。四、船中菓子。二、新聞。（計一、九〇）

三日

二二、蜜柑。四、新聞。一八、理髮。六、繪葉書。一、六一、長崎カステーラ。三七、足袋。六、雜誌。（計二、四四）

四日

一、七九、長崎宿料。二〇、車賃。一〇、女中。一、二〇、中津マデ汽車賃。五、新聞。

三〇、中津中食。二、渡錢　三〇、住ノ江マデ車錢。（計三、九六）

五日

住ノ江滯在。

六日

三五、車賃。一一、佐賀行切符。四〇、川上まで車代。四〇、川上中食。三、渡鐵橋錢。二、新聞。六、馬車。二、保管料（計一、三九）

七日

一、〇〇、佐賀宿料。二七、鳥栖まで切符。二、新聞。七、鐵道馬車。卅錢、太宰府中食　五、梅が枝餅　七、繪葉書　二四、觀世音寺繪葉書二組。二六、同寺へ。一五、都府樓跡繪葉書。一〇、繪葉書。五、電車。（計二、六八）

八日

久保氏の診察を受く。三〇、切手。四、新聞。（計三四）。夜武井氏と博多市中散歩。

九日

八、香椎切符。一、五〇、妙見中食。三、箱崎ラムネ。一〇、繪葉書。四、新聞。一五、チリ紙。四、鳴門蜜柑　七、顔剃。（計二、一一）

十日

三〇、切手。四、〇〇、宿拂。六、新聞。五、電車。一七、汽車賃。四、夏蜜柑。（計四、六二）。武藏溫泉に來る。

十一日

二、五、草履。一、一五、宿拂。一二、繪葉書。三、夏蜜柑。（計一、三二、五）。天拜山に登る。

十二日

一、〇〇、大丸拂。四、新聞。一〇、坂中食。三、ラムネ。一二、觀（世脱？）音寺繪葉書。一一、太宰府繪葉書。二、保管料。（計一、四二）

十三日

九〇、武藏拂。一七、汽車賃。四六、洋食。四、新聞。一五、切手。（計一、七二）

十四日

一五、理髮。五、繪葉書。二、七四、卵索麵。三〇、女中へ。四、新聞。八、蜜柑。（計三、三六）

十五日

一、五〇、卵索麵。七、繪葉書。三〇、切手。一五、葉書。九、電車。四、新聞。（計二、一五）

十六日

三、切手。二四、小包料。六、牛乳。二、新聞。七、繪葉書。一、下足。六、ザボン。（計四九）

十七日

六、朱欒。一六、地圖。一、下足。四、新聞。（計二七）

十八日

六、六五、大坂屋拂。三、三五、呉服。二、湯。（計一〇、〇二）

十九日

二、湯。四、新聞。一八、朱欒。（計二四）

廿日

一〇、繪葉書。二〇、文章世界。二、湯。（計三二）

廿一日

三〇、切手十枚。二〇、朱欒。一〇、水族館。三、電車。二、湯。（計六五）

廿二日

燒く。二〇、卯索麵。二、湯。（計二二）

廿三日

二〇、志賀島汽船。三〇、志賀島中食。二、草履。二、渡船。二四、汽車。（計七八）

廿四日

二、湯。一、五、新聞。（計三、五）

廿五日

一五、理髪。二六、下駄。二、湯。（計三三）。此夜久保博士の好意にて博多節をきく。

廿六日

一七、二日市マデ汽車賃。二二、中食。三〇、繪葉書。六、切手。四〇、二日市夕食。
一七、汽車。（計一、三二）

廿七日

六、電車。四五、切手　三〇、枇杷。（計八一）

廿八日

二、湯　四、筥崎見世物。 二、三五、卵素麵。（計二、四一）

廿九日

二五、薬代。 二、湯。 二八、小包料。（計五五）

卅日

七、剃。 二、湯。（計九）

卅一日

四〇、寒暖計。 一八、薬。 一二、〇三五、宿料一切。 一、五、新聞。 五一、羽犬塚マデ汽車賃。 一〇、牛乳。 三、螢籠。（計一三、二七）

六月一日

一、二〇、宿料。 二〇、女中。 二二、繪葉書。 一〇、硼酸六グラム。 三、新聞。（計一、九一）

二日

一、二〇、宿料。二〇、車賃。五一、汽車賃。五、電車。三、五、新聞。二、湯。一六、果物。(計二、一七、五)

三日

六〇、〇〇、入ル。一〇、枇杷。二、湯。一、〇〇、卵索麺カステーラ。二〇、女中へ。(計一、三二)

四日

五二、小包料。二、湯。一〇、枇杷。一〇、瓜掛。(計七四)

五日

一五、理髪。三〇、翠雲華(?)。一一、枇杷夏橙。一一、電車今川橋より。二、湯。(計六八)

六日

五、電車。九、雜餉隈マデ汽車。二〇、國分寺。一〇、關屋。一七、博多マデ汽車。三、五、新聞。二、湯。（計六六、五）

七日

二、湯。一、五、新聞。二一、枇杷。（計二四、五）

八日

二、湯。（計二）

九日

二、湯。七、顏剃。二一、バナナ。（計三〇）。久保夫人ヲ訪フ。

十日

一〇、硼酸。一〇、枇杷。五〇、東光院。二、湯。（計七二）

十一日

二一、電車。七〇、芥屋往復切符。三五、繪葉書切手。一〇、渡海船。二五、午餐。

二、湯。五、繪葉書。一三、果物。（計一、八二）

十二日

一〇、枇杷。二、湯　六五、卵索麪。三、七〇、反物。一五、さらし。三、五、新聞。一二、小包料。（計四、六七、五）

十三日

一八、吉塚より二日市マデ。九六、二日市惠蘇宿間軌道往復。二五、惠蘇宿中食。五〇、普門院。一〇、圓淸寺。三〇、南淋寺。四、五、繪葉書三枚。（計一、三三、五）

十四日

三、切手二枚。八〇、武藏宿料　一八、吉塚マデ汽車賃。二、湯。（計一、〇三）

十五日

十六日

一五、理髮。二、湯。四、繪葉書。（計二一）

十七日

五五、懐中電燈　二五、下駄。一〇、硼酸。二〇、卯索麵。三〇、切手。二、湯。五、繪葉書。（計一、四七）

十八日

二、湯。一〇、枇杷。（計一二）

十九日

二、湯。一〇、藥。（計一二）

廿日

一五、東光院。一〇、枇杷。一〇、湯札。八、博多座。（計四三）

廿一日

七、顔剃。二〇、卯索麵。（計二七）

廿二日

四〇、桃。一九、枇杷。（計五九）

廿三日

三、博多築港まで電車。一、八二、嚴原まで乘船賃。一〇、艀。二〇、藥。一〇、硼酸。（計二、二五）

廿四日

一〇、嚴原艀。二〇、女中へ。二〇、繪葉書。（計五〇）

廿五日

三五、樽濱まで馬車。四、ラムネ。一〇、竹敷へ。四〇、竹敷中食。二〇、渡船。六、ぼた餅二つラムネ一。四、夏蜜柑。三〇、繪葉書。三〇、馬車。（計一、七九）

廿六日

一〇、嚴原にてカス卷二つ。三〇、切手卄枚。四、〇八、嚴原拂。一、三一、勝本まで汽船。二〇、番頭へ。一〇、艀。一〇、勝本艀。（計六、一九）

廿七日

三〇、勝本宿料。三〇、馬車。一二、繪葉書。(計七二)

廿八日

六〇、湯本拂。一〇、女中へ。二、山桃二合。三、龜石にて夏橙。五、同所サイダー。

五〇、鄕ノ浦中食。一二、馬車。(計一、五二)

廿九日

二、五、瀨戸にて胡瓜一本。六、同所中食。二五、繪葉書。六、切手四枚。一、二〇、

勝本宿料 一五、女中へ。一、三二、乘船費。一〇、艀。(計三、一五、五)

卅日

一〇、博多艀。一五、理髮。三、電車。一、二九、新聞代。二、山桃。(計一、五九)

七月一日

五、電車。一七、博多より二日市　一〇、觀世音寺。一二、天滿宮茶店。一二、天滿宮守。一七、二日市より博多まで　二、新聞。七、繪葉書。三、五、夏橙。（計八七、五）

二　日

二〇、文章世界七月號。一、六五、雞卵素麵。三、五、夏橙。（一、八八、五）

三　日

一五、切手十枚。二四、小包料。三、夏橙。（計四二）

四　日

博多をたつ。二、山桃　六、切手。二、一五、洋食。二四、七六、宿料　二、〇〇、宿茶料。三〇、小包料。（計二九、二九）

五　日

二〇、番頭へ。一、一二、中津まで汽車　一〇、牛乳　二五、辨當　一五、中津茶代。

一五、同番頭。八〇、中津より中廣(?)迄馬車。二、耶馬溪立場茶代。(計二、八九)

六日

四五、中津宿料。五、柿坂まで荷物運賃。五、槻木にて茶代菓子。三、豐前坊にて力餅茶代。(計五八)

七日

二五、彥山案內。三〇、切手廿枚。七〇、(此處一字不明)。(計一、二五)

八日

五、髯剃。(計五)

九日

三〇、女中。(計三〇)

十日

五、〇〇、彥山拂。五、豐前坊。二〇、槻木辨當。六、ケモト茶店。二八、柿坂まで馬

車賃。（計五、四九）

十一日

二、山移草鞋。二〇、シギラ中食。五〇、鴫良にて捲柿二ツ。五、鹿倉にて。（計七七）

十二日

一、二五、捲柿。七〇、山移宿料。二〇、茶料。二、草鞋。八〇、柿坂拂。二五、靑まで馬車。一〇、羅漢寺案内。一〇、羅漢寺寶物見料。一〇、三旗亭茶代。五、靑立場。三、半紙。二〇、女中。（計三、八〇）

十三日

四五、靑宿料。一三、サイダー。九〇、捲柿三。三五、馬車。二、立場茶代。五、馬車屋。七五、繪葉書五組。（計二、六五）

十四日

一、四〇、中津宿拂。二四、宇佐まで汽車賃。一〇、馬車。二〇、人力車。二〇、神宮。二〇、中食。一、〇〇、大樂寺。五〇、汽車賃。二、荷物預賃。九、ミルクホール。一〇、牛乳一壜。(計四、〇五)

十五日

一五、理髮。三〇、卵。一四、刺身。五、牛乳。三、新聞閱覽料。五、桃。三〇、人性(?)見料。一、三五、柏木デアスターゼ。九、五、紙。(計二、四六、五)

十六日

八、桃二〇。一〇、奈良漬。八、ミルクホール。三〇、雞卵。二〇、平野水。四、新聞(計八〇)

十七日

四四、小包料。三〇、切手。二〇、藥。二〇、牛肉。一二、砂糖。二〇、番頭。一〇、傳授本。(計一、五六)

十八日

二六、大分往復電車賃。三、ラムネ。二〇、刺身。一五、繪葉書。六、ミルクホール。三、桃。一〇、女中。（計八三）

十九日

四、八二、濱脇拂。一三、洗濯料。一〇、番頭。三〇、ボーイ。五、赤帽。一五、高濱道後間汽車賃。五〇、道後茶代。二〇、女中。（計六、二五）

廿日

五、松山道後間電車往復。（計五）

廿一日

一三、麻裏。四、飴湯。（計一七）

廿二日

五、松山往復切符。一一、中食。一〇、西瓜。二五、松山高濱切符。二三、高濱道後。

（計七四）

廿三日

二七、繪葉書。六、松の辻電車。一、九六、五色素麵。五、五四、道後鮒屋拂。二〇、女中。五、赤帽。四、五、切手。一五、高濱迄切符。二〇、女中。（計七、四五、五）

廿四日

一、五〇、太山寺保存會寄附。三、桃。一一、古町まで切符。二、松山城。九、三津まで電車。一、五、切手。（計一、七六、五）

廿五日

二、五〇、高濱拂。一〇、女中。五、赤帽。二〇、ボーイ。五、新聞。五〇、宇品中食。二〇、同女中。五、赤帽。三六、宮島行。二〇、宮島女中。（計四、二一）

廿六日

一九、繪葉書。六、桃。一、下足。一〇、宮島宮殿案内料。五、寶物拜觀料。一、辻占。

六九、繪葉書。八、林檎。六、林檎。五、ラムネ。(計一、三〇)

廿七日

二、一四、嚴島大根屋拂。一〇、赤帽。五、新聞。三〇、ボーイ。一二、尾の道理髮。二〇、女中。二、半紙。(計二、九三)

廿八日

五一、尾道大三島間汽船劵。五、船中茶菓子。一、〇〇、大山祇神社保存會へ。(一、五六)

廿九日

七五、宮ノ浦拂。五一、尾ノ道までもどり汽船。四、船中茶菓子。三、尾ノ道西瓜。三、千見寺ラムネ。一五、尾ノ道繪葉書。一、二五、尾ノ道拂。一〇、女中。三〇、ボーイ。五、赤帽。(計三、二一)

卅日

五〇、高松宿料。一七、車賃。(計六七)

卅一日

三九、切手。(計三九)

八月一日

一五、栗林公園。一一、鼻緒。(計二六)

二日

三七、志度往復電車。一〇、五、屋島途中。八五、屋島頂上中食。三、壇ノ浦ラムネ。

四、同桃。三、志度ラムネ。二、今橋飴湯。(計一、四六、五)

三日

五、顏剃。九、西瓜。(計一四)

四日

一八、鴨川まで汽車賃。二、新聞。六、神谷にて飴湯。一八、高松まで。（計四四）

五日

四七、高松琴平間。二、新聞。六〇、琴平中食。五、牛乳。一、草履。二〇、土産。二五、招猫 四七、琴平より高松。（計二、〇七）

六日

ナシ

七日

二七、國分まで往復。二、國分寺鐘縁起。二〇、時計修繕料。（計四九）

八日

三〇、高松赤十字病院診察料。二五、桃。五六、下駄。一五、繪葉書。（計一、二六）

九日

一〇、散髪料。（計一〇）

十日

一、九七、高松大坂間汽車切符。二、新聞。一五、辨當。三五、書寫まで人力車。五、西瓜。一〇、時間表。書寫茶店。八、白甜瓜二ツ。二五、人力車。一〇、茶料。(計三、二〇)

十一日

一、二〇、加古川宿拂。三〇、刀田山。三、尾上鐘。一二、刀田山繪葉書。六、加古川繪葉書。五、電車。一五、シトロン。二、新聞。四、甘酒。五(此處二字不明)。二五、辨當。六、牛乳。七三、和歌山切符。二五、和歌山紀三井寺往復。三、飴湯。(計三、一四)

十二日

一、四〇、和歌浦宿拂。二、和歌山天主。二、新聞。四二、和歌山高野口。四、粉河にて西瓜。五、粉河寺拜觀料。五、粉河にて牛乳。二八、高野口より椎出まで人力車。

一〇、椎出にて茶料。三、五、橋錢。一六、五、途中卯桃。五〇、荷物持案内。二、不動前茶料。(計三、一〇)

十三日

一、二五、高野山珠數。二〇、繪葉書。一、五、線香。五、金剛峰寺内覽料。(計一、五一、五)

十四日

三〇、切手卄枚。六、繪葉書。五、金堂内覽料。五、洗濯料。(計四六)

十五日

二、草履。六、繪葉書。三、〇〇、繪葉書帳。二〇、不動守。一〇、羊羹。(計三、三二)

十六日

五、〇〇、高野山。五、下山途中梨子。二、五、橋錢。六、切手。二五、椎出より高野口まで人力車。六、停車場手荷物預料。一七、高野口より五條まで切符。八、西瓜。

二〇、辨當。四一、五、法隆寺切符。（計六、三一）

十七日

五、髭剃。九二、法隆寺大（此處一字不明）屋拂。一、四九、法隆寺繪葉書等。三二、昼食。五、甜瓜二本。二〇、法輪寺見料。二、飴湯。（計二、九七）

十八日

三〇、興福寺。三〇、牛乳食パン。七、西瓜。四、甘酒。三〇、女中。一〇、博物館。（計一、一一）

十九日

一〇、牛乳。一六、大佛前茶店。三、博物館。一〇、洗濯料。三〇、切手。三、西瓜。（計七二）

廿日

三、ラムネ　五〇、淨瑠璃寺。四、甜瓜二本。（計五七）

廿一日

四、九六、奈良小刀屋拂。九、人力車。二九、奈良より高田驛。一五、當麻繪葉書。六、牛乳。一〇、法隆寺人力車。四、新聞。六、牛乳。六、高田驛西瓜。六、同牛乳。六、高田より畝傍　二〇。畝火館まで人力車。（計五、九三）

廿二日

八〇、畝火館拂。一〇、久米寺。二〇、岡寺。一〇、橘寺。九、甜瓜二本。二〇、岡中食。

廿三日

一、〇〇、櫻井驛拂。二二、奈良まで切符。二、新聞。六〇、西京往復車錢。二〇、唐招提寺　二〇、藥師寺　一二、牛乳。三、博物館　二〇、辨當。一二、理髮。六、一時預料。一〇、牛乳。二、飴湯。二〇、女中。（計三、〇八）

廿四日

二、〃〃、奈良拂。一三、車。四四、京都まで切符。四、新聞。四、荷物預料。五、荷物配達料。三、京都電車。(計二、七八)

廿五日

三、四條小橋マデ。三、熊野まで。八、電車。一〇、薬。(計二一四)

廿六日

三、切手。三、四條西洞院まで電車。一〇、嵐山まで電車。一三、嵯峨龜岡間汽車。三、五、ラムネ。三、五、梨。二五、穴太寺開帳。二四、龜岡より京。二、五、新聞。三、電車。二〇、女中。(計一、一〇、五)

廿七日

二〇、女中。三、博物館。五、智積院(?)。六、封緘葉書。一〇、牛乳。一〇、梨子。(計五四)

廿八日

三、七條まで電車。二、新聞。九、山科まで切符。三〇、三寳院。二、上醍醐途上不動　六〇、上醍醐。一〇、法界寺。二四、法界寺繪葉書二組。二、西瓜。四、梨子。五、電車。（計一、五一）

廿九日

二、新聞。一二、木幡まで切符。六五、宇治中食。三、宇治坂錢。四、五、切手。五〇鳳凰堂　一、八五、茶　三、葉書。一七、宇治より汽車。五、電車。（計二、九六、五）

卅日

五、ヒゲソリ。一五、切手十枚。三、博物館。一〇、梨子。一六、西陣行電車往復。一、飴湯。（計三九）

卅一日

五〇、羊羮。五、電車。四、新聞。一七、宇治行切符。一〇、電車。一〇、繪葉書。一、二〇、五條易斷所。三〇、番頭。（計二、四六）

九月一日

七、五〇、龜利拂。六〇、洗濯料。一五、卵子。一八、サイダー二本。九〇、洗張。五〇、茶料。一五、三井寺繪葉書。四、新聞。一八、馬場まで切符。二五、辨當。一五、車賃。（計一〇、六九）

二日

九、（此處一字不明）山まで汽船。二五、辨當。六、牛乳。二一、大津より石部間切符。六、荷物預料。三六、善水寺繪葉書。一、〇〇、車賃。（計二、〇三）

三日

一、〇〇、石部拂。一五、車賃。四四、石部河瀬間切符。三〇、金剛輪寺。一、〇〇、車賃。一四、河瀬米原間切符。三、切手。一〇、理髮。（計三、一六）

四日

二〇、米原（此處三字不明）間。七、新聞。三〇、坂口飴。六一、木下大垣間。（計一、一八）

五日

九、大垣穂積間切符。二、保管料。（計一一）

六日

七日

八日

九日

一〇、荷物保管料。（計一〇）

十日

二、新聞。五、岐阜電報（話？）。三二、名古屋まで切符。三〇、女中。（計六九）

十一日

六、電車。四、理髪。一、五〇、宿料。（計一、六〇）

十二日

十三日

一〇、荷物預料。二、七九、名古屋新橋間切符。一三、岡崎電車往復切符。一〇、胃散。二〇、女中。（計三、三二）

十四日

八〇、岡崎宿料。二五、辨當。六、牛乳。三、新聞。（計一、一四）

十五日

五〇、急行劵。五、新聞。六、牛乳。一、六〇、山北鮎鮨十箱。一一、山北牛乳。九、電車。七八、下駄。（計二、一九）

十六日

一八、電車。一、新聞。二〇、手巾。四、牛乳。一五、葉書。（計五八）

十七日

九、電車。一二、理髪。（計二一）

十八日

九、電車。五〇、もなか。一、〇〇、夕食。（計一、五九）

十九日

五、新聞。六五、神崎へ土産。九五、郡まで切符。（計一、六五）

廿日

九五、上野まで切符。四、新聞。一、〇〇、茶料。三〇、女中。（計二、二九）

廿一日

一〇、電車。（計一〇）

廿二日

廿三日

二〇、番頭　一〇、切手　五、髭剃。四五、空也　齋藤隆三氏宅へ。九、電車　一、新聞（計九〇）

廿四日

九、電車　一〇、理髪　一八、博物館外展覽會。一五、博物館繪葉書。一四、足袋

廿五日

九、一五、那須館拂　一〇、車夫　一〇、小者　五、赤帽　八七、買物。九六、下館マデ切符　四、五、新聞　一、〇〇、小山鮎鮨　一二、牛乳　四五、馬車。一二、下妻大寶間人力車。

廿六日

二七、五、繪葉書　三〇、下妻國生間人力車。八七、柏屋藥品。

廿七日

一〇、梨。

廿八日

五、理髪。

廿九日

三四、下妻中食。九八、胃散。一五、葉書。二〇、人力車。

卅日

一〇、梨。

十月三日

一〇、理髪。

五日

二四、切手。

六日

三五、下妻中食。七〇、下駄。二五、唾壺。五五、チアスターゼ。二四、石鹸。三〇、名刺。二、コルク。一二、馬車。（計二、五三）

十六日

一〇、理髪。

廿日

三〇、菓子。三〇、樟腦。（計六〇）

廿三日

五、理髪。（計五）

廿四日

五〇、切手葉書。（計五〇）

廿五日

五〇、長塚三郎へ酒肴料。（計五〇）

廿六日

一、二〇、柏木ヂアスターゼ。一〇、ナフタリン。一〇、薬匙。三〇、繪葉書。五二、
五、豚肉百五十匁（計二、二二、五）

卅日

三五、豚。一〇、柿。（計四五）

十一月一日

一〇、理髪。（計一〇）

二日

四〇、樽柿。（計四〇）

三日

三七、紺足袋。九、切手。二五、人力車。（計七一）

四日

二〇、柿。

五日

一〇、理髪。

六日

二、渡船場　二六、五、車夫　九六、上野まで切符。五、新聞。三、五、小山にて蕎麥。二〇、蒸氣辨當。一二、大宮牛乳。一〇、那須舘まで人力車。（計一、七五）

七日

一、〇〇、下駄。一二、文展。六、博物館。三〇、同中食。九、電車。二、芝公園展進（覽?）會。一八、文展繪葉書。四〇、養生院。一、〇〇、茶料。一五、切手。二〇、女中。（計三、五二）

八日

二〇、女中。一八、電車。四〇、養生院。一、〇〇〇、橋田病院。一三、錦町牛乳 四五、秀眞へ手土産。一二、電車。一〇、拓博。一三、手巾。（二、七一）

九日

九、電 六、汽船 五五、三橋堂。六、封緘葉書。

十日

一一、美術協會。四〇、養生院。二〇、番頭。一〇、理髮。

十一日

九、電車。三、新聞。

十二日

五五、空也、夏目先生。九、電。（計六四）

十三日

二、新聞。三一、文展　一〇、拓博。九、電。五〇、養生院。（計一、〇二）

十四日

九、電。五〇、養生院、六、讀賣展覽會。五〇、番頭。一、〇〇、風月堂。五〇、番頭。（計二、六五）

十五日

一、八〇、喉頭注射器。九、電。五〇、子持栗。二〇、女中。九、葉書。

廿三日

五、顏剃。

廿四日

一二、書留、寺田憲へ。一、一〇、松皮（？）煎餅。一四、黒子（？）。一〇、車夫。九六、上野まで切符。二〇、賓餅。四、新聞。一二、牛乳。三〇、女中。二〇、番頭。一二、さらし。

廿五日

一、新聞。四、電。九、電車。一、〇〇、茶料。（計一、一四）

廿六日

二三、拓博。六五、人三（此處一字不明）。五〇、北海道土産。四、電。二〇、臺灣茶。二〇、すし。二三、菓子。四〇、神尾醫院。

廿七日

一八、電。一、〇〇、橋田病院診察料。一九、ミルクホール。四〇、富有柿。九、電。四、電。

廿八日

四、電。四、新聞。三三、上野中食。九、電。六、博物館。一〇、理髪。（計六六）

廿九日

九、電。五、新聞。

卅日

四、電。三、新聞　九、電。四六、容也、伊藤へ。

十二月一日

四、電。二、新聞。九、電。一、〇〇、静坐謝儀。（計一、一五

二日

一二、讀賣新聞社展覧會。一八、電車。

三日

五、田端電車。二、新聞。

四日

九、電。一、新聞。

五日

二〇、女中。九、電。六三、中食。三、五五、袖地。一、新聞。二、〇〇、洋袴下。一、五〇、襦衣二枚。七五、青木堂。三〇、女中。

六日

九、電。二四、中食　五一、風月堂。二〇、半紙さらし。

大正二年

三月十四日

二〇、番頭。九、電。四、新橋一時預。一八、ミルクホール。二、七〇、風月堂土産物二、夕刊。六、牛乳。一〇、旅行案内。七、〇八、博多まで切符。一六、鮎鮨（計一〇、六三）他ニ六、博物館。八、七五、那須館払　（通計一九、四四）

十五日

四、新聞。一二、牛乳。五、天王寺電車往復。一二、住吉神社往復。二五、辨當。五、蜜柑。(計六三)

十六日

一、〇〇、岡山宿料。一八、岡山西大寺間往復。一三、長岡觀音間往復。二〇、觀音志納　五、青山梅林。四二、岡山中食。一二、牛乳。七、五、鐘繪葉書。(計一、一七、五)

十七日

一、五〇、廣島宿料。二〇、牛田不動院繪葉書志納。四、新聞。一八、牛乳。二〇、辨當。一〇、蜜柑。(計二、二二)

十八日

九〇、長府宿料。七〇、長府長生館。七、長府一宮間切符。一一、住吉神社繪葉書緣起。二五、下關中食。二〇、赤間田島間。宗像神社。二、新聞。(計二、二五)

十九日

六〇、田島宿料。一〇、宗像神社絵葉書。二〇、同社志納。五、赤間迄馬車。二、湯銭。二〇、理髪。（計一、一七）

廿日

二〇、長宮院志納。二、湯。一〇、小僧へ。一〇、蜜柑。（計四二）

廿一日

一、〇〇、茶料。三〇、女中へ。二一、風邪薬含嗽料。二、新聞。（計一、五三）

廿二日

九、ネーブル。二、湯。

廿三日

一八、吉塚二日市間。一七、二日市博多間。二、新聞。七、顔剃。一五、観（世脱？）音寺絵葉書。一〇、湯札。（計六九）

廿四日

一二、小包料。（計一二）

廿五日

七、朱欒。（計七）

廿六日

四六、志賀島往復汽船。一〇、志賀神社。一〇、蜜柑。（計六六）

廿七日

一七、鼻緒。一〇、胃散。（計二七）

廿八日

三六、吉塚二日市往復。九四、二日市惠蘇宿往復。一〇、普門院。二、新聞。四五、切手。（計一、八七）

廿九日

九、蜜柑。（計九）

卅日

二、八〇、雞卵素麵。五、電車。二〇、農業世界。二〇、理髪。（計三、二二五）

卅一日

三〇、切手二十枚。一九、切符。三〇、觀世音寺へ土産。八、太宰府軌道。二〇、女中へ。（計一、〇七）

四月一日

三、半紙。五、繪葉書五枚。一、〇〇、太宰府泉屋宿料。一八、二日市吉塚間。一二、小包料。（一、三三）

二日

三、往復葉書。（計三）

三日

二〇、宇佐行汽車賃　四、雑餉隈顔剃。六、同うどん。二、湯錢。二四、小包料。一九、三〇、平野旅館拂　（一九、八六）

四日

八八、博多下關間切符。一〇、小僧。一一、下關門司間。四〇、下關中食。三〇、下關國分寺。（一、七九）

五日

四〇、ボーイ。一四、宮島大願寺繪葉書。五、茶菓。二〇、光明院志納。一五、（此處一字不明）山二ヶ所茶料　二七、繪葉書。二〇、女中。（一、五一）

六日

四〇、ボーイ。六、竹原ネーブル。五、同饂飩。五、宇品にて新聞。（五六）

七日

二〇、ボーイ。六、門司ネーブル。一一、下關門司間。二八、下關。二、新聞。一六、

赤間宮繪葉書。二一、下關繪葉書。二〇、女中。（一、一六）

八日

一、五〇、下關宿料。一〇、渡船。六、門司驛手荷物保管料。一〇、赤帽。（一、七六）

九日

五〇、ボーイ。四、赤帽。一五、車。七七、三ノ宮より京都行切符。二、新聞。五、手荷物配達。五、電車。（一、五八）

十日

三、切手。三、電車　三、博物館。三六、京極中食。一二、博物館繪畫一覽。二、八坂塔　三〇、切手廿枚　五〇、番頭。（一、三九）

十一日

一〇、散髪　四一、大阪まで電車。五、新聞。一四、大阪市電。五、住吉電車。一一、中食　四一、京まで電車　二五、女中。一五、葉書。（一、六七）

十二日

二五、女中。一、〇〇、茶料。九、電車。七、嵐山電車。三五、嵐山中食。五、渡船。二五、繪葉書。一〇、嵐山より京電車。二〇、女中。(二、三一)

十三日

二七、紺足袋。九、電往復。五、岡崎新古美術展覽會。九、電車。二、新聞。四〇、奈良行切符。(九二)

十四日

一、〇〇、奈良宿料。三、奈良博物館。一、二〇、特別觀覽劵。七、〇〇、博物館寫眞版。三五、ミルクホール。二〇、新藥師寺。四四、切符。五、電車。五、顏剃。(一〇、二四)

十五日

五〇、羊羹。二、新聞。二〇、福知山辨當。五、牛乳。二〇、女中。(九七)

十六日

一、〇〇、安來宿料。六、雲樹寺繪葉書。六、同。（一、一二）

十七日

一一、大社神寶拜觀。一〇、繪葉書。一〇、神符。三〇、守。（六八）

十八日

一、〇〇、杵築宿料。二、二四、出雲若布小包料等。三五、（此處二字不明）まで車。一

一、鰐淵寺。二七、今市中食。二、新聞。二〇、鳥取辨當。六、同牛乳。四〇、下駄。

（四、六五）

十九日

五〇、香住宿料。五〇、大乘寺。三、新聞。一〇、牛乳。一五、辨當。五、電車。（一、

三三）

廿日

九、電車。三、博物館。一、〇〇、寫眞版。二、新聞。一七、五條橋より橋本まで。一、五、山崎渡し。六〇、山崎向日町間車代。二〇、向日町茶料。一五、向日町停車場迄車賃。一四、向日町京都間二等切符。五、電車。二〇、女中。（二、六三、五）

廿一日

五、電車。二、〇〇、博物館特別觀覽。五〇、寫眞版。二一、中食。一〇、理髮。六、半紙。（二、九二）

廿二日

七、五六、鎚利拂。二〇、番頭。一〇、停車場まで車代。一、六〇、七條駿河屋羊羹。二、新聞。九、大津電車。一三、三井寺行車代。二五、大津辨當。五、大津牛乳。一六、大津繪葉書。四、蜜柑二つ。一、長良川渡錢。

廿三日

五、五、新聞。二〇、岐阜鮎鮨。六、牛乳。（三一、五）

廿四日

五、新聞。二、荷物保管料。一二、配達料。九、電。一、〇〇、橋田病院。一、二〇、下駄。一六、山北鮎鮨。九、電車。一、一〇、見舞品。一三、理髪。八〇、スッポンスープ。一〇、使賃。（四、八六）

廿五日

二〇、女中。二〇、使賃。

病牀日記〔二〕（小型手帳）

自大正二年十一月二十四日　至大正三年十一月十六日

大正元年十一月廿四日。小石川下瀬氏（數字不明）岡田氏（數字不明）の敎授を受く。爾來滿一年怠慢にして成績（數字不明）見るべからず。本年春より身體に（數字不明）を感ず（數字不明）八度に昇る。明日より力めて實行せんとして書を（以下數字不明）

（編者曰、「大正元年十一月廿四日」云々以下は感想を記せりと見ゆ。）

大正二年

十一月廿四日

晴。六時十五分起床 朝六、七。午后七、六。夕七、二。昨夜イヒチォールヲ塗リシタメ冷水浴ヲ休ム。四十分間靜坐。夜休。此日地目變換に就き役場員と共に終日步行。夜胃痛。

廿五日

八時起床 朝七、三。正午六、八。二時過七、五。夜七、六。午後一時靜坐三十分餘。

廿六日

(編者曰、此處判讀不明)(かつ子見舞)靜坐ヲ怠ル。

廿七日

(同)行く。同怠。

廿八日

(同)同怠。順次郎來ル。

廿九日

（同）夜三十分。二回。

卅日

（同）行く。夜十五分。

十二月一日

中岫へ。夜光明寺に宿り三十分。

二日

夜三十分。

三日

夜二十分。

四日

夜三十分。

五　日

夜三十分。

六　日

青木輸兒君來る。八度二分。寒し。夜三十分。

七　日

七、一。六、五。七、九。七、六。夜三十五分。

八　日

七、〇。七、九。夜七、八。玄米食。夜三十分。

九　日

六、八。一時半七、一。四時七、七。夜七、九。午后三十分。夜三十分。二回一時間。

十　日

六時四十分起床。午前三十分。午後十五分。夜二十五分。三回一時間十分。八椀。

十一日

七時起床。晝七、〇。夕七、四。夜七、五。夜三十分。八椀。

十二日

六時四十分起床。朝七、一。九時半六、七。正午七、三。夕八、三。夜八、〇。午前三十五分。夜十五分。八椀。二回四十五分。

十三日

八時。朝七、一。十時半六、六。二時七、七。夕七、九。夜七、九。夜三十分。八椀。

十四日

朝七、二。一時半七、四。夕八、三。夜三十五分。八椀。

十五日

朝七、一。正午七、〇。夕七、九。夜七、八。午前三十五分。夜三十分。六椀。二回一時間。

十六日

朝七、一。夕七、八。夜八、〇。午后三十分。七椀。（此處二字不明）捨松氏來ル。母與田へ行ク。便通二。

十七日

朝六、八。夕七、八。夜八、〇。八時起床。午後三十分。六椀。章魚ヲ三食共ニ一皿ヅツ。昨夜來積雪。便通二。昨日ヨリ午後臥床ノ際行火ヲ用ヰ、然ルニ熱ノ高度ニ達スベキ夕ヨリ夜ニ於テ二度ヲ增ス。明日行火ヲ廢セント思フ。發熱ノ度モ以前ト甚ダシク相違ナキガ如クナレドモ、時ニ八度ヲ越ユルコトアル爲カ、身體ノ疲勞ヲ感ズ。頭惡シ。感冒モ加ハリ居ルカト思フ。昨朝ヨリ冷水浴ヲ湯殿ニ改ム。數日來咽喉假ニ痛シ。人々皆風氣咽喉モ冒サレタリトイヒ合フヲ聞ク。一昨夜來咳嗽ス。昨日アタリヨリ咳少シク出ヅ。肋骨ノ痛ミ既ニ十日ニ至ル未ダシ。

十八日

七時十五分起床、朝七、〇　一時七、二。夕八、二　入浴後七、八　午後十分　今日三時より四時の間まで端坐セシニ平日の如く惡寒を感ぜず　然るに熱度を檢すればハ度二分に達せり　朝來氣分宜しからず　遂に靜坐を怠る。實は午後一回試みしに僅に十分弱にして堪へ得ず。食事も朝一回にして晝休。夜おそく二椀、一日僅に四椀　夜體量を檢す　纔に十一貫四百匁　實に一貫匁より一貫二百匁を減じたるなり　便通なし

十九日

朝七、二　午前中六、一　正午六、三。一時六、七。二時七、三。三時半七、八。夜八、〇　便一　午前四十五分　午後三十分。夜三十五分。三回一時間五十分。六椀。

廿日

一時七、一　夕八、〇　八、二　便一　午前三十分。夕食前十五分　夕食後三十分。三回一時間十五分　四椀。

廿一日

朝七、〇。七時半起床。夕七、五。夜七、六。便一。午前三十五分。午後二十分。朝蘇二十五分。朝休。五椀。三回一時間廿分。

廿二日

朝七、四。七、三。一時七、一。夕七、九。夜七、六。便一。夜四十分。昨日終日臥床セズ。昨夜安眠を得ず。其爲カ朝熱高シ。晝二椀。夜三椀。五椀。

廿三日

三時七度六分。上京神尾ノ診察ヲ受ク。披裂軟骨ニ米粒の半位ナル潰瘍あり。今手術スルハ寒クシテ宜シカラズ。故ニ平塚ノ海岸アタリニ行キテ潰瘍ノ部分擴大セザレバ、徐ロニ春暖ヲ待チ、約一ヶ月神尾ニ入院シテ手術ヲ受クルコト。兎ニ角二週日間平塚ニテ經過ヲ見、患部擴大スル容子ナラバ直チニ手術スルコト。手術ハ只一回ニテ十分トイフ。夜順次郎宅ニテ三十五分。

廿四日

一時七、七。夕七、九。便通ナシ。午前四十五分。井村君ニ診察ヲ受ク。

廿五日

七、二。正午七、六。夕八、四。便一。靜坐ヲ怠ル。神尾ニ手術ヲ受クル約ヲナス。

廿六日

朝七、〇。午前六、六。二時半七、八。四時七、九。夜八、四。午前約五十分。爲ニ空腹ヲ覺エタリ。夕十分。夜廿分。三回一時間廿分。神尾ヘ入院三時過。前夜多量ニ冷水ヲ嚥ミタル爲メカ夜明ニ下痢アリ。然シナガラ午前五十分ノ靜坐ノ效アリ。九時朝食。十二時午餐ニテ而カモウマク、夜六時過ノ夕食待遠クシテ殆ド堪ヘ難カリキ。八、四ノ熱ニテ如此ハ珍ラシトイフベシ。「三〇」葉書。

廿七日

朝七、一。三時七、六。四時半同。六時七、七。午前二十分。夜二十五分。二回四

十五分。岡君午前十時過來訪。菓子富士の雪一折持參、泡雪羹なり。三時まで話して歸る。氣分少しく宜しからず。三時過手術を受く。器械宜しからざる爲め潰瘍の一端を摘みしに過ぎず。更に明日を期す。廿四日井村學士の診察を受くるまで痛かりし肋骨今日手術の際、コカイン多く氣管に入りしらしく咳嗽甚だしかりしが、更に痛みを感ぜず。既に一兩日然るが如し。今夜肋骨を指にて押すにかすかに痛みを覺ゆるに過ぎず。今日朝未明の頃便通を催したりしが、八時近く起床せしになし。昨日下痢の後故ならん。今日只眠きが如く而かも眠られず。下痢發熱等の爲め疲勞せしならんか。午前の靜坐も漸くにして廿分に達せり。昨夜より下熱劑を用う。今日三時まで話して聊か氣分すぐれざるに遂に七、七なるは其爲なるべし。

廿八日

朝七、一。一時半七、一。二時同。四時半七、二。六時半七、三。八時七、四。午後

卅分。便通一。「七〇」鰻。今日正午手術せんとせしにコカイン效を奏せず、中止す。神尾曰く、喉頭の手術に於て二回の失策は始めてなり。三四日過ぎてコカイン奏效を見て手術することとなる。

廿九日

朝六、九。十時七、一强。三時半七、五。五時同。七時七、六。八時同。朝食前十五分。午前食前十五分、十五分。夕食前十五分、十分。夜廿分。六回一時間半。何故か氣分少しよろしからず。晝間眠る。而して寒し。小布施より肉果物を贈らる。便通一。

卅日

夕七、一。十時七、三。二時半七、四。四時七、六。五時半七、四。七時七、二。八時半七、三。朝廿分。午前廿分。夜卅分。三回一時間十分。便通。昨夜右を下に寐れば肋骨にまだ痛みあるを感ず。午前手術成功。手術後却て患部の痛みなし。手

術前は一日傷けたる箇所に疼痛あり、稍苦しみたり。宅より鐵道小荷物とどく。八、原稿紙。二〇、石鹸入。六、石鹸。一七、實業之日本。一四、インキ半紙二帖花紙。一五、理髪。計八〇。

卅一日

朝七、一。二時七、三。三時同　四時半同　六時半同弱。七時半七、〇。朝廿分。午後卅五分。夜廿五分。三回一時間廿分。午前中眠る。午睡の爲か頭重し。一、二〇、入院料。五〇、手術料。三〇、客膳　二、〇〇、女中二人へ。計一九、三〇、〇〇。入院後通計二二、一〇、〇〇。（編者曰、點の打方不整）

大正三年

一月一日

朝七、〇。一時七、一。四時七、三。五時七、一。朝四十分。午后卅分。夜廿分。三回一時間半。便通一。朝食雑煮三杯。餅六箇。刺身一皿。其他。九時半なり。午餐一時半。夕食五時半。いささか苦しかりき。然しながら朝は空腹に堪へざる程なりき。

二日

正午七、五。二時半七、六。四時同。八時同。通。朝廿五分。午前廿分。夜三十分。三回一時間十五分。朝食九時。終りて齋藤茂吉君來る。心地惡し。今日晝より復た玄米食、卅一日夕より白米食なりき。夕方よりぽかつく。此日南風强し。いささか風邪の氣味もありと思はる。

三日

七時六、八。十一時七、三。一時七、〇。五時六、五。八時七、一。十一時半同。朝卅分。夕卅五分。二回一時間五分。通。此日より上京後怠り居たる冷水浴を始む。

整四郎より書留の手紙とどく。順次郎來る。武井氏の畫到着す。夜中村憲吉君來り十一時まで話し行く。爲めに夜の靜坐を廢す。九椀。

四日

朝六、五。九時半七、三強。一時七、六。二時七、一。五時七、三強。朝卅分、夜食前廿五分。卅分。一時間廿五分。朝手術後吐くが如き血痰を吐く、昨夜話過ぎたる爲か。一昨年七月一回。昨年十一月一回。合せて三回。但し前二回は錆びたるが如き濃厚なるもの混じ、今回のは泡立ちたる痰に淡紅色を呈す。よく見れば血線なり。終日頭痛し。昨夜騷がしく夜半より能く睡眠せざるが爲なるべし。又夜なかも惡かりしならん。血痰も其結果と思ふ。血痰は手術の傷より出でたるならんといふ、然らん。通一。

五日

六時四十分六、五。一時七、五。五時七、三。八時七、五強。朝卅分。夕食前十分。

就褥前卅五分。三回一時間十五分。通二　二、四〇　島文買物。四五、洋食。計二、八五。整四郎來る。夜歸隊。朝二椀。これ宜しからざるが如し。三日の九椀も過ぎたり。朝は比較的空腹を覺ゆるも必ず二椀を越ゆべからず。

六　日

七時六、六。十時六、九。一時七、三。五時卅分七、五。朝四十五分。夕二十分、五分。夜十分。三回一時間廿分。通。平福君夜來る。十時近く歸る。三保に避寒を勸めらる

七　日

朝七、一。二時七、六。五時七、五。朝廿分。夕四十分。夜十五分。三回一時間十五分。通。九、電。五、博物館。一、同。一五、理髮。計四〇　朝二椀の掟。一回も守らず。今朝三椀を喫して腹苦し。博物館を見る。此日はじめてヨーグルトを飲む。

八日

十二時半六、九。三時七、六强。五時半七、四强。朝五十分。午前卅分。午后十五分。夕食前十分。夜十五分。五回二時間。三〇、切手。今日午前暖かにして氣分宜しく。三時迄臥床セズ。然ルニ午后ニ至りて寒キ爲メ驚キテ横ハル。既ニ六分强アリ。午餐ノ後直チニ用心スベカリシナリ。朝右ノ咽喉少シク痛カリキ。通一。

九日

朝七度　正午七、一。四時半七、二。二時七、三。六時七、三。朝四十五分。五分。午前廿分。午后十分。夜廿五分。五回一時間四十五分。整四郎より蜜柑とどく、昨夜少しく書見に過ぎたるらしく、今日頭痛し。鼻かぜまだ癒らず鼻孔も痛し。一昨夜より今朝にかけてドーブル散を飲む。其爲か食慾少し減退の感あり。今日よりヨーグルト朝夕二回の筈なりしも夕配達なし。今日氣分稍よし。夕食もうまし。通一。

十日

正午七、〇。三時半七、三半。五時七、〇。朝四十分。夕十五分。五分。夜廿分。四回一時間廿分。通二。宅より小包とどく。今日曇。氣分宜しからず。夜平福君來る。二、號外。計二。

十一日

朝六、八五。十一時半七、一五。四時七、二。六時七、三五。朝五十分。夜十分。十五分。三回一時間十五分。通二。今日午後はじめて外出して入浴す。體量を驗するに十一貫九百匁なり。四、風呂。計四。

十二日

朝六、八五。十一時七、四。二時七、三。四時七、〇。八時七、五。朝一時間。午後十五分。夜十分。三回一時間廿五分。通一。一五、葉書。今日氣分惡し。夜來よろしからず。朝食も空腹を感ぜず。

十三日

朝六、八五。三時七、二。夜中十分。朝四十分。夜五分。五分。四回一時間。朝通じありて一時氣分よろし。二五、腹卷。一五、繪葉書。本郷まで行く。四、入浴。一日臥床セズ。疲レズ。入浴時體重ヲ檢ス。十二貫百匁。日中一睡モセザル爲メカ、夜忽チニ睡眠ヲ催ス。計四。

十四日

九時半七、一。三時半七、三。通一。朝四十五分。午前十分。夕食前廿分。夜廿分。一時間卅五分。門間君、竹松、柳澤君、直子來る。門間君ころ柿、直子蜜柑一籠、西洋生菓子一折。柳澤君林檎ネーブル一籠を贈らる。

十五日

朝六、七五。三時七、二。通。夜〇時廿分迄廿分　朝三十分。午后十分　夜廿分。十五分　五回一時間卅五分。一五、切手。六錢顏剃。五十錢丼代。計七一。

十六日

十時七、〇。四時七、七。六時七、五。朝四十分。夜二十五分。十分。三回一時間十五分。九、實業之日本。通二。計九。朝より正午頃まで本郷通を歩く。それより門間君を萬佐に訪問、歸りて七、七なるに驚く。今日朝より稍身體疲勞を感じ居たりき。今日退院の筈にて少しく延ばす。便通よろしく、腹の工合よろし。但し便通宜しき爲か、食事の後と雖下腹部の膨脹少し。

十七日

六時六、九。十二時半六、九强。五時同。通一。朝五十五分。午前十分。五分。夜廿五分。四回一時間卅五分。三、風呂。計三。風呂へ行き體量を驗するに十二貫四百匁。十椀。

十八日

六時六、六。一時七、三强。四時六、六。七時六、八。朝四十五分。廿五分。午前十

五分。中食前五分。午後廿分。夜廿分。六回二時間十分。昨夜寢衣のままふかしたる爲めか、今日少しく氣分宜しからず。一時過二時近く就眠。五時半醒む。睡眠不足の爲めか、靜坐の時間たつに從つて身體の非常に(此處四字不明)覺ゆ。一五、葉書。計一五。

十九日

十二時半七、二。五時七、四。十一時半七、二。朝五十分。夕卅分。五分。夜廿分。四回一時間四十五分。九、電車。七八、(此處四字程不明)二七、麥作改良法。五、梅干。計一、二九。午前京橋まで行く。昨夜も十一時過(此處三四字不明)朝六時前醒めしが、遂七時過までとろとろとする。京橋よりかへりて疲勞を覺ゆ。今夜は入浴して早く寢んとす。齋藤茂吉君來る。今日より力めて饒舌を愼む。可成的低聲に談話すること。通一、二時迄不眠。

廿日

六時半六、七。一時六、八、三時六、七。五時半六、八、通二。朝四十五分、午後廿分、二回一時間五分。昨夜二時頃までうとうととする、今日氣分宜しからず、一つは雨模樣なるにもよらん、朝一椀を減ず、昨日頃より少し舌苔あり、門間君、平福君來る、夜十一時に成りて歸る、宅より夜書留とどく。夜二時まで不眠。

廿一日

六時六、五。十時七、〇、一時半六、九。朝五十五分、夕十分、夜十五分、三回一時間廿分。一、〇〇、鰻。一〇、理髮、三、入浴、計一、一三 體重十二貫六百匁、夜門間君を訪ふ。

廿二日

十時七、一。五時七、一强。通一。朝四十五分。午前廿五分、夕十五分。夜十分。四回一時間三十五分。巢鴨に齋藤君を訪ふ。九、電車。一、新聞。計一〇。

廿三日

十二時六、六。四時七、三。朝五十分。夜十分。二回一時間。歸國の途に就き神崎へ行く　五、五〇（？）、醫院拂（内四六、〇〇、入院料、二、六六、ヨーグルト。六五、新聞　一、〇五、食料　二〇、洗濯）。一五、車賃。四五、横濱へ運賃。一五、石下へ　九五、郡へ切符。八五、土産　一五、赤帽　二、新聞。一五、辨當。六、成田電車　五〇、栗羊羹。一〇、旅行案内　一二、車。七、成田休憩　計五五、二二。通計八二、九七

廿四日

一時過六、八　四時過七、九　朝一時間。午前五分。二回一時間五分　通　一、〇五、郡より石下まで切符。一〇、心付。五、五、新聞　一五、辨當　四、茶。計二、三二。昨夜少しくふかし過ぐ。前日早起なりしため眠かりしなり　咽喉右の方も少しく痛む　體温九分に昇る。随つて寒し。歸宅。

廿五日

朝七、一　四時七、二　朝四十五分　夜二十分　二回一時間五分。通。

廿六日

朝七、二。四時六、九強。六時半七、五弱。朝卅分。夜食前卅分。二回一時間十分。鼻風邪容易にぬけず。夕刻散歩を試みて體温を驗するに七、五に近し。寒氣に觸れたる故ならん。通。

廿七日

朝七、三。三時七、五。夜八時廿分六、七。通一。午前十一時半より四十五分。夕廿五分。十分。夜十五分。四回一時間卅五分。

廿八日

朝六、八。十二時六、六。四時七、〇。朝廿分。午餐前廿五分。夜四十五分。三回一時間卅分。通一。

廿九日

朝六、七。一時半六、六。四時七、二。朝卅分。午餐前三十分。夕食前十五分。夜廿

分。四回一時間卅五分。通一。屋根替第三日。昨日平福君より山水隨縁起とどく。

十二時六、九。二時半七、〇。四時七、一。朝四十分。午餐前卅五分。夕食前四十五分。夜廿分。四回二時間廿分。一五、顏剃。

卅日

一時七、一。四時七、三。朝四十分。午餐前廿分。夕食前十分。三回一時間十分。三四日以來夜能く眠れども、晝間眠し。左肋骨の神經痛癒えず。夜體重を驗するに十二貫二百匁なり。在京中のは衡器不完全なりしならん。四百匁を減ずる理なし。

卅一日

朝七、二。四時七、六。夜卅分。此日朝九時起床。朝晝共に食はず。午後四時僅に

二月一日

三椀を喫す。空腹を感ぜざるが故なり。或は兩三日カステーラを過食したるが爲か。空腹を覺えざる程胃を害したるならん。身體疲憊を感じ靜坐を怠る。通一。

二　日

朝六、八　十二時半七、一　三時半六、八。朝四十五分。夜三十分。二回一時間十五分。風に吹かれて外出す。林の作業を見る。入浴後臥床す。疲勞を覺ゆ。通一。

三　日

朝七、一。三時半七、一　十二時六、八。朝三十五分　午前廿五分　午後十五分。卅分　夜三十分　廿分　六回二時間卅五分。まだ毎日疲勞を感ず　屋根替終る。

四　日

朝六、五。正午六、八。三時半七、四弱。通一。朝廿分。午前卅五分。午後卅五分。夜十五分。四回一時間四十五分。夕食少しくうまし。

五　日

朝六、八。一時六、八強。三時半七、〇。通一。朝卅五分。午後十五分。夜卅分。廿五分。四回一時間四十五分。二三日前より聲に變化を來す。

六日

朝七、一。三時半六、九。通一。朝五十分。夜廿分。二回一時間十分。二〇、蜜柑。一二、理髪。計三二。

七日

朝七、四。晝六、九　三時六、九。通一。夜食前五十分。夜卅分。二回一時間廿分。昨朝六時起床　終日眠く靜坐を怠る。今日八時迄寢る。午前寢る。食事は行く。藥朝までにて切れる。肋まだ痛し。聊かも減ずることなし。

八日

十一時六、六。一時六、六　四時半七、一。朝十分。午前五分。夕一時間十分。夜卅分。四回一時間四十五分。入浴後臥床せず。七、一に歸る。日中より雪。

九日

晝七、三。夜七、一。午前四十分。夜十五分。二回五十五分。通一。雪。寒甚し。寢る。中食休。

十日

朝七、一。二時七、二五。朝十分。午前一時間。午後五分。夜十五分。四回一時間卅五分。通二。午後より寒氣。食慾減退す。七日の晝より藥切れたるも原因せるならん。時候の寒冷なるも原因せるならん。血色も衰ふ。早々轉地せざるべからず。

十一日

朝七、一五。朝卅分。下妻行。中䑛一泊。夜おそく寢る。靜坐を怠る。

十二日

此日熱度を檢せず。朝四十分。此日より水散藥を飲みはじむ。光明寺へ泊る。夕

方悪寒あり。顔ほてる。浴後直に寝る。

十三日

四時八、三。夜七、三。朝三十分。光明寺にて昼食欲しからず。午後三時渡場より宅までの歩行にて八、三おどろく。

十四日

朝七、二。昼七、二。夜七、二。夜三十分。終日臥床遂七、二に終る。

十五日

朝六、九。三時半七、九。夜七、六。午後三十分。夜四十分。計一時間十分。今(日脱?)午前より午後に至り林中を歩く、七、九なり。朝食うまからず。昼食せず。夕食普通。昨日あたりより左の肋骨のあたりも疼痛を感ず。

十六日

午後三時七、八。夜七、六。午後四十分。夜食前四十分。十分。夜十分。計一時間

五十分。通一。

十七日

朝六、九。午後七、四。午後十分。此日倦怠を呈し遂に靜坐を怠る。一日梅の剪枝す。熱昇る　食慾不進。朝食はずして然かも午餐うまからず。夕食も漸くに濟ます。玄米食は胃に宜しからざるが如きは焚方によるならん。通一。

十八日

朝七、〇。正午過七、五。午後三時過七、三。朝五十分。午後四十分。二回一時間卅分　梅畑に立ちたるが爲め晝頃熱高かりしならん。朝一椀にして過ぎたるが如く成りしが、不思議に食慾を恢復す。通一。

十九日

午後四時七、七。午後三十五分。食慾朝は旺盛。午後眠りし爲か空腹を感ぜず。

廿日

午後三時八、二。夜八、〇。靜坐を怠る。食慾更になし。午後三時迄客と對談、惡寒を催す。

廿一日

朝六、七。午後二時七、二。四時七、四。朝五十分。今日食慾あり。

廿二日

朝五十分。夜四十分。二回一時間十分。

廿三日

午後七、七。通ナシ。朝三十五分。

廿四日

午後七、六。通一。靜坐怠る。

廿五日

朝六、七。正午七、三。三時七、二。夜七、九。朝一時間五分。夜十五分。一時間廿

分。終日臥床。

廿六日

朝六、六。正午七、〇。夕七、五。通。夜卅分。

廿七日

朝六、六。正午七、〇。三時七、八。通ナシ。朝四十分。午後廿五分。計一時間五分。

廿八日

朝七、二。三時七、六。夜七、九。通一。午後廿分。

三月一日

朝七、一。三時八、六。朝四十分。發病以來はじめての高度の發熱。午後まで惡寒を感じながら出歩きたる爲めならん。

二日

朝七、一。三時八、一。朝五十分。午前十分。計一時間。通ナシ。

三日

朝七、一。午後七、六。通一。朝五十五分。小倉直枝、松山貫道兩氏來る。

四日

朝七、〇。午後七、二。夕七、五　朝一時間。

五日

午後七、五。通。朝一時間

六日

正午七、九。夕八、七。朝一時間。午前中横臥せず。疲勞を感ず。果し（て脱？）高度の熱（此處一字不明）あり。三日以來食慾なし。

七日

午後七、六。南風暖に過ぎて心地惡しく、靜坐を怠る。

八日

午後七、九。同怠る。

九日

朝七、二。午後七、九。通。朝四十分。食慾稍恢復。

十日

七、二。午後八、一。通。朝四十分。小倉直枝氏來訪。

十一日

六、七。午後七、四。朝一時間。

十二日

朝、正午七、〇。三時七、二。夕七、四。靜坐を怠る。

十三日

上京。熱を檢せず。通一。一、二七、孔雀送料。七八、切符。四、新聞。一、〇〇、奈

良漬。一八、電車　五〇、神尾。一七、配達料。三〇、中食。一六、人力車。二〇、女中。計四、六一。

十四日

一時半八、〇。三時半八、五。夜八、三。朝廿分。九、電。四五、茶菓。一、二八、野田驗溫器。他修繕。一七、五、實業之日本。五〇、神尾。一、〇〇、三國館。一五、車。一、〇〇、足駄　一三、ハンケチ、齒磨。計四、七七、五。三〇、葉書。計五、〇七、五。橋田病院へ入院　流動食。二七、半紙花紙、石鹸。昨夜あつくて半（此處一字不明）まで就眠出來ず。

十六日

七、一。六、二。夜七、三。七、五。齋藤君來る。中村憲吉、赤木桁平兩君來る。

十七日

朝七、三。七、〇。晝六、九。午後七、〇。七、三。五〇、丼代。平福君來る。三〇、

水飴。

十八日

朝六、七。六、七。正午六、九。三時六、五。夕七、五。夜七、〇。宅より荷物とどく。

二五、支那饅頭。

十九日

朝七、二。六、九。六、六。七、二。七、二。夜七、五。

廿　日

朝六、七。六、八。六、五。六、五。夕七、〇。夜七、二。齋藤茂吉君來り直ぐ歸る。

一五、切手。三〇、支那饅頭。夕順次郎來る。

廿一日

朝七、一。六、八。七、四。七、四。夜七、二。寺田憲君より小包來る。

廿二日

朝六、九。六、四。正午七、〇。七、一。夕七、五。夜七、〇。五、洗濯。齋藤隆三君、平福君來る。

廿三日

朝六、九。六、七。正午六、六。三〇、井。門間君より菓子とどく。

廿四日

朝六、八。六、八。正午七、〇。七、一。七、一。夜六、九。齋藤君より伊豆半島とどく。

廿五日

朝六、五。六、八。六、八。七、〇。門間武夫君果物一籠を贈らる。

廿六日

朝六、七。六、八。六、八。六、六。六、九。二〇、孤兒院賣品。

廿七日

朝六、八。六、六。六、八。夕七、三。夜七、四。二〇、昨夜のビステキ。二〇、刺身。計四〇。高野の叔母見舞に來らる。

廿八日

六、八。六、八。六、六。六、九。此日附添替る。坂本四方太君來訪、果物一籠贈らる。二〇、新聞。夜齋藤茂吉君、古泉千樫君來訪。古泉君殘りて十時まで話して歸る。其爲か、日中寢臺を替へたる爲か、三時頃まで眠らず。此日附添代る。茂吉君文章世界。

廿九日

六、八。六、六。七、二。何となく苦し。昨夜の睡眠不足の爲ならん。それに二三日來胃に變調あり。尤も晝飯のうまからざるは久し。晝間の短きによると思ふ。それにも拘らずつめ込みしが障ならん。それと野菜の缺乏も原因ならん。三〇、切手。

卅日

六、三。六、六。六、七。夜順次郎來る。パウンドケーキ、シウクリーム、ネーブル。

卅一日

六、二。六、四。六、七。朝廿分。午後四時十五分。計三十五分。今日より靜坐を始む。病勢大に宜しきを以て、四月一日より始むる心算なりしが、今朝ふと氣が向きたり。齋藤隆三君來る。二三日來胃の工合宜しからず。例の絶食すれば必ず治する癖なり。蓋し廿七日頃過食せしに因するならんか。

四月一日

朝六、五。六、六。六、八。朝三十分。夜三十分。一時間。三〇、葉書。八、うきよ。一七、六合雜誌。計五五。數日來便通一日に三乃至四回。消化の宜しからざるが爲ならん。

二日

朝六、四。六、三。六、八。朝三十五分。午前十分。午後三十分。三回一時間十五分。二三日殊に早起。今朝昨朝四時五十分位、爲めに午前眠し。腹少しくよく成る。一一、五、タオール。

三日

朝六、三。六、五。六、六。朝五十分。夜十分。二回一時間。五〇、支那饅頭。一〇、梅ひしほ。一二、理髮。計七二。夜齋藤茂吉君來る。此日理髮の爲めに始めて外出。食慾十分　齋藤君來りしため意外に長く横臥せずして語つたから明日を氣遣ふ。

四日

六、五。七、〇。午後五時半六、八。夜七、五。七、三。朝自五時至六時五分、一時間五分。午前卅分。十五分。三回一時間五十分。入院以來早起なれども二三日殊に早く、昨今共に四時頃醒む。昨日迄は午前に眠りしが、今日は午後に眠る。正午

七、〇に昇りしは昨夜の影響か、或は今日靜坐の長かりし爲か、孰れかならん。或は昨夜より飽食の結果ならんも知るべからず。或は今日稀有の天候降雪夜に入りて止まず、氣候の影響なりともいふべきか。十八日に支那饅頭を飽食す。十九日共に七、五に昇る。廿日は低きも、夜食の後二時間位に支那饅頭飽食。廿一、廿二日共に四分五分。二十三日より廿五日迄順調。最高七度一分なりしが食慾の十分なりし爲め、廿六日ビステキ一皿を食ふ。廿七日七、四に昇る。而して昨日より同饅頭を飽食して七、五なり。各種の原因ありと雖食事の分量と大なる關係あるを見るべし。

五日

七、〇。六、四。七、〇。七、三。朝五分。午前八時前約により上野精養軒に久保博士を訪ひ、診察を受く　相共に美術學校紀念展覽會を見る。九州行を約して別る。正午近く病院に歸る。疲勞す。然かも正午六、四。夜六時七、三なり。但し朝食を

喫せず、午餐も空腹を感ぜず、夕食も注意す。明日解熱せん。夕方中村憲吉君來る。九、電車、三〇、(空也草紙)。三三、繪葉書、計七二。

六日

六、四、六、六。六、七。六、六。六、六。朝卅分、昨夜ふと歌一首成る、十一時半頃より曉に及んで眠らざりし爲めなり。つとめて食事に注意す。此日發熱なし。此夜就眠前歌成る。遂に二時過まで眠らず、支那饅頭を食ふ。

七日

六、二。六、五、六、六、六、七、六、八。朝廿分、十分。三十分。日中眠る。昨夜よりの歌の添删をなす。支那饅頭を食はず、夜眠ることを得たり。

八日

六、七。六、六。六、六。六、五。六、七。五分。三四日間力めて少食に過ぎたる爲か。身體に疲勞を感ず。靜坐にたへず。

九日

六、六。六、四　六、八。六、五。夜四十分。朝來非常に氣分よろしかりしが、尚疲勞去らざれば、日中眠さを催す。頭は依然よろしからず。鼻孔やや痛し。解熱劑の爲か、今日食事うまく、量を增す。

十日

六、七。六、六　六、八。午前廿分。一八、電車。五〇、神尾　五七、五、色本書。計一、二五。五　齋藤茂吉君來る。小布施直子二兒をつれて來る。逢はず。工科大學朝鮮藝術展覽會を見る。食事はうまし　疲勞も感ぜず。

十一日

七、〇　六、七。六、六。六、九。七、〇。朝廿五分。午前廿五分。夜十分。計一時間。夕食より普通食　粥飯四椀。但し少量づつ。うまし。随てヨーグルトもうまし　頭痛あり。昨日外出の爲か七、〇に昇る　痰多し。

十二日

六、七　六、七。六、八、七、〇。七、一。朝卅五分。門間氏兄弟來る。郷里の母堂よりの贈物とて奈良漬一折。朝靜坐の折發汗の爲め單衣一つに成りし爲か、鼻感冒を發し頭痛あり。遂に七、一に昇る。昨夜四椀の飯今朝ひもじ。晝もうまかりき。然し夕食はまづし。六〇、もみぢ山。九椀。

十三日

六、四。正午六、三。六、四。七、〇。夜三十分。此日も九椀。但し夜おそくす。三十一日目にして始めて入浴す。昨夜頓服一服せし爲か、頭痛もとれ聊か心地よろし。九椀。

十四日

六、六。六、五。七、〇。七、三。朝卅五分。夜廿分。二回五十五分。昨夜十二時頃まで眠らず。文章一篇構想成る。朝食うまし。二、一六、ヨーグルト三月廿五日迄

の分。此日より散藥變更。九椀。

十五日

六、七。六、八。七、二。七、二。朝四十五分。昨夜少しく安眠足らず。昨日餘りに眠りしが爲ならむ。鼻風邪以來頭痛おほし。午後理髮す。聊か頭惡しと思ひしに七、二あり。夕醫員より少しく運動を勸めらる。一二、理髮。一三、タオール。朝四椀は過ぎたり。夕二椀とし九椀。

十六日

朝六、八。六、八。七、八。七、六。朝卅五分。昨日朝食過ぎたるため、晝夕共に食慾不進。既に朝食も空腹を感ぜざりしに無理なりき。少しく腹工合惡しき折は、却て過食することあるなり。過食の爲の熱と思ふ。

十七日

六、六。六、一。六、七。七、三。朝四十五分。朝一椀。晝一椀。夕二椀。計四椀。

それにても胃が下からつきあげられる様にて苦し。九、實業の日本。一〇、梅びしほ。五、梅干。二、干がき。計三一。散藥復舊。五、石鹼。

十八日

朝六、五。六、三。六、八。六、九。朝四十五分。飯は晝半椀のみ。平福君來り毬三箇。六〇、シウ。一〇、砂糖。五、鋲。計七五。

十九日

六、八。六、六。六、九。六、七。朝十分。晝はじめて二椀を喫す。今朝靜坐、聊か大儀なるは食事の減じたるが爲なりしならむ。一昨夜と少しく睡眠不足なり

廿日

六、七。六、二。六、五。六、六。深夜二十五分。朝ヨーグルト。晝二椀。夕二椀。
二三日夜間熟睡を得ざるを以て晝眠る。今日午後約二時間眠る。身體午前中は力なく、晝もどかしかりき。夜一時半頃まで眠らず。順次郎夜來る。整四郎の話し

て歸る。

廿一日

六、三。六、四。七、〇。六、九。朝卅分。午前平福君を訪ふ、不在。歸途疲勞す。昨夜の睡眠不足にもよらむ。十一時歸りて眠る。夕齋藤隆三君來る。夜まで話して歸る。朝二椀。晝二椀。夕二椀。何故か朝食後胃痛聊かありき。一八、電車。六〇、シウクリーム。四五、玉川堂紙類買物。四五、もみぢ山。一五、雜誌。一、八三。島久より保溫器取よせる。三時頃ヨーグルト製造を試む。

廿二日

六、四。六、四。六、八。六、九。朝十五分。五〇、丼。一、七六、和田ヨーグルト。四、敷布洗濯。計二、三〇。朝一椀。晝夕二椀づつ。ヨーグルト水分離してねばり多く酸もおほし。食して心持よからず。夕方の分も凝結せずしかも酸十分なり。久保田君來り久しく語りて行く。齋藤君朝一寸來る。入浴。

廿三日

六、二　三時七、〇、六、八。朝卅分、十五分、暖く漸く時候恢復。午前平福君を訪問。父來る。九、電車。七〇、洋食二人分。一、〇〇、附添へ。計一、七九。此日父の來訪の爲め、院長も來り會談、夕方に至るまで談笑。頗る疲勞す。

廿四日

六、三。六、四。六、八。六、六。靜坐怠る。五椀。終日殆んど臥床せず。聊か疲勞せしも熱は昇らず。

廿五日

六、三。六、六。六、七。朝卅分。小布施直子來る。果物。牛肉。漬物。

廿六日

六、二。六、八。七、〇。六、九。朝四十分。夜齋藤隆三君來る。菓子一折(青木堂)。六〇、色紙奉書。二五、(此處一字不明)一つ。一四、電車。六、〇〇、和亭の畫表裝。四、

小包。一二、理髮。計七、一五。七椀（朝三椀）。

廿七日

六、一。六、八。六、九。朝五十分。宅より荷物とどく。寺田君より小包とどく。眠し。六椀。

廿八日

六、五。六、四。六、三。六、五。朝四十分。八椀。昨夜滿腹の爲め惡夢を見る。手紙。

廿九日

六、六。六、六。六、八。朝四十分。朝二。晝二椀。少しく苦し。昨日あたりより咽喉少しく痛し。夜一椀。三五、新聞紙。四、鼻紙。計三九。

卅日

六、六。六、六。六、九。怠る。朝食せず。午前岡君を訪問、不在。四五、繪葉書。

五〇、シウ。九、電車。一〇、實業之日本。一、二八、島久ヨーグルト。一八、電。二〇、夕食。計二、八二。（編者曰、最初計二、八〇とし、後二、八二と訂正しあり。初めの計可ならん）

午後三時巣鴨の病院に齋藤君を訪問。共にいろは館に久保田君を訪ひ、太田水穗、中村憲吉君と會す。夜久保田、齋藤、中村三君と共に、傳通院前にて會食。

五月一日

六、六。六、八。六、九。朝卅分。今日昨日のたたりあるべきかを懸念したれども、左程にもなく、只いささか心部（?）に疲勞あるが如く覺えしのみ。睡眠の昨夜やや不足なりしも今日影響少く、葉書十五枚書く。夕方齋藤隆三君來る。直ぐ歸る。三〇、切手卅枚。一五、夏蜜柑。計四五。

二日

六、七。六、三。六、九。午後五分。夜卅分。計廿五分。二〇、肉。五、玉葱。五、卷

紙。計三〇。六椀。夜半醒めて睡眠不足。浮世繪のことなど考へる。

三日

六、八。六、三。六、九。朝卅分。四〇、シウ。黑田てる子午前十一時頃來り、三時まで話して行く。天氣惡しく小雨。中食せず。然かも夕食もうまからず。夜半さめて暫くして眠る。

四日

六、〇。六、三。朝五十分。午前一寸齋藤茂吉君來り歸る。てる子の手紙とどく。夜久保田君來る。二五、ネーブル。

五日

六、六。六、八。七、一。七、一。朝卅分。昨夜までに三夜一時頃醒めて眠られず。前日午後頭の少しく惡きを感じたりしが、今日食慾不振、氣分落つかず、苦しきこと限りなし。夜ねむり藥をのむ。一體五月に入りて茶の芽つむ頃は、從來身體

の工合宜しからぬ時なり。三〇、切手。一九、繪葉書。

六　日

七、〇。七、三。七、四。七、五。怠る。午後四時頃てる子來る。九時まで話して行く。此日工合惡しく熱高し。此間の入浴時に風邪を引きたるならん。てる子菓子一折。草花、きんせん。ひめじおん、をだまき、たてふぢ、牡丹。

七　日

七、〇。六、六。七、〇。六、八。怠る。四、敷布洗濯。夜橋詰氏父子來る。

八　日

七、〇。六、七。六、八。六、八。朝五十分。夜四十分。計一時間半。十五、切手。齋藤茂吉君出勤前一寸來り、平福君より貰ひたりといふ漬物を贈らる。夜平福君一寸來てかへる。今日氣分午前中宜しく、午睡の後少しく惡し。

九　日

六、四。七、三。七、四。朝卅分。午前久保田君來り談話を筆記して行く。談話中發熱あり、或は靜坐の時間過ぎたるに非ずやとも思ふ。大に注意の要あり。午前神尾へ行く。此一週間位咽喉の宜しからざりし由いひしが、矢張惡し。夜中三時頃少量の下痢あり。夜中の便通既に三四回つづく。注意を要す。一二、理髮。五〇、神尾。三五、にしき。一〇、電新。計一、〇七。

十日

六、九。六、七。七、三。怠る。午後二時てる子來り、夜九時迄居て行く。（此處二字不明）鐵砲百合、スウヰトピー。彼女の歸りし後はいつも心中に泣く。夜うとうととして眠足らず。夜半下痢を催すが如き感ありしが下痢もなし。數日前非常に咳多かりし時に比して稍少くなれり。三、八〇、愛光舍。

十一日

七、[illegible]。六、七。七、〇。七、〇。同。午前少しく眠る。一回便通、下痢の感ありて

下痢に非ず。便通後もいささか厭惡の感ありしが癒る。頭くらくらして蒲團を掩ひおくにいつも汗にじむ。數日來の曇天氣分に障ること多大なりしが、今日午後小雨に變ず。一五、葉書。睡眠劑第二回目。

十二日

六、九。七、〇。七、四。同。午前日本橋榛原まで行く。かへりは徒歩。お濠のほとりにアカシヤの花咲く。無花果の嫩葉。午後久保田、中村、齋藤君來る。岡君來り夜まで居て行く。三、一〇、屁。二三、封筒。計三二、三三。

十三日

六、七。六、五。七、〇。六、九。同。昨夜能る(く?)眠りし爲めに心地よかりし。午前中市村惟五(?)氏來訪。平福一寸來る。畫を置いて行く。午後てる子を訪ふ。決心をきく。一〇、電新。三五、にしき。計四五。

十四日

六、九。六、六。七、〇。七、〇。同。午後岡君來り筆を置いて行く。てる子の手紙とどく。夕方より久保田君を訪ふ。齋藤君其他にあふ。一〇、新電。夜熟睡を得ず。久保田君方に在りて林檎を過食――量おほからざれど――せし爲か。夜半一時半頃下痢。

十五日

六、八。六、六。六、九。六、六。同。睡眠不足の爲めか頭痛し。一四、繪葉書。二、切手

十六日

六、七。六、七。六、八。午後久保田君來る。齋藤隆三君來る。久保田君九時迄居て行く。

十七日

六、五。六、八。七、二。六、三。同。六、理髮。八五、日本美術史講話。計九一。頭

悪しく當てなき程の氣分なり。夜半睡眠劑を服す。

十八日

六、四。七、三。七、〇。同。博覽會見物。朝根岸養生院へ見舞に行く。見物十一時前より四時過まで。最初餘り疲れざりしが、午後にいたりて脚いたく成る。歸來七、三あり。安靜ならば平熱なるべき日なり。睡眠劑の爲めに午前中ぼんやりす。一〇、新電。四〇、シウ。四〇、養生院。一五、觀覽卷（券？）。三〇、鮨。五〇、當り餅。一五、ケーブルカー。四、石鹸。三五、にしき。計。疲勞して夜足いたし。按摩し且つアルコールを塗り、睡眠劑を服す。父來る。

十九日

七、〇。六、九。六、九。六、六。睡眠劑を服したる後は必ず眠ることながら頭ぼんやりす。午前中うとうとと成る。午後も暫時うとうとと。長場氏來る。果物。入院當初肛門にしこりありて痛かりしが、昨日より再發。夕はじめて石田英一氏と話

す。夜バナナ三つ食す。其爲か夜十二時前便通あり。

廿日

六、八。七、〇。七、一。七、二。南風吹き空曇りて、一日氣分悪しき天候。六、切手。

廿一日

七、〇。六、五　七、〇。午後小布施來る。菓子一折。

廿二日

六、五。六、七。六、七。六、八。午後父來り、久保田君來る。珍らしく氣分よき日。

朝てる子の手紙とどく。（[illegible]）氏の手紙とどく。熱湯を被りし處あり。夜半より眠らず　三五、にしき。

廿三日

六、七　六、九。七、二。六、六。朝てる子へ手紙書く。速達便に托せんとして果さず。睡眠不足のため頭痛し　終日悲しみ去りやらず。一二、理髪。

廿四日

六、七。六、七。七、二。六、八。終日悲し。二〇。

廿五日

六、七。六、七。六、九。てる子の手紙まだ出し難し。朝少し書き足す。九、繪葉書。昨日の刺身の爲か、腹少しとけて夜二時半頃一回下痢。夕方緣日散歩。疲勞を感ず。

廿六日

六、五。六、八。七、二。七、〇。夜間一回の下痢の爲か大儀。午後平福君扇を持つて來てくれる。夜久保田君來る。附添數日前より罹病今夜休む。

廿七日

六、六。七、〇。六、五。てる子へ手紙小包共に速達便にて出す。二五、速達。四五、切手。一二、包紙。六、顏剃。二、五〇、石原純君歡迎會。夜十時に歸る。

廿八日

六、三。七、三。七、五。昨夜一睡もせず。午前平福君を訪ふ。久保田君來り、岡君來り、齋藤隆三君來る。小布施來る。九、電。三、〇〇、袱紗。六三、シウ。二、二四、島牛乳店。三二、新聞。一二、一〇、反物。一〇、〇〇、表裝代。三、〇〇、心つけ。夜古泉君。計三一、三八。

廿九日

六、三。七、三。昨夜睡眠劑を服す。今日も氣分宜しからず。咳嗽も多し。三、三五、愛光舍。二九、濾紙麻繩。一二、小包料。二五、車代。二〇、女中。九、電。計四、〇一。退院三國館へ泊る。夜久保田君を訪ふ。

卅日

雨。歸鄕。八〇、宿料。二〇、車。五、五、新聞。七八、切符。一五、荷物。一〇、赤帽。二五、辨當。一、〇〇、菓子。四九、車渡錢。計三、八二、五。雨中を歩く。氣分

悪し。

卅一日

六、六。七、五　七、三　七、三。晴。

六月一日

正午七、〇　七、三。七、一。午後から雨ふる。出あるく。夜安眠せず。

二　日

一時過七、五。夕七、二　雨中出あるく。

三　日

正午七、二　三時半七、〇。雨。下妻へ行く。光明寺にて松山貫道氏に逢ふ。

四　日

正午七、二　四時七、〇。晴　はじめて單衣に成る。

五日

朝六、九。朝雨後晴、上京。二、渡。七八、切符。三〇、(二字不明)土産、五、配達。二七、電、一五、合ノ子。五〇、神尾。計二、〇七。夜齋藤隆三君を訪ね、久保田君を訪ぬ。中村君、齋藤君、河西省吾君等に會ふ。十二時歸宿。徹宵不眠、咳嗽やまず。

六日

朝久保田君を訪ふ。河西君と三人美術學校に展覽會を見、博覽會に入る。一八、電、一、新。一〇、時間表。三六、行李。四五、入場料。二七、腰卷。五〇、番頭。四〇、女中。計二、一七。夜順次郎來り、久保田君來る。

七日

五、電。五、洗濯。一、四〇、土産。一、二〇、帽子。二五、卷紙。九、電。一五、衛生展覽會。一、八五、宿料。五〇、神尾。一〇、番頭。七、〇八、博多まで切符。三二、山北すし。一二、牛乳。一、新聞。靜岡泊り。計一三、一七。

二五、辨。一二、牛乳。四、新。三〇、女中。計七一。神戸泊り、十三時間。

九日

神戸より下關、十三時間。途中麥商人と邂逅。一、三〇、神戸宿料。四、新聞。二五、鯛めし。一八、牛乳。二〇、女中。一八、下關理髮。計二、一五。

十日

三時七、七。博多着、午頃久保夫人を訪ふ。二時半久保博士の診察を受く。八〇、宿料　二、新聞。二、保管料。一五、人力車。計九九。

十一日

午六、五。三時四時七、三。夕七、三。夜七、〇。二〇、女中。三、新聞。計二三。午前診察を受け喀痰の檢査。午後久保博士夫人を訪ふ。五時過まで居る。朝夫人の訪問を受く。夜よくねる。

十二日

朝七、一。午七、三。三時四時七、一。六時七、四。午前十時診察を受く。咯痰に黴菌あり。一、〇〇、茶代。一〇、髭剃。計一、一〇。寐る。

十三日

朝六、六。十時六、八。六時七、四。午前病院。多くは寐る。二、入浴。

十四日

朝六、九。一時過七、六。六時七、六。午前福岡郵便局まで徒歩往復。近來朝食うまからず。無理に食ふ。毎食皆然り。故に氣分惡し。午後久保博士夫人を訪ふ。琉球の西瓜をもてなさる。二、下足。二八、帶。計三〇。

十五日

朝六、八。十時七、一。一時七、三。六時七、三。此日より雨。病院へ行く。第二内科研究室に高崎義行氏を訪ねて會はず。今日より梅雨ふりいづ。午後高崎義行君

に面會。二〇、茶。二〇、紙ばさみ。一〇、湯卷。一六、枇杷。計六六。

十六日

朝七、一。午前七、〇。三時七、四。六時七、六。病院、內科第二の敎授の診察を受く。高崎氏の好意なり。午後四時第二內科研究室に高崎氏を訪ふ。診察の模樣をきく。三〇、處方箋。計三〇。

十七日

朝七、一。三時七、二。六時七、二。病院へ行く。此日まで雨。靜臥したるため熱昇らざるならむ。夜高崎君來り十一時頃まではなして行く。茶を喫したる爲か眠り難く、徹宵うつらうつらに過し小便數回。歌の成りしも不眠の原因なりしならむか。國華を讀む。

十八日

朝七、三。正午七、〇。三時七、二。六時七、〇。朝來ねむし。昨夜の不眠のために

熱高し。然るに安靜を保ちたる爲か、思ひの外に熱低し。朝少し空を見て（此處四字不明）。二〇、理髮。計二〇。

十九日

朝七、〇。午七、四。六時八、〇。九時七、八。十時七、六。昨夜もよく眠らず、午睡の爲ならむ。病院に行く。一兩日中に入院することを得べしと。朝來少し氣分惡し。天候の故にもよるべし。朝袱紗へ歌を書く。昨日夕方より食慾なし。午食はうまかりしが、不審と思ひしに果して發熱八、〇風邪ならむ。然かも今朝は氣分宜しかりしなり。今日午後再度久保夫人を訪ねて逢はず。夜同じくうつらうつら。

廿日

朝六、八。三時入院して七、六。六時七、三。昨夜睡眠惡し。午前久保夫人を訪ふ。午餐を饗せらる。三時入院朝來雨止まず。入院匆々高崎君一寸來らる。一四、五三、旅館拂。三八、スリッパ、箸。三、印紙。三〇、心附。計一五、二四。夜隣室の喧

しさも加はり眠り難し。不眠幾夜に渉るを以て、睡眠劑を服す。此日エニグマ一册贈らる。

廿一日　日曜

三時七、〇。六時六、九。此日藥さめず、一日昏々たり。朝晝共に食はず。夕より粥食とする。力なし。午前久保夫人、久保令妹見舞はる。ベコニヤの一輪挿しと、福島の櫻桃一包送らる　午前博士より西洋の畫の雜誌貸與さる。すべて、此處三字不明のうちに過ぐ。夫人令妹ために早速歸らる。夜看護婦蚊帳を釣りながら一輪挿を顚覆して葉一枚折る。第三室の喧しき爲め一室に移る。夜曾田氏來りて語る。

廿二日

朝六、六。午六、七。三時六、八五。助手掛下氏來りて診察。日誌を作る。氏は久保令妹と婚約ある人なり。漸く醒めて人心地つく。午後高崎氏來る。三、食鹽　九、

福神漬。一三、濕布材料。二五、ビフテキ。一〇、(此處三字不明)。計六二。夕方看護婦長來り親切のはなし。高崎君來る。

廿三日

朝六、五　午六、九　三時七、三。六時七、五。夜卅分。昨夜睡眠殆んど成らず。午後平野女中來る　五〇、鰻丼。一、二〇、切手葉書。一四、洗濯料。三、五、パン。二七、(數字不明)。二、(數字不明)。二、一六、五。平福君より繪葉書來る。昨夜の眠不足にして今日熱アリ。夜體量を量る、四十五キロ、十一貫二百五十匁なり。身體疲勞を感じ居る筈なり。夜間は相應睡眠。就眠前はじめて靜坐卅分。

廿四日

朝六、六。午七、〇。三時七、三。六時七、三。夜卅分。午餐の際久保夫人より菓子惣菜を贈らる。いささか氣力の恢復を感ず。午後體重廿五匁を増す。昨春に比して一貫三百匁以上の相違あり。凡て大儀にして日中も眠る道理なり。夜博士辭林

を持ち來らる。二、新。一〇、胡瓜。夕食まだ空腹ならざりし爲か、夜苦しかりき。

廿五日

朝五時六、三。午六、七。三時七、〇。六時七、四。夜廿五分。昨夜一夜不眠。朝氣殊宜しからず。今朝までに蚤十五匹とる。午餐時久保氏ベコニヤの白さを贈らる。さきのは既に散りつくしたり。はじめて入浴。午後高崎氏來り五時過まで話す。久保夫人より粽、つくだ煮、昆布細工を贈らる。話し過ぎたる爲めの熱ならむ。遂に午睡せず。夕、四五キロ(此處一字不明)昨より廿五匁減。二、新。三、五、パン。一四、奈良漬。八、鯛味噌。六、顏剃。計三三、五。

廿六日

朝六、三。三時七、二。六時七、六。夜三十分。昨夜おそく眠りし爲か、今朝ねむく五時起床。洗面の後復た七時までねむる。夜机の上にベコニヤの一輪散る。蚊帳の裾觸れたるならむ。久保夫人より紫蘇びしほ等、バナナ二ツ。平野より胡瓜三

本。隣宅よりフリーヂヤ一鉢。入浴。二、新。五〇、共進亭。七、パン。計五九。朝涼しく晴れ、やがて曇りて霧雨。又晴れ蒸暑きことおどろくばかりなりき。眠りたる次の日熱ありて不眠の次の日熱なし。夜空冴えて天の川低くうるほひを見る。

廿七日

朝六、八。三時七、六。六時七、八。夜三十分。昨夜眠らず。蚤七匹を獲る。これにて廿二匹なり。夜半胃の消化（此處十數字不明）今朝は涼し。晴れて（數字不明）。午睡す。雷雨。注射不完全にして手術不能。二、新。三、五、パン。八、鯛味噌。今日熱高きは昨夜の不眠と、今日の注射とによるならん。夜睡眠藥を服す。四十五キロ、八百。

廿八日

朝六、八。夕七、五。朝まで眠し。午後一時間午睡、近來聲に變化を來す。右の聲帶赤く腫れたる故といふ。然し以前の如く成るべしと博士の談。快晴。暑し。只

稀に涼風來る。釜廿八匹。久保博士倫敦學會の復命書印刷成りて贈らる。七、パン。三〇、ビステキ。一一、草履。八、鯛味噌。二、新聞。計五八。夕方はじめて構内の散歩。平福君より鴨の葉書。四十五キロ。八百五十。

廿九日

朝六、三。三時七、五。夜六、五。朝七時半より卅分。昨夜僅ながら眠る。まだ全く明けぬに下痢の氣味にて起く。蛙の聲を聞く。散歩。蛙聲の來る處を知る。朝少しも食はず。喉頭直達檢査。成功す。直ちに吸入せしに氣分緩になる。晝食うまからず。二時頃尿の甚だ出憎きを感ず。今朝咳甚だ少し。晴天。夜寐冷したりと思ひしが、下痢四回遂八、五といふ稀有の熱昇る。風邪の氣味にもよらむか。入浴も惡しかりしならむか。午後順次郎來る。櫻桃、洋菓。一一、新。三〇、チキン。計三三。

卅日

朝七、四。三時七、一。六時七、一。晴天暑氣甚だしく汗を流す。午後佐々木好母氏來訪。第三室の病者死す。下痢止りたるらしけれど、尙腹の氣持よろしからず蚤三十一匹。宅より手紙。便通なし。四十五キロ。二五、卅。三〇、新聞代。一三、洗濯。計六八

七月一日

朝六、六。三時七、二。暑し。朝構内散歩。晝久保夫人より手紙、羊羹、煎餅を贈らる。午後高崎君來りし由なるが不在。松林に憩ふ白雨來る。入浴す。食慾少し出づ。今日便通。四十五キロ百五十。九、漬物。一二、理髮。二五、洋食。一一、實業之世界。計五七。

二日

朝六、九。午七、三。三時六時七、五。午前高崎君來る。午後久保夫人來る。久保博

士と語る。アララギとどく。門間君の繪葉書。武井君の手紙。八、鯛みそ。一二五、洋食。計三三二。四五キロ五五。少しく曇りて昨日より涼し。昨夜は非常の暑氣。寒暖計八六度なりき。内科の診察を受く。蛋三十二匹。夜武井氏返書來る。

三　日

朝六、六。三時七、三。六時七、五。昨夜夜中非常の暑氣なりしが眠る。夜明に蛙聲を聽く。稍涼し。今日第二室の人退院。今日はじめて其人と語る。三、五、パン。一二五、洋食。計二八、五。蚤三十五匹。午睡す。

四　日

朝六、四。四時七、四。六時七、三。昨夜も眠る。蚤四十匹。曉涼しく、寢冷せずやと懸念せし程なり。午後外出、久保夫人を訪ふ。ベコニヤの小鉢一つ貸與さる。平野旅館へ立寄る。八、鯛味噌。一、〇〇、平野旅館へ。一七、タオル。計一、一二五。

五　日　日曜

り副食物を持ち來ることとす。スリッパを掏り替へらる。

朝六、六。三時七、一。六時六、九。朝、晝共に午睡に耽る。夜も眠る。今日平野よ

三、五、パン。日中少しく驟雨あり。曇ることありて稍涼し。夕方却て風なし。松林に行きたれども。

六日

朝六、八。午六、九。四時七、二。七時七、九。午後工科大學の觀覽。少しく雲あり。時に涼風を送れども往路は未知の地理なるを以て徒歩す。二時過より四時近くまで電氣の講話をきく。氣分少しく惡しかりき。箱崎より電車にて歸る。夕方熱高きは歩行過ぎたるが爲ならむと思ふ。過日も福岡郵便局まで歩きて八度に達したりき。七、パン。二七、スリッパ。三、電。計三七。此日平野より山桃。

七日

朝六、九。午六、七。三時七、〇。七時七、四。六、理髮。雨、冷かなり。然れど我が

室は暑きことおほし。入浴。四五キロ百なり。食餌の美なるをとりて如此は如何の理由ならむ。昼五十四をとりて二三日安し。齋藤、久保田兩君の葉書つく。午睡。夜おそく眠る。蚊帳の中の蚊おほし。

八日

朝六、〇。午六、〇。四時七、〇。六時七、三。四四キロ八百。二五、ビステキ。一八、ナラ漬。一四ホータイ。二一、五、バナナ。計七八、五。朝少しく雨。後晴れて暑し。午睡。滋味を攝取して漸次體量の減ずるは如何ならん。高崎氏を訪うてあはず。

九日

七、四まで。此日も高崎氏に逢はず。深更蚊帳に月さす。一一、ホータイ。夜まで原稿を書く。

十日

七、三まで。午後高崎氏の診察。暫く右肋骨に疼痛ありしが一兩日以來きびし。然るに右肺下部にラッセルありといふ。昨年十一月然りといひしが、時々起るものと見えたり。此夜までに三夜不眠。第二回の手術。

十一日

七、二まで　二八、奈良漬。一二、（編者曰、脫漏あるか。）計四（）。ねむり藥をのむ。

十二日　日曜

四時七、五　午後博多の山（此處一字不明）見に行く。暑し　久保博士夫人を訪ふ。下痢ありしとて逢はず　アララギの原稿とどく。宅より手紙とどく。返事出す。アララギ原稿おくる。此夜も不眠。二、九五、平野へ。五、屯。三、五、パン。九、桃。五、砂糖。計三、一七、五。

十三日

六、九。四時六、八。夕七、五。入浴。午睡　順次郎より電報。國華を讀み盡す。一

八、洋食。如何にしけむ夕食うまからず。

十四日

朝六、六。四時八、〇。五時七時八、三。昨夜涼しく十一時過ねる。意外に夜ねむりて朝さめず。朝食せず。晝もうまからず。午後入浴。久保夫人を訪ふ。熱あるにおどろく。尤も今日も暑きに八通の手紙を書く。藥の塗布なし。吸入も一回。一二、理髪。夕食はうまし。

十五日

三時四時六、九。六時七、五。晝食うまく、夕食一時間早かりし爲かややうまからず。十二時順次郎來り三時まで居て行く。色奉書へ歌を書く。今朝はじめて蟬鳴をきく。一日風涼し。四〇、檢溫器辨償。

十六日

朝六、五。三時四時七、二。六時七時七、三。晝六、四。二〇、新聞。一〇、使へ。計

三〇。夕はじめて海岸へ行く。歌心動く、成らず。今日も涼風あり。溫度高し。

十七日

三時四時まで六、五。六時七時七、一。睡眠不足にて氣分惡し。午睡。暑し、夕方松林を行き海岸に涼む。松林に油蟬をきく。一八、あさひ漬。

十八日

朝六、五。三時四時七、七。六時七、八。晝飯前高崎君來る、はじめ外來に訪ねて逢はざりしなり。ハンモックより落つ。夜高崎君より電話にて十二病棟に行き內科圖書室にて十時半まで語る、久保夫人よりおくりもの。五、砂糖。九、福神漬。二二、バナナ。四七、バナナ。計八三。

十九日　日曜

六、五、三四時七、〇、五六時六、八。一日よくねる　夜久保博「士」夫人と共に病棟に來る。夫人と語る。夫人のおくりものは金澤の名物もみこのかす漬といふ、

紫蘇の葉に卷けり。夜雨の手紙つく。

廿日

朝六、三。三四時七、二。七、三 朝涼しく午後暑し。土用の入り。博士に少しく患部に就きてきく。六、顔剃。一二、繪葉書 一二、(此處一字不明)七、夏みかん。三五、饅。計七二。今日より肉類をやむ。過食なりしなり。夕食後衣類共に四五キロ二百。正味四四、四にして一、四を減ず。

廿一日

三時四時七、二。午後雨あり 其前のむし暑さいふべからず。然かも其前夜不眠に終りしため一日午睡す 夜も熟睡す。五、砂糖。

廿二日

六、四。七、三。七、七 朝少しく涼し 今日直達を見る。一七、五、バナナ。一四、飴。計三四、五。三、せんたく。(此處三字不明)成りつつねむり難し。昨夜の睡眠藥を

服す。

廿三日

朝六、七。三時六、九。六時七、一。七、パン。一八、フキヨセ。計二五。久保令妹より桔梗一りん。高崎君來る。

廿四日

朝六、三。四時七、三。六時七、五。博士に逢ひて手術を要求。夕近頃になりてはじめて海岸に行く。歌成り手圓の造語あり。香物南瓜など他の(此處三字程不明)貰ふ。三、五一、平野へ。六六、浴衣地。二、ラムネ。五、繪葉書。計四、二四。夜ねむられざるべしと思ひ居りしに眠りて曉さむ。

廿五日

六、六。七、〇。七、四。手術を受く。第三回目。二、ラムネ。一〇、砂糖。計一二。二三日以來しきりに茶をのむ。自らおどろく如く、爲に發汗も甚だし。

廿六日

六、三。七、一。七時七、七。依然として食慾なし。西瓜、南瓜を貰ふ。寺田憲より見舞として五圓、整四郎より藥。一日菴法を廢す。肋骨の痛みまだ少しあり。咳多し。二〇、新聞。一二、理髮。二五、五、バナナ。計五五、五。

廿七日

六、八。六、四。六、九。一日菴法せず。咳多し。久保夫人より夕方西瓜。五、夏蜜柑。

廿八日

六、六。菴法す。博士夫人より東京の鹽煎餅。二五、鰻丼。六、石ケン。三〇、切手。一〇、繪葉書。計七一。夕方はじめて外出。風さわがしく雨來る。今日松林に行きて見る。南瓜畑は空しく成り居たり。然れどもねて汗出づ。みかん、瓜をもらふ。午睡。涼し。夜眠らず。

廿九日

四時六、七。七時七、二。赤い朝顔一つさく。午後久保夫人を訪ふ。西瓜二切。夜高崎君を訪ふ。共に海岸にいづ。氏は卅一日歸省。診察。夜ねむる。正午頃川邊君來訪。

卅日

朝六、六。四時六、七。夕七、二。朝一しきり庭の松に蟬鳴く。午後佛敎講習會。非常に草臥る　二室より久留米の鰻と茨の葉もち。二、ラムネ。五、夏みかん。朝顏の花昨日より小さくさく。

卅一日

六、七。夕七、三。直達を見る。朝顏の花今朝も一つ。晝近く雨いたく降り出づ。エニグマもらふ。午後佛敎講演をきく。白胡瓜。夕今日も疲れて一時遣り場なき氣分。

八月一日

四時七、〇。七、五。朝顔赤二つ、藍一つ、うす青一つ殖えたり。一一、實業の日本。二九、飴。五、インキ。二五、鰻丼。計七〇。

二日

朝七、三。四時六、九。夕七、四。二五、丼。一〇、顏剃。計三五。朝顔赤うす色。暑し。小布施より小包。

三日

朝六、八。三、五、パン。一〇、カステーラ。二、ラムネ。計一五、五。朝顔一つもなし。第二病棟の箱庭に一つ地を偃ふ。整形外科の蔭に垣根の朝顔あるを夕方知る。夕食後海岸へ行く。久保博士にきく處あり。

四日

朝七、三。九、鯛味噌。二、ラムネ。一八、桃。五、砂糖。二五、ビステキ。計五九。朝顔只藍一つ。整形外科の蔭の垣根見に行く。小雨。正午頃驟雨。今日朝手術室にて診察を受く。蟬一しきり鳴く。三度目。

五日

四時七、二。夜七、三。一、一三、新聞代。一〇、新聞。二〇、平野の小僧。一〇、同。一二、理髮。計一、六五　素麵南瓜を貰ふ。久保夫人よりアララギを借る。朝顔赤一つ。

六日

四時七、五。夜七、九。朝顔只白ばかり。おほく地を偃ふ。午後久保夫人を訪ひ寫眞版を借る。博士の診察なし。二五、ビステキ。三、五、パン。二、(著者曰、脱字あるか。) 計三〇、五。夜曾田氏の當直室をおどろかす。月夜(滿月)松林を行く。

七日

朝六、四。四時六、八。夜七、五。午後久保夫人より西瓜をおくらる。二五、丼。二、ラムネ。四、繪葉書。計三一。今日朝顔いろいろおほし。蟬一しきり鳴く。海岸散策。

八日

七、二。四時七、〇。七、五。朝顔かずかずおほくさく。立秋。博士診察なし。二五、五、桃梨。二五、鰻丼。博士と暫時語る。蟬一しきり。

九日

七、一。六、七。七、六。蟬一しきり。非常に暑し。午睡。五、砂糖。一二、桃。計一七。夜藤田式をはじめて行ふ。アララギの原稿を書く。

十日

四時七、〇。六時七、一。夜三十分。二五、丼。八、味噌。二、切手。九、バナナ。一〇、新聞。二〇、アイスクリーム。計六四。蟬鳴く。夕方外出。入日を見る。山

（此處一字不明）より料理。アララギの原稿おくる。

十一日

四時六、八。六時七、二。朝三十分。夜三十分。計一時間。三、五、バン。一五、桃。一〇、カステーラ。計二八、五。蟬鳴く。朝顔咲く。午睡。靜坐。疲ならむ。此日便通三回。下血あり。今日靜坐して腹を刺戟せるよりのこととはじめて心づく。此日朝食す。

十二日

六、七。七、三。朝十五分。朝ねむし。靜坐（此處二字不明）にして飽く。蟬。五、繪葉書。一〇、桃。計一五。

十三日

朝六、七。四時七、五。午前〇時過三十五分。朝顔。蟬。順次郎來る。八、みそ。一〇、顔そり。一四、桃。二五、ビステキ。前夜ねむれず。丹田呼吸をなす。眠る。

十四日

四時七、五。夕七、四。夜三十五分。退院。今日も便通おほし。但し昨日中より靜坐せざるためか下血なし。食慾乏し。二五、ビステキ。三〇、夕アイスクリーム。四四キロ、八百。

十五日

三時七、四。夜三十分。朝病院へ行く。午前久保夫人を訪ふ。午後午睡。博多へ行き葛素麵。三、切手。八、五、洗濯。一、五〇、葛そうめん。一〇、桃。三四、新聞。六、九八、宿拂。計九、〇三、五。

十六日

六時七、九。八時四十三分（此處二字不明）發小林へ向ふ。人吉在林温泉泊り。一五、切手。三〇、女中小僧へ心付。二、一八、小林まで切符。二、新聞。一五、辨當。二〇、牛乳。二五、人吉林間人力車。六、西瓜。計三、一七、五。

十七日

五時六時七、六。午後五時迄努力、三十分。人吉十時に立つ。三時小林着。日向は火山灰の地埃立つ。一、〇〇、林檎。三五、人力車。一五、辨當。一五、（一字不明）松西瓜。二〇、女中。計一、八五。

十八日

三時四時八、三。六時八、〇。殆んど休。四時起床。五時小林町を馬車にて立つ。午後二時十四里餘を宮崎につく。一、二五。宮崎小林間馬車賃。八五、小林宿料。四、野（此間一字不明）驛。五、高取驛。一五、宮崎にて理髪。七、西瓜茶料。五、荷物持料。二〇、女中。計二、六六。馬車中に九時間を費したる爲か、宿について氣分非常に惡し。八、三にいたる。五時迄入浴。其前より幾分快く成りしが、六時八度に下る。入浴の折惡寒を感ぜり。夜武井氏訪問。平松氏にあふ。

十九日

朝六、九。夜九時七、七。午前中十分。三十五分努力。計四十五分。午前十時より十二時迄縣廳にて稲葉氏に面會。午後武井氏訪問。午後四時赤江發青島。夜平松氏來る。兩氏歸る。時化。青島へ渡り難し。夕飯うまし。一、四〇、宮崎宿料。一〇、青島梨瓜。計一、五〇。

廿日

朝六、八。三時七、五。六時七、四。十時三十分努力(數字不明)四十分。計四十分。望洋館より戊申館(?)へ移る。午前青島へ行く。午後同宿の神(數字不明)と語る。五〇、望洋館。八、青島西瓜。一、外良。三、ラムネ。一、席料。計六三。

廿一日

三時七、一。六時七、一。二十分努力。計廿分。午後宿換を請求さる。肺患なるべしとの故なり。土木技手と知合に成る。宿を探す。

廿二日

六時七、七。二十分努力。計二十分。今日時化甚だし。朝散步に出てぬれる。一九、梨瓜、外良。手紙を書きてまだ出さず。技手によりて宿定まる。今日何となく氣分惡し　潮風の吹く故にもよらむ。

廿三日

三時七、五。六〇、切手。六、顏剃。三、西瓜。二、二〇、宿料。計二、八九。時化風南にかはる。驟雨。夕食後松琴亭へ移る。

廿四日

午七、〇。四時七、五。時化風益加はる。午前佐々木氏、午後石川氏來る。朝食後籠居。はじめて靑島より手紙書く。

廿五日

三時半七、四。六時七、五　夜八時努廿分。夜半過努約十分。後熟睡。計三十分。大吹降り　三時頃一寸やみ、ほのかに日見えしが、ま(た腕?)曇り時々細雨。猿の

蟹をくふ處おもしろし。今日朝八時半さむ。氣分惡しく食不進。昨日の手紙まだ出し得ず。夜猿を見る。

廿六日

朝六、六。午七、四。三時七、二。朝努十五分。夜半迦努卅分、結迦丹十五分。夜結迦努卅五分、丹五分。計一時間四十分。宿換を請求さる。引越しの翌日戊申館主人遊びに來りしが、蓋し余を疑問の病者として告げたるならむ。午前佐々木技手と橋梁の工事の場所に行く。引越しのことは佐々木氏へ主婦よりの談なり。此家に來れるは佐々木氏の口入なればなり。今日漸く晴天に復す。佐々木氏のために宿見つかる。久保夫(人脱?)へ葉書かく。七、瓜。

廿七日

朝六、二。夜八時八、〇。朝結四十分。午前同十五分。計五十五分。五時半起床。青島へわたり散策。霧晴れて快し。今日宮崎に來る。三、五〇、松琴亭拂茶料共。

一〇、ラムネ。一九、汽車賃。一五、車。計三、九四。武井氏を訪ひ松原氏と語る。夜に入りて熱出でたるが如し。暑くして汗あゆ。武井氏來り十時に歸る。非常に眠かりしに松原氏の共に來らざりしは幸なりき。

廿八日

四時七、七。午前十時努廿分。丹十分。計三十分。昨夜のおそねなればか、一日氣分宜しからず。午前武井氏に到り夕方までごろごろする。目的の講演もききに行かず。葛素麵西瓜。晝餐せず。食慾なきなり。夜早くねる。よく眠る。二〇、女中。一、〇〇、藥代。計一、二〇

廿九日

朝六、五。四時七、七。六時七、九。夜五分。一時三十分努二十五。丹十。三時丹二十五分。計一時間。朝起氣分宜しからず。散歩。橋上より霧島を見る。十時人力車にて宮崎宮に賽す。午後武井氏を訪ふ。梨瓜。

卅日

夜内海へつき入浴して八、一。朝努三十分。午前九時より十二時迄小川博士内田學士の講演　武井氏を訪ふ。午後五時五十分赤江發。七時内海着。今日氣分甚だ惡し。二〇、女中。四〇、メートル。七、インキ、ペンサキ。三、八〇、宿料。二〇、人力車。二九、切符。五〇、武井氏へ藥價。計五、三九。

卅一日

三時七、四。朝二十分。午後十分。計三十分。内海より靑島へもどり、更に内海に來り、二時十五分發の汽船にて三時十五分鵜戸着。休息。小蒸汽船とてやはり氣分惡し。頭腦惡し。六〇、内海宿料。二二、靑島内海間。五七、船賃。一〇、靑島茶店。五、松亭。一〇、鵜戸にて夜西瓜二切。計一、六四。

九月一日

七、〇。夕七、一。朝十分。計十分。午前鵜戸神宮參拜。疲れる。ねる。午後の汽船にて佐々木氏來る。今日氣分宜しく成る。其爲か熱昇らず。五、鵜戸山茶店。五、飴。

二日

一時七、一。夕七、〇。佐々木氏と別れ、馬車にて油津。油津より飫肥。二〇、女中。一、三〇、鵜戸拂。三〇、油津まで馬車。二、西瓜。一、立場。九、飫肥迄切符。三〇、油津中食。一〇、女中。計二、三二。草臥れる。午前中氣分非常によかりしが。

三日

朝六、八。三時七、二。夜七、三。夜努二十分。計二十分。飫肥に見るものなし。午前油津へかへる。八〇、飫肥拂。四、繪葉書。五、西瓜。九、油津行切符。四五、油津繪葉書。三〇、切手。計一、七三。今日盆といひて漁船出でず、生魚乏し。繪葉書

三十枚を書く。其ためか夕氣分惡し。

四日

午前七、三。一時七、九。三時七、九。六時七、二。朝努二十分。午食後努三十分。丹十分。計一時間。前夜眠りしも、夜明に冷えたり。朝氣分惡し。葉書のためもあるならむ。朝食後徒歩（跣足）にて梅が濱へ行く。案外つまらぬ。歸來十時檢溫七、三なり。氣分惡しく晝食もうまからず。二二、繪葉書。一五、切手。一〇、西瓜。一、二〇、宿拂。二〇、女中。二四、油津外ノ浦間船切符。計二、一〇。四時油津發、五時外の浦着。波大なりしも時間の短きためか、只氣分の惡しき位にて醉はず。

五日

朝六、八。一時七、二。三時七、五。七時七、二。夜四十分。計四十分。今日汽船出でず、爲めに日井澤迄馬車に乘る。馬車を尋ねて往復約十町以上半里位歩きしな

らむ、疲る　日井澤につきて眠る。熱高きは朝の疲勞の爲ならむか、六〇、外浦拂、一三、馬車、六、顏剃、四、西瓜、計八三、

六　日

五時六、九、七時過七、九、汽船後れて九時半日井澤發、一時過内海着。浪高く油津以北暫時困憊す、上陸停車場に休息中一時半非常に空腹を感じ、休憩所にて中食す　二時二十分發、青島に行く、旅館を定む。中食後却て船暈の氣分に成り聊か頭腦の惡しきを感ず。八〇、日井澤宿拂。七三、内海行切符。二五、中食、五、青島茶店、計一、八三、夜佐々木氏を訪ふ。

七　日

朝七、五　四時七、二　午前努四十分　午後努三十分。計一時間十分。昨夜蚊と枕の堅き爲か一睡もせず　其爲朝の熱高きならむ。今日も波高し、繪葉書書く、二二、繪葉書、五、ウイロ　計二七　夜佐々木氏を訪ふ。

八日

朝寢起七、二。朝努十分。午前同二十分。同十分。計四十分。時化に成る。午前佐々木氏と橋へ行き見る。午後ねる。前夜も熟睡を得ざりし故なり。夜佐々木氏を訪ふ。順次郎より手紙來る。驟雨來る。晝夜共に。一〇、茶料。一〇、ウイロ。計二〇。

九日

朝七、五。夜九時過八、三。朝三十五分。午前宮崎に來る。午後稻葉氏を訪ふ。私邸に同道饗應を受け九時過歸る。發熱の原因ならむ。寢てからの氣分たとふるにものなし。然れども眠れり。四時頃さめ復たねむる。四〇、青島ウイロ。一九、切符。二五、人力車。計八四。

十日

朝七、三。三時七、五。九時七、五。今日意外に風靜かになる。但し時々雨は來る。

一日外出もせずねる。咳出る。夜武井氏を訪ふ不在。

十一日

朝六、八　四時七、七　夜七、五。午前武井氏を訪ふ。食餌療法を問ふ。牛乳六合。雞卵十二　但し黄味ばかり。肉三十匁。飯三杯づつ。蛋白質一瓦、四、七カロリ。炭水炭素同、同。脂肪同、九、一カロリ　夜武井氏來り、十時半まで話して行く。ねむし。ねつくまでの苦しさ。

十二日

四時七、五。夜七、七　午前武井氏へ行く。身體のだるきこと甚し。風靜かに成りたれど、雨は時々來る　暑し。午後も武井氏へ行く　近來便通の工合面白からず。溜り居たるが如くにして、時々ゆるむことあり。下腹いたむこと多し。二〇、女中。[illegible]五、理髮。計三五。

十三日

夜七、八　青島へもどる　武井夫人より梨を贈らる。此日海荒れて青島のあたりは濛々たり　五、一五、廣瀨拂　二〇、人力車　一九、青島行切符。二四、小包料　計五、七八　夜佐々木氏を訪ふ　宅より手紙を見る。

十四日

三時七、二。七時八、四　海漸く凪ぐ　青島より内海。一日氣分惡し　然し八、四には一驚を喫す　宿騷がしく十二時を過ぎて眠る　天候恢復　海路を（此處一字不明）る故に或はよからむかと想ふ。氣分すぐれざる爲め呼吸法も行はず。

十五日

朝七、〇　十二時七、五　四時七、二　七時七、五　今日凪なれども船來らず　豐後のあたり時化にあらずやといふ　氣分惡しく終日ねる。食慾不進おどろくべし。夜幾分よろし　安養を保ちたる故ならむ　明日必ず汽船來るべしといふ　先づよく眠る　六、ラムネ。

十六日

乗船。ために體溫を檢せず。一〇、饅頭。三、菓子。計一三。波立たず。瀬戸内海を行くが如し　但夜は眠らず。

十七日

一時七、二一　七時七、四。九時別府上陸。ねむる。午後郵便局へ行き久保夫人の葉書受取る　五〇、船中　六、荷物。七、顔剃。五、五、新聞。計六八、五。夜呼吸法を行はむとして、大儀にして止む。

十八日

夜八、一。午前大分に到り、直ちに元町植田村等の石佛を見る。午後四時電車に乗り五時別府　二五、電車往復切符　二〇、女中。六、梨。二、渡船　五〇、東植田村大字岡永富丈之助方晝食。一、五〇、人力車。二、新聞。一〇、饅頭。計二、六五。植田より歸途必ず八度以上ならんと思ひしに果して然り　夕冷氣甚だしく襯衣をきる。

十九日

朝八時半七、一。七時七、八。午後廿分、今日一日寢る。されど全く熱去らず。今日按摩器を母に送る。明日も寢んと思ふ。午後一時神氣爽快となる。今夕は暑し。一〇、繪葉書十枚。二、二〇、按摩器。七〇、羊羹。一五、同。八、新聞。計三、二三。

廿日

七時七、九。午前廿分。午後十分、十分。計三十分。今日團體客の砂（此處一字不明）浴を見る。今日午後呼吸法を行ふに岡田式は直ちに動搖す。卽ち足の組方を岡田式にして呼吸を止むる方法を藤田式に從ひ見るに却て宜しきが如し。一五、切手十枚。三六、土産。四、新聞。二〇、（此處二字不明）。計七五。

廿一日

朝六、九。夜七、七。昨夜蒸暑く寢苦しかりき。朝食更に進まず。連日無理に食事せし故ならむ。九時半別府を立つ。中津に下車して白（此處一字不明）寺を空しく引

取る。小倉泊り。遠方雨ありて夕冷氣深し。一日腹いたし。且つぶつぶつす。朝牛乳を飲みたるにもよらむか。二三日來便通の工合橋田病院入院當時の如し。中津にて一回輕く下痢。中食せず。四、四〇、別府拂。一五、車。一、六四、切符。四、新聞。三〇、中津車。五〇、中津。四〇、女中。一五、理髮。計七、九三。

廿二日

三時七、七。七時七、九。夜四十分。六時廿五分小倉博多にもどる。午前午後共久保夫人を訪ねて逢はず。午睡。今日も朝より冷氣なり。昨日より空模樣惡し。一、〇〇、宿拂。一八、バナナ。二、新聞。一五、人力車。二、風呂。計一、三七。

廿三日

午前十時七、〇。三時七、九。夜八、〇。午前四十分。午後十分。夜十分。計一時間。午前久保博士診察を受く。今日朝晝共三椀づつ。流石に夜空腹を感ず。從來過食の弊あり、愚なり。便通もよく成る。今日も久保夫人に遇はず。熱高きほ大

分以來の失敗と、過食して消化を害したるとより來りしなるべし、人皆瘦せたりといふ。二、湯。計二、

廿四日

朝七、二。三時八、〇。七時八、一。彼岸中日。朝十分。午前一時間。午後廿分。夜三十分。計二時間。朝四時さめて復た眠る。七時さむ。朝一杯。晝二杯。夕空腹二杯。今日より肺歪湯をのみはじむ。午前一寸久保夫人を訪ひあとは寢る　減食しはじめてより靜坐苦しからず　愚なりときく。八度の熱にて空腹を感ずること妙なり。明日より吸入もはじめんと思ふ。武井氏の依頼品を滴羽雨軒へ渡す。熱さめず。然る時眞に空腹を感じて（數字不明）。再び入院の希望達すべしや。一一、氷砂糖。

廿五日

朝八時半六、九。三時七、四。夜七、六。今夕吸入をはじむ。朝廿分。午前廿分。計

四十分。昨夜時（々脱？）眼さめて且咳出づ。昨日の冷氣に少しく風邪の氣味あり。鼻つまれるによる。今朝少しく身體だるし。昨日は靜坐するに姿勢を考へたる爲か、心地よかりしが、今朝はだるくて思ふ樣ならず、昨日過ぎたる爲か　胃の工合よろし。夜高崎義行氏來訪。十一時まで居て歸る。故に夜の靜坐を廢す　六、繪葉書。三三、酒精。計三九。

廿六日

十時七、〇。三時七、六。夜七、八。食朝（朝食？）前卅分。同後卅分　夜五分。計一時間五分。病院よりかへりてねる。靜坐（此處二字不明）間ならむ

廿七日　日曜

一時二十分七、六。三時同。七時同。午前宮川源二郎（？）氏來る。午後四時過高崎氏を訪ふ。在（不在？）。今日腰部に聊か疼痛らしく感ずることありき。一日冷氣。五、切符。

廿八日

三時七、五。七時八、二。朝廿分。九時四十五分。計一時間五分。朝昨日の約履行し難き旨久保夫人より通知あり。今朝何となく氣分すぐれず。然し診察の際熱出づるを恐れて、熱灼を見合すべしといひわたさる。明朝夫人を訪ひ、尙懇談する處あるべし。今日食慾十分なれど、夕方にいたりて身體熱く、遂に八、二にいたる。遺憾なり。一五、切手。

廿九日

朝七、〇。十時七、四。三時七、五。六時七、七。朝十五分。午前三十分。計四十五分。病院へ出掛けに雨ふる。十一時過診察。其時まで腰掛に横に成る。歸りに高崎氏をたづね診察を受く。十二時過歸宅。寐る。身體熱し。久保夫人を訪はず。博士在宅の折篤と相談すべし。夜高崎君藥を持ち來らる。二〇、女中。

卅日

三時七、〇。七時六、六。雨。今日博士治療早し。宮川氏より本を借る。今日より下宿に成る。順次郎より整四郎出征の旨通知し來る。九、繪葉書。一、〇〇、宿へ茶料。三〇、切手。計一、三九。如何なるものか今日熱低く、食慾甚だし。夜牛肉を攝取す。一日雨。朝顏昨日終日萎まざりし爲か、今日一つもさかず。

十月一日

三時七、〇弱。六時同。午後久保夫人を訪ふ。面會を得ず。今日昨夜少しく飽食したる爲か、食慾稍感（減？）ず。然れども以前の如き直ちに胃を害したる如き感なし。一八、酒精。一〇、顏。一二、繪葉書。計四〇。

二日

三時七、一弱。六時半六、六。博士休む。夫人急遽上京の爲め下關まで見おくりたりといふ。曾田氏の診察を受く。父より手紙、當地に來るべしといふなり。一日

ねる。食事うまし。夜飯悪く食ふに不堪。九、石鹼。二、ペンサキ。計一一。

三日

朝六、六。正午七、二。三時七、一。七時八、二。蒲團厚くて時々まくりしためか、風邪氣に成りしならむ、今朝頭痛し。朝久保令妹一寸來らる。宅より小包とどく。朝來頭いたかりしが、風邪の爲か、遂に八、二に昇り、例の如く不快なり。食慾十分ならざるに無理に攝取したる傾あり、愚なり愚なり愚なり。明日必ず減食。一時熱の引きしは減食の故ならむ。可驚。七、パン。二、湯。一四、ブダウ。一〇、(此處二字不明)。計三三。夜半咳出でしが今日は痰甚だ少し。吸入午後までに終る。殆んど過不及なし。八時頃入浴してみる。

四日

正午七、八。三時七、六。六時半七、七。朝三十分。朝の内一寸手紙を書き、やがてねるに厚き蒲團にても寒し。熱あるべしと思ひしに、果せるかな正午に七、八な

り。午後一時約束にて久保博士を訪ふ。胸部に甚だしき異狀なければ手術すといふことに成る。順次郎の手紙に、整四郎は大阪より乘船といふ。逢ひ難し。今朝靜坐を試みしに、力を餘計に入れざれば樂なり。一〇、一五、宿の拂 二五、サボン 一五、ブダウ 計一〇、五五 今日飯食ひたからず、夜少量にとゞめて果物を食ふ。腹ふくる。過ぎたるならむか。

五日

朝九時六、八。正午七、四。四時七、四。六時半七、四強。朝果物のみ食ふ。晝二椀半にして滿腹苦し。夜僅に一杯。病院に歸りて一日ねむる。夜中島松次郞氏を不老館に訪ふ。十一時過まで居て歸る。此夜不眠四時過まで。明方とろとろとして六時十分さむ。

六日

六時過七、四。朝中島氏父子來る。朝十分。食後廿五分。計卅五分。病院にて日光

にて咽喉を檢査す。深處に爛れあり、高き處の下、そこに痰たまる、鉗子を以ては手術し難し、身體別に異狀なければ、も一度燒くべしといふ。高崎氏を訪ね博士のはなしをたのむ、午後よくねむる、朝もねむくて熟睡す。高崎氏より健胃劑をもらふ。一四、ブダウ。五、氷砂糖。七、顏剃。計三〇。

七　日

夜十時八、〇。朝廿五分。朝中島氏來る。午前病院（に等脫？）中島氏を見舞うて正午まで居る　疲る　午後また行く。四時迄　中島氏と同伴一方亭にて（數字不明）く。十時過ぎてかへる　今日從來の掟を破ること甚だし。しかも一方亭に在る間は氣分惡からざりしが歸來八、〇あり　此日食慾十分なりき。

八　日

正午八、二。五時七、九。八時八、四。朝四十五分。夜十五分。計一時間。朝中島氏來る、手術に就き博士と熟談の歸途なり。中島氏を病院に訪はず。一日ねる、然

かも果して發熱あり。朝久保博士の女中、整四郎の寫眞を持ち來る。二〇、甲州葡萄。

九日

朝七、三。正午七、九。三時七、七。夜八、二。朝曾田君と語る。二十分。此日工合惡し。中島氏を訪ふ。昨日入院せし由なり　今日父共に手術、熱あれども食事はうまし。病院に少しはやく行き、おそく歸る。二四、甲州葡萄。

十日

十二時七、五。三時七、四。七時七、九。朝一時間。午後仰臥して二三十分。更に一時間、朝早く出る、掛下君と一緒に成る。診察前中島父子を訪ふ。同前はじめて吸入す　歸來寒きこと甚だしく蒲團着て容易に暖まらず。朝一時間の靜坐のため大熱に非ずやと思ふに然らず（此處二字不明）食慾昨日の如くならず。蓋し昨夜の過食に起因すべし。午後仰臥して息ひ調和法を行ふ。二七、藥代。一三、ブダウ。六、

切手　計四六。

十一日

正午七、三。夜七、三。朝四十分。夜一時間。計一時間四十分。朝入浴して午前中熟睡す。午後理髪して中島氏を病院に見舞ふ。夕方まで話してかへる。熱低し。夜静坐の後眠難く明方に眠る。六時半起く。二〇、理髪。二〇、ブダウ。二〇、女中。二、風呂。計六二。朝小豆飯三杯。

十二日

正午八、〇。四時七、五。朝四十分。夜二十五分。計一時間五分。午前中島氏を訪ひ少しく疲を覚えたり。午後一睡す。午餐甚だ過ぎたるが如く苦しかりき。夜高崎氏（此處一字不明）來り十一時まで話して行く。夕食は非常におそく喫す。却て工合よろし。母より手紙。二〇、ブダウ。

十三日

夜七、五　朝一時間。夜四十五分。計一時間四十五分　中島氏を訪問して午後五時頃まで居る。歸りて眠る。其ため晝まで旺盛なりし食慾少しく減ず。夜屋外散歩。少しく冷ゆ。其ためか夜明に熱出づ。今日の如く晝起きたることなし。順次郎より藥とどく。

十四日

二時八、〇。七時七、三。朝三十分。午後二十分。朝靜坐の後入浴、別段食慾を催したる程に非るも一杯非常にうまし。故に二杯半を喫す。夜半さめたる後暫く眠らざりしによりねむく、少しく氣分惡しかりしが、今日も午後四時まで病院にありしを以て、遂に熱出づ。二時半過中食。其前二十分の靜坐により空腹を感ず。然し食後胸惡く、夜九時に成りていささか食思起る。夜高崎君來る。病院にて訪問したるために藥を持參されたるなり。今朝吸入をはじめたれども、食慾に影響するが如きを以て、一回にて見合せ。久保博士へ高崎君（數字不明）れし由（數字不明）

君よりきく。一〇、湯札。三三、バナナ。二五、饅頭。一九、紙類。四、繩。

十五日

三時八、〇　七時七、六。朝一時間。夕四十分。計一時間四十分。午前病院にて中島氏と海岸を散歩　午餐、朝來腹工合宜しからざりしが、午前中腹に力を貯へたるためか、非常に空腹を感じ三杯を喫す。午後五時迄ねむる。七、繩。一三、ブダウ。七、顔剃。計二七。

十六日

三時半七、五　七時七、六　朝三十五分。整四郎の手紙。静岡よりの薬とどく。午前病院より歸り、福岡局へ行く。徒歩して歸る。ねむる　夕方中島氏名島よりかへりによる　今日雨三日來の胃の工合惡しかりしが遂に食慾不進なり。九、電。三〇、赤城叢書　三〇、菓子。一、三〇、素麵　一三、包紙。一五、ブダウ。計二、二七。

夜半火事あり。

十七日

夜八、七。朝二十分。祭日　雨。中島氏を訪ね雜談に過ぎて午後五時頃迄居てかへる。胃の工合もよく昨日と非常の相違にて、氣分もよかりき。歸宿後夜荷造りなど精出して後檢せしに八、七おどろく。一五、切手。一二、平福君へ小包料。二〇、内紫　計四七　痰おほく咳おほし。

十八日　日曜

朝七、九　正午七、三　四時七、五。夜八、四。朝入浴してねる。朝食殆んど取らず。晝二椀。夕方父三人連にて來る。雜談其ための熱ならむか　中島氏午後令息同道にて來る　三日以來暖きに熱あるを以て著し。二〇、氷糖　今日より肺金湯を用ゐる、今日全く靜坐を休む

十九日

朝七、三　三時同　夜八、一。今日中島氏を訪問せずして歸る。午後胃痛。午後も

然り。午前も午後もねる。夕近く父等宰府より歸る。夜中島氏父を訪ねて來る。七時父久保博士を訪問、西公園菊人形見に行く。

廿日

朝七、〇。三時半七、七。九時の汽車にて父歸る。父の見舞品を持ちて中島氏を訪問、二時にかへる。中食約三椀。昨日まで非常にほかつきしが夜來天候惡しく、今日陽氣もとにかへる。夜中島氏來る。晝晩六に十分に食ふ。夜八、〇に昇りしならむ。

廿一日

朝七、六。三時半同。七時八、四弱。朝來氣分惡し。一つは非常に（編者曰此間脫字あらん）よりしならむ。中島氏を訪ね氣分惡しき爲め壹時頃かへる。入浴す。中食後ねる。夜中島氏訪ね來り、長時間話してかへる。自分は寐たる儘挨拶す。八、顏剃。朝非常に寒し。

廿二日

朝七、六。三時七、七。夜八、二。學生の豫診日なりしを以て博士多忙、十二時頃診療を受く。氣分悪し、然れども晝は三椀。夜中島氏來る 子息を殘して歸京の決心をなせりとてなり、二時間以上語りて行く。夜葡萄百目を喰ふ。滿腹にて聊か苦し 熱の下らざるは夜過食せし故ならむ 明日より改めん 夜藥につき順次郎より、小（此處一字不明）川の件に就き母より消息あり。二〇、葡萄。五四、書留小包料。計七四。

廿三日

朝七、六 一時七、七 七時七、四。朝食とらず 九時病院に行き電氣燒灼を受く。今日苦しからざりき 鉗子に代り探りて後燒灼 十一時より約廿分以上かかる。氣分直らざる爲め歸宿せしは十二時半なり 直に寐る。二時頃食事せしに味なく通らず 夜七時三椀。中島氏來る 都府樓のかへりなり。

廿四日

朝七、七。一時八、一。七時八、〇。病院にて中島氏に逢ふ。今夜割烹店に行かんと勸められたれど辭退す。晝はうまし。歸宿後寒かりしが暫時にしてやむ。今朝より吸入をはじむ。三、切手。三〇、酒精。二〇、女中。七、バナナ。計六〇。夜中島氏來る。夜（此處三字不明）氏來る爲めなり。

廿五日　日曜

朝七、五。一時七、三。夜七、七。入浴。朝中島氏來る。（此處二字不明）氏に面會す。寐る。午後中島氏を病院に訪ふ。菓子を食ふ。中島氏を博多停車場に送る。歸來ねる。夜食菓子のためうまからず。二、入場券。咽喉は痛し。一〇、女中。計一〇。

廿六日

朝七、八。一時半七、七。六時七、八。病院にて十二時過まで待つ、博士來らざる爲なり。身體の疲勞甚だしきを覺ゆ。身體の熱くして、ともすれば汗ばむに困却す。

朝食意外にうまく飯二杯。菓子の爲めに如何かと思ひしにうまし。午後五時近く（此處二字不明）氏來り羊羹、鑵詰を贈らる。今日中島氏を訪ねざるにわざわざ此の如し。昨日より暖かなり。一五、ブダウ　計一五。

廿七日

朝七、八　四時八、一。七時八、三。仰臥のまゝ腹力を試む。午前中島氏を訪ひ、後れて診察を受けず。然れども却て手術に就き、きくを得たり。中島氏肺尖に異狀ありといふ。午後久保夫人を訪ふ不在。中食栗うまかりしが過ぎたりと思ひしに、果して然り。熱出づる所以ならむ。夜咳出づ。二〇、理髮。

廿八日

朝六時過八、〇。九時七、三。七時八、三。午後二時間。夜約卅分。中島氏を訪ふ。西巻氏に解熱藥を貰ふ。今日聊か咽喉の痛み薄らぐ。今日門間君より書物とどく。午後寐ながら温泉の話をよむ。其間新聞と共に二時間腹に力を入れる。菓の過食

和らぐ。夜服薬（解熱劑）の後汗しきりなり。

廿九日

朝七、三。正午六、八。三時半六、九。七時七、八。今日も仰臥して、解熱劑の爲ならむ、疲勞を感じたれど、朝食二椀。中島氏を一寸訪ふ。昨夜は咳出でず大に樂なりき。正午熱下りたるを以て、服藥は二服にて止む。正午頃病院より歸る。何となくだるく氣分惡し。一つは藥の爲なり。夜朱欒を食ふ。滿腹苦し。一二五、朱欒。昨日の疲れか腹力十分に入らず。

卅日

朝七、〇。三時半八、二。七時七、〇。同。朝入浴す。九時久保夫人を訪ね十時半まで話してかへる。氣分よかりしが中島氏を訪ひ一時頃かへる。少しく惡寒を感じて遂に熱出づ。止むを不得解熱藥二服。中島氏退院二人して夜來る。鷄卵素麵一箱を贈る。二、〇五、卵素麵。昨夜夜中咳なし。

卅一日

朝六、八。一時過七、二。四時六、八。七時七、五。十時半八、二。同。一日寐る。食慾十分ならず。今日朝食はざるべしと思ひしに食ふ。但し少許。晝も空腹ならざるに食ふ。時々眠る。中島氏へ返事書く。門間へ送物。六、不足料。六、切手。五〇、新聞紙　五、〇〇、宿へ　一一、雑費　今夜（此處二字不明）の强健法を試む。計五、七三。

十一月一日

朝六、八。三時七、七。七時八、一。同。昨夜殆んど眠らず。然れども如何にかしけむ　非常に空腹を感ず　午前入浴して一眠り。午後も一眠り。順次郎より羊羹。宅より衣類とどく。昨夜の疲れか今日呼吸法十分ならず。一、四七、宿拂不足分。一二、ブダウ　八、小包料。計一、六七。

二日

朝六、九。一時七、五。八時八、一弱。病院より歸りて氣分非常に惡し。朝來然り。朝二椀にして、晝非常に胃の工合惡し。食後ごろ寐す。整四郎へはじめて手紙書く。午後中島哀浪氏來り夕食後歸る　其間起きて居る。昨夜も殆んど不眠に陷らんとしたれば、仰臥して腹力を行ふ、百回以上。いつの間にかねむる。昨夜寐しなに少しく胸むづかゆかりしが、夜明に少し咳出で朝また出づ。日中も少し出づ。今夜も不眠に陷らんとせしが、腹力により漸く兇る。三、切手。

三日

朝七、三。四時七、六。九時過七、五　同。夜明に少し咳出づ。久保令妹結婚。中島氏へ體溫表をおくる。飯非常にうまし。朝二。晝二半。夜三椀。西卷曾田二氏へ菓子をおくる。手紙三本書く。家より外套とどく。今日も咳少しあり。割合に疲おほし。八、顏剃。九、切手。計一七。

四日

朝七、二。正午過七、七强。八時八、〇。今朝も少し咳出づ。頭惡し。病院にて右肺より（此處一字不明）類を取り出したるを見る。吳服町丸善にて大健康法を買ふ。一、〇〇、本。一九、バナナ。バナナの爲め夜滿腹。計一、一九。

五日

朝七、四。正午過七、五。四時七、三。夜八、三。本日高崎君と談じ診察受け損ず。午後久保夫人を訪ふ、四時まで。昨夜の過食のため朝一杯にせしに、晝空腹三杯。病院より歸りて一日寢ず。久保夫人を訪ねたるよりなり。夜三杯の爲に聊過食、夜ねむり難く、朝にいたりてねむし。解熱一服夜。一五、切手。

六日

朝七、三。三時七、八。七時八、〇。朝服藥の爲ならん食慾なきに二杯、更に羊羹。晝滿腹。氣分惡しく午後ねる。近頃のどはれる、聲變る。放屁多し。過食の時腹

力を加ふれば然り。X光線を見る。一一、實業之世界。

七日

朝七、二。晝七、五　三時七、三。七時七、四。午後四時入浴。高崎君の診察を受けて、博士の診察を受け損ず。曾田氏に診て貰ふ。朝一杯　晝食慾なし。今朝咳多し汗出づ　晝一、夜一半　然して夜葡萄及びカステーラを食ふ。藥をつくらしむ。五日分。五〇、藥。二二、菓子果物。計七二　三四日以來非常に寒し。青島陥落。

八日　日曜

朝七、二。正午六、九。三時六、八。七時七、三。九時七、〇。朝宅へ手紙出す。朝汁一椀にとどむ　晝約三椀。副食物多量。少し滿腹。午後よく眠る。夢を見る、よろしからず。五、切手封筒。今日腹力少し怠る。晝食過ぎたるため夜不進一椀に止む。

九日

朝六時七、〇。八時七、三。正午六、七。三時六、四。七時六、九。朝甚だ力なし。理髮して病院へ行く。今一度手術すべしといふ。暖かなり。曇り。朝汁のみに止む。卵二個。晝容腹にたへず。而して我慢し難く二杯半。後睡眠のためいささか停滯なり。夜バナナ五ツ、飯約二椀。一、新聞。一八、バナナ。一四、理髮。計三三。

十日

朝六、八　晝七、一。六時七、一。七時七、二弱。腹力なまける。但し少しやる。數日來身體倦怠を感じ、晝食に際し何となく不安らしく感ぜらる。それも一時間の横臥睡眠にて治す。三時近く久保夫人を訪ふ。五時近くまで居てかへる。如此して直ち（に脱？）はかりて七、一はうれし　それ故頭のぐらぐらすることなし。夜入浴　二二、切手、石鹼、卷紙。

十一日

朝七、二　晝六、七。三時六、八。七時七、〇。咽喉の日光浴をはじむ。高崎君を訪

ふ　午後眠る。一五、切手。三五、鏡。計五〇。

十二日

朝六、九。晝六、七。四時六、六。七時七、二。雨あり、午後。咽喉反射の稽古くもりて出來ず　昨夜より今朝痰おほし。夕方入浴。一九、バナナ。一〇、湯札。計二九。中島松次郎氏より菓子とどく。

十三日

朝八時廿分。朝食後七、五弱。十一時七、〇。正午七、〇。三時六、六。六時七、一。七時六、九。夜半珈丹田。三十分眠る。朝高きは昨夜一時過まで不眠に陷りたるによるならむ。今日注意を要す。十一時病院より歸り直ちに體溫をはかる。今日咽喉日光反射うまく行く。一昨日あたりより非常に暖かなり。二〇、女中。

十四日

朝六、九。正午六、九。四時六、八。六時半七、〇强。夜同十分。曇りて日光反射行

ひ難し。今日診療早し　今日もよく眠る。夕顔剃。夜七時久保博士を訪ね相談す。

一五、洗たく。七六、燒炭研究社へ。二、新聞。七、顔剃。計一、〇〇。

十五日

朝六、八　正午六、七。七時六、八。夜端坐卅分。昨夜雨強し。午前ねむりて、午後西公園に中山博士を訪ひ五時頃まで話してかへる。午後晴る。秋色皆珍らし。發熱なきを喜ぶ　此日朝二椀、晝同、夜三椀。留守中久保夫人より赤飯を贈らる。然し日中の睡眠の爲め夜半まで眠らず。近來時々如此。九、電車。

十六日

朝六、九。正午六、九　三時六、七。七時七、二。夜同廿分。（數字不明）共に一時間なり　病院にて六十餘歳の老人の鷄の骨の咽喉につかへたるを取り出す處を見る。昨夜來咳嗽少し　午前曇りて日光反射まづし。四時過ぎ喉頭鏡買ひに出づ。七五、喉頭鏡　三〇、鷄卵素麵。二二、防水紙。三五、手帳。一一、實業之日本。計一、

五三。寺田よりひしほとどく。

餘白記載

咳藥止處方

セネカ浸(四、〇〇〇)	一〇〇、〇〇〇	重曹	二、〇〇
燐酸コデイン	〇、〇五〇	ヴオタール	〇、七
杏仁水	四、〇〇〇	ホミカエキス	〇、五
苦丁	二、〇〇〇	ピラミトン	〇、五
單舍	八、〇〇〇		

（重曹・ヴオタール・ホミカエキス・ピラミトン）三服

右神友學士の醫院に在りし當時の處方

〇

石井傳一
加藤馨次　麥作改良法　三〇、送料不要　有隣堂

橫濱市西戸部八九八　小島久太

同　市　本町四丁目　高野鷹藏

學說術語　便覽　特價六五、山陽堂　上野櫻木町卅九　香川眞治

大正三年一月七日　表慶館

徑山無準書　宋代

國寶阿彌陀三尊　蓮華三昧院　藤原時代

同　廿五菩薩來迎　八幡講

同　松崎天神緣起　鎌倉末期

同　牛皮華鬘　教王護國寺　藤原時代

同　古羅漢　鎌倉時代　神奈川縣光明寺

博物館　普賢菩薩　藤原時代

同　愛染明王　鎌倉時代

本郷區駒込千駄木町三十六番地木村方　門間武夫
仙臺市北三番町三六　石原純
本郷曙町五　蕨一郎
福島縣岩城郡平町長坂　太田勇

大正三年五月十一日　表慶館

博物館　鎌倉時代　淨土曼陀羅
寶樓閣曼陀羅　○
京都　隨川院愛染曼陀羅　藤原時代
博物館春日本地曼陀羅　鎌倉初期
大覺寺五大虚空藏　藤原末期　○
鎌倉時代　光明寺當麻曼陀羅　○
博物館兜卒曼陀羅　鎌倉末期
光明寺當麻曼陀羅緣起　○
法然院德川中期鶴州初名作吉慶復觀音功德圖屏風　○
（此處數字不明）山水、波十二幅、山水七幅、他四幅　○

大正三年二月五日　表慶館

松尾寺　孔雀明王　藤原時代

大阪府護國寺般若明王　同時代

岐阜縣永保寺千手觀音　宋代

鳥取縣豐乘寺揚柳觀音

博物館地藏尊

法然寺觀音功德圖屛風

松崎天神緣起

觀智院應業雲龍屛風

江南竹　京都乙訓郡大原野村大字上羽八番戸　福井種次郎

向原寺　長谷川繁太郎

乙訓村長法寺　山下德次郎

同郡大山崎村大字圓明寺　木村六助

同所　大北寅吉

丹後斑竹
綴喜郡大住村松井　堀口彌市　長二間　四寸五本二圓
雲（此處一字不明）竹
麩屋町通高辻上ル　中林喜三郎　一本五六寸　三本ニテ六圓
葛野郡川岡村川島　中林直吉　雛竹　一本四十錢ヨリ二圓

○

稀鹽酸　一、〇
單舍　一〇、〇（杏仁水　四、〇
　　　　　　　　赤酒　一五、〇）
水　一〇〇、〇

炭酸グワヤコール　一、〇
柏木ヂアスターゼ　一、〇
重曹　二、〇
龍膽末　適宜〇、三

歌論歌話・病牀日記　終

巻末記

一、本卷には、旣に雜誌等に發表した長塚氏の歌論歌話全部と、歌集「赤光」に書入した文章全部と、未發表の病牀日記全部とを收めた。「赤光書入」は古泉千樫氏が雜誌「アララギ」に發表した文章に據り、病牀日記の筆記は森山汀川氏がこれを擔當し、編輯は生前島木赤彦氏がした。長塚氏は作歌の實行を重んじて、議論はなるべく爲なかつた方であるが、それでもなほ、長塚氏の心の据ゑ方が那邊にあつたかといふことは本卷を讀めば極めて明瞭に分かるとおもふ。

一、本卷の校正は、初校から校了に至るまで全く山口茂吉氏の手を煩はした。山口氏は細心の用意を以て、原稿の誤をも幾つか見つけて呉れた。例へば、馬醉木所載の歌論中、『かはかみの根やはら小菅あまたあれば君は忘らすわれ忘るれや』とあるは、『うなばらの根やはら小菅あまたあれば』の誤で、長塚氏はその隣りにあつた歌の初句を採つたものらしい。山口氏はそれを正した。それから、『みくゞ野』と原文にあつたのは『みくゞ沼』の方が好かつた。又、『あはきるがへ』とあるのは、『あはさかるがへ』の誤であつた。なほ、『足利のをてもこのもにさす罠のかなる間しづけみ兒ろあれひもとく』をば、古義・略解に從つて、『かなる間しづみ』とし、また『葛飾の間々』を『葛飾の眞間』とした如きは、一般的の說に從つたので

ある。

一、病牀日記の原文は、片假名と平假名混用であるが、これはその儘にしておいた。なほ病牀日記は長塚氏自身の覺帳であるから、省略字がある。例へば、牛乳を牛と記し、電車を電、シウクリームをシウと記してゐる。また、體温、金高等を示すに只數字のみで記して居る。また、三十分、十五分などとあるのは、岡田式靜坐をした時間を示すのである。なほ、支拂金高の合計（　）内の數字には時たま誤算があるが、これもその儘にしておいた。このへんの校正には山口氏は隨分骨折られた。

一、口繪の第一は、正岡子規先生在世中、病牀のつれづれに長塚節氏の顏を寫生されたもので、岡麓氏の珍藏に係つてゐる。岡氏の談によれば、正岡先生は、明治三十三年ごろの確か冬であつたさうである、手紙を書く卷紙に歌人仲間のスケッチ似顏を書かれた時に、長塚氏の顏はむづかしいので三つも同じやうなものを書かれたのであつた。大正十二年の大震災に岡氏邸も燒失し、貴重な家具古書類盡く燒亡したのに、岡氏は貴重品數點を持つてやうやく立退かれたのであつた。その數點の中の一つなのである。今度、全集を出版するに際して特に恩借にあづかつた。

一、口繪の第二は、歌論「桔梗漫筆」の第一草稿の一部を寫眞にとつたものである。そのほかに、歌論の草稿類を捜したが、見つからなかつた。紀行文・寫生文などの草稿は可成りあるが、歌論の草稿は一體尠いやうである。若し誰か歌論原稿を珍藏の方々は寫眞にとらせていただきたい。

一、口繪の第三は「鍼の歌」の原稿である。長塚氏は鍼の歌は大凡三たびほど原稿を作つてゐるが、これは

三度目ぐらゐのもののやうである。

一、口繪の第四は、旅行の歌の草稿で、いまだ推敲の途中にあつたものの如く、字句を案じながらいろいろ樂書してゐるところを示さうと思つてこのところを選んだ。

一、口繪の第五は、病牀日記の一部を寫眞にしたもので、大正二年の末と、大正三年一月一日のところを示した。このあたりは一番分かり易い方で、ほかの處は字體もまだまだ細かく、文字の薄れてゐるところが多い。これを筆寫するのに島木赤彦・森山汀川の二氏が如何に困難したかが分かる。島木赤彦氏の作『病中記蟲眼鏡もて讀みにけり細かに至るあはれ御こころ』をも參照して看ていただきたい。長塚氏の病牀日記は小形の手帳二册であつて、島木赤彦氏がこの全集を編むとき、一册は横瀬夜雨氏のところにあり、一册は古泉千樫氏のところにあつた。全集を編むに當つてそれを送られ、便利を與へられた二氏に感謝する。

一、全集第二卷の卷末記に書き落したから此處に附記する。明治四十一年四月廿五日發行の雜誌「偶櫻」第二十六號所載の「大寺餅」といふ文章は横瀬氏編の「山鳥の渡」にも收められたが、これは單行本「炭燒の娘」及び全集第二卷中の「松蟲草」といふ文章の(一)と同じものであるが、そのまま載せた。

一、全集校正の遺漏錯誤は纏めて正誤表を作製したいと思ふから、どうぞ心當りの方は通知していただきたい。大正十五年十二月吉日。齋藤茂吉識。

大正十五年十二月二十五日印刷
大正十五年十二月二十八日發行

著作者検印

長塚節全集第四卷

非賣品

著作者 長塚節

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者 和田利彦

東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷者 左手薰

東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷所 日東印刷株式會社

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所 春陽堂
電話大手五一・四二一〇
振替口座東京一六一七